

2025（令和 7）年度 人間発達環境学研究科
年 次 報 告 書

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

はじめに

本年次報告書は、人間発達環境学研究科における令和7(2025)年度の教育・研究・社会貢献等の活動の記録や取り組み内容が記載されたものであり、研究科の強み・特色を示した集積となっている。

令和7年度は、これまで本研究科が取り組んできた多様な活動を継続・発展させるため、研究科として解決しなければならない組織、研究、教育等に関する課題、すなわち、研究科の規模に応じた学際研究・文理融合研究のアウトプットの必要性、教員らが専攻を越えて協働できるための枠組みづくりの必要性、ならびに多種多様な社会的活動を展開・維持していくために不可欠な大型の外部資金獲得の必要性、及び優秀な学生の積極的獲得の必要性などの観点からの取り組み・検討をさらに進めた。また、学域制（教員組織と教育研究組織の分離）や教員人事のポイント制のもとで、教員の新規採用および昇任について人事計画を進め、教育研究組織の活性化による機能強化につとめた。

第4期中期目標・中期計画期間に向けて、神戸大学として各種評価指標の目標値を設定し、部局にも応分の目標設定を求められ、この評価の中で本研究科の強みを見つける作業も必要となった。また、令和4年度から神戸大学が採択された国立大学改革・研究基盤強化推進事業「異分野共創研究教育グローバル拠点」にも参画し、その中心的なデジタルバイオ&ライフサイエンスリサーチパークの一つの拠点である、健康長寿研究拠点のウェルビーイング先端研究センターを、保健学研究科とともに運営している。また、高大接続卓越グローバル人材育成センターに本研究科の教員が関わり、“越える”力を育む国際的科学技術人材育成プログラム（ROOTプログラム）や、神戸みらい博士育成道場を中心的に運営し、神戸大学全体の教育研究に寄与してきている。さらに、本研究科に強みである異分野融合を打ち出して企業との連携に組織的に取り組む準備を進めている。

こうした中でも、本研究科がこれまで唱えてきた「人間の発達及びそれを支える環境を多面的に捉える」という教育研究のアイデンティティを守り、さらに発展させていく必要性を感じている。そのためには、着実に教育・研究・社会貢献に係る実績を重ね、他部局との協力のもと、学内外での研究科のプレゼンスをいっそう高めて行く施策がさらに重要になると考える。

（人間発達環境学研究科長 佐藤春実）

2025(令和 7)年度
人間発達環境学研究科 年次報告書 目次

はじめに

目次

1. 令和7年度の取り組みの概要	1
1.1. 神戸大学の施策に関わる取り組み	1
1.1.1. 神戸大学機能強化改革	1
1.2. 部局としての取り組み	2
1.2.1. 戦略「社会課題を解決する異分野共創研究の推進」	2
1.2.2. 異分野共創研究教育を推進のための組織	3
1.2.3. 第4期中期目標期間の大学評価と部局独自指標 (KPI: Key Performance Indicator)	4
2. 学部・大学院運営	4
2.1. 学部・大学院運営組織	4
2.2. 管理運営	5
2.2.1. 学域人事委員会	5
2.2.2. 研究科運営委員会	7
2.2.3. 中期計画推進委員会	9
2.2.4. 教員活動評価委員会	9
2.2.5. 自己評価委員会	9
2.2.6. 安全衛生委員会	10
2.3. 予算	11
2.3.1. 予算に関する特記事項	11
2.3.2. 予算関係の審議等の状況	12
2.3.3. 外部資金獲得状況(教員及び学生)	12
2.4. 広報及び情報公開	13
2.4.1. パンフレット, ウェブサイト等	13
2.4.2. 人間発達環境学研究科 オープン・らぼ	13
2.4.3. ホームカミングデイ	14
2.5. 環境設備	15
2.5.1. 教育・学習環境の整備	15
2.5.2. 交流ルーム・アゴラ	15
2.6. 教員研修	16
2.6.1. FD	16
2.6.2. 初任者研修	16
3. 入試	16
3.1. 一般選抜入試	16
3.1.1. 入学試験委員会	16

3.1.2. 一般選抜入試に係る総括と課題	17
4. 国際交流活動	18
4.1. 学術交流協定	18
4.2. 留学生	19
4.3. ダブルディグリー	20
4.4. Innovative Asia	20
4.5. 学生・教員・職員の海外派遣	20
4.6. 海外研究者等の招聘・訪問	21
4.7. スタディツアー	21
5. 教育	22
5.1. 教育課程	22
5.1.1. 今年度の特徴	22
5.1.2. 研究科, 専攻共通科目	22
5.1.3. 教職教育	23
5.1.4. ゲストスピーカー及びティーチング・アシスタント	23
5.2. 各専攻講座の教育	23
5.2.1. 人間発達専攻	23
5.2.2. 人間環境学専攻	52
6. 進路	57
6.1. キャリア形成支援	57
6.1.1. キャリアサポートセンター	57
6.1.2. 学振特別研究員申請支援	59
6.2. 卒業・修了後の進路	59
7. 研究	59
7.1. 今年度の特長	59
7.1.1. 研究動向	59
7.1.2. 学生の受賞	61
7.2. 学術 Weeks	63
7.2.1 学術 Weeks の各事業・セミナー	63
7.3. 研究科支援プロジェクト研究	69
7.4. 高度教員養成プログラム	73
7.5. 附属中等教育学校を活用した高大接続共同研究	74
7.6. 研究推進	75
7.6.1. 研究倫理審査委員会	75
7.6.2. 紀要編集委員会	75
7.7. 各専攻の研究	75
7.7.1. 人間発達専攻	75
7.7.2. 人間環境学専攻	136

8. 産官学共同・地域連携による教育・研究活動	157
8.1. 産官学共同プロジェクト	157
8.2. 地域連携プロジェクト	163
9. 社会的活動・震災復興支援	164
9.1. 災害地への支援活動	164
10. 附属施設	165
10.1. 発達支援インスティテュート	165
10.1.1. 発達支援インスティテュート運営委員会	165
10.1.2. 心理教育相談室	165
10.1.3. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター	166
10.1.4. のびやかスペースあーち	174
10.1.5. サイエンスショップ	180
10.1.6. 教育連携推進室	183
10.1.7. アクティブエイジング研究センター	188
10.2. 実習観察園の運営利用状況	193

1. 令和7年度の取り組みの概要

1.1. 神戸大学の施策に関わる取り組み

1.1.1. 神戸大学機能強化改革

(1) 神戸大学ビジョンの実現に向けた戦略

R4年度から第4期中期目標・中期計画が始まった(R9年度まで)。平成27年6月に文部科学省「国立大学経営力戦略」の3つの重点支援の枠組みの重点支援の内、神戸大学は③「海外大学と伍して、全学的に卓越した教育研究、社会実装を推進する取組を中核とする国立大学」を選択し、第4期からは規模や組織体制の観点からさらに2つのグループに細分化され、グループが⑤つとなり、現在に至っている。

神戸大学は、「学理と実際の調和」を建学の理念とし、「真摯・自由・協同」の学風のもと、真理の探究と社会実装を旨として学問の継承と発展に寄与し、人々の智と徳を高め、もって社会の基盤を築き、産業・経済を活発にするとともに、様々な社会的課題解決に貢献してきた。この伝統を継承するとともに人文・人間科学系、社会科学系、自然科学系、生命医学系諸分野における強みを社会に活かし、「知と人を創る異分野共創研究教育グローバル拠点」として進化・発展し続けることを神戸大学長期ビジョンとしている(図参照、KU VISION 2030)。



(2) 神戸大学ビジョンを支える新たな教員組織・人事システム

平成 28 年 5 月 19 日開催の教育研究評議会において「神戸大学ビジョンを支える新たな教育組織・人事システム（案）」が承認された。この教員組織・人事システムは、教員の流動性の向上、組織間の教員配置の最適化、柔軟な改組の実現、教員数及び若手ポストの増加をねらいとし、教員の教育研究組織からの分離、ポイント制の導入及び学長裁量戦略枠の設定などを柱としたものである。

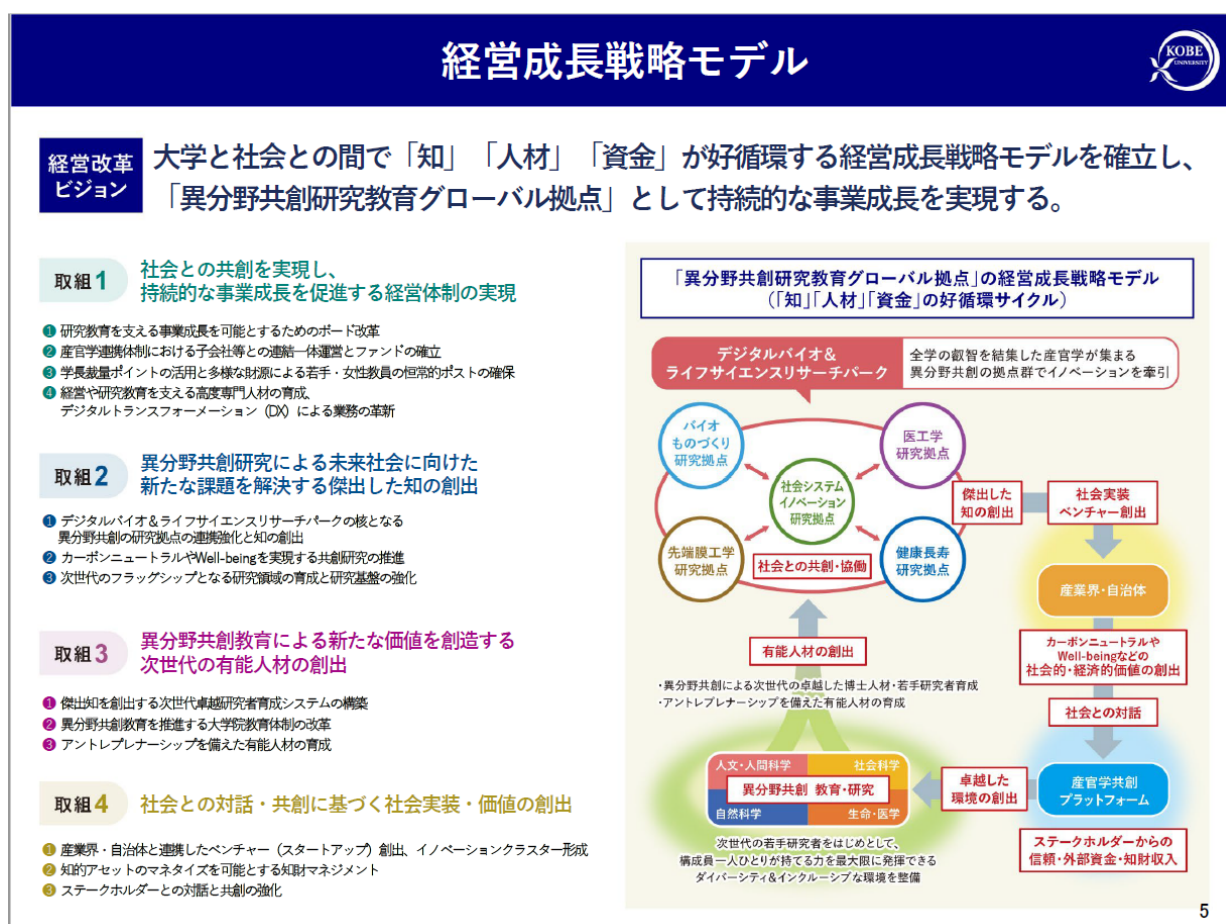
平成 28 年 10 月から教員組織と教育研究組織の分離が実施され、当研究科教員の全員が人間発達学域の所属となった。また、同時に教員人事委員会が設置され、教授人事の審査、及び採用・昇任人事に伴うポイントの管理が行われることになった。そして、平成 29 年 4 月にポイント制が正式導入され、現在に至っている。

(人間発達環境学研究科長 佐藤春実)

1.2. 部局としての取り組み

1.2.1. 戦略「社会課題を解決する異分野共創研究の推進」

神戸大学ビジョン「知と人を創る異分野共創研究教育グローバル拠点」に向けた取り組みとして、国立大学改革・研究基盤強化推進事業が令和4年10月から採択され、これを中心に神戸大学ではビジョン実現が推進されている。中心的なデジタルバイオ&ライフサイエンスリサーチパークの一つの拠点である、健康長寿研究拠点のウェルビーイング先端研究センターを、保健学研究科とともに立ち上げ、神戸大学全体の教育研究に寄与してきている（図参照、KU VISION 2030）。



この推進のため、先端的異分野共創研究プロジェクト、『異分野共創による資源循環イノベーション』と『神戸市デジタルツインによる防災減災・社会経済シミュレーション分析：世界初「地震シナリオの網羅的シミュレーション」による異分野共創先端研究』が推進されており、いずれのプロジェクトに本研究科に教員が参加している。また、本学のフラッグシップ研究の候補となり得る異分野共創研究ユニットの創出及び育成が行われており、『環境 DNA 研究の総合化ユニット』、『ゼニゴケ産業利用（機能性野菜と有用物質生産）のためのプラットフォーム開発』にも本研究科の教員が参画し（前者のユニットは本研究科教員がユニットリーダーである）、研究科のプレゼンスを高めるとともに、神戸大学ビジョン「知と人を創る異分野共創研究教育グローバル拠点」の推進に大きく貢献している。

令和 6 年度からは戦略的事業経費の支援を受け、適応的スキル発達をめぐる異分野競争先端研究を推進している。

さらに、異分野共創研究教育グローバル拠点のもとに推進された高等学術研究院テニュアトラック教員制に 5 名（A 制度 1 名、B 制度 4 名）の教員が採択されており、また、高等学術研究院の卓越教授 1 名、卓越准教授 1 名が選ばれ、神戸大学の改革・研究基盤強化推進を支援している。

1.2.2. 異分野共創研究教育を推進のための組織

人間発達環境学研究科は、心身発達専攻、教育・学習専攻、人間行動専攻、人間表現専攻、及び人間環境学専攻の 5 専攻から成る研究科として平成 19 年 4 月に設置された。その後、平成 25 年 4 月に、人間それ自体の発達を対象に教育研究を担ってきた心身発達専攻、教育・学習専攻、人間行動専攻、人間表現専攻の 4 専攻をまとめ人間発達専攻とし、人間発達専攻と人間環境学専攻の 2 専攻体制で教育・研究を行っている。

平成 26 年 4 月に文部科学省が公表した本研究科のミッションの再定義には、「今後、人間の発達及びそれを支える環境を多面的に捉えるため、異なる専門分野間の連携等に取り組みについて重点的に取り組むなど、総合的な研究を組織的に推進するとともに、我が国の社会課題解決・文化の発展に貢献することを目指す。」と記されている。

これまで、本研究科はこのミッションの実現に向け、人間の発達及びそれを支える環境に関わる新たな研究課題の設定、ならびに分野横断型研究の支援等の取り組みを行っている。

平成 29 年および 2020 年度には外部評価を受けた。その結果、学際系の研究科として、教育・研究・社会的活動の成果を着実に蓄積していること、またそれらの活動は発展・深化を続けており、地域の課題に対して、その住民と連携する形で、研究と教育と社会活動を一体のものとして展開していること、及び高齢化、貧困、環境、共生社会などといったグローバルな課題に関する国際共同研究の推進やそれらの研究に学生を参画させる多様な取り組みが実施されていることなどが高く評価された。その一方で、本研究科が取り組んでいる多様な活動を将来にわたって継続・発展させていくために解決しなければならない組織、研究、教育等に関する課題も指摘された。すなわち、研究科の規模に応じた学際研究・文理融合研究のアウトプットの必要性、より多くの教員が専攻を越えて協働できるための枠組みづくりの必要性、多種多様な社会的活動を展開・維持していくために不可欠な大型の外部資金の獲得の必要性などである。

人間発達環境学研究科では、国際人間科学部の最初の卒業生が入学してくるのを機に、人間発達専攻内の 4 つの系講座（こころ系、表現系、からだ系、教育系）および人間環境学専攻の 2 つの講座（環

境基礎講座，環境形成講座）をそれぞれに1講座にまとめ，各専攻を1講座で編成し，それまでの講座を教育研究分野に移行する組織再編が令和3年度に行われた。この組織再編により研究・教育活動における連携をさらに進める体制ができ，それを具体化するための施策が，今後さらに必要となる。

このような中，令和5年度からさらに教育研究を連携させるための組織について将来検討委員会で検討を始め，令和6年度にはこの委員会から研究科運営委員会への検討結果の答申が行われ，それをもとに教員会議で意見交換を行った。

1.2.3. 第4期中期目標期間の大学評価と部局独自指標（KPI: Key Performance Indicator）

第4期中期目標期間では大学指標に基づき，各部局にも指標が設定され（部局独自指標，意欲度指標含む），これをもとに部局運営を実施することとなった。令和5年度の各指標の評価は達成できていない指標が多かった。特に，WoS論文，国際共同研究に係る国際共著論文数，科研費採択および獲得額の目標達成が十分でなかった。一方，外部資金獲得額や共同研究・受託研究費は目標を上回っていた。次年度以降，国際共同研究推進のための研究科での支援方法，また，独自指標の著書数の達成率低下の原因の検討が必要である。

（人間発達環境学研究科長 佐藤春実）

2. 学部・大学院運営

2.1. 学部・大学院運営組織

神戸大学大学院人間発達環境学研究科は，以下の組織で運営している。

<教授会等>

人間発達環境学域会議，神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授会

以下に委員会等の組織を列記する。

<管理運営>

学域人事委員会，教員活動評価委員会，研究科運営委員会，予算委員会，学舎検討委員会，中期計画推進委員会，自己評価委員会，交流ルーム運営委員会，安全衛生委員会，ハラスメント防止委員会，

<研究>

研究紀要編集委員会，研究倫理審査委員会

<教務・学生>

教務委員会，学生委員会

<入試>

入学試験委員会，学生委員会（編入学入学者の募集及び選考に関わる事務），オープンらぼワーキンググループ

<国際交流>

国際交流委員会，学術 WEEKS ワーキンググループ

<広報>

情報メディア委員会，研究科案内作成ワーキンググループ

<附属施設等>

図書委員会，実習観察園運営委員会，キャリアサポートセンター運営委員会，発達支援インスティテュート運営委員会，心理教育相談室運営委員会，ヒューマン・コミュニティ創成研究センター運営委員会，のびやかスペースあーち運営委員会，サイエンスショップ運営委員会，教育連携推進室運営委員会，アクティブエイジング研究センター運営委員会

（人間発達環境学研究科長 佐藤春実）

2.2. 管理運営

2.2.1. 学域人事委員会

学域人事委員会は、教員の採用及び昇任等，ポイントの管理・運用及び教育研究組織への配置に関して，学域会議に発議する原案を審議する委員会である。学域人事委員会の構成は，学域長，副学域長，人間発達環境学研究科専攻長，国際人間科学部学科長（グローバル文化学科長を除く）の8名体制であり，令和7年度の委員は佐藤春実学域長（委員長），津田英二副学域長，丑丸敦史副学域長，岸本吉弘人間発達専攻長，太田和宏人間環境学専攻長，林創国際人間科学部発達コミュニティ学科長，井上真理国際人間科学部環境共生学科長，山下晃一国際人間科学部子ども教育学科長である。また，古川昌紀事務部長，西田望智子総務係長も出席した。

学域人事委員会の開催日及び検討事項については，以下に記す。

	検討事項
第1回（4月2日）	1. 准教授昇任人事 について（人事委員会報告） 2. 令和7年度人間発達環境学域人事方針について 3. 採用人事の公募について 4. テニユア付与について 5. その他
第2回（5月2日）	1. 教授昇任人事に係る人事選考委員会の設置について 2. テニユア審査報告について 3. 助教の講師または准教授昇任人事について 4. 採用人事について 5. ウェルビーイング先端研究センターへの教員配置要望について 6. その他
第3回（6月6日）	1. 採用人事の公募について 2. テニユア審査報告について 3. 助教の講師または准教授昇任人事について 4. その他
臨時：6月16日	1. 特命講師（ウェルビーイング先端研究センター主配置）の採用について
第4回（7月4日）	1. 教授昇任人事に係る人事選考委員会の設置について 2. 准教授昇任人事に係る人事選考委員会の設置について

	3. 准教授，講師または助教の採用人事に係る人事選考委員会の設置について 4. テニユア審査について 5. 教員人事スケジュールについて 6. その他
持ち回り：7月14日	1. 教員配置について
第5回（8月29日）	1. 教授昇任人事について 2. 准教授昇任人事について 3. 准教授昇任人事に係る人事選考委員会の設置について 4. 准教授，講師または助教の採用人事に係る人事選考委員会の設置について 5. 准教授または講師の採用人事に係る人事選考委員会の設置について 6. 採用人事について 7. 採用人事について 8. その他
第6回（10月10日）	1. 教授昇任人事について 2. 教授昇任人事について 3. 准教授昇任人事について 4. 准教授昇任人事について 5. テニユア審査報告について 6. 准教授，講師または助教の採用人事に係る人事選考委員会の設置について 7. 採用人事の公募について 8. 外部資金により雇用する特命教員の任期更新について 9. 名誉教授の推薦について 10. その他
第7回（11月7日）	1. 准教授昇任人事について 2. 採用人事の公募について 3. 令和8年4月1日付け教員の配置換及び人間発達環境学域教員人事配置案について 4. 令和8年度教授昇任人事について 5. その他
第8回（12月5日）	1. 採用人事について 2. 公認心理師養成業務を担当する助手の採用人事に係る人事選考委員会の設置について 3. GSP オフィス教員の任期更新について 4. 公募を行わない採用人事について

	5. 都市安全研究センターへの教員配置要望について 6. 教授昇任候補者の選考について 7. その他
第9回（1月9日）	1. 採用人事について 2. 准教授昇任人事に係る人事選考委員会の設置について 3. 教授昇任候補者の選考について 4. 公募を行わない採用人事選考委員会の設置について 5. 教員の割愛について 6. 名誉教授の推薦について 7. 今後の採用人事等について 8. その他
第10回（2月13日）	1. 採用人事について 2. 外部資金による特命准教授及び特命助教の採用人事について 3. 採用人事について 4. ライフ光学イノベーション研究センターへの教員配置要望について 5. 「研究分野を指定しない大学一括女性限定公募」について 6. その他
第11回（3月3日）	1. 採用人事について 2. 准教授または講師の採用人事に係る人事選考委員会の設置について 3. 教員の割愛について 4. その他
持ち回り：3月9日	1. 教員配置要望について

（学域人事委員会委員長 佐藤春実）

2.2.2. 研究科運営委員会

研究科運営委員会は、研究科長、副研究科長、専攻長（2名）、その他委員会が必要と認めた者として国際人間科学部学科長（グローバル文化学科長を除く）を加えた8名体制で、研究科等の管理を円滑に行うために組織及び運営に関し包括的な事項を扱ってきた。検討事項は、以下のとおりである。

	検討事項
第1回（4月2日）	1. 予備審査委員会委員候補者について 2. 学内・部局内プロジェクト等について 3. その他
第2回（5月2日）	1. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科における客員協力研究員の称号付与について 2. 2024（令和6）年度人間発達環境学研究科「研究推進支援経費」

	報告書について 3. 令和7年度優秀若手研究者賞の推薦について 4. 寄附講座の設置について 5. 子ども教育学科からの体育館備品の整備についての要望について 6. 防衛装備庁「安全保障技術研究推進制度」応募に係る安全保障技術研究審査委員会委員について 7. その他
第3回（6月6日）	1. 2025（令和7）年度人間発達環境学研究科「研究推進支援経費」の選考結果について 2. 2023（令和5）年度人間発達環境学研究科「研究推進支援経費」報告書について 3. 寄附講座について 4. 博士論文に係るその他参考論文等について 5. その他
第4回（7月4日）	1. 博士学位論文審査委員について 2. 鶴甲第二キャンパスにおける新たな障害者雇用計画について 3. 高大接続活動の集約について 4. 教職の免許について 5. 寄附講座について 6. 博士論文に係るその他参考論文等について 7. その他
持ち回り：7月15日	1. 寄附講座の設置について
第5回（8月29日）	1. その他
第6回（10月10日）	1. 発達支援インスティテュートの名称変更等について 2. その他
第7回（11月7日）	1. 居室について 2. 教員免許について 3. その他
第8回（12月5日）	1. その他
第9回（1月9日）	1. その他
第10回（2月13日）	1. 大学院の入学定員等について 2. その他
第11回（3月3日）	1. 教員居室の管理運用に関する申し合わせの制定について 2. 人間発達環境学研究科戦略的スペース利用要項の制定について 3. その他

（研究科運営委員会委員長 佐藤春実）

2.2.3. 中期計画推進委員会

令和7年度は、研究科長（委員長・佐藤春実）、副研究科長（津田英二，丑丸敦史）、入学試験委員会委員長（津田英二）、国際交流委員会委員長（平芳裕子）、教務委員会委員長（大田美佐子）、学生委員会委員長（中谷奈津子）、キャリアサポートセンター長（澤宗則）、情報メディア委員会委員長（宮田任寿）、自己評価委員会委員長（蘆田弘樹）、事務部長（古川昌紀）の構成員に加え、総務係長（西田望智子）が出席し、令和5年度より研究科運営委員会との合同会議を開催した（計4回）。

「中期目標の遂行、見直しに関する事項」を所掌する本委員会では、研究科長から部局年次計画に関わる全体的な状況が説明された。その後、各委員会等からそれぞれの活動内容が報告され、年次計画の進捗状況を確認し合うとともに、各委員会における計画実施の促進、ならびに委員会相互の情報の共有と連携可能性について検討した。

また、「中期目標・中期計画管理表」における令和7年度実績について各委員会に対し回答を求め、それらを踏まえたうえで本研究科の年次計画管理表の再確認を行った。

（人間発達環境学研究科長 佐藤春実）

2.2.4. 教員活動評価委員会

神戸大学教員活動評価が実施されて12年目となる。昨年度と同様、教員活動評価委員会内規第3条に基づき、学域長、副学域長、専攻長に、その他学域長が必要と認めた者として国際人間科学部学科長（グローバル文化学科長を除く）を加えた8名体制で臨んだ。

また、昨年度合意した評価の方法や基準等を基本的に踏襲しつつ、その都度問題がないか慎重に判断しながら、手続を進めた。「教員活動評価結果通知書」配布後「意見の申出」はなかった。

教員活動評価委員会は、6月6日、7月4日、8月8日、9月26日に開催した。

（教員活動評価委員会委員長 佐藤春実）

2.2.5. 自己評価委員会

本年度の委員会は、副研究科長（津田英二，丑丸敦史）、委員長（蘆田弘樹）、副委員長（稲原美苗）、委員（坂本美記，關典子，高見和至，内山愉太）、事務課長の9名の構成員ならびに総務係長（西田望智子）で構成された。4回の委員会（メール会議2回を含む）の開催によって、以下の事項について取り組んだ。

（1）ファカルティ・ディベロップメント

・授業のピアレビュー

大学院の授業を対象にピアレビューを実施した。各専攻から選定された授業の参観および授業担当者と参観者との意見交換が行われ、授業2科目を対象にそれぞれ教員2名が参加した。次年度の授業改善に向けて強化できる点がピアレビューレポートとして報告された。

・ファカルティ・ディベロップメント講演会

大学教員としての能力開発を目的として、4回のファカルティ・ディベロップメントを実施した。参加者の人数は、328名（教員308・職員等20）であった。今年度のテーマは、科研費制度に関するもの、税関輸出に関するもの、危険物取扱や処分に関するもの、障害者雇用に関するものであった。

（2）Voice Box（「学生の声」投稿箱）への対応

本年度 10 月までの投稿はなかった。

11 月からは Voice Box を廃止し、全学統一の「意見箱」を設置することになった。

(3) 各種アンケートの実施と検討

研究科前期課程について、学修の記録、入学・進学時アンケート、授業振返りアンケート、卒業・修了時アンケートを実施し、結果の分析を行った。また来年度に向け、研究科独自の質問項目を設定するかどうかについて検討を行った。

(4) 教育の内部質保証に関する自己点検・評価

令和 6 年度「教育の内部質保証に関する自己点検・評価」に関する一次点検・評価を行い、報告書を作成した。

(5) 令和 7 年度「年次報告書」、「現況分析に関する報告書」の担当

令和 6 年度の研究科における教育・研究活動を集約した「年次報告書」の執筆依頼をするとともに、「現況分析に関する報告書」の一部を取りまとめた。

(6) 外部評価委員会の実施

3 名の外部評価委員に出席していただき、研究科長、副研究科長、専攻長、各組織代表者から研究科の組織、研究活動、教育活動、組織活動について説明を行い、今後の研究科を改善するための質疑応答、意見交換が行われた。

(7) 修了生アンケート結果の分析

修了後 5 年程度経過した修了生の意見等を集約し、ディプロマ・ポリシーに則した学修成果が得られているかを点検するとともに、その結果を教育の改善や質向上に役立てることを目的として、修了生アンケートが全学共通質問項目と研究科独自質問項目について行われた。研究科独自質問項目に対するアンケート結果を解析し、報告書を作成した。

(8) 就職先機関インタビュー調査の実施

修了した学生の就職先機関からの意見等を集約し、本学の学位授与方針に則した学修成果が得られているか、また教育の成果が社会のニーズに適合しているかを点検するとともに、その結果を教育の改善や質向上に役立てることを目的として、全学共通インタビュー項目に加え、研究科独自インタビュー項目について、神戸市教育委員会と神戸市役所にインタビュー調査を行った。インタビュー調査結果を分析し、報告書を作成した。

(自己評価委員会委員長 蘆田弘樹)

2.2.6. 安全衛生委員会

1) 令和 7 年度委員

委員長（木村哲也）、副委員長（勅使河原君江）、委員（清水大地、谷篤史、福田博也、古川昌紀（事務部長）、西田望智子（総務係長）、大倉直起（附属図書館人間科学情報サービス係長）、浅野志織（総務係員）、笠原真人（総務係員）、山中康弘（会計係長）

2) 委員会の開催

対面にて 4 回開催した（5 月 14 日、9 月 2 日、11 月 19 日、2 月 6 日）。

3) 委員会の業務

- ・点検事項報告とその対策の検討
- ・その他改善を要する点の検討
- ・全学安全衛生委員会の報告
- ・その他

4) 定期点検

委員による学舎内共用部点検を月に一回実施し、各委員が担当場所の点検報告を行った。

5) 本年度の実施事項

- ・産業医による巡視の実施とその対応について
 - ・5月20日（巡視場所：運動場、運動場附属施設、テニスコート、駐輪場）、9月19日（体育館、階段）に実施された産業医職場巡視の結果を受け、改善・確認が必要な箇所について対応を行った。対応の結果は、全学安全衛生委員会（12月25日）にて報告された。
- ・衛生管理者による巡視の実施とその対応について
 - ・B棟の衛生管理者巡視を12月15日に実施した。要改善点は改善を依頼し、改善確認のための再巡視を2月6日に行った。それらの結果について、全学安全衛生委員会（2月26日）で報告した。
- ・防災管理点検結果への対応について
 - ・9月16日に実施された防災管理点検の結果、棚等の転倒防止措置がされていない部屋があったとの指摘があったため、11月26日に委員で確認のための巡視を行った。その後、管理を担当されている教職員に改善を依頼した。
- ・安全衛生管理マニュアルの更新について
 - ・国際人間科学部安全衛生管理マニュアルの更新を行った。

6) 課題

- ・転倒、落下防止措置についての注意喚起を継続する。
- ・化学物質の管理徹底についての注意喚起を継続する。

（安全衛生委員会委員長 木村哲也）

2.3. 予算

2.3.1. 予算に関する特記事項

(1) 令和6年度（2024）決算について

収入決算額は1億8,877万5,119円、支出決算額は1億8,760万1,622円となり、収入決算額との差額117万3,497円は令和7年度へ繰り越した。

(2) 令和7年度（2025）当初予算配分再編成（5月）について

学生当経費について5月1日現在の大学院生の員数確定及び博士実験系の申請に基づき再編成を行

った。また、本部からG棟改修に伴う移転費（往路）4,912万9,000円が予算配分された。

(3) 令和7年度（2025）当初予算配分再編成（10月）について

学生当経費の研究生の人数が確定したことによる再編成を行った。また、G棟改修に伴う移転費（往路）の契約金額が6,044万5,000円となったことを報告した。

(4) 令和7年度（2025）当初予算配分再編成（2月）について

G棟改修に伴う移転費（復路）のため令和7年度予算の余剰金1,200万円を令和8年度に預け入れし、さらに1,200万円を本部から借り入れすることとなった。なお、1,200万円の返済計画は令和9年度から令和12年度の4年間、毎年300万円を返済する計画とした。

(5) 令和8年度（2026）当初予算配分について

収入予算として過年度に預け入れしていた「G棟改修設備整備事業」1,300万円、「G棟改修移転費（復路）」1,200万円、本部から借り入れした「G棟改修移転費（復路）」600万円が当初予算として配分された。また、本部からG棟改修に伴う移転費（復路）5,099万8,000円と建物新営設備費1,566万8,000円が予算配分された。支出予算では研究基盤経費において、これまでの均等配分を見直し傾斜配分に変更した。

（予算委員会委員長 佐藤春実）

2.3.2. 予算関係の審議等の状況

(1) 令和6年度（2024）決算について

令和7年5月13日の予算委員会、令和7年5月16日の教授会において審議・承認された。

(2) 令和7年度（2025）当初予算配分再編成（5月）について

令和7年5月13日の予算委員会、令和7年5月16日の教授会において審議・承認された。

(3) 令和7年度（2025）当初予算配分再編成（10月）について

令和7年10月10日の予算委員会、令和7年10月17日の教授会において審議・承認された。

(4) 令和7年度（2025）当初予算配分再編成（2月）について

令和8年2月16日の予算委員会、令和8年2月20日の教授会において審議・承認された。

(5) 令和8年度（2026）当初予算配分について

令和8年3月11日の予算委員会、令和8年3月19日の教授会において審議・承認された。

（予算委員会委員長 佐藤春実）

2.3.3. 外部資金獲得状況（教員及び学生）

外部資金の獲得状況については、その詳細を資料編（特に「11-3-1～5」参照）に掲載しているため、ここでは特徴的な点を指摘するにとどめる。

令和7年度科学研究費補助金の獲得は、65件（新規：19件）、総額129,706千円であった。内訳は、基盤研究(A)：1件、基盤研究(B)：20件（新規：3件）、基盤研究(C)：25件（新規：8件）、挑戦的研究（開拓）：2件、挑戦的研究（萌芽）：5件（新規：2件）、若手研究：9件（新規3件）、研究活動

スタート支援：2 件（新規：2 件），国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）：1 件（新規 1 件），となっている。基盤研究(A)をはじめ基盤研究(B)(C)の採択数の堅調な増加が特徴的である。

引き続き、研究科運営委員会等において、科研費制度改革の留意点を再考しながら、次年度以降の科学研究費補助金の獲得に向けての検討が必要と思われる。

日本学術振興会特別研究員について、令和 7 年度は DC1 3 名、DC2 2 名の合計 5 名が継続採用となり、新規採択数は 0 名であった。10 年以上にわたり毎年開催している学生委員会主催の申請に係る説明会に加えて、学術研究推進機構学術研究推進室（URA 室）の支援を得て、計画調書（申請書）の書き方セミナーや推敲のためのワークショップ継続的に開催し、申請支援に取り組んでいる。

受託研究について、令和 7 年度は 9 件、総額 5,801 万円（令和 6 年度 12 件、総額 6,115 万円）、共同研究については、21 件、総額 6,984 万円（令和 6 年度 18 件、総額 4,131 万円）となった。

（人間発達環境学研究科長 佐藤春実）

2.4. 広報及び情報公開

2.4.1. パンフレット、ウェブサイト等

(1) 研究科案内（パンフレット）

2027 年 4 月入学者向け研究科案内（研究科案内 2027）を作成した（発行は 2026 年 4 月 1 日予定）。研究科案内 2027 は 16 ページ（研究科案内 2026 は 24 ページ）で構成され、研究科の教育、研究、各専攻に関する特色の他、国際学術交流、地域貢献について掲載した。

(2) 研究科ウェブサイト

研究科ウェブサイト（<http://www.h.kobe-u.ac.jp>）は、2021 年度に最新の CMS（コンテンツ管理システム）用で作成したデザインテンプレートを導入し、全面改装を行っている。研究科案内の情報に基づいた最新情報や入試情報を掲載した。また、研究科における様々なニュースや在学生向けの教務情報や学生生活に関わる情報を掲載した。なお、システム整備については、学部用サーバ機と研究科用サーバ機を 1 台の新しいサーバ機（2024 年度予算で導入）へ統合し、マシンのメンテナンス作業の効率化を行なった。

（情報メディア委員会委員長 宮田任寿）

2.4.2. 人間発達環境学研究科 オープン・らぼ

オープン・らぼとは、神戸大学大学院人間発達環境学研究科前期課程に進学を考えており、研究や研究内容について詳しい話を聞いて進路の参考にしたい、興味のある研究分野や教員と話をして進学を考えてみたいという方々のために人間発達環境学研究科が独自に運営するプログラムである。平成 28 年度から始めているこの取り組みは、「オープン・らぼウィークス」という研究室訪問期間を設け、参加希望者が予め個別に教員に連絡して面談の予約をとり、「オープン・らぼウィークス」の期間中の任意の日時に面談を行うというものである。

令和 7 年度に関しては、面談者の希望に応じて対面あるいは遠隔のいずれかで実施した。オープン・らぼ春シーズンは、面談期間を 6 月 9 日から 7 月 4 日までとした。その結果、人間発達専攻での面談者は 67 名、人間環境学専攻での面談者は 26 名、計 93 名であった。令和 4 年度から始めたオープン・らぼ秋シーズンは、面談期間を 11 月 10 日から 12 月 5 日までとした。その結果、人間

発達専攻での面談者は 36 名，人間環境学専攻での面談者は 18 名，計 54 名であった。

令和 8 年度人間発達環境学研究科入試は，人間発達専攻，人間環境学専攻ともに受験者数が堅調であった。オープン・らぼ実施の成果であるとともに，SNS（X（旧 Twitter），Instagram），Youtube での情報発信の効果が含まれていると思われる。これらでは，院生・教員の研究成果情報の公開や，研究科で実施される各種イベント情報を公開している他，教員の研究活動を語るポッドキャスト番組を発信している。

オープン・らぼ開催の目的は，人間発達環境学研究科の理念や特徴，養成しようとする人材像等を広く発信するとともに，ひいては大学院の受験者を増加させる点にある。教育研究分野によっては，十分な受験者数を確保できていないところもあるため，情報発信と相談を有効に組み合わせることで，引き続き受験者数増加に努める必要がある。

（人間発達環境学研究科 オープン・らぼ WG 主査 津田英二）

2.4.3. ホームカミングデイ

2025 年度第 19 回神戸大学ホームカミングデイの学部企画（師範学校・教育学部・発達科学部・国際人間科学部）は，10 月 25 日（土）午後 1 時 30 分～午後 5 時 15 分に，鶴甲第二キャンパス A 棟 2 階大会議室などにて開催された。参加者は 48 名で，昨年に引き続き，神戸大学発達科学部鶴甲会との合同開催であった。

企画内容は以下の通りであった。例年通り，現役教員・学生と卒業生・修了生・退職教員との交流が行われ，参加者から好評を得た。

（1）学内探検ツアー

2 つのグループに分かれて，A 棟と F 棟を巡回した。とくに F 棟では，現役教員・学生によるアート作品の展示と解説が行われて大変好評を得た。

（2）各種挨拶

佐藤春実研究科長・学部長，蔭山慎吾紫陽会会長，吉田圭吾鶴甲会世話人より挨拶があった。

（3）紫陽会賞授賞式

中溝茂雄氏（神戸親和大学教育学部教授），川崎弘貴氏（発達コミュニティ学科），坂本優音氏（環境共生学科）への授賞が行われた。

（4）紫陽会記念講演

中溝茂雄氏による講演「阪神・淡路大震災から 30 年～防災教育とボランティア～」が行われた。

（5）紫陽会受賞者演奏

C 棟にて，坂本優音氏によるピアノ演奏が行われた。

（6）鶴甲会記念講演

青木茂樹教授による講演「原子核乾板（げんしかくかんぱん）を用いた望遠鏡による宇宙ガンマ線の観測」が行われた。

（7）懇親会

参加者有志による懇親会が催された。

（第 19 回発達科学部ホームカミングデイ実行委員長 山口悦司）

2.5. 環境設備

2.5.1. 教育・学習環境の整備

(1) 各種施設・設備

教育・学習環境を充実させるため、以下の施工を行った。

- ・ 食堂ホール改修工事
- ・ B 棟渡り廊下床面張替え工事
- ・ A 棟各所ガス給湯器更新

(事務課長 古川昌紀)

(2) キャンパス内ネットワーク環境整備

本研究科で利用できる無線 LAN は、2021 年度に、神戸大学情報基盤センターが管理する全学用無線 LAN 用のアクセスポイントを合計 13 箇所（A 棟に 1 台、B 棟に 5 台、C 棟に 1 台、F 棟に 5 台、G 棟に 1 台）を増設しており、2023 度は学生食堂に、2024 年度は人間科学図書館にそれぞれアクセスポイントを増設している。2025 年度は、KHAN2025 の枠組みで新たな 11 台（A 棟に 5 台、C 棟に 2 台、E 棟に 4 台）に設置された。

本研究科では、学生向けメーリングリストの運用を行っている。メーリングリストは学生が所属する公式組織（コースなど）単位で構成され、教務、学生生活、キャリアサポートに関する情報などが配信された。また、部局内の 3 箇所に設置されている電子掲示板の運用も行なっている。

(情報メディア委員会委員長 宮田任寿)

(3) 図書館運営・整備

昨年度までに引き続き、本年度においても、全学の附属図書館運営委員会はオンライン会議、人間科学図書館図書委員会はオンライン会議とメール回議であった。人間科学図書館委員会の計4回の各委員会の議題は以下の通りであり、第1回委員会：令和6年度人間科学図書館決算報告について、令和7年度人間科学図書館予算について、令和7年度学生用推薦図書について、資料の不用決定について、資料の廃棄基準の見直しについて、第2回委員会：令和7年度学生用推薦図書追加募集および高額図書の募集について、資料の不用決定について、第3回委員会：高額図書の採択について、資料の不用決定について、第4回委員会：学生用図書の評価について、「神戸大学附属図書館人間科学図書館図書委員会規程」の改定について、附属図書館規則の改正に伴う項番の改正、資料の除籍について。以上の各議題において、本図書館事務担当者からの詳細な状況把握とモニタリングデータに基づき、図書館運営の充実を目的とした協議と共に、図書館機能の向上に向けての具体的内容が図られた。

(図書委員会委員長 長ヶ原誠)

2.5.2. 交流ルーム・アゴラ

今年は大学生活は通常になったものの、交流ルームは感染対策を万全にして、平日11時～16時まで運営し、食事と飲み物を提供した。展覧会「〇〇ちゃんのママ」を開催し、どちらも好評を得た。詳細は下に記す。

体制

- ・今年度は、2名のスタッフ（非常勤職員）および、知的障害のあるスタッフ（臨時用務員）3名で運営を行い、常時2名体制を敷くことができた。
- ・12月より非常勤職員2名について業務支援員への身分変更があり、うち1名が30時間雇用となった。また、臨時用務員を1名補充した。

活動状況

- ・今年のオープンキャンパス（8月8日）では、スタッフ5名と学生アルバイト6名、ボランティア1名で飲料と食事を提供した。
- ・スタッフと実習生が、教員ボックスへの郵便物の配達を行った。
- ・湯浅研究室との共同で新メニューを開発し、12月の食堂改修にあわせて弁当販売を行った。

展示について

- ・9月25～26日博物館実習×キリコのアートカフェ「〇〇ちゃんのパパ」の他、「神戸大学学ぶ楽しみ発見プログラム」受講者による作品展（10月～3月）を行った。

（交流ルーム運営委員会委員 大田美佐子）

2.6. 教員研修

2.6.1. FD

- (1) 7月18日 科研費制度の概要と重複応募、審査区分の選定について
- (2) 9月10日 税関輸出事後調査の指導とその対応について
- (3) 10月17日 日常または研究で使用する危険物等の取扱や処分について
- (4) 11月21日 神戸大学における障害者雇用の現状と課題－新たな雇用創出を目指して－

（人間発達環境学研究科長 佐藤春実）

2.6.2. 初任者研修

情報メディア委員会では、毎年、着任した教員に対して、情報セキュリティに関する研修会を開催している。今年度、2025年4月に6名に対して研修会を開催した。

（情報メディア委員会委員長 宮田任寿）

3. 入試

3.1. 一般選抜入試

3.1.1. 入学試験委員会

入学試験委員会は、2名の副研究科長、人間発達専攻長、人間環境学専攻長、学生委員会委員長、研究科長・全学入試委員会委員によって構成され、委員長を津田英二副研究科長が務めた。今年度の委員会での活動は以下の通りである。

第1回：4月16日

- 1) 令和7年度博士課程前期課程入試 募集要項について
- 2) 令和7年度博士課程後期課程入試 募集要項について
- 3) 1年履修コース入試 募集要項について

第2回：7月17日

- 1) 令和8年度博士課程前期課程推薦入学試験合格者の判定について
- 2) 令和8年度博士課程前期課程入試における受験上の特別配慮について
- 3) 入試方法およびアドミッションポリシーの変更について

第3回：8月27日

- 1) 令和8年度博士課程後期課程入学試験（I期）合格者の判定について

第4回：9月24日

- 1) 令和8年度博士課程前期課程入学試験（第I期）合格者の判定について
- 2) 令和8年度博士課程前期課程（2次募集）募集要項について

第5回：11月4日～14日（持ち回り審議）

- 1) 令和8年度大学院入試の入試情報の開示基準について

第6回：12月1日～8日（持ち回り審議）

- 1) 令和8年度博士課程後期課程入学試験に係る個別の入学資格（出願資格事前）審査について

第7回：1月15日

- 1) 令和8年度博士課程前期課程入学試験（第2次募集）合格者の判定について
- 2) 令和8年度博士課程前期課程1年履修コース入学試験合格者の判定について
- 3) 令和9年度入学試験日程について

第8回：3月3日

- 1) 令和8年度博士課程後期課程人間発達専攻，人間環境学専攻（第II期）入学試験・進学者選考試験合格者の判定について
- 2) 令和8年度博士課程前期課程人間環境学専攻推薦入学試験募集要項について
- 3) 令和9年度入学試験日程について

（入学試験委員会委員長 津田英二）

3.1.2. 一般選抜入試に係る総括と課題

今年度の人間発達環境学研究科の一般選抜入試に関する業務は、関係各位の尽力により大過なく遂行された。平成28年度から導入された博士課程前期課程の英語外部試験は本年度も継続され、合否判定に有効に活用された。人間発達環境学研究科博士課程前期課程の学生定員に関しては、平成28

年度より人間発達専攻では 52 名から 51 名に、人間環境学専攻では 40 名から 36 名に削減され、研究科全体の定員は、92 名から 5 名減の 87 名となっている。また、人間環境学専攻では、令和 4 年度入学試験より推薦入学試験が導入された（募集人員 18 名）。

博士課程前期課程の令和 8 年度入学試験結果は、人間発達専攻では、入学定員 51 名に対し、志願者数 57 名（志願倍率 1.22 倍）、合格者数 39 名であった。人間環境学専攻では、入学定員 36 名に対し、志願者数 44 名（志願倍率 1.22 倍）、合格者数 39 名であった。人間発達専攻では、合格者数が定員に達しなかったため、募集人員を若干名とする第二次募集を実施した。人間発達専攻第二次募集の結果は、志願者数 16 名、合格者数 12 名であった。外数としている人間発達専攻（一年履修コース）の入学定員 4 名に対しては、志願者数 6 名、合格者数 5 名であった。これらの入試の結果、研究科全体では、定員 91 名に対し、志願者数 123 名（志願倍率 1.35 倍）、合格者数 94 名となった。

博士課程後期課程については、人間発達専攻では、入学定員 11 名に対し、志願者数 21 名（志願倍率 1.91 倍）、合格者数 16 名、人間環境学専攻では、定員 6 名に対し、志願者数 8 名（志願倍率 1.33 倍）、合格者数 8 名であった（第Ⅰ期と第Ⅱ期の合計）。研究科全体に関しては、定員 17 名に対し、志願者数 29 名（志願倍率 1.71 倍）、合格者数 24 名となっている。

人間発達専攻は、博士課程前期課程に関し、合格者数が定員を下回り、第二次募集の実施が必要となったことは、受験者の確保が引き続き課題になっていることを示している。人間発達専攻の受験者数及び志願倍率は、年度によって大きく上下する。ちなみに昨年度の志願倍率は 1.76 倍であった。これまで、受験者確保のために、(1)人間環境学専攻については、2020 年度から英語での受験を可能とした、(2)両専攻とも、2021 年度入試から社会人特別枠における英語の配点割合を下げ、専門科目を重視した採点を行うことで、社会人受験生の増加を図る、(3)人間環境学専攻に関し、2022 年度入試から推薦選抜を実施する、などの一連の制度改革を進めた。大学院受験生の確保のあり方を引き続き検討していきたい。

また、博士後期課程に関し、人間発達専攻、中でも教育系の受験者数が定員を大幅に超過した。人間発達専攻の志願倍率が 1.91 倍となり（昨年度は 1.55 倍）、合格者数が定員を上回ることとなった。

入学試験に関する詳細なデータは『資料編』に掲載する。

（入学試験委員会委員長 津田英二）

4. 国際交流活動

国際交流活動を通じた積極的な研究と教育が展開された。特に留学生の数は前年度に増加して以来、同様の人数を引き続き保っており、国を超えて本研究科で学ぶ学生との国際交流活動が活発化している。その一方で、海外に赴く学生への支援を目的としている紫陽会グローバル人材育成資金への申請がみられなかった。本研究科の学生の海外での学びにさらに注目し、支援を推進するために、周知方法や手続きの改善などを検討したい。

4.1. 学術交流協定

学術交流協定の締結に向けての準備を行った。一つは、サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学との全学協定に関して本研究科教員が関与し、協定締結に向けて準備を行った。一つは、エトブシ

ユ・ローランド大学との Erasmus+ の協定締結に向けて手続きを推進した。

(1) 新規：なし

(2) 更新：なし

(国際交流委員会委員長 平芳裕子)

4.2. 留学生

(1) 本年度、本研究科で学んだ留学生は116名、概要（国籍別・学年別・専攻・国費/私費別）は次表の通りである。

		前期	後期	計
国籍	中国	51	57	108
	韓国	1	1	2
	台湾	0	1	1
	カーボベルデ	1	1	2
	キューバ	1	1	2
	マラウイ	0	1	1
	計	54	62	116

		前期	後期	計
学年	D3	8	8	16
	D2	4	4	8
	D1	1	1	2
	M2	17	14	31
	M1	14	17	31
	大学院特別聴講学生	0	1	1
	教育研修生(大学院特別研究生)	0	0	0
	大学院研究生	10	17	27
	計	54	62	116

		前期	後期	計
専攻	人間発達	22	25	47
	人間環境学	32	37	69
	計	54	62	116

		前期	後期	計
国費/私費	国費	4	5	9
	私費	50	57	107
	計	54	62	116

(2) チューター制度

留学生の渡日直後の生活条件の整備，諸手続き遂行，また論文作成において補助を要するものに対して，チューターを配して学生生活への円滑な適応，および論文執筆における支援を図った。

(3) 派遣留学生報告書の閲覧

教務学生係において，過去の交換留学生の報告書をファイルにまとめ，学生を対象に閲覧を継続している。

(4) メーリングリストの利用

留学生のメーリングリストを作成し，就活セミナーやイベントなどについて一斉メールで案内を送付した。

(5) 来年度に向けて

コロナ禍を経て海外渡航環境の回復は進み，学生の派遣，受け入れも活発化していた。しかし，インフレや円安などの経済的要因，加えて外交問題を含む国際情勢等が，留学生の動きにも影響を及ぼしていると見られる。学生への支援についても円滑に進んでいることから，今後も派遣学生，受け入れ学生，共に丁寧な支援を継続したい。

(国際交流委員会委員長 平芳裕子)

4.3. ダブルディグリー

ダブルディグリー・プログラムの新規開拓は，引き続き困難な状況が続いているが，可能性について模索を続けたい。

(国際交流委員会委員長 平芳裕子)

4.4. Innovative Asia

新規受入について，2019 年度以降は申請していない。

(国際交流委員会委員長 平芳裕子)

4.5. 学生・教員・職員の海外派遣

(1) 国際交流運営資金

- ・交流協定締結のための派遣事業助成

2025 年 9 月:近江戸 伸子 教授

「RWTH Aachen University (アーヘン工科大学)」

- ・学生の国際学会発表への援助事業助成

2025 年 6 月：人間発達専攻 2 名 イタリア

「30th Annual Congress of the European College of Sport Science」

2025 年 7 月：人間発達専攻 1 名 ブラジル

「18th International Conference on Music Perception and Cognition」

2025 年 8 月：人間発達専攻 2 名 大韓民国

「東北アジア体育・スポーツ史学会第 14 回大会」

2025 年 9 月：人間環境学専攻 1 名 オーストリア・ウィーン

「Plant Chromosome Biology 2025」

(2) 紫陽会グローバル人材育成資金

今年度においては、申請はなかった。

(国際交流委員会委員長 平芳裕子)

4.6. 海外研究者等の招聘・訪問

期日	氏名	国名	所属・職名	受入者
2025 年度				
2023/6/1～ 2026/3/31	Khalif BENZID	アルジェリア	-	谷 篤史
2025/7/14～ 2025/8/19	LEI TZE-HUAN	中国	湖北師範大学・教授	近藤 徳彦
2025/7/16～ 2025/8/26	Milou Voorwinden	オランダ	デルフト工科大学博士 後期課程	上田 香
2025/10/1～ 2025/12/5	KELCHTERMANS Geert	ベルギー	レウヴェン大学 教授	LASSILA ERKKI TAPIO
2025/11/27～ 2028/3/31	MOHAMMAD SAIFUL ISLAM	バングラデシュ	Livestock Research Institute, Senior Scientific Officer	佐藤 真行
2026/1/11～ 2026/7/11	Duangduean Kingphan	タイ	Chulalongkorn University Master' s Degree	佐藤 春実

(国際交流委員会委員長 平芳裕子)

4.7. スタディツアー

(1) GSP 留学型（中期）：アラバマ大学：英語・文化研修

米国・アラバマ大学において英語・文化研修を実施し、多様な価値観としっかりと向き合うことのできるグローバル人材となる機会を提供した。研修及びホームステイを通して、思考力・洞察力・

創造性・自主性を伸ばし、学部や大学院で求められるアカデミック・イングリッシュの向上を目的としたプログラムを実施した。期間は、2025年8月16日～9月28日までで、人間発達環境学研究科からは、大学院生2名が参加した。

(人間発達専攻 高田義弘)

5. 教育

5.1. 教育課程

5.1.1. 今年度の特徴

令和7年度に新たに開始した取り組みや、本年度特記すべき事項などは以下のとおりである。

(1) 研究指導計画書

令和3年度から実施している研究指導計画書の提出時期及び提出先について再検討を行ったが、これまで通りとすることにした。

(2) 他研究科と連携した教育プログラムの構築（継続）

理学研究科化学専攻との連携で互いの大学院と学部の授業を履修できる「環境・化学プログラム教育コース」を実施・運営しており、理学の知識と環境に関する知識を与え合うことで、社会において多様な問題解決に対応できる人材育成を可能にしている。さらに、令和6年度から保健学研究科との連携で互いの大学院の授業を履修できる「ウェルビーイング教育プログラム（発達・保健）コース」を実施・運営し、健康・発達・環境の領域から生涯にわたるWell-beingを掲げ、少子高齢化社会での深刻な課題解決に資する専門的能力を習得した人材の育成を可能にした。

(教務委員会委員長 大田美佐子)

5.1.2. 研究科、専攻共通科目

(1) グローバルリサーチ演習Ⅰ・Ⅱ

大学院学生の国際的な研究活動に対しては、研究会の開催や出席に対して経済的な支援が得られる機会を提供するなど、従来から積極的に奨励して来たところであるが、新たに専攻横断型の「グローバルリサーチ演習Ⅰ」（前期課程）と「グローバルリサーチ演習Ⅱ」（後期課程）という授業科目を開設し、国際的な研究活動の集積が所定の条件を満足する場合に単位を付与することとした。

研究の専門性を高め、その成果を広く国内外に発信する高度な実践能力を身につけることを目標として、指導教員による指導のもと海外および国内での学会・研究会への参加・発表やスタディツアーなどへの参加を積み重ねた上で、学術WEEKSなどの国際的な研究会や活動の企画を行うことを通じて実践能力を習得することを目指す。

(教務委員会委員長 大田美佐子)

(2) ヒューマン・コミュニティ創成研究

例年どおりさまざまな領域で研究を志す院生が受講し、知を横断する対話の創出に力点を置く授業を行った。受講生各人の研究関心に関わる意味あるテーマについて熱心な対話を展開することができた。コーディネーターは稲原美苗准教授と津田が務めた。

(ヒューマン・コミュニティ創成研究 主担当 津田英二)

5.1.3. 教職教育

(1) 教育実習

令和7年度の教育実習の履修者(単位認定者)数は、幼稚園16名、小学校38名、中等教育57名、特別支援学校17名であった。令和8年2月26日に附属校園との実習反省会(国際人間科学部)を行い、令和8年度の実習に関する反省事項や次年度以降に向けての課題について意見交換を行った。

(2) 教員免許取得状況

本年度の教員免許実取得人数は一種免許状が85名、専修免許状が16名であった。

(教務委員会委員長 大田美佐子)

5.1.4. ゲストスピーカー及びティーチング・アシスタント

(1) ゲストスピーカー

令和7年度は、前期(第1, 2Q) 4件、後期(第3, 4Q) 0件の計 4 件が実施された。提出された実施報告書の点検を通じて、受講学生、招聘講師、担当教員のいずれからも良好な評価が得られており、高い教育効果を生んでいることが確認できた。

(2) ティーチング・アシスタント

優秀な大学院学生及び学部学生に対し、教育的配慮のもと教育補助業務を行わせ、学部教育におけるきめ細かい指導の実現や、学生に将来教員・研究者等の職に就くためのトレーニングの機会を提供し、これに対する手当支給により、学生の処遇の改善の一助とするためにティーチング・アシスタント制度を設けている。学部学生をスチューデント・アシスタント(SA-時給 1130円)、大学院生をティーチング・アシスタント(TA-前期課程:時給 1230 円、後期課程:1430 円)、同後期課程学生をシニア・ティーチング・アシスタント(STA-時給 1530 円)とし、従事可能な業務内容につき差別化を行ったうえで任用した。実施報告書(学生用・教員用)からは、担当教員・学生のどちらからも高い評価を得ていることが確認できた。任用学生数は以下のとおりである。

前期 SA 0 名 TA 2 名 STA 0 名 計 2 名

後期 SA 0 名 TA 2 名 STA 0 名 計 2 名

(教務委員会委員長 大田美佐子)

5.2. 各専攻講座の教育

5.2.1. 人間発達専攻

(1) 運営

各教員は、4つの教育研究分野(心理系、表現系、行動系、教育系)に所属している。専攻の運営は、基本的に各教育研究分野を中心に行われている。運営にあたっては、専攻長と各教育研究分野代表により構成された人間発達専攻運営会議を組織し、年間8回の運営会議のほか、メール審議(Garoon 審議)により、専攻に関わる重要案件(人事、予算、入試等)の審議等を行った。教員人事は、学域人事委員会が策定した方針に基づきつつ、専攻運営会議では、今後の採用人事方針について議論を重ねて、人間発達について、学際的に教育研究を進めるための基盤づくりを目指した。

(2) 予算

予算は、専攻に配分されたものを従来通り各教育研究分野に振り分けた。共通経費は設定していない。

(3) 入学試験

博士課程前期課程入試について、例年は一定の受験者を確保できているが、本年度はやや少ない傾向となった。また、合格者のうち他大学院への進学などの理由による辞退者もいた。さらに本専攻の各分野の魅力を発信しつつ、特に学部からの進学者を増やす努力をしていきたい。後期課程入試では、進学者、入学者ともに志願者が多く、優秀な学生を迎えられている。本専攻博士後期課程では、コンスタントに学位取得者を出しており、今後も専攻の理念を実現すべく研究者養成を進めていきたい。

(4) 教育

以下、教育研究分野別に内容を学生の実績を中心に列挙する。

●心理系

心理系では、心身の発達や健康、その促進・阻害要因の探究と複雑な相互関係の把握に努め、広い視野と深い専門性をもって人間発達の様相を追究している。また公認心理師の養成も行っており、心理臨床の専門職として高度な知識とスキルを獲得することをめざし教育を展開している。このような教育体制を受け、学生の研究発表についても、国内で優れた学会発表や学術論文に関する報告がされた他、国際学会でも複数の発表が行われた。

(1) 学生の論文

査読付き論文

劉 娟・山根 隆宏 (2025)．在日中国人家庭における子どもの問題行動がソーシャルサポートを媒介して育児ストレスに与える影響：発達障害の有無による比較．発達心理学研究，36，56-67．

平岡優実・山根隆宏 (2025)．自閉スペクトラム症者のカモフラージュを引き起こす要因とその影響における心理社会的側面からの文献的検討．神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，19，59-70．

劉娟・山根隆宏．(2025)．在日中国人の子どもの神経発達症の気づきに及ぼす影響要因 ―テーマティックアナリシス法を用いた保護者の語りの分析― 神戸大学大学院 人間発達環境学研究科研究紀要，19(1)，71-82．

原 瑞穂・加藤 佳子. (2025). 大学のキャリア教育で育成すべきキャリア意識の構造に関する文献検討—国内文献のレビューより— キャリアデザイン研究, 211, 54-161.

オルランド ヤコボ. (2025). 精神疾患患者を題材にしたロールプレイが看護学生の感情労働に与える影響 応用心理学研究, 53, 207-216.

オルランド ヤコボ・加藤 佳子. (印刷中). 精神科看護師における患者との関係に伴うストレスと感情労働および情緒的消耗感の関連 日本看護科学会誌

Kato, Y., Yamane, T., Murata, Y. (2025). Assessment of behavioral emotion regulation and relationship with mental health in adults: BERQ Japanese version. Discover mental health, 5, 128. <https://doi.org/10.1007/s44192-025-00272-9>

査読無し論文

生田邦紘・竿美羽(印刷中). 大学における知的障害のある青年の自治的活動:神戸大学 KUPI における階段アート制作の実践報告. 障害者問題研究, 54(1).

加藤哲子 (2025). ケア役割を担っていた娘の学校不適応に悩む 40 代母親との面接. 神戸大学発達支援インスティテュート心理教育相談室紀要 (印刷中)

(2) 学生の学会発表

国際会議

Tetsuko Kato. Art as a Potential Space: Examining the Emotional and Identity Development of STEM Students through Interactive Art-making. World Art Therapy Festival, September 26-28, 2025, Prague, Czechia. 【査読有り, ポスター発表】

国内学会

松嶋桃子・山本健太. (2025) 実際の経験の記銘がエピソード検索に及ぼす影響—ASD 傾向に着目して—, 日本心理学会第 89 回大会, 東北学院大学五橋キャンパス. 2025 年 9 月

村上萌子・山本健太. (2025) 成人自閉症者の対人感情調整の意図, 目標, 努力の特徴 — 一誌法を利用して—, 日本心理学会第 89 回大会, 東北学院大学五橋キャンパス. 2025 年 9 月

加藤哲子. 工業系高等専門学校の学生に対する MSSM の長期的効果の検討—アイデンティティ形成と感情特性の側面から—日本心理臨床学会第 44 回大会, 神戸, 2025 年 9 月 7 日 【査読無し, ポスター発表】

松田華織・松本伊織・中谷響・埜田つみ綺・生田邦紘・赤木和重(2025). 「インクルーシブ教育統計」の学問領域を作る：なぜ特別支援学級・学校在籍児は増加するのか. 心理科学研究会春集会

中谷 響・松田華織・生田邦紘・松本伊織・中谷響・赤木和重(2024). なぜ特別支援学級・学校在籍児は増加するのか：固定効果モデルを用いた多変量解析. SNE 学会第 30 回記念研究大会.

中谷響 (2025). 合築された小学校と特別支援学校における継続的な交流及び共同学習の効果：小学校児童における知的障害児への態度や認識の変容に注目して. SNE 学会第 31 回研究大会 若手チャレンジ研究会.

竿美羽(2025). 特別支援学級に在籍する児童は, 交流学級の児童とどのように関わるのか. 心理科学研究会中四国地区合同例会.

小峰範子(2025). 自閉スペクトラム症児の嫌いな食べ物にアプローチしない教師の偏食指導観—特別支援学校小学部教師へのインタビューを通して—SNE 学会第 31 回研究大会・若手チャレンジ研究発表会

石井正幸・赤木和重 (2025) 協調運動に困難を有する知的障害青年への運動介入の検討：高等部におけるサーキットトレーニングの群間比較から. 日本特殊教育学会第 63 回大会. (ポスター発表)

石井正幸 (2025) 不器用な知的障害のある生徒と共につくるサーキットトレーニング：内発的動機づけと自己理解の促進. 日本特別ニーズ教育学会第 31 回研究大会 (自由研究発表)

平岡優実・山根隆宏 (2025). 教育現場におけるいじめ防止プログラムの研究動向. 日本心理臨床学会第 44 回大会, ポスター発表, 9 月 6 日

原 瑞穂・加藤 佳子 (2025). 大学生のキャリア意識を構成する要因の検討—インタビューによる調査結果から 日本教育心理学会総会

村田康徳・加藤佳子 (2025). 大学生における行動的感情制御方略のスタイルと抑うつ・不安の関連 日本応用心理学会大会

Wen Rui, Maki Furutani (2025). Effects of singing bowl sound mediation in comparison with nap on sleepiness, moods, visual and auditory continuous performance. 日本睡眠学会第 49 回定期学術集会

岩間桃子・相澤直樹（2025）．改訂版防衛的悲観主義尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 日本心理臨床学会第44回大会

(3) 特別研究員, 外部資金獲得など

横田 慧：異分野共創による次世代卓越博士人材育成プロジェクト生(2024年10月～2027年3月)

(4) 学生の著書

石井正幸（2025）自立活動．赤木和重（編）子どもの理屈からはじめる特別支援教育 北大路書房

(5) 学生の受賞

なし

(6) 高大接続、初等中等教育等に係る活動状況

担当教員名：山根隆宏

実施年月日：2025年7月22日

相手方：兵庫県立夢野台高校

対象人数：17名

実施内容：同高校の教育・心理類型における学校設定科目「教育・心理」において、心理学入門の講義を行い、課題研究についての指導と助言を行った。

担当教員名：山本健太

実施年月日：2025年7月15日，2025年10月31日

相手方：兵庫県立明石城西高校

対象人数：35名

実施内容：全2回にわたって同高校の探究学習の時間に、研究における問いの立て方，データ取得の方法，基礎的な解析，についての指導と助言を行った。

担当教員名：伊藤俊樹

実施年月日：2026年1月13日

相手方：附属中等学校

対象人数：1名

実施内容：芸術療法を課題研究とする附属中等学校の3年生にタブレットを用いた芸術療法について指導と助言を行った。

担当教員名：林 創

実施年月日：2025 年 5 月 7 日

相手方：兵庫県立加古川東高等学校

対象人数：40 名

実施内容：「科学を考える」特別講義において，課題研究（探究）を進めるうえでのクリティカルシンキングと認知バイアスの重要性を講演した。

担当教員名：林 創

実施年月日：2025 年 6 月 21 日，9 月 10 日，2026 年 2 月 4 日

相手方：兵庫県立兵庫高等学校

対象人数：3 名

実施内容：3 回にわたって，創造科学科の生徒の探究活動における研究に関する指導助言を行った。

担当教員名：林 創

実施年月日：2025 年 10 月 6 日，12 月 15 日

相手方：兵庫県立兵庫高等学校

対象人数：280 名

実施内容：2 回にわたって，「総合的な探究の時間」講演会として，普通科の生徒に探究の進め方の注意点を講演した。

担当教員名：林 創

実施年月日：2026 年 2 月 7 日

相手方：神戸大学附属中等教育学校

対象人数：30 名

実施内容：「授業研究会」の「Kobe プロジェクト（総合的な探究の時間）／6 年一貫 Kobe プロジェクトの実践—資質・能力育成の要として—」において指導助言を行った。

担当教員名：林 創

実施年月日：2026 年 3 月 3 日

相手方：兵庫県立加古川東高等学校

対象人数：10 名

実施内容：SSH 運営指導委員会において，委員として，加古川東高等学校で指導されている課題研究（探究）や教育プログラムに対して，コメントした。

担当教員名：古谷 真樹

実施年月日：2025 年 8 月 20 日

相手方：兵庫県立国際高等学校

対象人数：1 名

実施内容：探究活動における生徒の研究テーマに関する取材協力と指導助言を行った。

担当教員名：古谷 真樹

実施年月日：2025 年 11 月 13 日

相手方：滋賀県立守山高等学校

対象人数：1 名

実施内容：探究活動における生徒の研究テーマに関する取材協力と指導助言を行った。

担当教員名：古谷 真樹

実施年月日：2025 年 11 月 26 日

相手方：兵庫県立神崎工業高等学校

対象人数：25 名

実施内容：学年 LHR 授業において、学年主任、大学院生と共同で「睡眠を通して自身の生活を振り返る」の授業を行った。

●表現系

表現系の教育では例年と比べて大きな変化はないが、2 名の助教が准教授に昇任し、新たに准教授が一名加わり、様々な場面で院生たちに新たな刺激となり、それが良い効果をもたらしつつあることが実感される。

(1) 学生の論文

査読付き論文

蔡悦「中国におけるファンダム・ナショナリズム：現状と発展要因の考察」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』Vol119. No. 1, 2025.

松井典子 「ミリアム・ハイドの音楽活動における自己像と社会的受容—自伝と新聞記事による言説分析を通して—」オーストラリア学会編集オーストラリア研究第 39 号, 2026 年 3 月, pp. 1-15.

李 雅心 「多文化影響下における青島での音楽活動と歴史的背景の考察 —1938-1945 を中心に」神戸大学大学院人間発達環境学研究科 博士学位論文, 2025 年 9 月

西晃平 (2025) 斎藤佳三の芸術観-『表現浴衣』におけるデザイン実践, デザイン理論 (86) 23-37
坂田万青 (2026) 戦後日本のファッション文化におけるジュエリー産業の興隆, ヴェンドーム青山を事例に, デザイン理論 (87), 5-19

工藤源也 (2026) 小林泰彦の一九七〇年代のイラストレーションと執筆活動 : 男性ファッション誌『メンズクラブ』の分析を中心に. 服飾美学 (72)

(2) 学生の学会発表

Rina Nishiyama and Tetsushi Nonaka. “Can a human sing with an artificial partner?: Coordination dynamics when singing with an unseen human or artificial partner”. 2025 年 7 月 23 日. 18th International Conference on Music Perception and Cognition

村上瞳・鎌田紗弓・野中哲士, 「雅楽の稽古における唱歌使用の観察的検討」2025 年 9 月 12 日, 日本認知科学会第 42 回大会

西山理奈・野中哲士, 「人は歌声合成ソフトと歌えるか: 歌唱時における音声の協調ダイナミクスの検討」2025 年 9 月 14 日, 日本認知科学会第 42 回大会

朝比奈茉穂・野中哲士, 「保育園での歌遊び場面における移動獲得後の乳幼児の行動」2026 年 3 月 5 日, 日本発達心理学会第 37 回大会

松岡 (初田) 響子・清水大地 (2025). 接触を伴う共同行為に見られる 動作協調のわずかなラグと一体感の促進. 日本認知科学会第 42 回大会, ポスター発表, 2025 年 9 月, 早稲田大学

松岡 (初田) 響子・清水大地 (2025). ペアダンスにおける一体感を喚起する個人間協調の様相. 第 5 回日本ダンス研究会, ポスター発表, 2025 年 10 月, 神戸大学

松岡 (初田) 響子・清水大地 (2026). ラテンダンスにおける一体感を喚起する個人間協調運動協調の様相. Adaptive behavior and its ecological foundations ABEF 2026, ポスター発表, 2026 年 2 月, 神戸大学

松岡 (初田) 響子・清水大地 (2026). +Contact: 他者との接触を含む身体的相互作用における主観的体験の変化. 第 16 回日本ダンス医科学会学術集会, ポスター発表, 2026 年 3 月, お茶の水女子大学

Kyoko Matsuoka-Hatsuda, Daichi Shimizu (2026). Coordination and the Sense of Togetherness in Partner Dance: Nonlinear Dynamics of Embodied Coupling. 2026 Conference of Society for the Psychology of Aesthetics, Creativity, & the Arts, 口頭発表, 2026 年 3 月, Omaha, Nebraska

大倉なつ美・清水大地 (2025). 鏡像と実像に関する知覚・認知の差異. 日本認知科学会第 42 回大会, ポスター発表, 2025 年 9 月, 早稲田大学

西晃平 (2025)「斎藤佳三の服飾観—和装と洋装のデザイン理論を手がかりに」日本デザイン学会 ファッション・デザイン部会, 口頭発表, 杉野服飾大学, 2025 年 12 月 13 日

松井典子「オーストラリアにおける音楽文化の発展— ミリアム・ハイド(Miriam Hyde, 1913-2005)の功績を通じて」 オーストラリア学会 第 38 回地域研究会, 2026 年 2 月 14 日

佐野翔・岡野真裕 (2026). 音楽ビートと身体動作の同期：どこまでのずれが「同期」と見なされるか？ 第 16 回日本ダンス医科学会学術集会, ポスター発表, 2026 年 3 月 1 日, お茶の水女子大学

橋澤慧・岡野真裕 (2026). 続・合奏で低音が遅れる？：高さの違う 2 音における演奏家の同時性判断特性の検討. Adaptive behavior and its ecological foundations 2026 場所と挙動：物理系から社会まで, 2026 年 2 月 2 日, 神戸大学

藤野真由・岡野真裕 (2025). 打楽器演奏における脱力の評価方法の検討—スティックの軌跡に着目して—. 日本音楽知覚認知学会 2025 年度秋季研究発表会, ポスター発表, 2025 年 11 月 15 日, 大阪学院大学

稲垣七海・岡野真裕 (2025). 注意焦点の違いが金管楽器の演奏動作に与える影響の予備的検討. 日本音楽知覚認知学会 2025 年度秋季研究発表会, ポスター発表, 2025 年 11 月 15 日, 大阪学院大学

渡辺佑 (2025). 学業とピアノの両立—非ピアノ専攻者に着目して—. 口頭発表. 日本音楽教育学会 第 56 回長崎大会, 2025 年 11 月 9 日, 長崎大学

Nanami Inagaki and Masahiro Okano (2025). Effects of performance anxiety on brass players' attention and body movements. 18th International Conference on Music Perception and Cognition, Poster presentation, 2025.7.23, Mackenzie Presbyterian University

Kei Hashizawa and Masahiro Okano (2025). Simultaneity judgment for two tones with different pitches: the effects of musical training and the primary instrument. 18th International Conference on Music Perception and Cognition, Poster presentation, 2025.7.23, Mackenzie Presbyterian University

一井冴月・岡野真裕 (2025). ピアニストの身体動作が聴取者の知覚する感情に及ぼす影響. 日本音楽知覚認知学会 2025 年度春季研究発表会, 口頭発表, 2025 年 6 月 14 日, 豊橋技術科学大学.

(3) 特別研究員, 外部資金獲得など

坂田万青「戦後日本のファッション文化におけるジュエリー産業の興隆」異分野共創による次世代卓

越博士人材育成プロジェクト生(2024 年 10 月～2027 年 3 月)

西山理奈：神戸大学「異分野協働・共創による次世代 AI 卓越博士人材育成プロジェクト (BOOST)」
(2025 年度～2027 年度)

稲垣七海：異分野共創による次世代卓越博士人材育成プログラム (2025 年度～2027 年度)

初田響子：異分野共創による次世代卓越博士人材育成プログラム (2023 年度～2025 年度)

朝比奈茉穂：異分野共創による次世代卓越博士人材育成プログラム (2023 年度～2025 年度)

(4) 学生の受賞

藤野真由：日本音楽知覚認知学会 2025 年度秋季研究発表会 ポスター発表選奨

朝比奈茉穂：国際シンポジウム Adaptive Behavior and its Ecological Foundations 発表賞

(5) その他の執筆

100 枚のドローイング展 (ゼミ学生有志 2 人展), 10 月～12 月, 鶴甲第 2 キャンパス F 棟 1 階ギャラリー 虹

ゼミ 3 回生展 (ゼミ学生 5 人展), 1 月～3 月, 鶴甲第 2 キャンパス F 棟 1 階ギャラリー 虹

工藤源也 (2025) べつにそうじゃなくてもよかった。けど、そうでしかない。ユリイカ 57(11), 青土社

西晃平・谷口美佳 (2026) 「プロジェクト型学習における教育実践—ライフデザイン学科×日本ライトハウス盲導犬訓練所の連携活動を事例に—」四天王寺大学紀要 (77) 2026 年 3 月

ヴァレリー・スティーレル 著, 平芳裕子, 蘆田裕史 監訳, 五十棲亘, 鈴木彩希, 工藤源也 訳 (2025) ファッションセオリー : ヴァレリー・スティーレル著作選集, アダチプレス

西晃平 (2025) 「サステナブル・ファッションの 実現へ向けた取り組み ～サーキュラーエコノミーの事例から～」『動画付きテキスト「繊維リサイクルと私たちの生活～持続可能な社会に向けて～」』 木村照夫監修, 一般社団法人日本繊維機械学会・繊維リサイクル技術研究会.

(6) ゲストスピーカーの招へいなど

講師：飯川雄大 (美術家)

講演題目「その場所、その空間を使う」

その場所、その空間の状況や得られる情報を利用した平面作品を作るワークショップを開催し、ワークショップ参加者の成果物を見てキャンパス内をまわった。

講演日：2026年6月19日(木)、7月3日(木)

松居直美（ロンドン大学准教授）「音楽風刺劇『オスペダーレ』について」2025年7月

井上登喜子（お茶の水女子大学教授）「オーケストラと日本人の研究背景について」2025年12月

講師：東田範子

題目：「カザフスタンの音楽について（エスノソルフエージュに着目して）」

日程：2025/5/31

実施授業：「民族音楽演奏演習1」

講師：Razi Yazdanmehr

題目：「イラン音楽のリズム理論について」

日程：2025/6/30, 10/27, 2026/2/2,

実施授業：「民族音楽演奏演習2」「音楽民族学特論1-A, 1-B」「エスノミュージコロジー1・2」「民族音楽特論演習」

(7) 学術 Weeks シンポジウム

【企画名】クラシック音楽への親しみと協働的創造を促すための「鑑賞＋音楽づくり」ワークショップ

【日程】2025年10月8日(水) 17:00～19:00

【参加者】11名

【概要】本企画は、クラシック音楽に対して難しく堅苦しいという印象を持つ人やクラシック音楽になじみがない人に、クラシック音楽の持つ音楽を聴いて様々なイメージを巡らす面白さや、ともに演奏して全体の音を作り上げる楽しさや効力感を実感してもらうこと、それらを通じて人々の協働的な創造性育成に寄与する音楽鑑賞・制作の枠組みを見出すことを目的として開催した。

特に本ワークショップでは、クラシック音楽の鑑賞とその鑑賞活動で得た曲の一部を利用・応用して音楽づくりを行う「鑑賞＋音楽づくり」のワークショップを行った。本企画には、ダンスや音楽を専門とする大学生・大学院生の他、音楽や表現の専門的経験を持たない大学生、大学外の外部参加者など、多様な属性を持つ人々が参加し、活発に交流が行われた。前後に行ったアンケートの様子から、参加者がクラシック音楽に親しみ、その面白さや楽しさを実感した様子、グループで音楽を制作・演奏することで一つの曲をつくる楽しさやグループ内・間の一体感を味わった様子が見られた。

【企画名】＋ Contact：言葉を使わないコミュニケーションの可能性

【日程】2025年11月21日(金) 17:00～19:30

【参加者】12名

【概要】本企画は、身体を通じたコミュニケーションの可能性を、ダンスの身体知を切り口としたワークショップを通じて探索的かつ実践的に検証することを目的として開催した。

特に、本ワークショップでは、非言語的相互行為に注目した国際的に実践されているボールルームダンス (ballroom dance) ・ラテンダンス (Latin American dance) ・コンテンポラリーダンス (contemporary dance) といった、即興性を含む身体表現における知見や技法 (ミラーリング (mirroring) ・コンタクトインプロビゼーション) を手法を参照し、非接触・接触の双方を含む身体的対話の体験をラテンダンスの専門家と研究者が協力して設計・実施した。また、ワークショップ後には、実践および研究の専門家との総合討論を通じて、身体接触の状態に応じた相互作用、情動の喚起、関係性の変容に関する学際的意義について、多角的に考察した。

本企画には、ダンスや音楽を専門とする大学生・大学院生の他、表現の専門的な経験を持たない大学生、大学外の外部参加者など、多様な属性を有する人々が参加し、活発に交流が行われた。また参加者には、ワークショップの体験を通じて、他者との身体的インタラクションにおける接触の有無がもたらす違いや、それぞれの効果・可能性に気づき、触覚 (haptics) への意識を高めていく様子が窺われた。加えて、身体を介した非言語コミュニケーションの豊かさや、他者とのインタラクションに伴う身体感覚や情動の変化を体験的に理解する機会となった様子も見られた。

(8) 高大接続、初等中等教育等に係る活動状況

担当教員名：岡野真裕

実施年月日：2025 年 11 月 15 日，2026 年 2 月 7 日

相手方：滋賀県立膳所高等学校

実施内容：スーパーサイエンスハイスクール事業における「サイエンスプロジェクト 2025」グループ研究についての指導助言

対象人数：サイエンスプロジェクト参加生徒 66 名＋教員 20 名（膳所高等学校および連携高等学校の生徒・教員）

担当教員名：谷正人

実施年月日 2025 年 7 月 19 日

相手方：令和 7 年度 HYOGO グローバルリーダー育成プロジェクト高等学校探究活動の充実事業
「ひょうごリーダーハイスクール」キックオフ研修会 兵庫県教育委員会

実施内容：神戸大学ラボツアーにおける授業（大学研究室訪問，民族音楽学研究室，谷正人研究室）

対象人数：計 50 名

●行動系

行動系は自然科学から人文・社会科学分野までの多岐にわたる学問分野を含んでおり、これらの学際的観点から解析する方法や枠組みを習得し、課題解決のための柔軟な思考能力や洞察力を涵養することを目的に、大学院生には、それぞれの分野の学会での発表することのみならず、学内での各種発表会・研究会などの実質的な計画・準備・運営に参画し、積極的参加を推奨している。本年度も国内

外での学会等で研究発表を行い、積極的な研究活動を展開している。今後の課題としては、国際誌への論文掲載成果と共に、国際学会での発表活動が望まれる。

(1) 学生の論文

査読付き論文

乾順紀・長ヶ原誠(2025) 高校生のフィジカルリテラシーを高める体育授業プログラムの開発に関する研究：「体育理論」との関係から．体育学研究，70：717-736.

太田幸志，原田和弘．(2025)．高齢者を対象とした運動継続に寄与する他者との運動実践のあり方の探索的検討．理学療法学研究，52：357-365

Han, T., Ding, T., Li, S., & Ishihara, T. (2025). An anterior-posterior gradient in hippocampal subfield volumes linking sleep health to cognition in young adults. *Neuroscience Research*, 105006.

査読無し論文

Ishibashi, S., Tamura, K., Goma, A., Yamamoto, K., & Masumoto, K. (2025). Preference-Aligned Options from Generative AI Compensates for Age-Related Cognitive Decline in Decision Making. *arXiv preprint arXiv:2511.21164*.

木村直登(2026) 卓球における「プレーシング」に関する一考察－鈴木貞雄の記述の変化に着目して－．早稲田－研究と実践－，46：91-102.

(2) 学生の学会発表

国際会議

Koji OTA, Kazuhiro HARADA. (2025). Diversity of exercising with others and one-year maintenance of exercise behavior and social support among older adults: A longitudinal survey. World Physiotherapy Congress 2025. Oral Presentation.

Aoi Nishino, Benio Kibushi

The Effect of Combining Neuromuscular Electrical Stimulation with Towel Curl Exercise Focusing on the Abductor Digiti Minimi Muscle on Standing Balance

European College of Sport Science 30th Annual Congress 2025 年7月2日

Pelvic Belt-Equipped Garment Suppresses Fatigue-Induced Reductions in Force Production during Countermovement Jump and Landing Cutting

Yata Endo, Takashi Kawamura, Benio Kibushi

European College of Sport Science 30th Annual Congress 2025 年7月2日

Naoto Kimura

A Study of the Adoption Process of Offensive Hitting Techniques in Japanese Table Tennis Competitions (1902-1942)

The 14th Northeast Asian Sport History International Conference, Seoul, Republic of Korea, August 6, 2025

Kanata Takami

The Idea and Actual Condition of Athletics as “sen-gi” (陸上戦技 in Japan during the Pacific War (1941-1945)

The 14th Northeast Asian Sport History International Conference, Seoul, Republic of Korea August 6, 2025

国内学会

丁同芳, 韓天放, 李述冰, 石原暢. (2025). 体力, 肥満, 血圧, 喫煙・飲酒習慣と記憶機能および海馬サブ領域体積の関係. 第 79 回日本体力医学会.

Tianfang Han¹, Toru Ishihara. (2026). Subnucleus-Specific Volumetric Variations in the Amygdala Linking Sleep Health to Cognition in Young Adults. The 28th Annual Meeting of Japan Human Brain Mapping Society.

丁同芳, 韓天放, 石原暢. (2026). 体力・心血管代謝リスクと海馬サブ領域体積および認知機能との関連：遺伝要因を統制した多変量解析. 第 28 回日本ヒト脳マッピング学会.

西野葵, 木伏紅緒. (2025). 小趾外転筋に焦点を当てたタオルギャザーエクササイズと神経筋電気刺激の併用が立位バランスに及ぼす影響. 第 19 回 Motor Control 研究会.

乾 順紀・長ヶ原 誠 (2025) わが国におけるフィジカルリテラシー評価尺度の適用性の検討：基準連関妥当性に着目して. 兵庫体育・スポーツ科学学会第 36 回大会（口頭発表），神戸大学深江キャンパス，2025. 6. 7.

乾 順紀・長ヶ原 誠 (2025) 日本語版フィジカルリテラシー評価尺度とその関連項目の検討. 日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会（口頭発表），日本体育大学，2025. 8. 29.

乾 順紀・長ヶ原 誠 (2025) 就学期のフィジカルリテラシー形成と運動・スポーツ経験の関連：課外活動と体育授業両面の検討から. 日本生涯スポーツ学会第 27 回大会（口頭発表），順天堂大学，2025. 11. 29.

三浦敬太・山下耕平・長ヶ原誠（2025）

国際スポーツイベントのボランティア関心度に影響する要因：ワールドマスタースゲームズ 2021 関西に着目して.

兵庫体育・スポーツ科学学会第 36 回（口頭発表），神戸大学， 2025. 6. 8.

松本えりあ・伊藤汐梨・木村心春・山下耕平・三浦敬太・長ヶ原誠(2025)

ワールドマスタースゲームズ 2027 関西に対する選手の期待 ～ホスト国選手とゲスト国選手の比較～日本生涯スポーツ学会 第 27 回大会（順天堂大学），順天堂大学，2025. 11. 29-30.

竹下誠隆，原田和弘. (2025). 性格特性は自己調整介入による高齢者の運動継続を調整するカーランダム化クロスオーバー試験の二次分析一. 日本健康心理学会第 38 回大会. ポスター発表

井内貴大，川崎亜瑠，木村哲也. 測定時間の教示が静止立位制御則に与える影響. 日本体力医学会第 40 回近畿地方会，2026. 2. 28，神戸大学

吉永梨桜，酒井蒼介，木村哲也. 腰部への軽い荷重負荷が立位バランスに与える効果. 日本体力医学会第 40 回近畿地方会，2026. 2. 28，神戸大学

胡麻彩奈，石橋紗矢香，田村亘，増本康平，塩崎麻里子 (2025) 人生の疲れ尺度の作成：日本人の長寿願望との関連. 日本心理学会第 89 回大会 2025 年 9 月 6 日

田村亘，石橋紗矢香，胡麻彩奈，山本健太，増本康平 (2025) 生成 AI からの反論が正解のない意思決定判断に及ぼす影響：高齢者と若年者の比較. 日本心理学会第 89 回大会 2025 年 9 月 7 日

石橋紗矢香，田村亘，胡麻彩奈，山本健太，増本康平 (2025) 生成 AI 使用が選択満足度と選択困難度に及ぼす影響：若年者と高齢者の比較. 日本心理学会第 89 回大会 2025 年 9 月 7 日

木村直登，「卓球のループドライブにおける主観的努力度がボールの速度と回転数に及ぼす影響」，第 11 回日本スポーツパフォーマンス学会大会，東京ビックサイト，2025 年 7 月 30 日

木村直登，「日本の卓球競技におけるカット打法の変化と採用過程に関する研究(1902-1942)」，日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会，日本体育大学，2025 年 8 月 29 日

木村直登，「日本の卓球競技における攻撃的打法の変化と採用過程に関する研究(1946-1960)」，スポーツ史学会第 39 回大会，札幌大学，2025 年 12 月 7 日

木村直登，「精神科作業療法における卓球導入期の歴史的考察 — 長山泰政の留学と実践を手がかりに — 」，日本アプライドスポーツ科学学会第 5 回大会，国学院大学，2026 年 1 月 24 日

木村直登,「卓球における『プレーシング』に関する一考察 -戦前の記述に着目して-」,第13回北関東体育学会大会,作新学院大学,2026年2月21日

木村直登,「卓球における打球面特性の差異がボール速度・回転数に与える影響 -1959年の規則変更再評価のための基礎的検討-」,第17回東京体育学会,東京学芸大学,2026年3月4日

木村直登,「卓球の打球方向予測における『読まれにくさ』の基礎的検討:低身長群と高身長群の比較」,日本コーチング学会第37回大会,日本大学,2026年3月6日

(3) 特別研究員, 外部資金獲得など

木伏紅緒, 朱織雨, 壺井達也. 筋・運動学シナジーを用いたアスリートの移動運動能力評価. 公益財団法人ヒロセ財団

入江宗太郎, 前田正登. 遠投を目的としたボール投げにおけるボールの大きさとボール把持の関係. 令和7年度兵庫体育・スポーツ科学学会学術研究助成(奨励).

大平聖人, 前田正登. 重いバットでの素振りがその後のバッティングスイングの速度認識に及ぼす影響. 令和7年度兵庫体育・スポーツ科学学会学術研究助成(奨励).

(4) 学生の受賞

受賞者: 松本えりあ・伊藤汐梨・木村心春・山下耕平・三浦敬太・長ヶ原誠(2025)

受賞名: 日本生涯スポーツ学会 第27回大会学生ポスター発表最優秀賞

受賞演題: ワールドマスターズゲームズ2027 関西に対する選手の期待 ～ホスト国選手とゲスト国選手の比較～

受賞者: 太田幸志

受賞名: 日本健康支援学会第12回優秀論文賞(研究部門)

受賞者: Aoi Nishino

受賞名: Young Investigators Award

機関: European College of Sport Science 30th Annual Congress

受賞演題: The Effect of Combining Neuromuscular Electrical Stimulation with Towel Curl Exercise Focusing on the Abductor Digiti Minimi Muscle on Standing Balance

受賞者: 木村直登

受賞名: Certificate of Excellence in Oral Presentation, The 14th Northeast Asian Sport History International Conference (NEASHPES 2025), Seoul, Republic of Korea

受賞演題: A Study of the Adoption Process of Offensive Hitting Techniques in Japanese Table

(5) 高大接続，初等中等教育等に係る活動状況

担当教員氏名：佐藤幸治

実施年月日：2025 年 12 月 15 日

相手方：神戸大学附属中等教育学校

対象人数：1 名

実施内容：卒業研究に対するアドバイスと生化学的な測定方法や栄養実施状況に関する助言を行った。

担当教員氏名：石原暢

実施年月日：2025 年 10 月 28 日

相手方：関西学院高等部

対象人数：4 名

実施内容：探求授業「AI 活用」に対するアドバイスを行った。

担当教員氏名：石原暢

実施年月日：2026 年 2 月 7 日

相手方：神戸大学附属中等教育学校

対象人数：5 名

実施内容：授業研究会（保健体育科）において指導助言者を担当した。

担当教員：木村哲也

実施年月日：2025 年 6 月 4 日（オンライン），10 月 2 日（対面），ならびに随時メールでの指導

相手方：兵庫県立兵庫高等学校

実施内容：学校設定科目「創造応用 I」における身体科学分野の探究活動についての助言

対象人数：5 名

●教育系

教育系では，教育学の諸領域を総合し，乳幼児期から成人期に至る発達と学習，カリキュラムや教育行政のあり方を追究している。理論と実践の往還を重視し，現代的課題に対応できる高度な専門性を持つ人材の養成に努めている。こうした体制のもと，学生による国内での学術論文掲載や学会発表に加え，欧米やアジアでの国際学会発表も活発に行われた。さらに，JST 次世代プロジェクトや特別研究員への採択，文部科学大臣表彰の受章，地域社会への貢献など，多角的な教育研究成果が得られている。

(1) 学生の論文

査読付き論文（WoS 収録論文はその旨記入）

加藤優汰「梅根悟の戦後新教育期カリキュラム論における基礎学習 —『春日井プラン』の『基礎課程』と『発展的研究課程』に着目して—」, 日本教育方法学会『教育方法学研究』第 50 巻, 2025 年 3 月, pp. 73-83.

加藤優汰「梅根悟の幼児教育課程論に関する研究—戦後新教育期の言説に着目して—」, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 19 巻第 1 号, 2025 年 9 月, pp. 39-48.

加藤優汰「梅根悟の三層構造論と『春日井プラン』—『問題単元課程』における『活用』概念—」, 日本教育学会『教育学研究』第 92 巻第 4 号, 2025 年 12 月, pp. 54-68.

松田華織 (2025)「現代米国における「IEP ファシリテーション」制度の特質と意義 —障害児教育行政に見る学校—保護者間紛争解決の展開—」『日本教育行政学会年報』第 51 号, pp. 166-185.

永岡珠瑠 (2025)「現代米国教員養成における「住民参加」の萌芽的動向と意義 —住民による支援・協力を手がかりに—」『日本教育行政学会年報』第 51 号, pp. 186-205.

金聯珠 (2025)「教育課程の自律的編成・運営における地方教育行政の役割 —韓国の京畿道教育庁の政策を中心に—」『東アジア教育研究』第 20 号, pp. 42-60.

友永達也 (2025)「話すこと・聞くことにおける循環的なメタ認知に基づく戦略的判断に関する事例研究—小学生がインタビュアーとなる『聞き書きプロジェクト』の実践を通して—」全国大学国語教育学会『国語科教育』97, pp. 35-43.

大塚雅之 (2025)「高等学校公民科における人間の非合理性を踏まえた 社会参加 学習—金融行動に対するナッジを用いた課題解決力の向上を目指して—」日本公民教育学会『公民教育研究』32, pp. 53-67.

賀内望 (2026)「発達と学力の保障を志向する教育目標・教育評価—学習困難を抱える児童に焦点を当てて—」『教育科学論集』29, pp. 13-20.

長井映雄・菊地章・南洋平 (2025)「古代インカ文明における計算・記録具ユパナ・キープの教材化と有用性の考察」『日本産業技術教育学会誌』第 67 巻第 1 号, pp. 59-68 .

長井映雄, 石川勝彦, 菊地章, 平山勝浩, 南洋平 (2025)「「美術 I」デザイン分野の視点を取り入れた 情報デザイン教材の開発」『日本産業技術教育学会誌』第 67 巻第 4 号, pp. 259-269 .

Sakamoto, M., Yamaguchi, E., Yamamoto, T., Matano, M., Ohmido, N., & Murayama, R. (2026. 1).

An SSI-based instructional unit to enhance primary students' risk-related decision-making. *Education Sciences*, 16(1), 143. <https://doi.org/10.3390/educsci16010143> (WoS 収録論文)

田中達也 (2025.9) 「防災教育における「知識から行動への変換」を支援する教育設計の検討」『防災教育学研究』第6巻, 第1号, 143-153.

田中達也・大城亜水・京極重智・深川幹 (印刷中) 「協働学習型キャリア支援プログラム STEP Project の実践と展望」『神戸常盤大学紀要』第19号.

田中達也・大西鮎美・寺田努 (印刷中) 「児童の災害対応力を育成するゲーミフィケーション型防災教育プログラムの開発と評価」『防災教育学研究』第6巻, 第2号.

小尾麻希子 (2025). 「1950 年代の神戸大学教育学部附属幼稚園における「明石附幼プラン」の改革過程－「一人一人を生かす」カリキュラム構成の検討を中心に－」. 日本保育学会『保育学研究』第63巻第1号. pp. 79-90.

小尾麻希子 (2026). 「戦後幼稚園教育改革の起点(1)－幼稚園の目的・目標規定の検討－」. 武庫川女子大学教育学部『教育学研究論集』第21号. pp. 118-127.

小尾麻希子 (2026). 「戦後幼稚園教育改革の起点(2)－昭和23年『保育要領』再考－」. 武庫川女子大学教育学部『教育学研究論集』第21号. pp. 128-137.

小尾麻希子・阪本圭子・松村美佳 (2026). 「3歳児クラスにおける保育実践創造の視点－生活経験と遊びの連続性に着目して－」. 武庫川女子大学教育学部『教育学研究論集』第21号. pp. 156-165.

清山莉奈 (2025) 公的機関による乳幼児教育に関する保護者向けの情報発信の実態を分析する視点の提案－イギリスとニュージーランドのウェブサイト調査を通して－ 岡山県立大学保健福祉学部紀要 32(1), pp. 179-190.

澤田淳・岡部恭幸 (2026) 等号理解と関係的試行の発達段階に基づく授業実践の再分析, 数学教育学会誌 66(3・4), 印刷中

澤田淳・岡部恭幸 (2025) 等号理解と関係的試行の発達の様相：足し算にかかわる式の分析に焦点を当てて, 数学教育学会誌 66(1・2), 印刷中

太田直樹・岡部恭幸 (2025), 「部分と全体の関係性」の評価課題からみる構造的捉えの困難性－下位項目の通過基準による分類と誤答傾向からの示唆－, 数学教育学会, 数学教育学会誌 66(1・2), pp. 49-60

水谷智一（2026）式の構造や関係を読む様相に関する研究—小学校第2学年「四季を使って考えようの実践から—、数学教育学会誌 66(3・4), 印刷中

倉本悠吾（2025）算数科における児童の文字理解の課題に関する一考察—小学校第6学年を対象とした調査を通じて—、近畿数学教育学会誌第38号 pp. 1-18

飯田理愛，飯田望未，津田英二（2026）「居場所支援による体験格差の是正に関する研究—神戸大学のびやかスペースあーちの取り組みの観点において—」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』19（2）（掲載予定）

稲原美苗，井上太一（2025）「「わたし」の声を聴き合う対話の場 ～特別支援学校におけるお母さんたちとの哲学カフェの実践～」『ふくしと教育—ふくしと学びの交差点—』43，大学図書出版，pp. 64-69.

査読無し論文

中山瑠美「ゲーリー公立学校における work-study-okay プランの思想と実践—なぜ『遊び』と『仕事』は学校に必要だったのか—」、神戸大学大学院人間発達環境学研究科『教育科学論集』第29号，2026年3月，pp. 65-74.

瀬川千裕（2025）「文芸雑誌『否文学』について—生活綴方と文学の狭間」関西教育学会『関西教育学会』49号，pp. 156-160.

瀬川千裕（2026）「雑誌『作文奈良』総目次（1）」大阪樟蔭女子大学『大阪樟蔭女子大学研究紀要』16巻，pp. 89-95.

瀬川千裕（2026）「雑誌『作文奈良』総目次（2）」大阪樟蔭女子大学『大阪樟蔭女子大学研究紀要』16巻，pp. 89-95.

瀬川千裕（2026）「第14章 児童生徒・保護者支援におけるチーム学校のあり方」村上凡子編著『子どもの居場所づくりに役立つ教育相談』一藝社，pp. 139-148.

瀬川千裕・中嶋郁雄（印刷中）「講義における意見交流を促進する要件に関する研究—『教職概論』および『生徒・進路指導論』の学生の認識に着目して—」大阪樟蔭女子大学『樟蔭教職研究』10巻，pp. 1-10.

三島泰樹（印刷中）「日本におけるセカンドキャリア教員の現状と課題 - Current issues of second-career teachers in Japan-」『教育科学論集』第29号

山口悦司・坂本美紀・俣野源晃・山本智一・川崎弘作・長沼祥太郎・毛利圭汰・村山留美子 (2025. 5) 「科学技術の社会問題に対する小学生の意思決定を支援する生成 AI 利用型教育プログラムの開発」『日本科学教育学会研究会研究報告』第 39 巻, 第 5 号, 67-70.

比嘉俊・山口悦司 (2025. 12) 「日本国内における外来生物教育研究の現状と課題」『日本科学教育学会研究会研究報告』第 40 巻, 第 2 号, 87-90.

木村柚香・貞清篤郎・増田莉子・伊藤堇・山崎朋香・中谷奈津子 (2025) 「ノディングズ著『ケアリング論』を読む：ソーシャルケア研究の新たな地平を目指して」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 19 巻第 1 号, 105-114.

太田直樹 (2025) 子どもの数理認識を研究する意義を問い直す
-数の構造「部分と全体の関係性」に関する数理認識-数学教育学会「2025 年度数学教育学会夏季研究会（関西エリア）予稿集」, pp. 32-37

太田直樹 (2025), 低学年児童の「部分と全体の関係性」に関する構造的理解の実態一面接法による 4 観点の質的分析—日本数学教育学会「第 58 回秋期研究大会予稿集」, pp. 249-256

著書

松本法尊 (2025) 「第 4 章」『「愛と知の循環」としての保育実践、』無藤隆ら 北大路書店

松本法尊 (2025) 「第 6 章 1, 第 7 章」『領域人間関係と道德教育 子どものウェルビーイングを目指して』伊藤理絵ら 大学教育出版 (2025)

松本法尊 (2025) 「第 2 章 6」『心の発達と「レジリエンス」の育て方 子どもと保育の柔軟なあり方を目指して』無藤隆ら ぎょうせい.

(2) 学生の学会発表

国際学会

Naoki Eda (2025) : Transition of Writing in Freinet Education--Focusing on the collection of writings in 1927-54--, International Auto Biography Association (IABA) , Europe Conference 2025, Coimbra, Portugal, 24 July 2025.

Mitsuru Matsuda, Naoyuki Yamada, Tatsuya Tomonaga (2025) Generating Expansive Learning through Lesson Study: Applying Change Laboratory in Second Grade Classrooms, World Association of Lesson Studies , WALs Conference 2025, Paper Presentation (HIROSHIMA, JAPAN)

Tatsuya Tomonaga (2025) Proposals for an Analytical Framework and Instructional Methods in

the Teaching of Questioning, World Association of Lesson Studies , WALs Conference 2025,
Teacher Talk (HIROSHIMA, JAPAN)

Mishima, T. & Lassila, E. T. Professional socialization of teachers with diverse professional specialties - Focus on Anticipatory and Organizational socialization. (Poster presentation) 34th Japan-U.S. Teacher Education Consortium (JUSTEC 2025) September 6-8th 2025, Mukogawa Women's University, Japan.

Matano, M., & Yamaguchi, E. (2025, August). Instructional approach to improve primary students' argumentation skills using multiple pieces of evidence: Focusing on epistemic understanding of evidence. Paper presented at the European Science Education Research Association (ESERA) 2025.

Sakamoto, M., Yamaguchi E., Yamamoto, T., Matano, M., & Murayama, R. (2025, August). Relationship between primary students' socioscientific decision-making and risk perception. Paper presented at the European Association for Research on Learning and Instruction (EARLI) 2025.

Sakamoto, M., Yamaguchi, E., Matano, M., Mori, K., & Murayama, R. (2025, October). Teaching socioscientific issues in elementary school: Supporting risk - benefit reasoning and consensus-oriented decision-making. Poster presented at the 2025 64th Annual Convention of Taiwanese Psychological Association.

Tanaka, T., Ohnishi, A., & Terada, T. (2025, August). Integrating video reflection and gamification into disaster education: A competence-based framework for enhancing preparedness. Poster presented at the European Science Education Research Association (ESERA) 2025.

Matsuyama, S. & Kitano, S. "Social work functions found in training programs for early childhood teachers and public health nurses in Japan", PECERA, 2025. (審査有)

国内学会

松田華織, 松本伊織, 中谷響, 埜田つみ綺, 赤木和重 (2025) 『『インクルーシブ教育統計』の学問領域をつくる ―なぜ特別支援学級・学校在籍児は増加するのか―』 心理科学研究会 2025 年春の研究集会、名城大学, 2025 年 4 月 26 日.

松本伊織 (2005) 「米国教員評価政策における評価項目の細分化と教員の声の考察 ―D. C. 教員評価政策に注目して―」 日本教育経営学会第 65 回大会, 茨城大学, 2025 年 6 月 8 日.

松田華織（2025）「米国特別支援教育の教員養成課程にみる模擬 IEP 会議の制度設計と運用意義」日本教育経営学会第 65 回大会，茨城大学，2025 年 6 月 8 日．

永岡珠瑠（2025）「現代米国教員養成における「文化的に応答的な指導」の理論と実践」日本教師教育学会第 35 回大会，宇都宮大学，2025 年 9 月 21 日．

綾香音（2025）「米国都市部における地域再生と連関した学校参加への保護者の当事者意識の生成過程 —イリノイ州・シカゴの parent mentor program に着目して—」日本教育行政学会第 60 回大会，東京大学，2025 年 10 月 12 日．

友永達也（2025）Developing Speaking and Listening Skills Through Co-Creating Criteria for “Good Discussions”，第 7 回 OracyJAPAN オンライン公開研究会．

友永達也（2025）「小学校 6 年生を対象にした Oracy Assessment Toolkit の活用とユーモアの指導—英国 Oracy 教育を踏まえた日本における音声言語教育の再構成を目指して—」第 149 回全国大学国語教育学会 早稲田大会（早稲田大学）．

大塚雅之（2025）「不確実性を前提とした金融経済教育 —信頼構築を通じた市民性の育成—」第 35 回日本公民教育学会全国研究大会（北海道大会）（北海商科大学）．

南洋平（2025）「美術科における批評学習モデルの比較研究—アンダーソンとゲーヒガンによる学習モデルを手がかりにして—」令和 7 年度日本教育大学協会全国美術部門．第 64 回大学美術教育学会 千葉大会（千葉大学）

南洋平（2026）「米国第三世代 DBAE におけるカリキュラム構造転換 —認知的柔軟性理論と教科横断的ハブ構造に着目して—」第 48 回 美術科教育学会東京（早稲田）大会（早稲田大学）．

瀬川千裕（2025）「今井誉次郎の児童文学にみる子ども」第 21 回日本子ども学会学術集会（秋田大学）．

瀬川千裕（2025）「今井誉次郎の教育評価論—社会科と生活綴方の異同に着目して—」教育目標・評価学会第 36 回大会（広島大学）．

瀬川千裕（2025）「作文教育の歴史」全国キャラバン 3Questions 関西地区（オープンイノベーション施設 QUINTBRIDGE）．

三島泰樹・ラッシラ、エルッキ（2025. 9）「中途入職教員の教職キャリア初期における組織内での成長に関する課題— ナラティヴ・インタビューの分析から —」日本教師教育学会第 35 回研究大会

比嘉俊・山口悦司（2025. 8）「国内の社会教育における外来生物啓発活動の特徴：文献レビューを通して」『日本理科教育学会全国大会発表論文集』第 25 号，379.

坂本美紀・山口悦司・俣野源晃・山本智一・川崎弘作・長沼祥太郎・毛利圭汰・村山留美子（2025. 9）「科学技術の社会問題に対する小学生の意思決定を支援する生成 AI 利用型教育プログラムの評価：意思決定の正当化に着目して」『日本科学教育学会第 49 回年会論文集』433-434.

山口悦司・坂本美紀・俣野源晃・山本智一・川崎弘作・長沼祥太郎・毛利圭汰・村山留美子（2025. 9）「科学技術の社会問題に対する小学生の意思決定を支援する生成 AI 利用型教育プログラムの評価：小学生からみた生成 AI 利用の有効性」『日本科学教育学会第 49 回年会論文集』435-436.

先山直・山口悦司（2025. 9）「金属の電気抵抗の温度依存性に関する学習を支援する Arduino 実験教材の改良」『日本科学教育学会第 49 回年会論文集』459-460.

北野成親・山口悦司（2025. 9）「日本の小学校授業における自律性支援の教授行動の評価：Reeve and Cheon (2021) の枠組みの適用可能性の予備的検討」『日本科学教育学会第 49 回年会論文集』711-712.

俣野源晃・山口悦司（2025. 9）「アーギュメントにおける証拠の十分性の認識的理解の変化を支援する方法の開発」『日本科学教育学会第 49 回年会論文集』721-722.

比嘉俊・山口悦司（2025. 9）「国内における外来生物リテラシーに関する質問紙調査の検討」『日本科学教育学会第 49 回年会論文集』763-764.

坂本美紀・山口悦司・俣野源晃（2025. 10）「科学技術のリスクとベネフィットを踏まえた意思決定を目指す教育プログラム改善：小学生の意思決定に関する成果の予備的評価」『日本教育心理学会第 67 回総会発表論文集』505.

坂本美紀・山口悦司・俣野源晃・山本智一・川崎弘作・長沼祥太郎・毛利圭汰・村山留美子（2026. 3）「小学生の生成 AI イメージ:学習のコーチとして生成 AI を利用した授業の経験がもたらす影響」『日本発達心理学会第 37 回大会発表論文集』424.

紀伊大輔・田中達也（2025. 6）「理科的知識を活かした防災的空間設計学習の実践：水害リスクを見据えたまちづくり活動を通して」『防災教育学会第 6 回予稿集 上巻』22-23.

由利琴羽・田中達也（2025. 6）「教員志望学生による ICT 教材「デジ防災®」を活用した防災授業の設計と実施：公立小学校での授業実践を通じた考察」『防災教育学会第 6 回予稿集 下巻』79-80.

田中達也・光成研一郎・伴仲謙欣・室崎友輔（2025. 6）「教員志望学生の防災指導力向上を目指した

ICT 教材活用型防災実践教育プログラムの提案」『防災教育学会第 6 回予稿集 下巻』 57-58.

田中達也・大西鮎美・寺田努 (2025. 8) 「児童の災害対応力と協働性の変容に着目したゲーミフィケーション型防災教育プログラムの効果検証」『日本理科教育学会第 75 回全国大会 (富山大会) 発表論文集 第 25 号』 279.

田中達也・深川幹 (2025. 9) 「ICT 活用指導力の向上を目指した中学校理科教員志望学生対象の教師教育プログラムの有効性の検証」『日本科学教育学会第 49 回年会論文集』 685-686.

田中達也 (2025. 11) 「チャイルドビジョンを活用した防災教育の再構成—児童の危険認知と科学的根拠に基づく判断力の育成—」『日本理科教育学会近畿支部大会 (和歌山大会) 発表論文集』 54.

田中達也・大城亜水・京極重智・深川幹 (2025. 12) 「初年次教育科目「まなぶる➤ときわびと」における大学生の資質・能力の発揮、伸長を評価する評価シートの開発」『神戸常盤大学学術フォーラム』.

大城亜水・田中達也 (2025. 12) 「専門職業人の基礎力養成に関する初年次教育科目「まなぶる➤ときわびとⅠ」の効果検証：受講生インタビューに基づく質的調査を通して」『神戸常盤大学学術フォーラム』.

田中達也・大城亜水・京極重智・深川幹 (2026. 2) 「テーマ初年次教育における資質・能力の可視化を目指した デジタル評価シートの開発と実践—「まなぶる➤ときわびと」における教員アンケートを通して—」『第 32 回大学教育研究フォーラム発表論文集』 87-88.

田中達也 (2026. 2) 「地域連携型『コベカツ』による保育者育成エコシステムの創出—中学生・大学生・養成校をつなぐ新しいキャリア形成支援の試み—」『日本保育者養成教育学会第 10 回研究大会抄録集』 155.

松本法尊 (2025) 「保育者不在時の位置測位データを活用した保育者の離れ際の手立ての分析」自主シンポジウム「位置測位システム活用の可能性を考える～保育の可視化と質の維持・向上をめざして～」話題提供、日本保育学会第 78 回大会.

松山聖奈・鶴宏史・木曾陽子 (2025) 「保育所等における子ども家庭支援の充実を図る推進事業に関する研究 (2) ニーズ評価と課題の明確化」日本保育学会第 78 回大会.

増田莉子 (2025) 「家庭科における『ケア』概念の検討—国内文献の整理を通して」第 45 回 家族関係学セミナー (静岡県立大学), 口頭発表

勅使河原君江・小山輝翔（2025）「高等学校探究授業における絵画分析型授業の開発—カラバッジョ《聖マタイの召命》を題材に一」第 64 回大学美術教育学会全国大会（千葉大学）

高島駿・岡部恭幸（2026）Unitizing・Norming を基盤とした分数の第一義と第二義の統合 Reasoning up and down の様相の分析から，2026 年度 第 30 回数学教育学会 大学院生等発表会，東京理科大学（東京都）

瀬田真裕美・岡部恭幸（2026）算数をわかるということ—概念的知識・手続き的知識の見地より，2026 年度 第 30 回数学教育学会 大学院生等発表会，東京理科大学（東京都）

大安沙織・岡部恭幸（2026）幼児の図形概念理解の発達と深化に向けた活動の検討，2026 年度 第 30 回数学教育学会 大学院生等発表会，東京理科大学（東京都）

太田直樹（2026）「部分と全体の関係性」に関する理論枠組みの検討と実践提案，2026 年度第 30 回数学教育学会春季年会，東京理科大学（東京都）

瀬田 真裕美（2026）算数がわかるということ，第 79 回 近畿数学教育学会例会，兵庫教育大学（兵庫県）

大安沙織（2026）幼児の図形概念理解の発達とその深化への示唆，第 79 回 近畿数学教育学会例会，兵庫教育大学（兵庫県）

升谷有里・高島駿・下村岳人・岡部恭幸（2025） 分数の意味の分類に基づく分数学習の再検討—分数の第一義、第二義・割合を表す分数を枠組みとした教科書分析を通して—，日本科学教育学会第 49 回年会，広島大学（広島県），

中田崇彦（2025）「身体が問いになるとき—小学校教員の身体図式の崩れとゆらぎが、新たな世界の地平を開く—」日本現象学・社会科学会第 42 回大会（2025 年 11 月 30 日，東京女子大学 9 号館）。

（3）特別研究員，外部資金獲得など

大部慎之佑（2025）「戦後新教育期の明石附小における教育の理論と実践に関する研究：『明石附小プラン』の展開過程に着目して」、令和 7 年度神戸大学「異分野共創による次世代卓越博士人材育成プロジェクト」採択（国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）次世代研究者挑戦的研究プログラム）

松田華織（2025）日本学術振興会特別研究員（DC2）採用，研究課題「現代米国における『学力向上』と『インクルーシブ教育』の共存可能性に関する研究」

松田華織（2025）科研費・特別研究員奨励費「現代米国インクルーシブ教育における学力向上との相

互矛盾および対応過程に関する研究」(課題番号 24KJ1677)

永岡珠瑠 (2025)「米国の“地域イマージョン型”教員養成に関する研究—日本での社会実装を目指して—」令和 7 年度 神戸大学「異分野共創による次世代卓越博士人材育成プロジェクト」採択(国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)次世代研究者挑戦的研究プログラム)

松本伊織 (2025)「教育ビッグデータを用いた教員の多忙化緩和を目指す定量的効果測定の可能性」令和 7 年度 神戸大学「異分野共創による次世代卓越博士人材育成プロジェクト」採択(国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)次世代研究者挑戦的研究プログラム)

綾香音 (2025)「米国における保護者の学校参加から地域再生の主体意識への発展過程に関する研究」令和 7 年度 神戸大学「異分野共創による次世代卓越博士人材育成プロジェクト」採択(国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)次世代研究者挑戦的研究プログラム)

友永達也 (2025)「適応的なメタ認知を生かした音声言語教育実践の開発」日本学術振興会 科学研究費助成事業 奨励研究 25H00070

大塚雅之 (2025)「持続可能な社会づくりをめざした金融ゲーム教材開発」日本学術振興会 科学研究費助成事業 奨励研究 25H001151

澤田淳 (2025) 関係的試行を促す授業開発, 奨励研究 25H00087

瀬川千裕 (2025)「初期社会科を経ることによる生活綴方の変容過程に関する研究」日本学術振興会 科学研究費助成事業 研究活動スタート支援 25K23287

俣野源晃 (2025) 奨励研究「GIGA 端末活用型のエビデンス選択能力向上を目指した教員研修プログラムの開発(課題番号 25H00072)」

田中達也 (2025) 基盤研究 (C)「教員志望学生を対象とした防災教育における教師エージェンシーの育成プログラムの開発」(課題番号 25K06654)

比嘉俊 (2025) 基盤研究 (C)「SDGs に向けた小中学校における外来生物教育」(課題番号 23K02793)

小尾麻希子(研究代表者) ※単独

研究課題: 1950 年代における幼稚園カリキュラムの発展過程と保育者の力量形成に関する実証的研究: 4,680 千円

研究資金: 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究 (C)

研究概要: 1950 年代の国立大学附属幼稚園におけるカリキュラムの発展過程と保育者の専門的力量

形成過程について当時の実践関係史料に基づいて明らかにする。

研究期間：2024 年 4 月～2029 年 3 月

清山莉奈（研究代表者）※単独

研究課題：乳幼児教育に対する理解推進を図るための公的機関による情報発信のモデルの提案：140 千円

研究資金：岡山県立大学独創的研究助成費

研究概要：公的機関による乳幼児教育にかかわる情報発信の実態調査を踏まえ、その課題と改善について提案する。

研究期間：2025 年度

松本法尊（研究代表者）※単独

研究課題：幼児の学びを支える教師の離れ際の判断の分析：320 千円

研究資金：科学研究費助成事業 奨励研究(2026 年度採択)

研究概要：保育者の離れ際の援助と幼児の学びの在り方について検討する。

研究期間：2026 年度

松本法尊（研究分担者）

研究課題：「幼稚園教育要領における 5 領域の構成と要領上の用語の不一致が、小学校教師の幼児教育への理解を停滞させている一因と考える。そこで、領域の枠組みを資質・能力の観点から再編し、要領上の用語の整合性を図ることにより、幼小双方の教師の理解を促進し、幼小の接続を推進するカリキュラムと指導方法の研究開発を行う。」：2,499,827 円

研究資金：文部科学省研究開発学校

研究概要：資質・能力の観点から領域の枠組みを再編し、用語の整合性を図ることで、幼小双方の教師、さらには社会一般の幼児教育への理解の深化に資する、新たなねらいの枠組みによるカリキュラムと指導方法を開発する。

研究期間：令和 6－9 年度

（4）学生の受賞

友永達也（2025）博報堂教育財団「児童教育実践についての研究助成」事業「第 19 回研究成果発表会」優秀賞

大塚雅之（2026）文部科学大臣優秀教職員表彰

田中達也（2025）日本理科教育学会研究奨励賞受賞

（5）ゲストスピーカーの招へいなど

下吉美香（2025）初等理科教育論・ゲストスピーカー

(6) 学術 Weeks シンポジウム

森阪祐貴・川地亜弥子「ライティング教育の未来を拓く―『ライティング教育の可能性』をふまえて―」2025年10月19日

大部慎之佑・中山瑠美・村上優佳・森阪祐貴・川地亜弥子・渡邊隆信・山下晃一「史資料から読み解く「学校の世紀」―現代教育への示唆―（Ⅰ）アメリカの校舎・教室の変貌と授業時間割の改革―子ども中心は実現したか―」2025年12月9日

大部慎之佑・中山瑠美・村上優佳・森阪祐貴・川地亜弥子・渡邊隆信・山下晃一「史資料から読み解く「学校の世紀」―現代教育への示唆―（Ⅱ）Life Writing Across Disciplines and Cultures: Education and Literature, Spain and US（学際的・文化横断的なライフ・ライティング：教育と文学，スペインとアメリカ）」2026年1月26日

大部慎之佑・中山瑠美・村上優佳・森阪祐貴・川地亜弥子・渡邊隆信・山下晃一「史資料から読み解く「学校の世紀」―現代教育への示唆―（Ⅲ）「明石附小」の史資料と教師教育（ワークショップ）」2026年2月1日

賀内望・竿美羽・川地亜弥子・赤木和重「障害の重い人たちと文化を味わう」講演会 私に人生と言えるものがあるなら―障害の重い人の生活に学ぶ実践―」2026年3月20日

(7) 高大連携

山下晃一，2025年6月10日，兵庫県立長田高校，演題「高校までの学び、大学からの学び」，56名対象

山下晃一，2025年11月27日，兵庫県立明石西高校，演題「グローバル化と教育の相互作用」，38名対象

勅使河原君江，2025年9月8日，19日，兵庫県立神戸鈴蘭台高等学校「総合的な探求の時間」において，生徒の課題研究について指導と助言を行い計画発表会にて講評を行った。

(8) その他（院生の社会貢献）

友永達也（2025）「問うことを対話に位置付ける―なぜ問うことが大切なのか―」加西市立賀茂小学校

友永達也（2025）「話すこと・聞くことの指導と向き合う ～『相手を見て』『うなずきながら』指導の 一歩先を目指して～」三重県教育委員会 夏季教員研修講座

大塚雅之（2025）「持続可能な社会の形成者育成をめざした実践研究」大阪府教育課程協議会（大阪

府教育センター)

大塚雅之 (2026)「フィーチャーデザイン研究を活用した経済分野の単元開発」経済教育ネットワーク春の経済教室 (慶應義塾大学)

(人間発達専攻長 岸本吉弘)

5.2.2. 人間環境学専攻

(1) 運営

専攻に関する意思決定は、例年どおり、人間環境学専攻運営会議において行った。本運営会議は、専攻長と各コースの主任の計 5 名から構成される。今年度は、運営会議をメール審議を含めて 6 回開催し、予算配分、人事、入試、教務等に関わる重要案件を審議決定した。

研究科人事方針に沿って、講師 1 名を採用し、3 名の助教の准教授昇任案件に取り組んだ。それらに関連する人間環境学セミナーを 4 回開催し、研究内容に関する議論も行った。

(2) 予算

各コースの学生の下記の所属人数に応じて配分した。

表 博士課程前期課程ならびに後期課程の在席学生数

	博士課程前期課程	博士課程後期課程
環境自然科学	22	6
環境数理科学	1	0
生活共生科学	11	10
社会共生科学	5	3
計	39	19

(3) 入試

前期課程入試については推薦入試 (7 月)、通常入試 (9 月) を行った。推薦入試については、プレゼンテーション、口頭試問、書類審査、ならびに外国語科目試験を総合的に評価した。通常については、試験区分ごとに専門科目について筆記試験を行い、口頭試問、外国語科目試験とともに総合的に評価した。本年度は推薦入試および通常入試の 2 回で募集定員を充足したため、例年行っている 2 次試験 (12 月) を行わなかった。

後期課程入試は 1 次 (8 月)、2 次 (2 月) に行った。後期課程入試に関しては、「受験生のプレゼンテーション、主論文等審査委員と論文等審査委員が所見を述べ、各コースから口述試験委員が採点する」という方式を引き続き採用した。本年度の 1 次、2 次ともは対面入試を実施した。

(4) 教育

大学院生は修士論文、博士論文の作成を中心目標として勉学・研究を進めることから、学生に対する指導はそれぞれの指導教員に負うところが大きい。本年度は、原則的に指導は通常の対面方式に戻った。BEEF ならびに Teams を併用することで、遠方のゲストスピーカーの依頼が可能となり、時間

ならびに空間も柔軟に効率的に学生指導できるなど、コロナ禍前より多角的に教育指導を行うことができた。

今年度の修士号の取得は 33 名、博士号取得者は 6 名となった。

表 2025 年度 修士号ならびに博士号の取得学生数		
	修士号	博士号
自然環境論	12	3
数理情報環境論	5	0
生活環境論	9	3
社会環境論	7	0
計	33	6

(5) 広報

博士課程前期受験検討者に対し、オープンラボの期間が設けられ、受験相談を行った。春シーズンおよび秋シーズンのオープンラボウィークスの実績は合計で 自然 28 名、数理 2 名、生活 2 名、社会 10 名であった。

(6) 学外研究者を招いての国際講演・シンポジウム等

内外の研究者を招き国際講演会、シンポジウムなどを企画開催し、研究内容上の議論を深めると同時に、学生院生その他に学術成果を公開することに努めた。

The 3rd International Workshop on eDNA and Ecosystem Monitoring

担当教員:源 利文

日程: 令和 7 年 5 月 22 日 (水)

場所: 鶴甲第 2 キャンパス B 棟 106

大韓民国 漢陽大学校 Sung Hye Kim 准教授らを招いての国際学術セミナーを実施した。参加者約 15 名

国際シンポジウム「メタアナリシスによるデータ統合とその問題点」

担当教員: 周怡

日程: 令和 7 年 9 月 12 日 (金)

場所: 鶴甲第 2 キャンパス A 棟 739

日本 大阪大学 服部聡氏およびドイツ連邦共和国 ゲッティンゲン大学医療センター (University Medical Center Göttingen) Ao Huang 氏をスピーカーに招いての国際学術シンポジウムを実施した。参加者 10 名

Employee Well-Being and Motivation Across Work and Home Domains: The Role of Leisure Crafting
(仕事と家庭をまたいだ従業員のウェルビーイングとモチベーション: レジャー・クラフティングの

役割)

担当教員：横内陳正

日程：令和7年6月3日（火）

場所：鶴甲第2キャンパス A 棟 大会議室（オンライン同時開催）

I-Shuo Chen 氏（Anglia Ruskin University）をスピーカーに招いて国際学術セミナーを実施した（参加人数：4名）

Job Crafting and Wellbeing: Insights from the Centre for Wellbeing Science（ジョブ・クラフティングとウェルビーイング）

担当教員：横内陳正

日程：令和8年2月18日（水）

場所：鶴甲第2キャンパス A 棟 中会議室 B（オンライン同時開催）

Gavin R. Slemph 氏（The University of Melbourne）をスピーカーに招いて国際学術セミナーを実施した（参加人数：12名）

（7）学生の受賞

在学中の大学生ならびに大学院生が以下のように受賞した。

受賞者：石黒更（博士課程前期課程2年，指導教員：近江戸伸子）

賞の名称：令和7年度 博士学生優秀研究論文賞（神戸大学）

受賞対象：Repeatome landscapes and cytogenetics of hortensias provide a framework to trace Hydrangea evolution and domestication.

受賞年月：令和8年2月12日

受賞理由：2025年に発表した国際学術論文が優秀と評価されたため

受賞者：小倉彰紀（博士課程後期課程2年，指導教員：源利文）

受賞名：The 11th EAFES International Congress Best Poster Award

受賞対象：Relationship between anurans density and landscape factors in paddy field using environmental DNA analysis

受賞年月：令和7年7月22日

受賞理由：発表ポスターが最も優秀であると評価されたため

受賞者：松本奈々（博士課程前期課程1年，指導教員：源利文）

受賞名：The 11th EAFES International Congress Poster Award

受賞対象：Impact of farmland abandonment on survival of a small salamander (*Hynobius setouchi*) using environmental DNA analysis

受賞年月：令和7年7月22日

受賞理由：発表ポスターが優秀であると評価されたため

受賞者：平山一槻（博士課程後期課程 3 年，指導教員：源利文）

受賞名：第 8 回 環境 DNA 学会ポスター賞最優秀賞（学生部門）

受賞対象：eDNA 分析感度におけるマーカー依存的ボトルネックとその克服：ウナギ特異的レトロトランスポゾンによる改善を例に

受賞年月：令和 7 年 12 月 11 日

受賞理由：発表ポスターが最も優秀であると評価されたため

受賞者：松本奈々（博士課程前期課程 1 年，指導教員：源利文）

受賞名：第 73 回日本生態学会大会 ポスター賞優秀賞（保全部門）

受賞対象：耕作放棄がセトウチサンショウウオを脅かす一息への影響と保全部門の提案

受賞年月：令和 8 年 3 月 14 日

受賞理由：発表ポスターが優秀であると評価されたため

<生活環境論>

受賞者：山田拓翔（環境共生学科 生活共生科学プログラム 4 年，指導教員：村山）

受賞名：大会優秀発表賞 ポスター部門

受賞対象：リスク認知の因子構造の再検討

受賞年月：令和 7 年 12 月 5 日

受賞理由：発表ポスターが優秀と評価されたため

(8) 高大接続，初等中等教育等に係る活動

担当教員	実施年月日	相手方	実施内容	対象人数
近江戸伸子	2025/4/1-3/31	兵庫県立長田高校	ROOT プログラム	1 人
近江戸伸子	2025/8/4, 13	兵庫県立明石北高校	探究における実験指導と助言	のべ 10 人
小谷野由紀	2025/10/2, 6, 10	神戸大学附属中等学校	KU トライやる	5 人
小谷野由紀	2025/11/11	兵庫県立兵庫高校	大学訪問における体験授業	約 40 人
小谷野由紀	2026/2/7	神戸大学附属中等学校	授業研究会におけるコメンテーター	約 50 人
佐藤春実	2025/7/22	武庫川女子大学附属中学校・高等学校	科学交流研修会（高校生が研究室で実験を実施）	10 人
蘆田弘樹	2025/10/23	兵庫県立兵庫高校	生物分野の探究活動への指導	5 人
蘆田弘樹	2025/11/12	兵庫県立兵庫高校	生物分野の探究活動への指導	5 人
蘆田弘樹	2025/12/3	兵庫県立兵庫高校	生物分野の探究活動への指導	5 人
佐賀達矢	2025/5/1	長野県上伊那農業高校	探究活動への指導助言	10 人
佐賀達矢	2025/6/3, 10/7	兵庫県立上郡高校	高校での出前授業	20 人
佐賀達矢	2025/6/19, 10/9	兵庫県立淡路高校	高校での出前授業	15 人

佐賀達矢	2025/7/12	兵庫県内の SSH 高・理数 科高校の発表会	サイエンスカフェの開催	40 人
佐賀達矢	2025/8/13, 8/23, 10/11	神戸周辺の小学生～中 学生（障がいをもつ児 童・生徒を含む）	探究活動の実践	60 人
佐賀達矢	2025/9/2, 10/7, 10/14, 10/21, 10/28, 11/4, 2/3	兵庫県立淡路高校	探究活動への指導助言	40 人
佐賀達矢	2025/11/18, 2026/1/20	藤枝特別支援学校焼津 分校	探究活動への指導助言	15 人
佐賀達矢	2026/1/20, 21	静岡県立焼津中央高校	高校での出前授業	160 人
佐賀達矢	2025/11/30	兵庫県周辺の高校生	探究活動の発表会の企画・運営	200 人
佐賀達矢	2026/1/25	兵庫県内の SSH 高の発 表会	サイエンスカフェの開催	約 50 人
佐賀達矢	2026/3/8	兵庫県立神戸高校, 兵 庫高校、明石北高校	探究活動への指導助言	120 人
田畑 智博	2025/6/4	兵庫県立兵庫高校	探究成果発表会における指導助 言	6 人
田畑 智博	2026/2/4	兵庫県立兵庫高校	探究成果発表会における指導助 言	1 人
内山愉太	2025/10/15	沖縄県の複数の高校か ら選抜された 2 年生の 生徒	出前授業・キャンパスの案内・ 大学生との交流（沖縄県教育委 員会主催事業 進学エンカレッ ジ推進事業）	約 30 人
内山愉太	2025/11/12	沖縄県の複数の高校か ら選抜された 1 年生の 生徒	出前授業・キャンパスの案内・ 大学生との交流（沖縄県教育委 員会主催事業 進学エンカレッ ジ推進事業）	約 30 人
井上真理	2025/7/16	兵庫県立神戸高校	学部説明を含む出前授業	約 50 人
井上真理	2025/10/5, 8, 12	神戸大学附属中等教育 学校	高校生の研究室訪問	5 人
井上真理	2026/2/7	神戸大学附属中等教育 学校	研究授業における指導助言	7 人
太田和宏	2025/7/30, 12/14	滝川第二中学校・高校	探求授業への助言指導	50 人

（人間環境学専攻長 太田和宏）

6. 進路

6.1. キャリア形成支援

6.1.1. キャリアサポートセンター

人間発達環境学研究科キャリアサポートセンター（鶴 2CSC）は、国際人間科学部の学部生と人間発達環境学研究科の大学院生を対象に、学生のキャリア形成を実践的にサポートする活動を行った。これらは、就職活動及びキャリア形成支援、情報発信の3つに大別される。以下、それぞれの活動に関し詳述する。

(1) 就職活動及びキャリア形成支援

例年通り、就職活動中の学生を対象に、下記の個別相談（カウンセリング）を行った。

- ・自己分析支援
- ・エントリーシート作成支援
- ・模擬面接
- ・就活・キャリアに関する相談
- ・大学院進学に関する相談

個別相談の総人数は493人であり、その内訳は、人間発達環境学研究科：177人、国際人間科学部：290人、経営学部：6人、経済学部：5人、人文学研究科：5人、経営学研究科：2人、文学部：1人、保健学研究科：1人、理学研究科：1人、卒業生：5人であった。

（※2月27日時点の実績）

さらに、下記のセミナー・説明会を開催した。

- ・就職活動全般
- ・教員採用試験対策試験対策（公立、私立）
- ・自治体教育委員会による教員採用試験対策試験に関する説明会
- ・心理・福祉職、環境職、デザイン・クリエイティブ枠に焦点を当てた公務員試験対策

セミナーのタイトルは、下記の一覧を参照されたい。セミナーの総数は29、総参加人数は292人であった。（※2月27日時点の実績）

上記に加え、今年度も、発達科学部・国際人間科学部・人間発達環境学研究科のOBOG訪問の仲介を実施した。

- ・OBOG訪問受付件数：75

（※2月27日時点の実績）

また、昨年度と同様、「内定者獲得紹介システム」を運用した。本紹介システムは、鶴 2CSC の仲介により、就職先の内定獲得あるいは合格を果たした国際人間科学部・人間発達環境学研究科に在学中の学生に対し、同じ就職先を志望する学生が直接会って、当該就職先に向けての就職活動に関する情報（例えば、具体的な採用選考内容）を得ることを目的とするものである。

具体的な実績値は以下の通りである。

- ・内定獲得者の登録人数：18
- ・内定先（企業か官公庁等）の数：48
- ・内定獲得者と下級生との面談回数：7

(※2月27日時点の実績)

(2) 情報発信

キャリア支援に関する各種情報の発信を行った。

- ・企業からの大学推薦の求人情報
- ・公立・私立の教育機関（幼稚園，保育園，小中高）からの求人情報
- ・心理・福祉系の外部機関からの求人情報
- ・他大学の大学院募集情報
- ・学内セミナー（当センター主催分と学内の他の支援組織の主催分の両方）の開催情報
- ・外部業者から入手した関連情報

上記の情報を、学生向け一斉メール（鶴 2CSC ニュース）、掲示板、X 等の媒体を使って発信した。

(3) 教員採用試験対策勉強会の支援

- ・学生主体の教員採用試験対策勉強会の支援を行った。

教員採用試験対策勉強会の開催総数は 60 回、総参加人数は 362 人であった。

【今年度開催セミナー一覧】※対面またはオンライン

1. 4月15日（火） 教員採用試験対策「兵庫県教育委員会からの説明会」
2. 4月16日（水） 就職活動支援「就職準備スタートアップ講座」
3. 4月17日（木） 教員採用試験対策「神戸市教育委員会からの説明会」
4. 4月23日（水） 教員採用試験対策「京都府教育委員会からの説明会」
5. 5月8日（木） 教員採用試験対策「私学教員スタートアップガイダンス」
6. 5月13日（火） 就職活動支援「ES ブラッシュアップ講座」
7. 5月14日（水） 就職活動支援「インターンシップ参加に向けた選考対策講座」
8. 5月20日（火） 就職活動支援「業界解説セミナー【メーカー】」
9. 5月22日（木） 就職活動支援「業界解説セミナー【商社・流通・インフラ】」
10. 5月27日（火） 就職活動支援「業界解説セミナー【IT・サービス・マスコミ】」
11. 5月29日（木） 就職活動支援「業界解説セミナー【金融】」
12. 6月17日（火） 公務員試験対策「行政職公務員セミナー」
13. 6月19日（木） 就職活動支援「グループディスカッション練習会」
14. 6月24日（火） 公務員試験対策「心理・福祉系公務員セミナー」
15. 6月26日（木） 就職活動支援「グループディスカッション練習会」
16. 7月1日（火） 就職活動支援「グループディスカッション練習会」
17. 7月3日（木） 就職活動支援「キャリアデザイン講座」
18. 8月5日（火） 就職活動支援「就活準備 To Do 講座」
19. 10月28日（火） 就職活動支援「グループディスカッション練習会」
20. 11月13日（木） 教員採用試験対策「私学教員セミナー」
21. 11月18日（火） 就職活動支援「グループディスカッション練習会」

- 22. 12月4日(木) 公務員試験対策 「行政職公務員セミナー」
- 23. 12月10日(木) 公務員試験対策 「心理・福祉系公務員セミナー」
- 24. 12月11日(木) 教員採用試験対策 「兵庫県教育委員会からの説明会」
- 25. 12月16日(火) 教員採用試験対策 「神戸市教育委員会からの説明会」
- 26. 12月17日(水) 教員採用試験対策 「京都府教育委員会からの説明会」
- 27. 12月18日(木) 公務員試験対策 「神戸市福祉職説明会」
- 28. 1月27日(火) 公務員試験対策 「神戸市〈デザイン・クリエイティブ枠〉説明会」
- 29. 1月29日(木) 公務員試験対策 「大阪府福祉専門職説明会」

(キャリアサポートセンター運営委員会委員長 澤宗則)

6.1.2. 学振特別研究員申請支援

学生委員会主催の「学振特別研究員への応募のススメ」と題したセミナーを令和7年4月3日(木)に対面(大会議室)で実施した。

青木茂樹教授より特別研究員制度の概要についての説明, 近江戸伸子教授より審査委員経験を踏まえた申請書作成などに関するアドバイスがなされた。さらに, 人間発達環境学研究科で採用された特別研究員2名により, 採用に至る経験談や申請や審査に関わる留意点などの紹介がなされた。当日は21名と多くの参加者があり, 昨年と同様好評であった。また, 参加者のうち2名が令和8年度特別研究員に採用された。

○「学振特別研究員への応募のススメ」

・日時: 令和7年4月3日(木) 11:00~12:30 対面(大会議室) 開催

- 1) 特別研究員制度の概要と本研究科の現状(青木茂樹 教授)
- 2) 審査・選考の実際-審査経験者の立場から(近江戸伸子 教授)
- 3) 申請の実際-応募者の立場から(1) (人間環境学専攻大学院生)
- 4) 申請の実際-応募者の立場から(2) (人間発達専攻大学院生)

(学生委員会委員長 中谷奈津子)

6.2. 卒業・修了後の進路

令和7年度の発達科学部卒業生・国際人間科学部卒業生の就職状況は, 概ね良好であった。博士課程前期課程修了生も企業や公務員への就職者数や進学者数ほぼ例年通りであった。博士課程後期課程は学部や博士課程前期課程と異なり, 特に研究職の場合は公募による就職が主となるため年度ごとに様相が異なるが, 常勤の大学教員および学振特別研究員(PD, RPD)など, 専門性を活かしたキャリア選択を実現しており, 就職状況は概ね良好であった。進路状況, 産業別就職者数, 大学院進学者数などの詳細は『資料編』に記載した。

(学生委員会委員長 中谷奈津子)

7. 研究

7.1. 今年度の特長

7.1.1. 研究動向

(1) 本研究科教員の研究活動

本研究科における過去6年間の研究活動の実績は、下表のとおり、概ね順調に推移してきている。令和7年度の活動（KUIDをもとに調査）は、「論文」334件、「著書」60件となっておりここ数年の値と同等である。「研究発表等」については新型コロナウイルスの影響により低い数字が続いていたが、対面での学会等の再開に伴い、着実に増加してきている。

	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度
論文	326	396	365	339	315	334
著書数	63	45	53	45	48	60
研究発表等	282	349	372	428	423	520

(2) 研究科ミッションの実現に向けた共同研究への支援

本研究科では、研究科のミッションの実現に向けた研究の推進・発展を図ることを目的として、「研究推進支援経費」を継続的に設定してきた。

すなわち、複雑・重層化する国内外の社会的課題を克服し、多世代・多様な人々の安全・安心で豊かな生活(well-being)を実現するためには、課題解決の基盤となるコミュニティにおける社会関係資本（社会的ネットワークにおける人間関係や信頼関係、社会的結束力）の構築や持続可能な環境共生社会の形成が急務である。このことを踏まえ、「研究推進支援経費」は、人間発達環境学研究科がこれまで蓄積してきた研究教育活動の成果を活かした先端的かつ独創的な研究（人間発達環境学研究科の機能強化に資する研究）をより一層推進することを目的として、今年度は国際共同研究に重点配分し、若手教員による積極的な申請を奨励した。

令和7年度に研究科運営委員会にて選定した共同研究は、以下のとおりである。

- ① 研究課題：都市に根づく“食と植物の越境”：東京都江戸川区におけるインド・ネパール系移民と地域農業の共創的ランドスケープ

研究代表者：澤宗則

共同研究者：大野朋子

決 定 額：250 千円

- ② 研究課題：図像に基づく行為・表現の再構築過程の定量的検討：バレエ・リュス作品の再創造を対象として

研究代表者：關典子

共同研究者：清水大地，岸本吉弘

決 定 額：250 千円

- ③ 研究課題：データ統合に基づく神経発達症における感情調整方略の多様性分析

研究代表者：周怡

共同研究者：山本健太，阪本雄二

決 定 額：500 千円

- ④ 研究課題：働く人のクラフティングとウェルビーイング：日本における職場と生活環境を横断するメカニズムの解明

研究代表者：横内陳正

共同研究者：Gavin R. Slemp, I-Shuo Chen, May Young Loh

決 定 額：500 千円

(人間発達環境学研究科長 佐藤春実)

7.1.2. 学生の受賞

令和7年度における大学院生の受賞は以下の通りである。

【人間発達専攻】

受賞者：藤野真由

受賞名：日本音楽知覚認知学会 2025 年度秋季研究発表会 ポスター発表選奨

受賞者：朝比奈茉穂

受賞名：国際シンポジウム Adaptive Behavior and its Ecological Foundations 発表賞

受賞者：松本えりあ・伊藤汐梨・木村心春・山下耕平・三浦敬太・長ヶ原誠(2025)

受賞名：日本生涯スポーツ学会 第 27 回大会学生ポスター発表最優秀賞

受賞演題：ワールドマスタースゲームズ 2027 関西に対する選手の期待 ～ホスト国選手とゲスト国選手の比較～

受賞者：太田幸志

受賞名：日本健康支援学会第 12 回優秀論文賞（研究部門）

受賞者：Aoi Nishino

受賞名：Young Investigators Award

機関：European College of Sport Science 30th Annual Congress

受賞演題：The Effect of Combining Neuromuscular Electrical Stimulation with Towel Curl Exercise Focusing on the Abductor Digiti Minimi Muscle on Standing Balance

受賞者：木村直登

受賞名：Certificate of Excellence in Oral Presentation, The 14th Northeast Asian Sport History International Conference (NEASHPES 2025), Seoul, Republic of Korea

受賞演題：A Study of the Adoption Process of Offensive Hitting Techniques in Japanese Table Tennis Competitions (1902-1942)

受賞者：友永達也

受賞名：博報堂教育財団「児童教育実践についての研究助成」事業「第19回研究成果発表会」優秀賞（2025）

受賞者：大塚雅之

受賞名：文部科学大臣優秀教職員表彰（2026）

受賞者：田中達也

受賞名：日本理科教育学会研究奨励賞受賞（2025）

受賞者：松本えりあ・伊藤汐梨・木村心春・山下耕平・三浦敬太・長ヶ原誠（2025）

受賞名：日本生涯スポーツ学会 第27回大会学生ポスター発表最優秀賞

受賞演題：ワールドマスタースゲームズ2027 関西に対する選手の期待 ～ホスト国選手とゲスト国選手の比較～

【人間環境学専攻】

受賞者：石黒更（博士課程前期課程2年，指導教員：近江戸伸子）

賞の名称：令和7年度 博士学生優秀研究論文賞（神戸大学）

受賞対象：Repeatome landscapes and cytogenetics of hortensias provide a framework to trace Hydrangea evolution and domestication.

受賞年月：令和8年2月12日

受賞理由：2025年に発表した国際学術論文が優秀と評価されたため

受賞者：小倉彰紀（博士課程後期課程2年，指導教員：源利文）

受賞名：The 11th EAFES International Congress Best Poster Award

受賞対象：Relationship between anurans density and landscape factors in paddy field using environmental DNA analysis

受賞年月：令和7年7月22日

受賞理由：発表ポスターが最も優秀であると評価されたため

受賞者：松本奈々（博士課程前期課程1年，指導教員：源利文）

受賞名：The 11th EAFES International Congress Poster Award

受賞対象：Impact of farmland abandonment on survival of a small salamander (*Hynobius setouchi*) using environmental DNA analysis

受賞年月：令和7年7月22日

受賞理由：発表ポスターが優秀であると評価されたため

受賞者：平山一槻（博士課程後期課程3年，指導教員：源利文）

受賞名：第8回 環境DNA学会ポスター賞最優秀賞（学生部門）

受賞対象： eDNA 分析感度におけるマーカー依存的ボトルネックとその克服：ウナギ特異的レトロトランスポゾンによる改善を例に

受賞年月：令和 7 年 12 月 11 日

受賞理由：発表ポスターが最も優秀であると評価されたため

受賞者：松本奈々（博士課程前期課程 1 年，指導教員：源利文）

受賞名：第 73 回日本生態学会大会 ポスター賞優秀賞（保全部門）

受賞対象：耕作放棄がセトウチサンショウウオを脅かす一息への影響と保全管理の提案

受賞年月：令和 8 年 3 月 14 日

受賞理由：発表ポスターが優秀であると評価されたため

受賞者：山田拓翔（環境共生学科 生活共生科学プログラム 4 年，指導教員：村山）

受賞名：大会優秀発表賞 ポスター部門

受賞対象：リスク認知の因子構造の再検討

受賞年月：令和 7 年 12 月 5 日

受賞理由：発表ポスターが優秀と評価されたため

（学生委員会委員長 中谷奈津子）

7.2. 学術 Weeks

学術 Weeks は「国内外の学術交流活動を通して，大学院生・学部学生の視野を広げ，研究会の企画・運営・発表などの技能習得に資すること」を目的とした本研究科独自の取り組みである。毎年，秋期を中心として国内外から多くの研究者を招聘し，研究集会等の学術交流を行っている。多様な研究領域を擁する本研究科の特色が存分に生かされた取り組みであり，良質な領域横断的プログラムが提供されてきた。多くの大学院生・学部生にとって，様々な分野の国際交流を通して，自分の研究を見つめ直し，研究会の企画，運営，発表などの多くのスキルを習得するための有益な機会となっている。

昨年度に引き続き本年度も，対面で企画が開催できるようになった。企画内容としては，教育，音楽，スキル，発達，環境，数理データの領域を中心に，国内外の研究者・実践家との連携を通じて，人間発達をめぐる最先端の課題について大学院生，学生を交えた活発な議論や意見交換がなされるシンポジウム形式での試み，多文化的，文化伝承的な視点から芸術の新たな可能性を模索する試みなど，グローバルな視点での取り組みが活発に展開された。若手教員からの企画提案も増え，人間発達環境に関わる研究の活発化につながるものであった。個別の企画内容に関しては以下の例を参照されたい。

（学術 WEEKS2025WG 主査 谷篤史）

7.2.1 学術 Weeks の各事業・セミナー

（1）適応的スキル発達をめぐる異分野共創研究セミナー

Adaptive behavior and its ecological foundations 2026 場所と挙動：物理系から社会まで

【日 程】2026 年 2 月 2 日（月）10:30～17:30

【場 所】神戸大学百年記念館六甲ホール

【参加者】約 50 名

【講演者】

「創りながら理解するムカデの適応的運動知能」安井 浩太郎（東北大）

「仮想現実空間を利用した昆虫のナビゲーション行動の解析」佐倉 緑（神戸大）

「身体と場との相互作用から生まれる陰的制御」大須賀 公一（大阪工業大）

「時空間秩序でつくる自律挙動」松尾 宗征（広島大）

「意味の場」を再訪する」岩内 章太郎（豊橋技術科学大）

「場と雰囲気」新川 拓哉（神戸大）

【モデレーター】青沼 仁志，小谷野 由紀，野中 哲士（神戸大）

【概 要】地上環境は一様に均質ではなく、さまざまなスケールで構造をもつ。本企画では、環境における独特の構造を伴った「場所」が物理系、生物、人間の挙動にもたらす様々な制約と機会を共通のテーマとし、生物学、ロボティクス、化学、哲学等、異なる分野の第一線の研究者が集い、最新の研究成果を発表し、指定討論者および学生を含めた活発なディスカッションが行われた。

（人間発達専攻 野中哲士）

（2）国際シンポジウム「メタアナリシスによるデータ統合とその問題点」

【日程】2025 年 9 月 12 日（金）14:00～16:00

【参加者】10 名

【概 要】大阪大学の服部聡教授より「統計的メタアナリシス入門と公表バイアスの問題」について講演があり、メタアナリシスの理論的背景と、研究成果の信頼性に大きな影響を与える公表バイアスの重要性が解説された。続いて、University Medical Center Göttingen の Dr. Ao Huang より「公表バイアスの統計的評価における臨床試験登録の活用」と題する英語での発表が行われ、臨床試験登録データを活用した公表バイアス評価の具体的手法が紹介された。総合討論では、公表バイアスをはじめとする統計的課題や、複雑化する研究環境におけるデータ統合の可能性について、参加者の間で多角的かつ実践的な意見交換がなされ、今後の研究方法論の発展と国際的な共同研究の推進に向けて有意義な議論が展開された。

（人間環境学専攻 周怡）

（3）クラシック音楽への親しみと協働的創造を促すための「鑑賞＋音楽づくり」ワークショップ

【日程】2025 年 10 月 8 日（水）17:00～19:00

【参加者】11 名

【概 要】本企画は、クラシック音楽に対して難しく堅苦しいという印象を持つ人やクラシック音楽になじみがない人に、クラシック音楽の持つ音楽を聴いて様々なイメージを巡らす面白さや、ともに演奏して全体の音を作り上げる楽しさや効力感を実感してもらうこと、それらを通じて人々の協働的な創造性育成に寄与する音楽鑑賞・制作の枠組みを見出すことを目的として開催した。

特に本ワークショップでは、クラシック音楽の鑑賞とその鑑賞活動で得た曲の一部を利用・応用して音楽づくりを行う「鑑賞＋音楽づくり」のワークショップを行った。本企画には、ダンスや音楽を専門とする大学生・大学院生の他、音楽や表現の専門的経験を持たない大学生、大学外の外部参加者な

ど、多様な属性を持つ人々が参加し、活発に交流が行われた。前後に行ったアンケートの様子から、参加者がクラシック音楽に親しみ、その面白さや楽しさを実感した様子、グループで音楽を制作・演奏することで一つの曲をつくる楽しさやグループ内・間の一体感を味わった様子が見られた。

(人間発達専攻 清水大地)

(4) ライティング教育の未来を拓く ―『ライティング教育の可能性』をふまえて―

【日程】2025年10月19日(日) 9:30～11:30

【参加者】72名

【概要】学術 Weeks ライティングシンポジウム第6弾として『ライティング教育の可能性―アカデミックとパーソナルを架橋する―』(勁草書房, 2025年)をふまえ、これからのライティング教育を展望した。二人の書評者を迎え、今後のライティング教育の展望をともに描いた。本書では、アカデミック・ライティングの意義や評価に関する議論を含みつつも、「ライティング教育＝アカデミックな文章の技術指導」という狭い見方に限定するのではなく、パーソナル・ライティングというもう一つの軸が立てられた。そして、この両者を架橋することによって、人間形成全体におけるライティング教育の可能性が探究されている。本企画では、このような問題意識を共有しながら、ライティング教育をめぐる新たな地平を探る議論を展開した。

(人間発達専攻 川地亜弥子)

(5) 音楽文化のトランスボーダー Vol.9 「カタルーニャーモンポウー静寂の調べ」

【日程】2025年10月20日(月) 18:00～20:00

【参加者】60名(一般20名; 学生40名)

【概要】

モンポウは、いわゆるスペイン風の音楽として一般に認識されているファリャ、アルベニス、グラナドスとは異なり、カタルーニャの音楽の魂をミニマルな構成と瞑想的な響きで表現した作曲家」と言われている。モンポウのその独特な音楽世界について、前半は昨年、モンポウの評伝を上梓した音楽学者の椎名亮輔教授に講演して頂き、後半は自らもカタルーニャのアーティストとして、モンポウのスペシャリストでもあるピアニスト、アドルフ・ブラ教授にモンポウの初期から1960年代の幅広い作品、組曲をいくつか演奏して頂き、またモンポウの音楽の魅力を演奏しながら説明して頂いた。

椎名教授の講演では、有名なモンセラート山や豊かな自然、フォークロアの世界と共に、金属和音、モンポウ・サウンドの原点である「鐘」の存在などが指摘され、その音楽の背景に誘われた。続いて行われたブラ教授によるモンポウのピアノ作品の演奏では、「モダニズム」の先鋭的で構築的な世界観とは異なり、カタルーニャの言葉や民謡、踊りと強く結びついた素朴さと洗練された響きが表裏一体となっている、その独特な、あたたかみのある音楽が展開された。

ブラ教授はまた、モンポウが幼い頃の体験から魂、内面を重視し、東洋の哲学にも強く惹かれていたと指摘する。可視化され、わかりやすい世界が重んじられるなかで、不可視だが確かに存在するものを共に体感して味わうことの意味は大きい。カタルーニャの文化をモンポウを通して知ること、聴くことは哲学と交わり、東洋と西洋のトランスボーダーな世界も見えてくる。

参加者の学生からは、「音楽を実際に聴くことの重要性をあらためて感じた。音楽は知識として知

るだけではなく、体験することで初めて自分の中に深く届くものになる」といった感想も寄せられた。



(人間発達専攻 大田美佐子)

(6) 虫を愛でる文化から問い直す人間の豊かさ

【日程】2025年11月17日(月) 9:30~12:00

【概要】

本企画は、なぜ昆虫を食べるのかという問いを多角的に探究する学術シンポジウムである。博士後期課程の平山楽氏と共同で企画・開催し、生態人類学、データサイエンス、環境養育の異なる専門分野の研究者3名による講演、フィールドワークで採集した昆虫の実食体験、および総合討論を実施した。シンポジウムでは、阿部氏が数理・データサイエンスの観点から、社会性昆虫とヒトの双方において遺伝・個体学習・社会学習が行動を規定する共通構造を論じ、他の生物の心や意識に想いを馳せる能力こそが人間の豊かさである可能性を指摘した。生態人類学者の野中氏は、東アジア・アフリカの事例から、昆虫食が精緻な味覚表現や労働と余暇の二分法では捉えきれない文化的営みであることを示した。昆虫館館長の坂本氏は、虫を愛でる文化の継承における担い手不足という具体的課題を提起するとともに、鳴く虫の配置イベントを通じた市民の自然認識の変容事例を報告した。本企画は昆虫食の普及を目的とするものではなく、他者の食文化を深く知ることで自文化を相対化し、内省的に考察する学術的機会を提供した点に意義がある。理論と身体的体験の両面からのアプローチにより、参加者は文化の多層性を実感し、人間と昆虫の関係性について分野横断的な理解を深めることができた。

(人間環境学専攻 佐賀達矢)

(7) + Contact : 言葉を使わないコミュニケーションの可能性

【日程】2025年11月21日(金) 17:00~19:30

【参加者】12名

【概要】本企画は、身体を通じたコミュニケーションの可能性を、ダンスの身体知を切り口としたワークショップを通じて探索的かつ実践的に検証することを目的として開催した。

特に、本ワークショップでは、非言語的相互行為に注目した国際的に実践されているボールルームダンス(ballroom dance)・ラテンダンス(Latin American dance)・コンテンポラリーダンス(contemporary dance)といった、即興性を含む身体表現における知見や技法(ミラーリング(mirroring)・コンタクトインプロビゼーション)を手法を参照し、非接触・接触の双方を含む身体的対話の体験をラテンダンスの専門家と研究者が協力して設計・実施した。また、ワークショップ後

には、実践および研究の専門家との総合討論を通じて、身体接触の状態に応じた相互作用、情動の喚起、関係性の変容に関する学際的意義について、多角的に考察した。

本企画には、ダンスや音楽を専門とする大学生・大学院生の他、表現の専門的な経験を持たない大学生、大学外の外部参加者など、多様な属性を有する人々が参加し、活発に交流が行われた。また参加者には、ワークショップの体験を通じて、他者との身体的インタラクションにおける接触の有無がもたらす違いや、それぞれの効果・可能性に気づき、触覚(haptics)への意識を高めていく様子が窺われた。加えて、身体を介した非言語コミュニケーションの豊かさや、他者とのインタラクションに伴う身体感覚や情動の変化を体験的に理解する機会となった様子も見られた。

(人間発達専攻 清水大地)

(8) 史資料から読み解く「学校の世紀」—現代教育への示唆— (I) アメリカの校舎・教室の変貌と授業時間割の改革 —子ども中心は実現したか—

【日程】2025年12月9日(火) 10:40~12:10

【参加者】21名

【概要】19世紀後半から20世紀前半におけるアメリカでは、子ども中心を標榜する進歩主義教育運動が萌芽し、従来の画一的なものとは異なる教育実践が様々に模索されていた。本企画では、「史資料から読み解く『学校の世紀』—現代教育への示唆—」シリーズの第1弾として、『空間と時間の教育史』(東信堂、2018年)を著した宮本健市郎氏を招き、学校建築と授業時間割という宮本氏独自の視点から、子どもの経験した空間と時間の実態とその変貌を読み解いた。それにより、これまでに学校が果たした役割を検討しつつ、現代の学校教育研究や学校教育改革についての議論を深めた。

(人間発達専攻 川地亜弥子)

(9) 音楽文化のトランスボーダー Vol.10 「剃刀横丁のオペラーひとり芝居の可能性に触れる」

【日程】2025年12月15日(月) 18:00~20:00

【参加者】60名(一般25名; 学生35名)

【概要】

本公演は、2014年に両国のもんてんホールで上演され、同年の11月に神戸大学で上演された服部吉次さんと黒田京子さんの『剃刀横丁のオペラ』に遡り、今回は11年の時を経て再演されたことになる。オペラの世界では、リヒャルト・ワーグナーの楽劇をひとり語りで演じる喜劇俳優や、日本でもマルセ太郎のように映画を一本ひとりで語る例もある。服部さんの語る三文オペラは歌も重要であり、複数の人物を物語る江戸前の落語と、歌を語りで繋ぐドイツのカバレットのような味わいを併せ持つ。その「ひとり語り三文オペラ」のオリジナリティとアクチュアリティに感銘を受けた学生も多かった。記録写真でも、服部さんがその微妙な表情や身体の使い方の違いだけで、老若男女の役柄を演じ分けていることがわかる。人間の業が滲み出た、それぞれの登場人物の表情も豊かに表現された。

また、81歳にして内なるビートが感じられる軽い身のこなし。日本語を歌いながら、ヴァイルの音楽にびたっと嵌る卓越した語り。服部さんの語りと歌はシームレスにすべて音楽的で、言葉の意味もしっかり響く。そこに、ヴァイルの音楽に寄り添いつつ即興的な遊びあふれる黒田さんの音楽が、絶妙に生き生きと絡んで戯れた。

アフタートークでは、服部さんの発言「下手だって悪者だって、ブレヒトの告発に応えるためには、堂々と歌うってことが大切なんです」を印象深いこととして例に挙げた学生が多かった。まさに、弱きものや暗闇にいる者に「声を与える」ことが、登場する一人一人が自分の声で歌うブレヒトとヴァイルのオペラであったことを想起させた。黒田さんは、一見、キャッチーに聞こえるヴァイルの音楽のハーモニーの複雑さについて語った。アンコールとして、ブレヒトの「死んだ兵士の伝説」（長谷川四郎）が歌われた。



（人間発達専攻 大田美佐子）

（10） 障害の重い人たちと文化を味わう「私に人生と言えるものがあるなら―障害の重い人の生活に学ぶ実践―」

【日程】2026年3月20日（金・祝）14:00～16:00

【参加者】36名

【概要】1979年に、養護学校義務制によって、障害の有無に関わらず就学（学校で学ぶこと）が保障されることとなった。しかしそれ以降も、重症心身障害児者と呼ばれる人々は、学校に通えないまま成人を迎えることがあった。本企画では、そうした人たちと共に、学校における実践を積み重ね、積極的に報告してこられた原田文孝氏をお招きし、障害がある人の教育を受ける権利を保障することの意義や授業づくりの発想の源となる哲学を深めた。時間をかけて文化を味わい楽しむことを中心においた授業づくりについてご講演いただき、文化を楽しむことから排除されないインクルーシブ教育のあり方について、参加者と共に議論を深めた。

（人間発達専攻 川地亜弥子）

（11） 史資料から読み解く「学校の世紀」 ―現代教育への示唆―（Ⅱ）Life Writing Across Disciplines and Cultures: Education and Literature, Spain and US

【日程】2026年1月26日（月）13:20～14:50

【参加者】62名

【概要】ライフ・ライティングは、学際的・文化横断的な取り組みとして、世界的な広がりを持つ。本学術Weeksでは、スペインとアメリカの教育と文学におけるライフ・ライティングの取組について話題提供を頂き、日本のライフ・ライティングの定位に関する示唆を得ると同時に、現代教育（学校教育・社会教育・生涯学習等）への示唆を得た。

（人間発達専攻 川地亜弥子）

(12) 史資料から読み解く「学校の世紀」 ―現代教育への示唆― (Ⅲ) 「明石附小」の史資料と教師教育 (ワークショップ)

【日程】2026年2月1日(日) 10:00~16:00

【参加者】21名

【概要】神戸大学及川記念館は、戦前・戦後初期の新教育の研究実践校として有名な「明石附小」関連資料を中心に貴重な史資料を保管している。その整理・保存・活用に尽力してこられたアーキビストの協力を得て、「明石附小」の資料を活用したワークショップを実施した。学校教育に関する貴重な史資料をじっくり読み解き、当時の人々の〈声〉に触れることを通じて、現代教育、とりわけ教師教育への示唆を得た。

(人間発達専攻 川地亜弥子)

7.3. 研究科支援プロジェクト研究

(1) 都市に根づく“食と植物の越境”：東京都江戸川区におけるインド・ネパール系移民と地域農業の共創的ランドスケープ

1. 研究の概要

東京都江戸川区は、日本最大のインド人・ネパール人が居住する地域であり、両国のインターナショナルスクールやインド料理店、ネパール料理店、ヒンズー教の祭りなどの文化イベントなどを通じてインド・ネパール文化の発信地となっている。一方で、同区は伝統的な小松菜農業の拠点でもあり、農地が都市生活に隣接する特異な空間構造を持つ。

近年、こうした都市農業と移民コミュニティが新たな接点を持ち始めている。その象徴的な事例が、インド・ネパール料理に不可欠な香草「メティ (フェヌグreek)」の地産地消プロジェクトである。同区の農家と区民、インド系・ネパール系移民が連携し、メティの栽培・活用を進め、新たな地域資源の創出と多文化共生のモデルとして注目されている。

澤はインド系移民・ネパール系移民社会、とりわけエスニック料理店の戦略に関する研究実績が多く、大野はネパールの植物利用や景観構造、ネパール系移民の「食と植」に関する調査を継続的に進めている。

本研究の目的は、このような「食と植物を通じた文化的越境と地域再生」のプロセスを実証的に明らかにすることである。とりわけ、インド・ネパール系移民による食文化実践が、地域農業、空間構造、文化的意味付けにどのような影響を与えるのかを考察するとともに、外来種である「メティ」の栽培が環境にどのような影響を与えているのかを分析した。

2. 研究組織

①代表者：澤 宗則 (人間環境学専攻)

②共同研究者：大野朋子 (人間環境学専攻)

3. 研究実績の概要

①東京都江戸川区のメティ栽培農家への聞き取り調査を行った。メティの需要は一定数あるものの、

栽培野菜として未登録なことから害虫駆除等問題点は多いことが分かった。

②東京都江戸川区役所・多文化共生係でのインド・ネパール系移民社会に関して聞き取り調査を行うとともに、統計データを入手した。

③東京都江戸川区のインドのヒンズー教系寺院にて、メティを含めた外来の植物が、インド祭礼にどのように使用されているのかを聞き取り調査した。

④東京都江戸川区のインド料理店にてインド・ネパール系移民社会とメティの調理方法に関する聞き取りを行った。

⑤東京都江戸川区のインド宅にて、メティの使用状況に関して聞き取り調査を行った。メティの栽培方法は容易で、インド食材店に販売されるスパイスとしてのメティ種子から発芽、生育は可能であることが分かった。

4. 研究成果発表

澤 宗則「日本の南アジア系移民の地域的特徴とエスニック・エンクレーブの形成—インド人・ネパール人・パキスタン人・バングラデシュ人・スリランカ人の比較分析—」を「移民研究」（査読付き学会誌）に現在投稿中である。

5. 研究費の申請

澤はアジア歴史研究助成に「日本の南アジア系移民社会史の比較考察」を申請した。旭硝子財団に「排外主義を越えて—日本の南アジア系移民社会の包摂システム構築と持続可能な都市」を申請した。

大野は科学研究費補助金（基盤研究(C)）に「地域アイデンティティを形成する祭祀植物の選択要因と文化的プロセスの解明」を申請した。

（担当 澤 宗則）

(2) 図像に基づく行為・表現の再構築過程の定量的検討：バレエ・リュス作品の再創造を対象として

1. 研究目的の概要

本研究は、20 世紀初頭の革新的芸術集団「バレエ・リュス」作品の再創造を対象に、歴史的図像資料（舞台美術、衣裳デザイン、写真、絵画等）に基づく作品（行為・表現）の再構築過程を明らかにすることを目的とする。

2. 研究組織

①代表者：關典子（人間発達専攻）

②共同研究者：清水大地（人間発達専攻）

岸本吉弘（人間発達専攻）

3. 研究実績の概要

申請当初は、最新作『ペトルーシュカとロベルト・モンテネグロ』（2025）を対象とする予定であつ

たが、過去4回の上演歴を有し、記録映像や批評が蓄積されている『牧神とニンフの午後』に変更し、以下の活動を実施した。

1.) 一次資料の調査・整理・照合

兵庫県立芸術文化センター「薄井憲二バレエ・コレクション」において、『牧神の午後』に関する一次資料（バレエ・リュス公式プログラム、批評、写真、絵画等）を再調査し、関版『牧神とニンフの午後』との対応関係を整理した。これにより、参照された図像の範囲と選択傾向が明らかとなった。

2.) 再創造研究の意義の検討

「再創造 (reenactment)」概念に関する先行研究を整理し、本研究の枠組みを検討した。特に「復元 (reconstruction)」との差異に着目し、図像資料から身体表現に至る生成過程を「再構築」として捉える視点を設定した。

3.) 映像分析

初演および再演3回の映像をもとに全シーンの振付を単位化し、ポーズの持続時間や形態、動きの質や速度、空間意識等の観点から比較分析を行った。その結果、上演ごとに体系的な変化が生じていることが確認された。現在、これらの変化の種類や頻度の定量化を進めている。

4.) インタビュー

上記の映像分析を参照しつつ半構造化インタビューを実施した。その結果、変化の背景には、音楽（生演奏）、舞台美術（黒い箱）、上演環境（劇場や観客）、キュレーショナル思考の深化が影響していることが示唆された。

5.) 振付と図像の対応関係に関する考察

関版の振付と原作の図像（写真・絵画）の対応関係を分析し、特徴的な事例を整理した。現在、絵画表現の見地から「図像（視覚芸術）の静止性／運動性」と「ダンス（時間芸術）の運動性／静止性」という両者を接続する理論的枠組みの検討を進めている。

4. 研究成果発表

本研究の成果は、査読付き学術論文（『舞踊學』『比較舞踊研究』等）として公表するとともに、科学研究費等の外部資金申請へと展開する。

- ・招待講演「踊るキュレーターによるバレエ・リュス作品の再創造：黒い箱の象徴性と機能をめぐって」（第5回日本ダンス研究会、2025年10月12日、神戸大学）
- ・展示監修「薄井憲二バレエ・コレクション」第103回常設展『シェエラザード』（2025年9～11月、兵庫県立芸術文化センター）、第105回常設展「セルゲイ・プロコフィエフ生誕135周年（1）バレエ・リュス作品『道化師』」（2026年3～5月、兵庫県立芸術文化センター）
- ・招待講演「現代のダンスの記録をつくる：上演研究」（大阪大学大学院「舞踊史再考の後：ダンスのドキュメンテーション／アーカイヴ」、2026年7月4日、大阪大学中之島芸術センター）
- ・千葉市美術館企画展「おとぎの国のモードをさがして：Fairy Tale MODE」特別上演『牧神とニンフの午後』改訂再演（2026年8月16日、千葉市美術館さや堂ホール）
- ・同展図録への寄稿（2026年6月刊行予定、青幻舎）

5. 研究費の申請

申請研究種目：科研費基盤研究（C）「薄井憲二バレエ・コレクションと黒い箱：踊るキュレーターによる観客参加型アーカイヴ」（不採択）

（担当 關典子）

（3）データ統合に基づく神経発達症における感情調整方略の多様性分析

1. 研究目的の概要

感情調整（Emotion Regulation: ER）は、不安・抑うつ・行動障害などの内在化・外在化症状の発現および維持に深く関与する、診断横断的な心理プロセスである。感情調整の困難さは、自閉スペクトラム症や注意欠如・多動症などを含む神経発達症（Neurodevelopmental Disorders: NDD）に共通してみられる顕著な特徴であり、心理学および臨床的観点の双方から重要な研究課題となっている。本研究では、感情調整方略（Emotion Regulation Strategies: ERS）と神経発達症との関連をより精度高く理解することを目的とし、既存研究の結果を体系的に統合・分析する。複数の研究データを統合することで、個別研究では得られにくい包括的かつ信頼性の高いエビデンスを提示し、神経発達症における感情調整方略の多様性およびその特徴を明らかにすることを目指す。

2. 研究組織

①研究代表者：周怡（人間環境学専攻）

②共同研究者：山本健太（人間発達専攻）、阪本雄二（人間環境学専攻）

3. 研究実績の概要

あらかじめ研究プロトコルを登録し、複数の文献データベースを用いて体系的な検索を行い、関連研究のデータを収集した。現在、収集したデータに基づき予備的な分析を実施しており、神経発達症（NDD）における感情調整（ER）の特徴を明らかにすることを目指している。

4. 研究成果発表

今後、本研究で得られた結果を整理・発展させ、国際学術誌への投稿・発表を行う予定である。

5. 研究費の申請

申請研究種目：若手研究「ネットワークメタアナリシスにおける選択バイアスのノンパラメトリック評価法」（採択）

（担当 周怡）

（4）働く人のクラフティングとウェルビーイング：日本における職場と生活環境を横断するメカニズムの解明

1. 研究目的の概要

本研究では、職場の心理社会的環境および建造環境（室内の緑化）がジョブ・クラフティングを介してウェルビーイングに与える影響を明らかにすることを目的とする。

2. 研究組織

①代表者：横内陳正（人間環境学専攻）

②共同研究者：源利文（人間環境学専攻）

Gavin R. Slemp (The University of Melbourne)

I-Shuo Chen (Anglia Ruskin University)

May Young Loh (University of South Australia)

3. 研究実績の概要

職場の建造環境（室内の緑化）を意識したオフィスデザインを採用している JAM BASE を対象に、そこで働く従業員を対象とした質問紙調査を行った（2026 年 3 月）。具体的には、ベースライン調査に回答した 82 名を対象に、日誌法に基づく 5 日間のデータ収集を行った。また、共同研究者である Gavin R. Slemp 氏を招待して、ジョブ・クラフティングに関する研究会を実施した（2026 年 2 月）。

4. 研究成果発表

収集したデータを使用し、査読付き学術論文および国際共著論文を投稿する予定である。

5. 研究費の申請

申請研究種目：科研費（若手研究）「日本の職場におけるインクルージョンの文化特異的な健康影響メカニズムの解明」（採択）

（担当 横内陳正）

7.4. 高度教員養成プログラム

2013 年以降、開発研究部門において高度教員養成プログラムを企画・運営している。本プログラムは、グローバル化する知識基盤社会において、教育実践のアクション・リサーチを含む理論を踏まえた実践的研究に主導的に携わり、かつ、国際的にも通用する高度な教育能力および研究能力を備えた教員養成を行うことを目的とし、本学附属学校部と連携しながら実施した。

参加者は人間発達環境学研究科博士課程前期課程の大学院生であり、教員専修免許取得予定の受講希望者 9 名が、国内外を代表する研究者による教員を目指す大学院生等を対象とした高度教員セミナー（詳細 <https://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/954>）を受講した。最終報告会において受講生は、自らのアクション・リサーチの研究成果を報告・共有し、本学研究科と附属学校部による修了証を得た。

(1) 申請者：人間発達環境学研究科修士課程学生：9 名

(2) 実施内容

1) 第 1 回

テーマ：高度教員養成プログラムへ参加するために

講師：本学教員 3 名、本学附属学校部担当者

日 時：2025 年 5 月 16 日（金）17:00～18:00

会 場：F255（対面開催）

参加者：学生 3 名，教職員 3 名

2) 第 2 回

テーマ：子どもの認識と教育について-幼小連携段階-

講 師：関西学院大学教授 渡邊伸樹氏，本学教員

日 時：2025 年 6 月 20 日（金）17:00～18:30

会 場：F255（対面開催）

参加者：学生 9 名，教員 1 名

3) 第 3 回

テーマ：測りすぎの時代に意味ある学習評価を行うには—パフォーマンス評価の理論と実践—

講 師：京都大学教授 松下佳代氏，本学教員

日 時：2025 年 9 月 26 日（金）17:00～18:30

会 場：F255（対面開催）と遠隔によるハイフレックス

参加者：学生 9 名，教員 1 名，学外者 97 名

4) 第 4 回

テーマ：子ども・からだところどころ～保育者の抱く感覚の具体化をめざして～

講 師：愛知教育大学教授，名古屋柳城短期大学学長，鈴木裕子氏，本学教員

日 時：2025 年 10 月 17 日（金）17:00～18:30

会 場：F255（対面開催）

参加者：学生 9 名，教員 2 名

5) 第 5 回

テーマ：SDGs 時代の教育原理／教育の倫理：「教育学における討議倫理学研究」の成果を踏まえて

日 時：2025 年 12 月 3 日（金）17:00～18:30

講 師：島根大学教授，丸橋静香氏，本学教員

会 場：オンライン

参加者：学生 9 名，教員 2 名

6) 第 6 回

テーマ：リサーチ報告会

日 時：2025 年 12 月 19 日（金）17:00～18:30

講 師：中京大学教授，國土将平氏，本学教員

会 場：F255（対面開催）

参加者：学生 9 名，教員 3 名

（教育連携推進室長 北野幸子）

7.5. 附属中等教育学校を活用した高大接続共同研究

神戸大学が、「グローバルキャリア人の育成」を教育目標に掲げる附属中等教育学校を活用した高大連携・接続の在り方に関して行う研究に対し，人間発達環境学研究科の教員が積極的に協力した。

具体的な連携事業としては、附属中等教育学校生徒が参加したプログラムとして、「根源を問い革新を生む国際的科学技術人材育成挑戦プログラム（ROOT プログラム）」といった人間発達環境学研究科が実施するグローバルな課題に関するプログラム等が挙げられる。さらに、附属中等教育学校のインターンシップ学習「KU トライやる」に対して、人間発達環境学研究科の教員が協力し、附属中等教育学校生徒を受け入れた。

また、附属中等教育学校生徒が卒業研究として取り組む「課題研究」に、人間発達環境学研究科のSS 推進アドバイザーなど複数の教員が、研究の進め方や分析のしかたについての助言などを行った。プログラムを実施した。また、優秀者発表会においても講評を行った。附属中等教育学校で開催された「授業研究会」及び「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）報告会」において、人間発達環境学研究科の教員が多数指導助言を行った。また、このことは、化学グランプリ 2025 において銅賞を受賞し、国際化学オリンピックの日本代表候補に選出されたことなど、大きな成果に繋がるきっかけとなった。

（神戸大学附属中等教育学校 SS 推進アドバイザー 林 創）

7.6. 研究推進

7.6.1. 研究倫理審査委員会

本年度は 146 件の申請があり、89 件が承認、39 件が条件付承認、18 件が変更の勧告であった。なお、昨年度の申請件数は 130 件であり、昨年度よりも 1 割程度申請件数の増加が見られた。

（研究倫理審査委員会委員長 増本康平）

7.6.2. 紀要編集委員会

昨年度までの実績に基づき、本年度委員会会議はメール回議で行った。「神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要」第19巻第1号と第2号を編集・発行した。第1号（2025年9月30日発行）は、研究論文8編、研究報告4編であった。第2号（2026年3月31日発行）は、研究論文3編、研究報告4編であった。

（研究紀要編集委員会委員長 長ヶ原誠）

7.7. 各専攻の研究

7.7.1. 人間発達専攻

●心理系

(1) 国際共同研究

本専攻研究者：林 創

共同研究者：Robin Banerjee (University of Sussex), Michaela Gummerum (University of Warwick)

研究課題：社会性の豊かさを生み出す社会的評価に関する発達心理学的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（代表者：林 創）

研究概要：幼児期から児童期の子どもを対象に，社会性の発達について心理学的視点から検討することを目的とする。

本専攻研究者：加藤佳子

共同研究者：Schwerdtfeger Andreas (Graz university), Roswith Roth (Graz university), Rominger Christian (Graz university), Yamane Takahiro (Kobe university)

研究課題：心の健康の保持増進のための国際支援プログラム評価指標の開発

研究資金：国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))（代表者：加藤佳子）

研究概要：心の支援を行う支援関係者の心の健康の保持増進のための国際支援プログラム評価指標を開発することを目的とする。

本専攻研究者：古谷真樹

共同研究者：Rosemary Gibson (Massey University)

研究課題：国際比較に基づく有職介護者のライフスタイルと睡眠の分析：女性の仕事と介護両立への具体的支援策の提案

研究資金：国際共同研究者養成プログラム

研究概要：日本とニュージーランドの有職介護者におけるライフスタイルおよび睡眠の性差に関連する要因を明らかにする。

本専攻研究者：安達 友紀

共同研究者：榎本聖香（同志社大学）, Anupa Pathak (University of Sydney), Lisa C. Murphy (Independent), Mark P. Jensen (University of Washington), Melissa Day (University of Queensland), and Saurab Sharma (University of Sydney)

研究課題：The Behavioral Inhibition System-Behavioral Approach/Activation System model of chronic pain: A scoping review

研究資金：該当なし

研究概要：慢性痛に対する行動抑制・行動接近モデルの適用についてスコーピングレビューを行う。

本専攻研究者：安達 友紀

共同研究者：榎本聖香（同志社大学） and Ephrem Fernandez (The University of Texas at San Antonio)

研究課題：The Japanese Validation Study of Anger Parameter Scale

研究資金：該当なし

研究概要：感情の継時性を考慮した，怒りの測定尺度である Anger Parameter Scale 日本語版を開発する。

本専攻研究者：安達 友紀

共同研究者：榎本聖香（同志社大学）、Tyler Barrett（University of Washington）、中西美保・岩下成人・北川裕利（滋賀医科大学）

研究課題：Age differences of pain-related variables among individuals with chronic pain

研究資金：該当なし

研究概要：慢性痛を持つ人を対象に若年者、中年者、高齢者で痛みや心理変数の比較を行う。

本専攻研究者：岸田広平

共同研究者：William E. Pelham（Florida International University）

研究課題：Psychometric Properties of the Japanese Version of the Disruptive Behavior Disorders Rating Scale Reported by Parents

研究資金：科学研究費補助金・若手研究（代表：岸田広平）

研究概要：子どもの破壊的行動障害の各症状を測定する Disruptive Behavior Disorders Rating Scale 日本語版を作成する。

（2）国内共同研究等

本専攻研究者：林 創

共同研究者：清水由紀（早稲田大学）、岸本健（聖心女子大学）

研究課題：社会性の豊かさを生み出す社会的評価に関する発達心理学的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(B)（代表者：林 創）

研究概要：子どもと大人を対象に、特に社会的評価について着目し、こうした評価が社会性の発達において重要であることを実証的に明らかにする。

本専攻研究者：山本健太

研究課題：成人自閉症者の対人感情調整の特徴の解明とメンタルヘルスの関連性の検討

研究資金：科学研究費助成事業 若手研究（代表：山本健太）

研究概要：自閉症における他者と一緒に行う感情のコントロールについて日誌法や経験サンプリング法を用いて検証する。

本専攻研究者：山本健太

研究課題：成人自閉者における対人感情調整とメンタルヘルスの関連性の検討

共同研究者：出水志緒梨、村上萌子

研究資金：前川財団（代表：山本健太）

研究概要：自閉スペクトラム症者における対人感情調整とメンタルヘルスの関連性を検討する。

本専攻研究者：山本健太

共同研究者：楠房子（多摩美術大学）、稲垣成哲（立教大学）

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽）（代表：楠房子）

研究概要：従来の自閉症スペクトラム症の色知覚特性の調査手法を再検討し、新たな調査手法を開発することによって、その実態を解明することで科学系博物館における展示パネルの色彩デザインのためのガイドラインの提案を目指す。

本専攻研究者：山本健太

共同研究者：内山愉太（本専攻）、喜屋武亨（琉球大学）、高倉実（名桜大学）、佐藤真行（本専攻）、丑丸敦史（本専攻）、原田和弘（本専攻）、香坂玲（東京大学）

研究課題：日常生活全般における生態系サービス受給の格差と効果：都市地域環境と健康の改善手法

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究 B（代表：内山愉太）

研究概要：生態系サービス受給の格差と効果を解析し、最終的に生態系管理と健康の統合的改善手法を提言を目指す。

本専攻研究者：山本健太

共同研究者：稲垣成哲（立教大学）、増本康平（本専攻）、楠房子（多摩美術大学）、小川義和（立正大学）、寺田努（神戸大学工学研究科）、江草遼平（千葉商科大学）、石田弘明（兵庫県立大学）、岩崎誠司（独立行政法人国立科学博物館）、鳥居深雪（神戸大学名誉教授）

研究課題：科学系博物館におけるニューロダイバーシティの実現：展示手法と実践モデルの提案

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究 A（代表：稲垣成哲）

研究概要：ニューロダイバーシティ（ND）の立場から科学系博物館における発達障害（ASD, LD, ADHD 等）のある来館者向けの展示学習保障ガイドラインの体系化とその展示手法の開発、さらには具体例としての実践モデルを提案する。

本専攻研究者：山本健太、赤木和重

共同研究者：津田英二（本専攻）、稲原美苗（本専攻）、川地亜弥子（本専攻）、殿垣亮子（神戸大学附属特別支援学校）、橋田慈子（本専攻、特別研究員 PD）

研究課題：科学系博物館におけるニューロダイバーシティの実現：展示手法と実践モデルの提案

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究 A（代表：津田英二）

研究概要：さまざまな学びの機会や場面から排除されてきた人たちも含めて、すべての人やコミュニティが学びを通して生き生きとした生活を実現し、同時に共生社会を構築していくというビジョンの実現をめざす中核的な試みとして、障害者の生涯学習をテーマとした実践的な研究を行う。

本専攻研究者：加藤佳子

共同研究者：高橋路子（神戸大学附属病院），田渕聡子（神戸大学附属病院），三ヶ尻礼子（神戸大学附属病院）

研究課題：生物心理社会モデルに基づく相談・支援型食生活改善プログラム評価指標の開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表者：加藤佳子）

研究概要：食生活を改善するためには、要支援者のストレスや心情など心理社会的要因をくみ取った支援を行う必要がある。そこで病態栄養にもとづく食生活指導に、心理社会的要因に配慮した相談・支援型の食生活改善支援を融合することが期待される。したがって本研究では相談・支援型食生活改善プログラム評価指標および専門職支援者研修用プログラム評価指標を開発することとした。

本専攻研究者：加藤佳子

共同研究者：小澤（株式会社 テラアクソン）

研究課題：労働者のモチベーション・エンゲージメント強化に繋がる Well-being Monitor に関する研究

研究資金：株式会社テアラクソンから出資

研究概要：いわゆる既存のストレスチェック等の枠ではなく、継続的なアンケートとバイタルデータを通して、幸せを感じる等の主観的ウェルビーイングをモニターすると共に、分析により個々にあった主観的ウェルビーイング増進行動を推進する仕組みを開発する。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：ポーター倫子, 野上慶子, 鈴木田英里

研究課題：自閉スペクトラム症児の親におけるウェルビーイングの維持・向上の影響因の縦断的解明

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（代表：山根隆宏）

研究概要：本研究は自閉スペクトラム症児をもつ親のコホートを構築し、ライフコースアプローチを用いて、縦断調査からそれらの親がウェルビーイングの実現に至る中長期的な多様なパターンとそれらの変化に関わる要因の解明を目的とする。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：西田健志（神戸大学大学院国際文化学研究科），寺田努（神戸大学大学院工学研究科），村中泰子（神戸大学インクルーシブキャンパス&ヘルスケアセンター）

研究課題：発達障害のある児童を周囲と仲立ちするインクルーシブ教育支援システムのデザイン

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（代表：西田健志）

研究概要：本研究は、周囲にいる大人と子どもを支援することで交流機会を増やす方針に立ち、コミュニケーション支援システムを設計・開発する。本研究の目的は、周囲にいる人を支援するシステムによって発達障害のある子どもを間接的に支援することができるか実証的に明らかにすることである。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：原田新（岡山大学）、江上弘晃（神戸大学附属特別支援学校）

研究課題：成人期知的障害者家族におけるウェルビーイングへの「働くこと」・余暇の態度の影響

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究（萌芽）（代表者：山根隆宏）

研究概要：本研究は知的障害者やその重要な他者（親，施設職員）を対象に，賃金労働に限らず広い意味で社会の一員として活動する「働くこと」及び余暇活動に対する態度に焦点を当て，混合研究方法など多様なアプローチからウェルビーイングもたらす影響を解明する。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：ポーター倫子（北陸学院大学）

研究課題：二重 ABCX モデルを用いた自閉スペクトラム症児の母親のストレス適応の解明

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 C（代表：ポーター倫子）

研究概要：二重 ABCX モデルを援用し，自閉スペクトラム症児をもつ母親のストレスと適応のメカニズムを日米比較から解明を行う。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：辻井正次（中京大学）、伊藤大幸（お茶の水女子大学）、内山登紀夫（福島学院大学）、岡田俊（奈良県立医科大学）、小林真理子（山梨英和大学）、高柳伸哉（愛知教育大学）、浜田恵（中京大学）、日詰正文（独立行政法人 国立重度知的障害者総合施設のぞみの園）、本田秀夫（信州大学）、明翫光宜（中京大学）、村山恭朗（金沢大学）、岩永竜一郎（長崎大学）、枡屋二郎（東京医科大学）

研究課題：療育手帳の交付判定及び知的障害に関する専門的な支援等に資する知的能力・適応行動の評価手法の開発のための研究

研究資金：厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）（代表：辻井正次）

研究概要：療育手帳の交付判定に必要な判定基準の統一化をおこない，交付判定に利用できる簡便な知的能力及び適応行動を評価できる指標を開発する。

本専攻研究者：赤木和重

研究課題：通常学級から特別支援学級・学校への転籍理由とプロセスの解明：小学校時期を対象に

共同研究者：下木なつみ（神戸大学附属特別支援学校）

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 C（代表：赤木和重）

研究概要：小学校時期において，通常学級から特別支援学級・学校に転籍する理由やプロセスを，保護者・教員への質問紙調査および聞き取り調査を通して明らかにすることである。

本専攻研究者：赤木和重

研究課題：日本・ニュージーランド・イタリアにおける保育カリキュラムの創造と評価の研究

共同研究者：塩崎美穂（東洋英和女学院大学）、加藤繁美（東京家政大学）、川田学（北海道大学）
ほか

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 B（代表：塩崎美穂）

研究概要：日本・ニュージーランド・イタリアにおける保育カリキュラムについて比較検討を行う。

本専攻研究者：赤木和重

研究課題：自閉スペクトラム症児における授業スタンダードの認識

共同研究者：前岡良汰（ほどきのとっと）

研究資金：前川財団（代表：赤木和重）

研究概要：自閉スペクトラム症児における授業スタンダードの認識 について検討を行う。

本専攻研究者：相澤直樹

研究課題：幼児期の表象する心のめばえを探るーインクプロット法を用いて

共同研究者：田中孝尚（神戸大学神戸大学附属学校部）、木下孝司（神戸大学）、渡邊隆信（神戸大学）、
松本恵（大阪大学）

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 C（代表：相澤直樹）

研究概要： インクプロット法を用いて幼児期の表象発達の様相を解明する。

専攻研究者：古谷真樹

共同研究者：佐藤幸治（本専攻）、福田博也（環境学専攻）、近藤徳彦（本専攻）

研究課題：心理的ストレスによる不眠予測およびセルフモニタリングツールの開発とその効果検証

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：古谷真樹）

研究概要：不眠と対応する代表的な生理指標とその基準を明確にし、不眠のスクリーニングツールの
開発および効果検証を行う。

専攻研究者：古谷真樹

共同研究者：林光緒（広島大学）、田中秀樹（広島国際大学）、笹澤吉明（琉球大学）、樋口重和（九州大学）、山本隆一郎（江戸川大学）、田村典久（広島大学）、綾部直子（秋田大学）、高田律美（人間環境大学）

研究課題：睡眠改善の促進妨害要因の解析と集団特性に応じた新たな睡眠教育プログラムの構築

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（代表：岡靖哲）

研究概要：国内多地域の調査データを比較・統合できる共通フォーマットに基づいてデータベースを構築し、睡眠改善を促進あるいは妨害する環境要因の解析から、集団特性に応じた睡眠改善プログラムのフォーミュラを構成し実証的に検討する。

本専攻研究者：安達友紀

研究課題：慢性神経障害性疼痛に対する痛み焦点化催眠と催眠認知療法の効果検証

研究資金：科学研究費助成事業 若手研究（代表：安達友紀）

研究概要：慢性神経障害性疼痛患者への催眠療法と催眠認知療法の効果を検証する

本専攻研究者：安達友紀

共同研究者：水野泰行（関西医科大学）、吉野敦雄（広島大学）、中村亨（大阪大学）、藤野陽生（大阪大学）、横山仁史（新潟大学）、北川裕利（滋賀医科大学）、中西美保（滋賀医科大学）

研究課題：行動抑制・行動賦活モデルに基づく慢性痛への催眠の作用機序の多面的検証による解明

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（代表：安達友紀）

研究概要：慢性痛患者対象の遠隔・集団式催眠プログラムを実施し、質問紙・Ecological Momentary Assessment・インタビューにより、その有効性と作用機序を検証する

本専攻研究者：安達友紀

共同研究者：細越寛樹（関西大学）、岩佐和典（大阪府立大学）、福森崇貴（徳島大学）、高岸百合子（国立精神・神経医療研究センター）、大江悠樹（杏林大学）、平子雪乃（杏林大学）、吉野敦雄（広島大学）、横山仁史（新潟大学）、柴田正彦（奈良学園大学）

研究課題：慢性痛に対する認知行動療法の無作為化比較試験およびその普及と集団版の検討

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（代表：細越寛樹）

研究概要：本研究では対面・個人形式の慢性痛に対する認知行動療法(CBT-CP)の有効性を臨床試験で検証する。加えて、CBT-CP がどのように有効なのか、わが国ではどれだけ普及しているかも踏まえながら、医療現場で実際に使用可能な資材を開発する。

本専攻研究者：河崎佳子（研究統括責任者）

共同研究者：酒井邦嘉（東京大学）、武居渡（金沢大学）、特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援研究機構

研究課題：手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト

研究資金：日本財団助成事業

研究概況：脳科学，心理発達，言語獲得（日本手話・日本語），学習能力（理解・思考）の4分野から，手話言語を獲得・習得して成長する聴覚障害児の真の言語力を適正に評価することを目指す。

本専攻研究者：岸田広平

共同研究者：佐藤寛（関西学院大学）

研究課題：子どもの反抗挑発症に対するペアレントトレーニングと認知行動療法の有効性検証

研究資金：科学研究費補助金・若手研究（代表：岸田広平）

研究概要：反抗挑発症を有する児童の保護者（母親）に対するペアレントトレーニングと認知行動療法の有効性を検討することを目指す。

本専攻研究者：岸田広平

共同研究者：高橋史（信州大学）、神原広平（同志社大学）、杉山智風（岩手大学）

研究課題：学校全体での心理支援プログラムは誰に効くのか？：大規模地域データに基づく検証

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（代表：高橋史）

研究概要：学校全体で実施する心理支援プログラムの有効性について、大規模地域データを用いて兼用することを目指す。

本専攻研究者：岸田広平

共同研究者：石川信一（同志社大学）、松原耕平（聖泉大学）

研究課題：子どもに対する認知行動療法の社会実装のための基盤研究

研究資金：科学研究費補助金・特別研究員奨励費（代表：岸田広平）

研究概要：学校教育現場における子どもに対する認知行動療法の普及と実装を進めるために、実施者トレーニングプログラムおよびアセスメントツールの開発を目指す。

本専攻研究者：坂本美紀

共同研究者：村山留美子（本専攻）、大島律子（静岡大学）、山口悦司（本専攻）、川崎弘作（岡山大学）、長沼祥太郎（九州大学）

研究課題：意思決定エージェントとしての市民を育成する変革的リスクリテラシー教育プログラム

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）（代表：坂本美紀）

研究概要：教育心理学と学習科学、リスク学、科学教育などの学際的な研究として、リスクリテラシー教育プログラムの実証研究に取り組んでいる。

(3) 論文

国際共著論文

Adachi, T., Enomoto, K., Barrett, T., Nakanishi, M., Iwashita, N., & Kitagawa, K. (in press). Age differences of pain-related variables among individuals with chronic pain. *GeroPsych The Journal of Gerontopsychology and Geriatric Psychiatry*.

Mori, Y., Ståhlberg, T., Zhang, X., Mishina, K., Herkama, S., Korpilahti-Leino, T., Ristkari, T., Kanasuo, M., Siirtola, S., Närhi, V., Savolainen, H., Hinkka-Yli-Salomäki, S., Torii, S., Matsubara, K., Kishida, K., Hida, N., Ishikawa, S., & Sourander, A. (2025). Let's Learn About Emotions Program: Acceptability, Fidelity, and Students' Mental Well-Being Outcomes for

Finnish Primary School Children. *Children*, 12, 1251.

Web of Science 収録誌掲載論文 * (10%論文にはマークを付す)

Yamamoto K., & Matsushima M. (2025). The relationship between open-air memory and social functions of autobiographical memory in individuals with autistic traits. *Memory*, 33(10), 1281-1292. <https://doi.org/10.1080/09658211.2025.2574429>

Uchiyama Y., Kyan A., Sato M., Ushimaru A., Minamoto T., Harada K., Takakura M., Kohsaka R., Kiyono M., Tsurumi T., Uchida A., Saga T., & Yamamoto K. (2025). Association between objective and subjective relatedness to nature and human well-being: Key factors for residents and possible measures for inequality in Japan's megacities. *Landscape and Urban Planning*, 261, 105377.

<https://doi.org/10.1016/j.landurbplan.2025.105377>

Hosogoshi, H., Iwasa, K., Fukumori, T., Takagishi, Y., Takebayashi, Y., Tairako, Y., Oe, Y., Adachi, T., Enomoto, K., Yokoyama, S., Kurata, J., Matsui, A., Nishie, H., Sato, H., Takahashi, N., Watanabe, K., Fujiwara, A., Yoshino, A., Toyota, A., Horikoshi, M., ... Shibata, M. (2025). Individualized cognitive behavioral therapy for chronic pain in Japan: study protocol for a multicenter randomized controlled trial. *Trials*, 26(1), 489.

<https://doi.org/10.1186/s13063-025-09153-6>

Kishida, K., Tsuda, M. & Ishikawa, S. (2025). Psychometric Properties of the Japanese Version of the Disruptive Behavior Disorders Rating Scale Reported by Parents. *International Journal for the Advancement of Counselling*, 47, 459-477. <https://doi.org/10.1007/s10447-025-09593-4>

Kishida, K., Hida, N., Matsubara, K., Kihara, H., Sakaue, Y., Takeuchi, Y., & Ishikawa, S. (2026). Effectiveness of a School-Based Universal Prevention Program on Self-Efficacy and Mental Health Problems in Japanese Children: Differences Between Universal- and Indicated-Level Effects. *Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health*.

Sakamoto, M., Yamaguchi, E., Yamamoto, T., Matano, M., Ohmido, N., & Murayama, R. (2026). An SSI-Based Instructional Unit to Enhance Primary Students' Risk-Related Decision-Making. *Education Sciences*, 16(1), 143-156. <https://doi.org/10.3390/educsci16010143>

Kato, Y., Yamane, T., Murata, Y. (2025). Assessment of behavioral emotion regulation and

relationship with mental health in adults: BERQ Japanese version. Discover mental health, 5, 128. <https://doi.org/10.1007/s44192-025-00272-9>

査読付き論文

石本雄真・山根隆宏 (2025). 発達障害児向け SEL プログラムの放課後等デイサービスにおける実施可能性と効果の検証. LD 研究, 34, 387-399.

劉娟・山根隆宏 (2025). 在日中国人の子どもの発達障害の気づきに及ぼす影響要因—テーマティックアナリシス法を用いた保護者の語りの分析. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 19(1), 71-82.

平岡優実・山根隆宏 (2025). 自閉スペクトラム症者のカモフラージュを引き起こす要因とその影響における心理社会的側面からの文献的検討. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要, 19(1), 59-70.

劉娟・山根隆宏 (2025). 在日中国人家庭における子どもの問題行動がソーシャルサポートを媒介して育児ストレスに与える影響—発達障害の有無による比較. 発達心理学研究, 36(2), 57-67.

岸田広平・津田征海・福山裕三郎・板東瑞季・佐藤寛・石川信一 (2026). 親の養育行動尺度の開発および子どもの内在化問題と外在化問題に与える影響. 対人援助学研究, 17.

福山裕三郎・岸田広平 (2025). 子どもの攻撃行動と Callous-Unemotional (CU) 特性の関連に対する親の養育行動の調整効果. 学校メンタルヘルス, 28, 149-153.

加藤 佳子・小島 亜未・古屋敷 智之・篠原 正和 (2025). 労働者の健康に関連する生活の質とメタボリックシンドロームおよび生活習慣との関連. 日本公衆衛生学会,
<https://doi.org/10.11236/jph.24-110>

オルランド ヤコポ・加藤 佳子. (印刷中). 精神科看護師における患者との関係に伴うストレスと感情労働および情緒的消耗感の関連 日本看護科学会誌

相澤直樹 (2025). シンボル表象の観点からのロールシャッハ事例解析の試み ロールシャッハ法研究, 29, 15-24.

査読なし論文

相澤直樹・田中孝尚 (2026). インクブロット法を用いた幼児の表象発達に関する予備的研究—使用

カードの選択と実施法上の工夫― 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 19(2) (印刷中)

津田英二・山本健太・赤木和重(2025). 「障害者の生涯学習」支援への動機づけにアプリ活用は有効か～兵庫県民意識調査結果分析の概要(速報)～, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要, 19(1), 115-124.

山口悦司・坂本美紀・俣野源晃・ほか5名(2025). 科学技術の社会問題に対する小学生の意思決定を支援する生成AI利用型教育プログラムの開発 日本科学教育学会研究会研究報告, 39(5), 67-70.

川崎紗和子・木原陽子・津田征海・岸田広平・松原耕平・石川信一(2025). COVID-19の影響下における児童青年のメンタルヘルスについての縦断調査. 同志社心理, 71, 1-11.

(4) 著書

編著

赤木和重(編著)(2026) 子どもの理屈からはじめる特別支援教育 北大路書房

共編著

石本雄真・山根隆宏(2026) 発達障害・知的障害のある子どもの不安やイライラをやわらげる方法―感情調整のための本人への支援と環境づくり 学苑社

小泉誠・山根隆宏(編)(2025). 現場からあなたに語る公認心理師の職責 創元社

分担執筆

呉文慧・赤木和重(印刷中) 竹沢清『子どもの真実に出会うとき』全障研出版部 について 田中耕治(監修)「シリーズ学級経営」 ミネルヴァ書房

赤木和重(印刷中) 障害とインクルーシブ教育 心理科学研究会(編)『新・小学生の生活とこころの発達』福村出版

山本健太(2026) 個別の指導計画 子どもの理屈からはじめる特別支援教育 赤木和重(編著) 北大路書房

(5) シンポジウムの開催など

安達友紀, 有村達之, 横山仁史, 吉野敦雄, 本谷亮, 榎本聖香 日本心理学会第89回大会公募シンポジウム(2025年9月5日) 慢性痛をもつ人への心理療法の作用機序 何がどのように働くのか?

波光涼風，松原耕平，杉山智風，福山裕三郎，岸田広平，式部陽子 日本認知・行動療学会 第 51 回大会 自主企画シンポジウム（2025 年 8 月 24 日）未就学児と家族のための認知行動療法：支援の拡充と今後の展開について

石本雄真・山根隆宏・野上慶子・北川庄治・平生尚之・原田新・宮崎昭 日本発達心理学会第 27 回大会ラウンドテーブル（2025 年 3 月 4 日）「発達障害児者に対する情動調整に関する支援—発達の視点を踏まえた支援とするために

翻訳

総説・書評など

赤木和重（印刷中）おもちゃ職人 教職研修

赤木和重（2025）振り返りの功罪 はあとブリッジ，469，3

赤木和重（2025）実践報告：神戸大学・KUPI（学び楽しみ発見プログラム）一知的余暇としての学び — 日本特別ニーズ教育学会会報，20，16-17.

赤木和重（2025）「若い女の子，好きなんやから，もう〜」はあとブリッジ，464，1

赤木和重（2025）子どもの気持ちは「わかる」ではなく「気づく」もの 日本の学童はいく，597，10-13.

岸田広平（2026）2025 年『認知療法研究』第 12 回最優秀論文賞受賞にあたって 認知療法 News，88，3.

(6) 受賞

第 12 回 認知療法研究 最優秀論文賞. 岸田広平・佐藤寛・石川信一（2025）. 子どもの反抗挑発症に対する認知行動療法の Proof-of-concept 試験：怒りに特徴的な認知の変容可能性.

(7) 心理系講座の研究の総括と課題

教育，発達，健康，発達支援などにおける心理に関する課題の解決に向けた研究が，活発に行われた。これらの研究は人々の QOL(Quality of Life)の向上につながる貴重な研究である。そのため本講座で得られてきた研究成果は，研究としてとどめ置かれることなく，きれめなく，社会へとつながっている。2025 年度も産官学共同プロジェクトや地域連携プロジェクトなどの形として，心理系の研究が展開していることが報告された。心理系への社会からの期待の高さがうかがわれる。また，複数の国際共同研究の取り組みが報告された点も評価される。

●表現系

(1) 国際共同研究

本専攻研究者：野中哲士

共同研究者：Fumiya Iida (ケンブリッジ大学), 中嶋浩平 (東京大学), 永野光 (京都工芸繊維大学), 木伏紅緒, 清水大地 (神戸大学)

研究課題：身体の摂動ダイナミクスを情報資源として用いる身体一環境系の知覚行為制御

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究(開拓) (代表者：野中哲士)

研究概要：本研究では、環境と相互作用する豊かな身体のダイナミクスが、知覚行為制御にいかなる「情報」をもたらし得るのかという新たな視点から、「情報の媒質」としての身体とそのダイナミクスを捉え直し、身体一環境系制御理論の刷新を目指す。

本専攻研究者：野中哲士 (研究代表者)

共同研究者：Thomas A. Stoffregen (ミネソタ大学), 林創, 木村哲也, 石原暢, 山本健太, 木伏紅緒, 岡野真裕, 清水大地

研究課題：適応的スキル発達をめぐる異分野共創先端研究 (代表者：野中哲士)

研究資金：人間発達環境学研究科学研究推進支援経費

研究概要：変化する環境と柔軟に切り結ぶ人間の「スキル」の原理を深く探求し、異分野の連携を通して傑出した研究成果を創出する。

研究代表者 (本専攻教員)：清水大地

共同研究者：工藤和俊 (東京大学教授), 宮田紘平 (東京大学講師), 鎌田紗弓 (東京文化財研究所研究員), 高岡明 (桜美林大学教授), Clayton Martin (Durham University, UK, Professor)

研究課題：日本伝統音楽合奏時に演者間に生じる巧みな間の検討

研究資金：該当なし

研究概要：日本の伝統音楽である雅楽・舞楽の合奏場面において、演者間にどのような協調・非協調の間合いの関係が生じているのかを、呼吸や運動の観点から量的・質的に検討する研究を進めている。2025 年度では、実際に演奏者達を集めて合奏を行い、その際の運動・呼吸データを測定するフィールド実験を実施した。

本専攻研究者：上田香

共同研究者：Bine Roth (Royal College of Art), Junichro Horikawa (Kyoto Institute of Technology)

研究課題：ZeroWaste デザインと連動するアバターシミュレーション開発

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究 (開拓) (代表者：上田香)

研究概要：西陣織と八丁撚糸 (絹の強撚糸) を利用した 3D 生地 of 製作からスタートし、現在までいくつものプロジェクトを共同で行ってきた。今年度はアバター試着などに焦点をあて、研究している。

本専攻研究者：上田香

共同研究者：Laura Devendorf (University of Colorado Bolder), Jim McCann (Carnegie Mellon

University) など

研究課題：Developing Next-Generation Rapid Prototyping Tools to Catalyze Innovation in Smart Textiles

研究資金：National Science Foundation CAREER award（代表者：Laura Devendorf）

研究概要：AdaCAD 開発者グループによる，情報系研究者，ソフトウェア開発者，テキスタイルデザイナー・アーティストを招聘しコロラド大学ボルダー校にて6月2日から5日まで研究ワークショップを行った。

本専攻研究者：上田香

共同研究者：Kristina Andersen (Eindhoven University of Technology), Milou Voorwinden (Delft University of Technology)

研究課題：「振る」技法が拓く繊維の未来：日欧の織構造比較と国際共同研究

研究資金：国際共同研究PIプログラム（神戸大学女性リーダー育成室），【公益財団法人 住友財団】環境研究助成（代表者：上田香）

研究概要：日本の伝統技法「絡み織（Karami-Ori）」と西洋の「Leno weave」を比較し，「振る」織構造の技術的・文化的意義を再検討・評価する。また，構造試作や文化的考察を通じて，新たな知見を生かしたイノベーションの創出に取り組む。

（2）国内共同研究等

本専攻研究者：野中哲士（研究代表者）

共同研究者：西尾千尋（甲南大学），山崎寛恵（東京学芸大学）

研究課題：乳児の「探索する手」を起点とする発達カスケードの実証的理解

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究B（代表者：野中哲士）

研究概要：乳児が環境を「探索する手」の自発的動作が起点となり，発達の諸相に影響が及ぶ「発達カスケード」現象の統合的な理解を目指す。

本専攻研究者：野中哲士（研究代表者）

共同研究者：青沼仁志（神戸大学理学研究科），小谷野由紀（神戸大学人間発達環境学研究科）

研究課題：適応的な行動の発現をめぐる学際共創研究（代表者：野中哲士）

研究資金：神戸大学学術研究推進機構異分野共創研究企画・創出委員会異分野共創ユニット

研究概要：環境と結びついて合目的的な挙動を生成する行動の発現をめぐって，動物生理行動学，認知科学，非線形物理学という異なる分野の研究者が協働し，行動の時間スケールで環境に適応する原理をめぐる新たな学術パラダイムの創成を目指す。

本専攻研究者：清水大地（研究代表者）

共同研究者：岡田猛（東京大学教授）

研究課題：アート体験によるビジネスパーソンのパフォーマンス向上に関する研究

研究資金：株式会社 SIGNING 共同研究費

研究概要：絵画・ダンスの芸術表現の持つ知覚や相互作用に働きかける特異的な特徴を活用した，創造性促進のための「表現ワークショップ」と「その定量的・定性的な効果検証方法」を開発し，ビジネスパーソンを対象に実際に実施・検証する。特に，定量的な効果検証方法としては，伝統的な創造性測定の手法に加え，非線形力学の手法を応用・活用し，新規な解析方法の開発にも取り組む。

本専攻研究者：清水大地（研究代表者）

共同研究者：土田修平（お茶の水女子大学講師）

研究課題：ダンスパフォーマンスにおける身体・生理・認知の相互引き込みによる一体感の生起

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究（萌芽）

研究概要：ダンスや音楽における演者－観客系において逸話的に確認される事象としての「場の一体感」の感覚について，身体－生理－認知の複数媒体間の相互引き込みの観点から解明する。そのために，生態学的妥当性の高い現実のダンスバトルを企画・開催し，リアルなパフォーマンス場面における演者・観客の身体行為・心拍・呼吸データを計測する。そして，非線形時系列解析（交差再帰定量化解析）を発展させた Content-based Cross Recurrence Plot 等により複層的な相互引き込みの様相・程度を検証する。

本専攻研究者：清水大地（研究代表者）

共同研究者：O JUN（研究分担者，東京藝術大学名誉教授），戸田将平（エキスパートダンサー）

研究課題：絵画とダンスとの融合による新たな芸術パフォーマンスの探索とその過程における個人の創造的熟達の探索過程の解明

研究資金：個人研究費

研究概要：絵画とダンスという異なる領域に位置付けられる表現を融合したパフォーマンスを生成し，実際に展覧会・パフォーマンスとして公的にその成果を披露する。また，その過程で各芸術家個人に生じうる感覚やスタイルの変化などを抽出し，創造的な熟達過程に対して異分野領域との協働がもたらす影響を定量的・定性的に検証する。

本専攻研究者：岡野真裕（研究代表者）

共同研究者：紅林亘（大阪大学），近藤聡太郎（慶應義塾大学・日本学術振興会），橘亮輔（産業技術総合研究所）

研究課題：合奏の個性を形作る時間的協調ダイナミクスの解明

研究資金：科学研究費助成研究 基盤研究（C）

研究概要：ヒトの動作の同期に関するタイミング調節特性の調査，タイミング調節特性に影響する因子の特定，バーチャルパートナーや Humanizer の開発を通し，合奏における「息が合う」という感覚の正体，つまり名演の背後にある時間的協調ダイナミクスについて検討する。

本専攻研究者：岡野真裕（研究代表者）

共同研究者：三浦哲都（早稲田大学）

研究課題：感覚運動同期研究のアップデート：パフォーマンスに特有な動作や環境の影響の検討

研究資金：科学研究費助成研究 基盤研究（C）

研究概要：演奏家やダンサーのリズム感の基礎研究には、指タッピング課題が多く用いられてきた。しかし近年の研究の進展から、パフォーマンス特有な動作や環境を考慮した研究も必要な可能性が明らかになってきた。動作や環境の違いがパフォーマーの振る舞いにどう影響するかという、研究と現場をつなぐ研究は、まだ手薄なままになっている。本研究では楽器特性や運動器という身体的特性と、リズム刺激のグルーブという外的環境が、リズム同期課題におけるタイミングのずれやそのばらつき、修正反応に与える影響について検討し、基礎研究をパフォーマーのためにカスタマイズする足がかりを得ることを試みる。

本専攻研究者：岡野真裕（研究分担者）

共同研究者：楠本未来（大阪信愛学院大学・研究代表者）、饗庭絵里子（電気通信大学）、津崎実（京都市立芸術大学）

研究課題：声楽教育における個人に適切な呼吸法の究明——腹式呼吸と胸式呼吸

研究資金：科学研究費助成研究 基盤研究（C）

研究概要：歌唱に適した呼吸は腹式呼吸であるとされることが多いが、腹式呼吸が体質に合わないとして、胸式呼吸を用いていると述べる歌手がプロの中にもいる。本研究では腹囲・胸囲の伸縮、姿勢のゆらぎ、声の同時計測を通して、行われている呼吸法の実態や、個々人に適した呼吸法をどのように見極めるか等について検討する。

本専攻研究者：岡野真裕（研究分担者）

共同研究者：工藤和俊（東京大学・研究代表者）、三浦哲都（早稲田大学）

研究課題：インタラクションする身体／情動伝播過程の解明とパフォーマンス設計

研究資金：科学研究費助成研究 学術変革領域研究（A）

研究概要：現代社会において人々が経験する身体や顔に対する違和感、差別、痛みなどの「負の情動」を軽減し、それを昇華するための新たな身体パフォーマンスの設計原理を構築する。アートやスポーツにおける身体情報の伝播を解明し、感情の同期・共鳴・模倣に基づく身体パフォーマンスを設計し、多様性を包摂する実践へと展開する。さらに、アートとサイエンスの融合により、未来社会における顔身体表現の新しいモデルを提示し、多様性と共生を支える文化的基盤の構築に貢献することを目指す。

本専攻研究者：岡野真裕（研究分担者）

共同研究者：紅林亘（大阪大学・研究代表者）

研究課題：認知科学への縮約理論によるアプローチの確立：モデリング、同定、制御

研究資金：科学研究費助成研究 基盤研究（C）

研究概要：アンサンブル演奏やダンスなどのような人間同士のリズム協調がどのように生じるのかという問いに対して、縮約理論と呼ばれる非線形科学の枠組みを適用し、リズム協調メカニズムの数理的モデリングを試みる。

本専攻研究者：岡野真裕（研究代表者）

共同研究者：伊坂忠夫（立命館大学スポーツ健康科学部），赤澤健太郎（立命館大学スポーツ健康科学部），三浦哲都（早稲田大学）

研究課題：ポップダンスにおける「ヒット」動作の運動制御

研究資金：立命館大学学内予算，COI 基盤形成費

研究概要：ポップダンスの基本技術である「ヒット」の運動制御についての理解を深めるため，上半身のヒット動作における筋肉の活動量と活動タイミングのばらつき，およびそれらの熟達差について明らかにする。

本専攻研究者：上田香

共同研究者：藤木庸介（滋賀県立大学），江村耕市（嵯峨美術大学），岩崎陽子（嵯峨美術短期大学），蛭田直（神戸芸術工科大学），金箱淳一（神戸芸術工科大学），榎本雅穂（京都女子大学）

研究課題：五感×デジタルファブリケーションが生み出す伝統繊維産業・西陣織の革新

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（開拓）（代表者：上田香）

研究概要：本研究は，五感に訴える布の価値とデジタルファブリケーションを結びつけ，西陣織に新たな設計・制作・活用の可能性を開くことを目的とする。視覚・触覚・嗅覚などの感覚的経験を重視した布のデザインと，デジタルジャカードやアバター試着等の技術を統合し，伝統技術の継承と革新を両立させる。

本専攻研究者：上田香

共同研究者：瀬川典久（京都産業大学）

研究課題：西陣織技術を活用したあたらしい e-テキスタイルの開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表者：瀬川典久）

研究概要：本研究は，西陣織の精緻な織技術と素材設計を活用し，新たな機能性と表現性を備えた e-テキスタイルの開発を目指す。導電糸やセンサー素材を伝統的な織構造に組み込み，触覚的・視覚的な豊かさと電子機能を両立する布の設計手法を構築する。

本専攻研究者：上田香

共同研究者：橋野知子（神戸大学）

研究課題：伝統染織と先端環境技術を融合した新たな衣装設計モデルの構築と波及効果

研究資金：【公益財団法人 住友財団】環境研究助成（代表者：上田香）

研究概要：本研究は，日本の伝統染織産業に内在する Zero Waste の思想を再評価し，デジタル設計・デジタルプリント・生分解性素材を組み合わせた環境配慮型の新しい布設計と衣服生産のモデルを構築するものである。とくに西陣織を対象に，反物設計や無駄のない裁断・縫製の知を現代の設計支援技術へ接続し，持続可能で高品質なものづくりの可能性を探る。

本専攻研究者：平芳裕子（研究代表者）

共同研究者：本橋弥生（京都芸術大学），井上雅人（武庫川女子大学），蘆田裕史（京都精華大学），

安城寿子（阪南大学）、小形道正（大妻女子大学）、鈴木彩希（四天王寺短期大学）、五十棲亘（京都服飾文化研究財団）

研究課題：ファッションスタディーズの樹立に向けた日本的課題解決のための挑戦的研究

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究

研究概要：日本のファッションスタディーズにおける制度的問題、歴史的問題、ジェンダー的問題への取り組むことによって、分野の発展と若手の育成を目指す。

本専攻研究者：平芳裕子（研究代表者）

共同研究者：本橋弥生（京都芸術大学）、蘆田裕史（京都精華大学）、小形道正（大妻女子大学）、鈴木彩希（四天王寺短期大学）、五十棲亘（京都服飾文化研究財団）

研究課題：ミュージアムにおけるファッション展の日本的展開に関する総合研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（B）

研究概要：日本のミュージアムにおけるファッション展の成立と現代における展開を明らかにする。

本専攻研究者：田畑暁生

共同研究者：なし

研究課題：監視社会論の理論的研究

研究資金：学内資金

研究概要：内外の監視社会論を読み解き、その論点を整理する。

本専攻研究者：田畑暁生

共同研究者：なし

研究課題：生成 AI と表現

研究資金：学内資金

研究概要：生成 AI の活用が、文学や映像の制作にどのような影響を与えるのか、実践的に研究する。

本専攻研究者：大田美佐子（研究代表者）

研究課題：文化資源としてのフェスティバルー 分断のポリティクスの視点から

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 C（代表者：大田美佐子）

研究概要：本研究は、20 世紀以降の音楽文化のグローバルな状況に着目し、研究史料や研究方法を問い直し、芸術家の移動、作品の創造、作品の上演システム、解釈、受容、批評などについて、20 世紀の音楽劇のあり方をその「上演」を中心に、「トランスナショナルな歴史」として、世界史的視座から再構成し、再考することを目的とする。研究対象は、1992 年から現在まで四半世紀を超えて、亡命作曲家クルト・ヴァイルの生誕地である東部ドイツのデッサウで、毎年継続して開催されてきた「クルト・ヴァイル・フェスト」である。申請者は、初期のヴァイル・フェストに参加した経験を踏まえて、企画、意図、変化の推移などを実証的な側面から調査する。2025 年度は、デッサウでの資料調査を行った（2026 年 2 月 26 日-3 月 7 日まで）

(3) 論文

国際共著論文

Kawase, S., Okano, M., Bechtold, M., & Senn, O. (2025). Japanese Version of the Experience of Groove Questionnaire (EGQ-JA): Translation and Validation. *Music Perception*.

Hayashi, Y., Hashimoto, Y., Shimizu, D., & Okada, T. (2025). Somatic Movement/Dance Course for Undergraduates: Learning Process and Outcome. *Journal of Dance Education*, pp.1-14.

Web of Science 収録誌掲載論文 * (10%論文にはマークを付す)

Shimizu, D., & Okada, T. (2025). Coordination dynamics of back-and-forth movement among expert performers: interaction in the battle scene of breaking. *Frontiers in Psychology*, 16, 1441378

Takagi, Y., Shimizu, D., Wakabayashi, M., Ohata, R., & Imamizu, H. (2025). Cross-modal deep generative models reveal the cortical representation of dancing. *Nature Communications*, 16(1), 9937

Okano, M., Kondoh, S., Kurebayashi, W., and Tachibana, R.O. (2025).

Coupled-oscillator-humanizer revealed possible ensemble players' ability to discriminate cross-correlation structures in auditory sequences of paired drum tapping. *Plos One* (20), e0336778

Miura, A., Oba, N., Okano, M., Seki, H., and Sato, N. (2025). Pressure measurement on toes in pointe shoe using pressure-sensitive film. *Journal of Dance Medicine & Science*, OnlineFirst.

Ueda, K. (2026). From Craft to Code and Back: Biodegradable Polyester, Institutional Co-Design, and Garment Practice in Nishijin Weaving. *Arts*, 15(2), 34.

<https://doi.org/10.3390/arts15020034>

査読付き国際学会論文

Nonaka, T. (2025) . Dynamics of exploratory movement: The case of Braille reading. The 12th International Symposium on Adaptive Motion of Animals and Machines and 2nd LokoAssist Symposium, Darmstadt.

Ueda, K., Roth, B. (2026) . Institutional Co-Design for Nishijin Jacquard Weaving: Digital Mediation across a Networked Craft Field. In *Processings of IASDR 2025*, Taipei. pp.1-19

Kizuka, A., Ueda, K., Horikawa, J., & Roth, B. (2025). Reweaving Nishijin: Parametric Design System to Shape the Future of Kyoto Traditional Textiles. In *CHI EA ' 25: Proceedings of the*

Extended Abstracts of the CHI Conference on Human Factors in Computing Systems (Article No. 744, pp. 1-5).

Ueda, K., Roth, B., Devendorf, L., Andersen, K., & Posch, I. (2025). Gathering Textiles at CHI: Convening a Meeting to Share, Make, and Speculate. In CHI EA '25: Proceedings of the Extended Abstracts of the CHI Conference on Human Factors in Computing Systems (Article No. 781, pp. 1-5).

査読付き論文

野中哲士. (2025). 変化に浮かび上がるセルフ生態心理学の基本原則の予備的なリストー. 生態心理学研究, 17(1), 83-91.

平芳裕子 (2025)「現代衣服の源流」を遡るー日本におけるファッション展の成立についてー, 美學, 76(1), 73-84

査読無し論文

田畑暁生「21 世紀の監視社会論」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』Vol. 19, No. 2, 2026.

大田美佐子, 「関西地域のオペラ活動 2024」(『日本のオペラ年鑑 2024』所収 p. 60-65), 一般社団法人 グランドオペラジャパン 2026 年 1 月.

平芳裕子 (2025) 服と反戦の現在地-ウクライナのファッションから, 群像, 80(9), 186-193

招待論文

野中哲士 (2025) 探索行為と情報媒質のデザイン. Design science/The Design Science Foundation 編, 3, 30-35.

岡野真裕・向井香瑛 (2025). 同期研究への誘い: 機能・仕組み・方法・発展的課題. 生態心理学研究.

(4) 著書

編集

Nonaka, T., Segundo-Ortin, M., Romero, V., & Wagman, J. B. (2026). *The Routledge International Handbook of Ecological Psychology*. Routledge.

分担執筆

平芳裕子 (2025)「日常の切れ端」『ベスト・エッセイ 2025』光村図書.

平芳裕子(2025)『和英対照日本視覚文化用語辞典』和英対照日本視覚文化用語辞典編集委員会編，東京美術.

Nonaka, T. (2026). The Reciprocity of the Organism and the Environment. In T. Nonaka, M. Segundo-Ortin, V. Romero, & J. B. Wagman (Eds.) *The Routledge International Handbook of Ecological Psychology*. Routledge.

大田美佐子，「日本型」市民オペラから問われる教育の課題，瀧井一博/ 稲垣恭子編著『文明史のなかの「日本型教育」』pp. 229-245, 法律文化社（3月末刊行予定）

大田美佐子 「クルト・ヴァイルの社会派音楽劇と社会的メディアとしての音楽劇」，佐藤英，大西由紀，岡本佳子，萩原里香，森本頼子編著『オペラ/ 音楽劇研究の最前線：共鳴する人と社会』，pp. 393-420，水声社，2026年1月

大田美佐子「ヴァイマル体制下の音楽」，『音楽史事典』丸善出版，2026年1月

大田美佐子「ビーダーマイヤー」(pp. 250-254)，ヨハン・シュトラウス」(pp. 294-298)，『エリアスタディーズ 220 — ハプスブルクの文化を知るための71章』，明石書店，2025年12月15日

谷正人『音楽史事典』日本音楽学会，丸善出版 2025年12月

担当項目

「ペルシア古典音楽史」322-323

「即興」594-595

「打弦楽器」534-535

翻訳

マーク・クーケルバーク 田畑暁生訳『AIは民主主義の敵か』青土社，2025.

マイケル・ライアン+メリッサ・レノス 田畑暁生訳『FILM ANALYSIS 映像分析入門』フィルムアート社，2025.

平芳裕子・蘆田裕史監訳(2025)ヴァレリー・スティール，『ファッションセオリー：ヴァレリー・スティール著作選集』アダチプレス.

総説・書評など

大田美佐子 「対話を育む歴史研究としての挑戦 — Transnational History」

MSJ Web Plus 日本音楽学会 オンライン・ジャーナル 2025年6月16日

大田美佐子 「【音楽・評】 社会問題告発 苦い余韻残す ― ミラノ・スカラ座 クルト・ヴァイル「七つの大罪」など」 朝日新聞 2025 年 6 月 19 日

大田美佐子 演奏会評 「見よ東海の空明けて ― 敗戦 80 年に問う戦時期の音」 オンライン批評誌 *Mercures des Arts* 120, 2025 年 9 月 15 日

大田美佐子 演奏会評 「発酵する古楽 ― 紫田俊幸&アンソニー・ロマニウク ライブ」 *Mercures des Arts* 120, 2025 年 9 月 15 日

大田美佐子 公演評 「音楽劇 《三文オペラ 歌舞伎町の絞首台》」 *Mercures des Arts* 124, 2026 年 1 月 15 日

関典子「生き物たちの交感：劇場という交差点」（アklam・カーン『ジャングル・ブック』公演評），『愛知芸術文化センター情報誌 AAC vol.125』「鑑賞 note」，2025 年 9 月．

深澤南土実・関典子「バレエ・デ・シャンゼリゼ：知られざる伝説のバレエ団」，兵庫県立芸術文化センター，「薄井憲二バレエ・コレクション」第 35 回企画展リーフレット，2025 年 9 月．

関典子「『ジゼル』初演 185 周年：薄井憲二の著述を道標に」，兵庫県立芸術文化センター，「薄井憲二バレエ・コレクション」第 36 回企画展リーフレット，2026 年 1 月．

関典子「スターたちのバレエシューズ (2) ロシア編」，兵庫県立芸術文化センター「薄井憲二バレエ・コレクション」第 102 回常設展リーフレット，2025 年 5 月．

関典子「『シェエラザード』：沖澤のどか指揮 京都市交響楽団『シェエラザード』によせて」，兵庫県立芸術文化センター「薄井憲二バレエ・コレクション」第 103 回常設展リーフレット，2025 年 9 月．

関典子「〈馬〉と〈バレエ〉：2026 年〈午年〉によせて」，兵庫県立芸術文化センター「薄井憲二バレエ・コレクション」第 104 回常設展リーフレット，2025 年 11 月．

関典子「セルゲイ・プロコフィエフ生誕 135 周年 (1) バレエ・リュス作品『道化師』」，兵庫県立芸術文化センター「薄井憲二バレエ・コレクション」第 105 回常設展リーフレット，2026 年 3 月．

平芳裕子，激動のおしゃれ変遷『モード誌と戦争』産経新聞書評

平芳裕子，ゼレンスキー大統領はなぜスーツを着なかったのか，新潮社フォーサイト 2025 年 6 月 28 日

平芳裕子,「流行の裏の女性たち」「美の十選」日経新聞 2025 年 7 月(1-10 回連載)

平芳裕子,「教養としてのファッション～衣服と私たち～」『月刊保団連』2025 年 9 月～2026 年 1 月連載.

平芳裕子,「お札から見る日本の衣服」『青淵』2025 年 11 月, 32-34.

平芳裕子,『装いの翼』書評, 共同通信, 沖縄新聞他 2025 年 11 月

(5) 演奏会, 展覧会, シンポジウムなど

シンポジウム

登壇者: 岸本吉弘, 前田正明 (画家)

テーマ: 「作品の特質、あり方、なぜストライプなのか、抽象についての問い。」

開催場所: ギャラリー尾形 (福岡)

開催日: 5 月 18 日

概要: 絵画における垂直ストライプ表現を巡り, 批評的, 創作論的な立場よりトークイベントを開催した。尚, 同企画は同ギャラリーで開催された個展「垂直思考」展の付帯企画である。

野中哲士 Erik Rietveld 講演会 “Poetry of Absence: RAAAF, Art and Resilience in Turbulent Times” (2025 年 9 月 23 日開催)

開催場所: 神戸大学百年記念館六甲ホール

開催日: 2025 年 9 月 23 日 (月)

企画: 野中哲士 (神戸大学)

招待講演者: Erik Rietveld (University of Amsterdam)

清水大地 Adaptive behavior and its ecological foundations 2026 場所と挙動: 物理系から社会まで

開催場所: 神戸大学百年記念館六甲ホール

開催日: 2026 年 2 月 2 日 (月)

企画: 野中哲士・小谷野由紀・青沼仁志 (神戸大学)

招待講演者: 松尾 宗征(広島大学), 安井 浩太郎(東北大学), 岩内 章太郎(豊橋技術科学大学), 大須賀 公一(大阪工業大学), 佐倉 緑(神戸大学), 新川 拓哉(神戸大学)

清水大地 第 46 回身体知研究会 (2025 年 7 月 12 日開催) 「アーティスティックスポーツにおける評価とは?」

開催場所: 神戸大学人間発達環境学研究科

開催日: 2025 年 7 月 12 日 (土)

参加者数: 60 名超

企画：清水大地（神戸大学）

招待講演者：廣澤 聖士（桐蔭横浜大学）・町田 樹（国学院大学）

清水大地 日本認知科学会第 42 回大会オーガナイズドセッション 2-5「アイデア生成を取り巻く文脈を再考する―「いいこと思いついた」を手がかりとして―」

開催場所：早稲田大学早稲田キャンパス

開催日：2025 年 9 月 13 日（土）

参加者数：80 名超

企画：山川真由（慶應義塾大学）・清水大地（神戸大学）・石黒千晶（東京大学）

招待講演者：矢野 勇樹（フリーランス）・西川一二（大阪商業大学）・阿部慶賀（和光大学）

清水大地 芸術と情動研究分化学会「身体・インタラクション・想像の間にいるニンゲン達：人形・ロボット・ヒト」

開催場所：東京大学本郷キャンパス

開催日：2025 年 9 月 22 日（月）

参加者数：40 名超

企画：清水大地（神戸大学）

招待講演者：高橋 英之（追手門学院大学）・菊地 浩平（早稲田大学）

清水大地 第 5 回日本ダンス研究会

開催場所：東京大学本郷キャンパス

開催日：2025 年 10 月 12 日（日）

参加者数：70 名超

企画：清水大地（神戸大学）・土田修平（お茶の水女子大学）・宮田紘平（東京大学）・河野由（大東文化大学）・中村まい（新潟産業大学）

概要：スポーツ科学・生理学・認知科学・心理学・工学・文化人類学など、多様な分野においてダンスの研究を行っている研究者が集まり、研究発表・議論を行った。学会では、招待講演・口頭発表・ポスター発表・全体シンポジウムを実施した。

ホームページ：<https://jsds.info/2025/04/11/jsds-5/>

清水大地 学術 Weeks「クラシック音楽への親しみと協働的創造を促す「鑑賞＋音楽づくり」ワークショップ」

開催場所：神戸大学大学院人間発達環境学研究科

開催日：2025 年 10 月 8 日（水）

参加者数：10 名超

企画：清水大地（神戸大学）・早瀬美海（神戸大学）

清水大地 学術 Weeks「+Contact：言葉を使わないコミュニケーションの可能性」

開催場所：神戸大学大学院人間発達環境学研究科

開催日：2025 年 11 月 21 日（金）

参加者数：10 名超

企画：清水大地（神戸大学）・松岡（初田）響子・（神戸大学）

平芳裕子「ヴァレリー・スティー爾博士講演会『FIT ミュージアムのファッション展』」, 2025 年 6 月 7 日（企画・司会・コーディネータ）

ヴァレリー・スティー爾博士講演会「ファッションスタディーズ：その歴史と挑戦」.
2025 年 6 月 4 日（企画・司会・コーディネータ）

平芳裕子「『ファッションセオリー：ヴァレリー・スティー爾著作選集』を読む-身体・欲望・フェティシズム」, 2025 年 12 月 20 日（司会）

平芳裕子「『ファッションセオリー：ヴァレリー・スティー爾著作選集』書評会」2026 年 1 月 10 日
（企画・司会・コーディネータ）

本専攻研究者：上田香

登壇者：田茂井勇人（田勇機業株式会社・代表取締役）、村瀬裕（株式会社スズサン・4 代目会長・
絞り下絵職人）モデレーター：上田香

テーマ：伝統的テキスタイルの新展開

開催場所：滋賀県立大学

開催日：11 月 5 日

概要：伝統的テキスタイルの技術と美しさを継承しながら、洋装・インテリア・海外市場など新たな
領域へ展開する実践を、丹後ちりめんと有松絞りの事例から考える。「伝統は守るものではなく、攻
めるものである」という視点のもと、産地の技術継承と革新、そして伝統産業の未来を多角的に議論
した。

学会（展示・ワークショップ）

本専攻研究者：上田香

Workshop (CHI2025 YOKOHAMA) : Gathering Textiles at CHI: Convening a Meeting to Share, Make,
and Speculate.

企画者：上田香 ,Bine Roth (Royal Collage of Art) ,Laura Devendorf(University of Colorado
Bolder) ,Kristina Andersen (Eindhoven University of Technology) , Irene Posch (University of
Arts Linz)

開催場所：パシフィコ横浜

開催日：2025 年 4 月 26 日

来訪数：約 30 名

概要:テキスタイルというテーマで学際的なグループを生み出すことを目的とした1日ワークショップを企画し、開催した。

本専攻研究者：上田香

Interactivity (CHI2025 YOKOHAMA) : Reweaving Nishijin: Parametric Design System to Shape the Future of Kyoto Traditional Textiles.

展示者：木塚あゆみ（大阪芸術大学）、上田香、堀川順一郎（京都工芸繊維大学）、Bine Roth（Royal College of Art）

開催場所：パシフィコ横浜

開催日：2025年4月29日～5月2日

来訪数：約200名

概要：CHIのインターラクティビティーで、西陣織によるe-textileの展示を行った。

学会（その他発表）

Nonaka, T. (2025). Dynamics of exploratory movement: The case of Braille reading. The 12th International Symposium on Adaptive Motion of Animals and Machines and 2nd LokoAssist Symposium, Darmstadt.

Rina Nishiyama and Tetsushi Nonaka. “Can a human sing with an artificial partner?: Coordination dynamics when singing with an unseen human or artificial partner”. 2025年7月23日. 18th International Conference on Music Perception and Cognition

岩村翔馬・永野光・野中哲士. 「身体性触知覚の構成論的理解：ロボットの関節自由度が素材識別に及ぼす影響」, 2025年12月12日, 第26回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会

村上瞳・鎌田紗弓・野中哲士, 「雅楽の稽古における唱歌使用の観察的検討」2025年9月12日, 日本認知科学会第42回大会

西山理奈・野中哲士, 「人は歌声合成ソフトと歌えるか：歌唱時における音声の協調ダイナミクスの検討」2025年9月14日, 日本認知科学会第42回大会

青井郁美・野中哲士, 「物の接触場面において乳児はいつ大人を見るのか？」2026年3月3日, 日本発達心理学会第37回大会

朝比奈茉穂・野中哲士, 「保育園での歌遊び場面における移動獲得後の乳幼児の行動」2026年3月5日, 日本発達心理学会第37回大会

佐野翔・岡野真裕. 「音楽ビートと身体動作の同期：どこまでのずれが「同期」と見なされるか？」, 2026 年 3 月 1 日, 第 16 回日本ダンス医科学会学術集会

橋澤慧・岡野真裕. 「続・合奏で低音が遅れる？：高さの違う 2 音における演奏家の同時性判断特性の検討」, 2026 年 2 月 2 日, Adaptive behavior and its ecological foundations 2026 場所と挙動：物理系から社会まで

藤野真由・岡野真裕. 「打楽器演奏における脱力の評価方法の検討—スティックの軌跡に着目して—」, 2025 年 11 月 15 日, 日本音楽知覚認知学会 2025 年度秋季研究発表会

稲垣七海・岡野真裕. 「注意焦点の違いが金管楽器の演奏動作に与える影響の予備的検討」, 2025 年 11 月 15 日, 日本音楽知覚認知学会 2025 年度秋季研究発表会

Nanami Inagaki and Masahiro Okano. “Effects of performance anxiety on brass players’ attention and body movements”. 2025 年 7 月 23 日. 18th International Conference on Music Perception and Cognition

Kei Hashizawa and Masahiro Okano. “Simultaneity judgment for two tones with different pitches: the effects of musical training and the primary instrument”. 2025 年 7 月 23 日. 18th International Conference on Music Perception and Cognition

Masahiro Okano and Akito Miura. “The effects of syncopation and groove on knee flexion-extension movements in sync with auditory rhythm”. 2025 年 7 月 23 日. 18th International Conference on Music Perception and Cognition

招待講演・口頭発表

野中哲士「環境にうまれるかたち—ふるまい・モノ・情報」, 『第 3 回 Design Science アカデミー』, 2025 年 11 月 29 日, 招待講演, THE DESIGN SCIENCE FOUNDATION

清水大地「競争的・相補的ダンスに見る演者—観客間協調システム」, 『東京大学大学院総合文化研究科 研究セミナー』, 2025 年 5 月 26 日, 招待講演

清水大地「ブレイキンの評価の現在位置：独創性とライブ性を踏まえた展望」, 『第 46 回身体知研究会「アーティスティックスポーツにおける評価とは？」』, 2025 年 7 月 12 日, 企画講演

清水大地「芸術パフォーマンス・鑑賞における探索と共鳴：ブレイキンのバトルと大地の芸術祭」, 『芸術と情動研究分科会：身体・インタラクション・想像の間にいるニンゲン達：人形・ロボット・ヒト』, 2025 年 9 月 22 日, 企画講演

清水大地「芸術パフォーマンス・鑑賞における探索と共鳴：ブレイキンのバトルと大地の芸術祭」,
『情報処理学会第 88 回大会講演・パネルディスカッション：ダンス情報処理の未来』, 2026 年 3 月 6
日, 招待講演・パネルディスカッション

Daichi Shimizu, Takeshi Okada, & Yu Sato. “Physiological Synchrony and Shifts in Cognition
and Emotion
during Shared Art Experiences at an Art Festival”, 2026 Conference on Society for the
Psychology of Aesthetics, Creativity, & the Arts, 3. 13. 2026, 口頭発表

岡野真裕. 「ヒトはなぜ音楽するのか：音楽やダンスの機能をめぐる心理学」. 一般社団法人日本繊維機械学会・繊維リサイクル技術研究会第 160 回情報交換会. 2026 年 3 月 21 日. (招待講演)

岡野真裕. 「うまくいく」だけが正解か？ 熟達化の非線形科学. 第 75 回日本体育・スポーツ・健康学会. 2025 年 8 月 28 日. (本部企画シンポジウム「身体性の価値を再考する－冗長性や不可視性を手がかりに－」における話題提供およびパネルディスカッション)

岡野真裕・西口綾乃. 「合奏においてリズムに共通認識を持つことの効果」. 日本音楽知覚認知学会 2025 年度春季研究発表会. 2025 年 6 月 15 日 (口頭発表)

一井冨月・岡野真裕. 「ピアニストの身体動作が聴取者の知覚する感情に及ぼす影響」. 日本音楽知覚認知学会 2025 年度春季研究発表会. 2025 年 6 月 14 日 (口頭発表) 平芳裕子「教養としてのファッション論」岐阜大学第 17 回教養講演会, 2025 年 10 月 22 日

平芳裕子「教養としてのファッション」桐光学園, 2025 年 10 月 14 日

発表者：上田香(本専攻)

題目：「Institutional Co-Design for Nishijin Jacquard Weaving: Digital Mediation across a Networked Craft Field.」 (実施言語は英語)

発表日：2025 年 12 月 3 日

発表学会：IASDR 2025 (International Association of Societies of Design Research)

会場：松山文創園区 (台北)

発表者：上田香(本専攻)

題目：「テキスタイルとウェアラブル」

発表日：2025 年 12 月 20 日

発表学会：UWW 2025 (UBIQUITOUS WEARABLE WORKSHOP)

会場：神戸大学百年記念館 六甲ホール

Misako OHTA, *Civic Opera as Cultural Resilience: Rethinking Music Education through Japanese Community Based Phenomenon*, ASTR Working Session “What does Musical Theatre Generate?” November, 7th, 2025. American Society for Theatre Research, Denver.

大田美佐子「演劇の音楽性」日本演劇学会 分科会 西洋比較演劇研究会 第 244 回 演劇理論カフェ 2, 2026 年 1 月 10 日, 成城大学.

関典子(招待講演), 「踊るキュレーターによるバレエ・リュス作品の再創造: 〈黒い箱〉の象徴性と機能をめぐって」, 第 5 回日本ダンス研究会, 2025 年 10 月 12 日, 神戸大学

松岡貞行・松岡(初田)響子(進行・ファシリテーター), 関典子・清水大地(指定討論者), 清水大地・松岡(初田)響子(企画), 「+Contact: 言葉を使わないコミュニケーションの可能性」, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科「学術 Weeks2025」, 2025 年 11 月 21 日, 神戸大学

2026. 3. 20

谷正人「イラン音楽の楽しみかた ～《巡る》旋律の秘密と微分音の世界～」

日本イラン文化交流協会主催 ノウルーズ特別講演会「ペルシアの春、イラン音楽の楽しみ」

会場: 東京外国語大学 本郷サテライト 4F

2025. 10. 11

Masato Tani “Charkh in Iranian music” in Panel session: “Use and function of forms and content in Iranian Dastgāhi musical performance”

The Annual Conference of Analytical Approaches to World Music: Special Topics Symposium, Cornell University, Ithaca, NY, USA

展覧会・演奏会・公演

関典子(企画・監修), 斎藤慶子(企画・協力)「薄井憲二バレエ・コレクション」第 35 回企画展「バレエ・デ・シャンゼリゼ: 知られざる伝説のバレエ団」, 2025 年 9 月 17 日～10 月 13 日, 兵庫県立芸術文化センター

関典子(企画・監修), 「薄井憲二バレエ・コレクション」第 36 回企画展「『ジゼル』初演 185 周年: 薄井憲二の著述を道標に」, 2026 年 1 月 27 日～3 月 8 日, 兵庫県立芸術文化センター

関典子(企画・構成), 「薄井憲二バレエ・コレクション」第 102 回常設展「スターたちのバレエシューズ (2) ロシア編」, 2025 年 5 月 21 日～8 月 24 日, 兵庫県立芸術文化センター

関典子(企画・構成), 「薄井憲二バレエ・コレクション」第 103 回常設展「『シェヘラザード』: 沖澤のどか指揮 京都市交響楽団『シェヘラザード』によせて」, 2025 年 9 月 2 日～11 月 11 日, 兵庫県立

芸術文化センター

関典子（企画・構成），「薄井憲二バレエ・コレクション」第104回常設展「〈馬〉と〈バレエ〉：2026年〈午年〉によせて」，2025年11月12日～2026年2月23日，兵庫県立芸術文化センター

関典子（企画・構成），「薄井憲二バレエ・コレクション」第105回常設展「セルゲイ・プロコフィエフ生誕135周年（1）バレエ・リュス作品『道化師』」，2026年3月1日～5月27日，兵庫県立芸術文化センター

関典子（舞），高島史於（写真），岡正子（衣裳），『舞い散るものの平和』，第19回日本舞台写真家協会展「瞬～MOMENT～」，OM SYSTEM GALLERY（東京）2025年8月21日～9月1日／富士フィルムフォトサロン（大阪）2025年10月10日～10月16日／富士フィルムフォトサロン（名古屋）2025年10月31日～11月6日

関典子（企画・監修），古田弘珠・矢嶋紅（美術），鷺尾華子（衣裳），特別展示『ペトルーシュカとロベルト・モンテネグロ』，神戸大学第19回ホームカミングデー，2025年10月25日，神戸大学

出品者：岸本吉弘

共同出品者：なし

展覧会タイトル：岸本吉弘 個展「垂直思考」

展覧会場所：ギャラリー尾形（福岡）

展覧会期間：2025年5月16日～5月29日

資金：ギャラリー尾形企画

概要：大作である「スペクトラム」を中心とし，計22点の新作油彩画などを展示した。期間中にトークイベントも併催した。

出品者：岸本吉弘

共同出品者：秋山陽（陶芸家），上田泰江（画家），木戸修（彫刻家・東京藝術大学名誉教授），草間喆雄（美術家・岡山県立大学名誉教授），小島徳朗（画家・京都市立芸術大学名誉教授），児玉靖枝（画家），重松あゆみ（陶芸家・京都市立芸術大学名誉教授），西野庫造（彫刻家）

展覧会タイトル：Unknown World—見慣れた光景とその向こう側

展覧会場所：高島屋美術画廊（4都市巡回展）

展覧会期間：京都展 2025年10月15日～10月20日，東京展 11月5日～11月10日，大阪展 11月19日～11月24日，横浜展 12月17日～12月22日

資金：高島屋（京都）企画

概要：9名のベテランの抽象美術家たちによる大作を軸とする絵画と彫刻によるグループ展，岸本は大作油彩画2点，小品とドローイング7点を出品した。

出品者：岸本吉弘

共同出品者：15名の美術家

展覧会タイトル：「年末展」

展覧会場所：数寄和（東京）

展覧会期間：2025年12月10日～12月22日

資金：数寄和企画

概要：ギャラリー恒例の年末展示であり、岸本は小品2点を出品した。

本専攻研究者：上田香

共同出品者：上田香，江村耕市，岩崎陽子，金箱淳一，蛭田直，藤木庸介

展覧会タイトル：FUTURE STYLE・Woven Senses

展覧会場所：嵯峨美術大学・嵯峨美術大学短期大学附属ギャラリー アートスペース嵯峨

展覧会期間：2026年2月12日～2月15日

資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（開拓）（代表者：上田香）

概要：西陣織×「五感」をテーマとした科研費研究の研究成果を発表した展示。西陣織を「視覚中心の工芸」から「五感で立ち上がるメディア」へと読み替え、様々な試み・実験を行った。

本専攻研究者：上田香

ファッションショー「Oh!NeoNeo」神戸大学大学院学生・嵯峨美術大学学生・上田香・江村耕市

西陣織会館：11月15日（土） 13時～15時

ファッションショーの企画，作品制作

（7）表現系講座の研究の総括と課題

人間発達研究において表現にかかわる専門分野を相互にいかに関連させるかは、当系講座の長年にわたる課題となってきた。教育においてはその相乗作用に一定の成果をあげているが、研究においてはそれぞれの専門性の深まりにともなって、そこに一律に適用できる評価指標を見出すことは難しい。当系講座の教員は各専門分野で顕著な研究活動を展開し、すでに高い評価を得ている。今後も、学術・文化全体の本質でもある多様性は担保しながら、「表現」を核にした学術研究分野としての組織的フィッティングの模索が課題となるだろう。

●行動系

（1）国際共同研究

研究代表者：石原 暢

共同研究者：Eric S. Drollette (University of North Carolina at Greensboro), Sebastian Ludyga (University of Basel), Charles H. Hillman (Northeastern University), Keita Kamiyo (Chukyo University)

研究課題：一過性運動が認知機能に与える影響

研究概要：認知機能に対する一過性運動の効果およびその調整因子について、IPD メタ分析を用いて検討する。

研究代表者：石原 暢

共同研究者：Nóra Bunford (HUN-REN Research Centre for Natural Sciences), Sebastian Ludyga (University of Basel)

研究課題：発達障害を有する子どものライフスタイルと認知機能の関係およびその脳機構

研究概要：神経発達障害児を対象に、運動、睡眠、栄養などのライフスタイルと、磁気共鳴画像法 (MRI) により計測した脳の解剖学的特徴（大脳皮質厚、髄鞘密度など）との関係を検討する。

研究代表者：佐藤 幸治

共同研究者：Prof. Gary Wittert (The University of Adelaide, Aus)

研究課題：中高齢女性特有の疾患における新たな予防策の開発

研究資金：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究概要：肥満や糖尿病、高血圧のメタボリックシンドローム、骨粗鬆症等、特有の疾患が中高齢女性において、増加しており、新たな指標の炎症性サイトカインに着目し予防法を栄養及び運動の観点から明らかにする。

研究代表者：長ヶ原 誠

研究課題：ワールドマスタースゲームズ開催のホスト活性化効果とレガシー創出に関わるモニタリング指標の開発

共同研究者：Sergey Bubka, Kate Caithness, Manuela Di Centa, David Eades, Ugur Erderner, Sari Essayah, Tom Hollowell, Jens Holm, Poul-Erik Høyer, Alexander McLin, Ser Miang Ng, Petra Sorling (International Masters Games Association)

研究資金：International Masters Games Association R&D

研究概要：国際マスタースゲームズ協会管轄大会を対象とし、大会がホスト地域に及ぼす活性化効果と持続的影響を可視化するための調査指標とモニタリングシステムを開発する。

研究代表者：原田 和弘

共同研究者：Dr. Robert Walker (University of Bristol, UK)

研究課題：Determinants of exercise behavior among older adults

研究資金：日本学術振興会サマープログラム

研究概要：高齢者の運動行動は、どのような要因によって規定されるのかについて研究を進めている。

（2）国内共同研究など

1) 科研費による研究（代表者）

研究代表者：打田 篤彦

研究課題：地域共同体における社会関係資本と物理環境の相互作用のモデル化

研究資金：科学研究費補助金・若手研究

研究概要：機械学習モデルで大量の景観の画像から物理環境の要素を定量化し、行政機関に蓄積されたオープンデータや意識調査と比較検討することで、市街地での人々の社会関係資本と物理環境の相互作用を動態として把握することを試みる。

研究代表者：片桐 恵子

共同研究者：平山洋介，安里知陽，増本康平，伊藤真之，稲原美苗，中村匡秀，原田和弘，木村哲也，佐藤幸治，石原暢，木伏紅緒，竹内真純，福沢愛，Kim Nahyun

研究課題：研究開発プロジェクト「都市集合住宅高齢者の社会的孤立を予防する持続可能なコミュニティ構築」

研究資金：JST RISTEX「SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築）」

研究概要：現在の日本では高齢者夫婦のみや高齢単身世帯が6割を超える。海外と比べて別居子との交流が少ない上に、友人を頼らない傾向があり、孤立リスクが高い。特に退職後の男性は地域社会での知り合いに乏しく、地域デビューは難しく孤立するケースが多い。近年は賃貸住宅に居住する高齢者が増加傾向にあるが、特に賃貸住宅は住民の入れ替わりが激しく、孤立や孤独死のリスクが高い。このように都市の賃貸住宅に住む高齢者は孤立に陥りやすいリスクにさらされている。よって本プロジェクトの目標は、都市の賃貸住宅居住高齢者の豊かな交流を実現し、人生100年時代に備えたレジリエンス・レジリエンスを発達させることである。その実現に向け、身体・認知・心理面を縦断的に測定し、同時にIoTを活用したセンサーとバーチャル・エージェントとの会話による毎日の健康チェックを併用し、多指標マルチモーダルに健康と孤立・孤独との関連を明らかにする。さらに、孤立・孤独を生まない社会の実現のため、リアルとバーチャルが融合するコミュニティの創出、楽しい体験型イベントへの参加から地域のリーダーを育成する仕組みづくり、大学リソースを活用した生涯教育（サードエイジ・ユニバーシティ）の実施、高齢者が自発的に情報を提供する仕組みを作り孤立を予想するモデルを考案、情報共有の有効性の科学的エビデンスの提供を行う。

研究代表者：木伏紅緒

研究課題：心拍・運動リズム間位相同期が歩行安定性に及ぼす効果の解明と応用方法の検討

研究資金：科学研究費補助金・若手研究

研究概要：歩行動作では、運動リズムと心拍リズムが整数比となる、心拍・運動リズム間位相同期が生じる。位相同期は生理学的利点があると報告されているものの、運動学的な意義は不明である。そこで本研究課題では、心拍・運動リズム間位相同期の歩行安定化に対する効果と位相同期の応用方法を特定する。

研究代表者：木村哲也

共同研究者：木伏紅緒・佐藤幸治・塩澤成弘

研究課題：循環・呼吸両調節システムとの協働則を踏まえた純粋なバランス調節機能評価指標の確立

研究資金：基盤研究（B）

研究概要：静止立位時に循環調節システムに貢献する姿勢ゆらぎ成分について、その制御則とバランス評価指標に与える影響を明らかにする。

研究代表者：佐藤幸治

共同研究者：石原暢

研究課題：中高齢者のトゲドコロイモ摂取における機能性とその効能の解明

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）

研究概要：加齢に伴い、血中の性ホルモン濃度が低下し、また、メタボリックシンドロームの罹患率が増加しており、運動やトゲドコロイモの摂取は性ホルモン濃度を増加させることが明らかとなっており、中高齢者を対象にメタボリックシンドローム指標や認知機能への影響を検討する。

研究代表者：増本 康平

共同研究者：谷口隆晴・佐藤幸治・原田和弘

研究課題：感情調整と信頼の加齢変化と社会的つながりに関する縦断研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）

研究概要：高齢期の感情調整機能が社会的つながりに及ぼす影響を縦断データを用いて検討する。また、高齢期の感情調整が社会的つながりの基盤である「他者への信頼」に及ぼす影響を生理的要因、心理的要因をふまえた上で心理実験により明らかにする。

研究代表者：秋元忍

研究課題：19世紀前期のイギリスにおけるホッケーの展開に関する研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）

研究概要：19世紀前期のイギリスにおけるホッケーの展開について、以下の3点から解明する。1) 少年遊戯書に記述されたホッケーの検討、2) 事故、裁判関係記事に見られるホッケーの検討、3) スポーツ用具業者によるホッケー関連用具供給に関する検討。

2) 科研費による研究（分担者）

研究代表者：石黒 千晶

共同研究者：石原 暢

研究課題：学校・家庭教育環境が子どもの創造性発達に与える影響の横断・縦断研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）

研究概要：子どもの創造性が学校や家庭環境の中でどのように発達するかを明らかにする。

研究代表者：山本 敬三

共同研究者：坪倉 誠、松澤 衛、石原 暢

研究課題：スキージャンプのテイクオフ動作における運動学的・空気力学的成功要因の解明

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）

研究概要：スキージャンプ競技において最も重要とされるテイクオフ動作に焦点を当て、その成功要

因を調べる。

研究代表者：林 拓也

共同研究者：石原暢，高岸治人，村山美穂，横山ちひろ，BAI Wenjun

研究課題：脳コネクトーム・遺伝子・個体差の種間比較からみた脳加齢機構

研究資金：日本医療研究開発機構 脳神経科学統合プログラム（個別重点研究課題）（令和6年度採択）

研究概要：先進的な脳コネクトーム MRI 技術を用い，脳の加齢現象を調べ，認知機能，遺伝子，脳の結合性の関係を検証する。ヒトと実験動物として最もヒトに近い霊長類の両方でこれらのパターンを研究することで，脳の加齢メカニズムの解明と，加齢性疾患や発達障害の診断・予防に役立つ脳年齢バイオマーカーの開発を目指す。

研究代表者：権藤 恭之

共同研究者：増井 幸恵，石松 一真，石岡 良子，西田 裕紀子，神出 計，片桐 恵子，石崎 達郎

研究課題：加齢に対する信念の構造と加齢プロセスに与える影響の検証（2022-04-01 - 2027-03-31）

研究資金：基盤研究(A)

研究概要：「加齢に対する信念」は，本研究を申請するにあたって新たに提案した概念である。信念は内在化された心的表象であり，価値観を形成する最小単位であり，行動の経験と表出に影響するとされる。本研究では「加齢に対する信念」は，サクセスルエイジングの達成／不達成を目標とした価値観を構成する要因と定義する。そしてその構成概念を明らかにするとともに，信念の形成に寄与する要因を明らかにすることを目的とする。

研究代表者：北村 智

共同研究者：木村 忠正，片桐 恵子

研究課題：モバイルネット時代における日本人の情報行動の世代間・世代内比較の実証的研究

研究資金：基盤研究(A)

研究概要：本研究の目的は，本研究は「日本人の情報行動」調査プロジェクトの一環として，全国調査を2025年に実施する。本調査では，21世紀初頭からの日本人の情報行動の変遷や加齢効果・時代効果・コホート効果の分析を行い，日本人の行動情報の変化を全国調査により明らかにすることである。

研究代表者：増本 康平

共同研究者：谷口 隆晴，佐藤 幸治，原田 和弘

研究課題：感情調整と信頼の加齢変化と社会的つながりに関する縦断研究

研究資金：日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究代表者：古谷 真樹

共同研究者：近藤 徳彦，福田 博也，佐藤 幸治

研究課題：心理的ストレスによる不眠予測およびセルフモニタリングツールの開発とその効果検証

研究資金：基盤研究(C)

研究代表者：片桐 恵子

共同研究者：中村 匡秀，増本 康平，原田 和弘，平山 洋介，伊藤 真之，稲原 美苗，木村 哲也，佐藤 幸治，石原 暢，木伏 紅緒，竹内 真純，福沢 愛

研究課題：都市集合住宅高齢者の社会的孤立を予防する持続可能なコミュニティ構築

研究資金：JST 戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム（RISTEX）

研究代表者：内山 愉太

共同研究者：喜屋武 享，高倉 実，佐藤 真行，丑丸 敦史，原田 和弘，香坂 玲

研究課題：日常生活全般における生態系サービス受給の格差と効果：都市地域環境と健康の改善手法

研究資金：日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：生態系サービス受給の格差が健康行動やウェルビーイングに及ぼす影響について研究を進めている。

研究代表者：澤田 享（早稲田大学）

共同研究者：井上 茂（東京医科大学），岡 浩一朗（早稲田大学），小熊 祐子（慶応義塾大学），小野 玲（国立健康・栄養研究所），原田 和弘，宮地 元彦（早稲田大学）

研究課題：健康づくりのための身体活動・運動の実践に影響を及ぼす原因の解明と科学的根拠に基づく対策の推進のためのエビデンス創出

研究資金：厚生労働科学研究費・循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業

研究概要：身体活動推進政策を効果的に推進するための新たなエビデンスを創出し，国民の身体活動量を増加させることを目的とした研究を進めている。

研究代表者：石井 好二郎（同志社大学）

共同研究者：大石 寛（佐賀大学），中谷 友樹（東北大学），原田 和弘，辻 大士（筑波大学）

研究課題：地理情報システムによる児童・生徒の体力・運動能力，運動習慣等の学校間格差の検討

研究資金：日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(A)

研究概要：体力や運動習慣，生活習慣等の地域格差を，地理情報システムを用いて明らかにすることを目的とした研究を進めている。

研究代表者：原田悦子

研究分担者：増本康平・榊美知子・須藤智・松室美紀

研究課題：高齢者の新奇事項/事象の学習：感情・動機づけ，時間的展望，熟知度との関係

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（A）

研究概要：新奇事項事象の学習の加齢に伴う変化とその支援可能性を，学習を支える感情基盤・動機づけ，時間的展望の変化，学習内容に対する熟知性が学習過程にもたらす機序等を中心に明らかにし，

認知モデルとして提案する。

研究代表者：稲垣成哲

研究分担者：増本康平・楠房子・小川義和・寺田努・江草遼平・石田弘明・岩崎誠司・鳥居深雪

研究課題：科学系博物館におけるニューロダイバシティの実現：展示手法と実践モデルの提案

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（A）

研究概要：本研究の目的は、ニューロダイバシティ（ND）の立場から科学系博物館における発達障害（ASD, LD, ADHD 等）のある来館者向けの展示学習保障ガイドラインの体系化とその展示手法の開発、さらには具体例としての実践モデルを提案することである。

研究代表者：野中哲士

共同研究者：清水 大地・木伏 紅緒・永野 光

研究課題：身体の摂動ダイナミクスを情報資源として用いる身体一環境系の知覚行為制御

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究(開拓)

研究概要：従来の理論枠組みでは捉えにくかった道具使用などの複雑な身体一環境相互作用において、接触や動きを反映する摂動ダイナミクスがどのような情報をもたらすかを再検討し、リハビリや義肢制御に応用可能な新たな知見と柔軟な制御理論の構築を目指す。

研究代表者：木村哲也

共同研究者：木伏紅緒・佐藤幸治・塩澤成弘

研究課題：循環・呼吸両調節システムとの協働則を踏まえた純粋なバランス調節機能評価指標の確立

研究資金：基盤研究（B）

研究概要：立位時の姿勢ゆらぎが立位バランス、循環、呼吸といった複数の調節システムの協働によって制御されるメカニズムを解明し、その影響を排除した新たな定量指標を提案することで、評価方法の見直しとシステム間協働の理解を目指す。

研究代表者：松本珠希

共同研究者：木村哲也・佐藤幸治

研究課題：月経周期に伴う心身不調と睡眠習慣との関連：精神神経内分泌免疫動態からの探索

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）

研究概要：女性における月経周期による心身の不調と睡眠習慣との関連を、内分泌ホルモンや免疫応答の側面からも解析し、関連性を明らかにする。

3) 地方公共団体・神戸大学など

研究代表者：石原 暢

共同研究者：高岸治人、松田哲也

研究課題：子どものライフスタイルと向社会性の関係

研究資金：文部科学省共同利用・共同研究拠点 玉川大学脳科学研究所「社会神経科学研究拠点」

研究概要：子どものライフスタイルと向社会性の縦断的關係を調べる。

研究代表者：打田 篤彦

研究課題：都市空間における個人・社会環境・物理環境の相互作用の検討

研究資金：高等学術研究院テニュアトラック教員（A 制度）

研究概要：社会生態学的アプローチを援用し，都市空間において個人の well-being に資する人と環
多層的な環境との循環構造を学際的に可視化し探索する。

研究代表者：片桐恵子

共同研究者：勇上和史（経済学研究科 教授），鈴木竜太（経営学研究科 教授），久保雄一郎（経営
学研究科 助教）

研究課題：高齢就労者と well-being

研究資金：神戸大学国立大学改革・研究基盤強化推進補助金

研究概要：人材不足と高齢人口の増大から，高齢就労者の増加が見込まれている。しかし高齢就労者
の実際の就労状況や，かれらの well-being に資するような働き方については，未経験の事態である
ため研究はまだ少ない。本研究では，高齢就労者を支援するような会社のシステムが高齢就労者にど
のような影響があるのかなどを検討し，高齢就労者の well-being をいかに実現するかについて検討
する。

研究代表者：木伏紅緒

共同研究者：朱織雨，壺井達也

研究課題：筋・運動学シナジーを用いたアスリートの移動運動能力評価

研究資金：公益財団法人ヒロセ財団

研究概要：着地，スケーティングの動作中の筋・運動学シナジーを初心者と熟練者の間で比較するこ
とで，この新たな評価方法の実用性を探る。

研究代表者：寺田昌弘（京都大学）

共同研究者：相羽達弥（JAXA），神崎素樹（京都大学），石岡憲昭（JAXA 宇宙科学研究所），山田深（杏
林大学），田辺弘子（名古屋大学），木伏紅緒（神戸大学）

研究課題：「きぼう」利用（宇宙医学）テーマ「宇宙滞在における筋シナジー制御機構の解明」

研究概要：宇宙飛行士が宇宙空間に滞在する前後（飛行前，飛行直後，飛行半年，1 年後）での，姿
勢制御やロコモーション（歩行，障害物回避，ステップなど）の変化を筋シナジーの側面から解明す
る。

研究代表者：増本康平

共同研究者：谷口隆晴・原田和弘・打田篤彦・近藤徳彦

研究課題：ウェルビーイングの実現に資する社会的つながりの新たな推定・評価方法の確立に関する
研究

研究資金：大学発アーバンイノベーション神戸・大学研究者提案型（複合領域・民間企業連携区分）

研究概要：社会的つながりを定量的に評価する手法を開発する。

研究代表者：片桐恵子

共同研究者：原田和弘・打田篤彦・Kim Nahyun

研究課題：「坂の街神戸」と地域住民の Well-being：坂に息づくコミュニティの構築

研究資金：大学と連携した地域課題の調査研究（神戸市）

研究概要：坂の街神戸における坂に注目し、坂が住民の well-being に与える影響について検討する。

研究課題：スポーツと地域社会研究会

座長：山口泰雄

メンバー：秋元忍 ほか

研究資金：公益財団法人兵庫県スポーツ協会

研究概要：ひょうごの近代 150 年の中で、スポーツの発展が地域社会にどのような影響を与えたのかを検証する。

研究代表者：秋元忍

共同研究者：島津大地

研究課題：兵庫県から見た第1回国民体育大会（1946年）―開催準備、競技開催実態、参加者の評価の検討から―

研究資金：兵庫体育・スポーツ科学学会 令和7年度兵庫体育・スポーツ科学学会学術研究助成（一般研究）

研究概要：広域開催となった1946年第1回国民体育大会が、兵庫県においていかに開催されたのかについて検討する。

4) 民間共同研究

研究代表者：木伏紅緒

研究課題：動作計測・分析及びアドバイス

研究資金：コア・テクノロジー株式会社、丸紅インテックス株式会社

研究概要：スポーツ用衣料による運動パフォーマンス向上を目指した技術開発を目的とし、計測・分析・評価の確認、アドバイスに基づいた製品改良を行う。

研究代表者：近藤徳彦

共同研究者：増本康平・原田和弘・打田篤彦

研究課題：職場での室内環境の質における包摂性と組織の生産性に関する研究

研究資金：株式会社ダイキン工業

研究概要：研究の目的は、職場における室内環境の質（Indoor Environmental Quality: IEQ）が、労働者の主観的な労働の質および職場内の社会的関係に及ぼす影響を明らかにすることである。

研究代表者：秋末敏宏

共同研究者：近藤徳彦・増本康平・原田和弘・打田篤彦・古和久朋・園田悠馬・沖侑太郎

研究課題：地域在住高齢者の認知機能及びウェルビーイングに対する ICT を用いた行動変容が及ぼす影響の検討

研究資金：住友生命保険相互会社

研究概要：歩行数などの身体活動要素を ICT にて計測するとともに、行動変容を惹起させる ICT を用いたプログラムにて介入することにより、認知機能の経時的変化および社会参加に対する変容をとらえることを本研究の目的とする。

研究代表者：國部 克彦

共同研究者：佐藤正和・久保雄一郎・安川幸男・増本康平

研究課題：日常生活における心の豊かさ～価値創造プロジェクト～

研究資金：日本たばこ産業株式会社

研究概要：起業家・経営者の自律性を中心とした経営環境要因および意思決定ロジック（エフェクチュエーション）が、起業家のウェルビーイングならびに企業成果に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

(3) 論文

国際共著論文

Walker R, Harada K. (2025). Affective exercise experience in childhood and psychological determinants of exercise among Japanese older adults. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, 96, 133-145.

Web of Science 収録誌掲載論文

Tatara K, Sato K (contribution equal). (2025). Chronic intake of *Dioscorea esculenta* suppresses testicular atrophy, enhances the ability of protection from inflammation in the 2 diabetes rats. *The Journal of Steroid Biochemistry and Molecular Biology*, 250, 106730.

Harada K, Masumoto K, Okada S. (2025). Physical activity components that determine daily life satisfaction among older adults: an intensive longitudinal diary study *International Journal of Behavioral Medicine*, 32, 717-727.

Harada K, Izawa S, Nakamura-Taira N, Yoshikawa T, Akamatsu R, Ikeda H, Kubo T. (2026). Exercising with others, motivation, and one-year maintenance of exercise behavior among workers *Journal of Physical Activity and Health*, 23, 35-43.

Uchiyama Y, Kyan A, Sato M, Ushimaru A, Minamoto T, Harada K, Takakura M, Kohsaka R, Kiyono M, Tsurumi T, Uchida A, Saga T, Yamamoto K. (2025). Association between objective and

subjective relatedness to nature and human well-being: key factors for residents and possible measures for inequality in Japan's megacities. *Landscape and Urban Planning*, 261, 105377.

Yamagata M, Mori K, Katayama M, Taguchi M, Okada S, Sakaue Y, Chujo Y, Katada M, Idegomi Y, Kakutani H, Tanaka H, Kimura T, Hase K. (2025). Effects of subthreshold electrical stimulation with pink noise on postural control in lumbar spinal stenosis: a pilot study. *Scientific Reports*, 15:23883.

査読付き論文

Kumazawa Y, Sato K. (2025). Effects of nutritional status and menstrual cycle on acute aerobic exercise-induced immune responses in young women. *Gynecological and Reproductive Endocrinology & Metabolism*, in press.

Yamamoto A, Taoka K, Hirakawa K, Yanagita Y, Miyamura Y, Yamamoto Y, Tachibana T, Kimura T, Tamagawa M. (2025). Fundamental investigation on contactless and continuous blood pressure measurement by impinging jet flow and imaging photoplethysmography. *ICIC Express Letters*, 19:527-534.

乾順紀・長ヶ原誠(2025) 高校生のフィジカルリテラシーを高める体育授業プログラムの開発に関する研究:「体育理論」との関係から. *体育学研究*, 70:717-736.

増本康平・原田和弘・谷口隆晴・打田篤彦・近藤徳彦(印刷中) 社会的つながりへの介入による超高齢社会のウェルビーイングの実現 -介入の理論・方法・評価- *心理学評論*.

原田和弘, 山口裕子, 三古展弘, 西下直希, 前田至剛, 岸上順一, 徳楽清孝, 菱本明豊. (2026). 運動支援ツールの利用と運動習慣・運動時間との関連: 性格特性による違いの検証. *健康支援*, 28, 23-32.

太田幸志, 原田和弘. (2025). 高齢者を対象とした運動継続に寄与する他者との運動実践のあり方の探索的検討. *理学療法学*, 52, 357-365.

森田憲輝, 吉村茜, 石原暢, 奥田知靖. (2025). 小学校児童における N チャレンジアジリティテストと新体力テストとの関係. *体力科学*, 74(3), 181-189.

(4) 著書

分担執筆

石原暢(2025) みんなのための生涯学: 人生を楽しむ科学への招待(担当箇所: 第4章 身体活動と脳の健康), ナカニシヤ出版

増本康平・春日彩花（2025）老年臨床心理学ハンドブック（担当箇所：第9章 認知機能，知能，知恵），福村出版

総説・書評など

木伏紅緒・河村隆史. (2025). 骨盤ベルト付きコンプレッションウェアが疲労後の跳躍・着地に及ぼす影響. シンポジウム：スポーツ・アンド・ヒューマン・ダイナミクス講演論文集, U00012.

(5) シンポジウム開催など

（木村哲也）

Kimura T, Yamagata M, Taki C, Shiozawa N. Physiological mechanisms optimizing quiet standing posture, Keynote Speech in the International Conference on Computational Methods in Engineering and Health Sciences 2025, 2025.12.13.

（増本康平）

増本康平 老いへの偏見に挑む：高齢期の記憶と幸福の関係 アスニー特別講演会，2025. 7. 25

増本康平 高齢期の記憶と幸福の関係：老いへの偏見に縛られていませんか？ 日本心理学会公開シンポジウム「こころの加齢と発達」，2025. 10. 4.

(6) 受賞

受賞者：打田篤彦・渥美圭佑

受賞名：第4回計算社会科学大会 大会優秀賞，いきもの観測アプリのログを用いた都市緑地と社会環境の相互作用の検討，計算社会科学会

受賞理由：第4回計算社会科学大会において特に優秀な発表と認められたため。

受賞者：松本えりあ・伊藤汐梨・木村心春・山下耕平・三浦敬太・長ヶ原誠(2025)

受賞名：日本生涯スポーツ学会 第27回大会学生ポスター発表最優秀賞

受賞演題：ワールドマスターズゲームズ2027 関西に対する選手の期待 ～ホスト国選手とゲスト国選手の比較～

受賞者：石原暢

受賞名：若手研究者のための健康科学研究助成 優秀賞

受賞理由：第38回若手研究者のための健康科学研究助成成果報告書に掲載された報告書が優秀なものと認定されたため。

受賞者：原田和弘

受賞名：第67回日本老年社会科学大会 大会優秀ポスター賞

受賞理由：第67回日本老年社会科学大会のポスター研究発表において優秀な発表と認定されたため

め。

受賞者：木村哲也

受賞名：令和7年度学長表彰（神戸大学）

受賞理由：財務貢献者

受賞者：増本康平

受賞名：令和7年度前期全学共通教育ベストティーチャー賞

受賞理由：全学共通教育（大学教育推進機構 教養教育院で開講）において、学生から高い評価を受けたため

行動系の総括と課題

国内外で活動的な研究活動を教員各自が展開し、本年度も研究資金獲得を伴う研究の進展とその成果は着実に挙げられている。国際共同研究もこれまでの継続に加え、新規研究が拡大しており、次年度以降もそれらの成果と発展が表れてくることが期待できる。今後は各研究分野における更なる研究の進展とともに、外部資金の獲得にも注力しつつ、国際的な共同研究をさらに推進したい。課題としては、研究成果の発信や理論化により著書出版の増加や、各研究室の大学院生の研究活動への研究指導と支援による研究成果を行動系より発信していくことが挙げられる。

●教育系

（1）国際共同研究

本専攻研究者：川地亜弥子

研究代表：川地亜弥子

共同研究者（海外）：Meritxell Simon-Martin

共同研究者：瓦林亜希子（東洋大学）、枝廣直樹（尼崎市立小学校教諭）

研究課題：ライフ・ライティングにおける Oracy 育成—生活綴方とフレネ教育を比較して—

研究資金：2024～2027 年度・基盤研究（B）（一般）（24K00369）

研究概要：ライフ・ライティングにおける Oracy 育成について、生活綴方とフレネ教育を比較して研究した。

本専攻研究者：田中 伸

研究代表者：田中 伸

研究課題：文化受容型学習論の改革論研究 —文化を主体的・批判的に捉える市民性教育の構想—（課題番号 24K21476）

研究資金：2024～2026 年度・挑戦的研究（萌芽）

研究概要：市民性育成を目指した文化学習のあり方を日本と米国の研究者で共同研究している。

本専攻研究者：田中 伸

研究代表者：伊藤 直之

研究課題：アジアの社会科教師のエージェンシー比較研究：生態学アプローチによる再文脈化の考察
(課題番号 25K00797)

研究資金：2025～2029 年度・基盤研究 (B) (一般)

研究概要：アジア諸国の地理教育研究者間に拡がりつつある教師の再文脈化研究に日本から参画するもの。主にシンガポール、マレーシア、中国、韓国を対象にする。

本専攻研究者：山口悦司

研究代表：山口悦司

共同研究者 (海外)：Clark A. Chinn (Rutgers University)

共同研究者：望月俊男 (専修大学)、大浦弘樹 (東京理科大学)

研究課題：科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築
(課題番号 23H01021)

研究資金：2023～2026 年度・基盤研究 (B) (一般)

研究概要：科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築を行っている。

本専攻研究者：北野幸子 (共同研究者)

研究代表者：西田幸代 (研究代表者)

共同研究者 (海外)：西田幸代 (University of Aberdeen)

研究課題：園と家庭との連携に関する実態調査 Family Involvement in Early Childhood Education: The Perspectives and Experiences of Early Childhood Professionals

研究資金：特になし。

研究概要：保育者と家庭との連携協働や保護者の園へのエンゲージメントの状況について、保育専門組織の関係者にインタビュー調査を行い、コロナ禍以降、どのように参画が促されたのか、また実施されてきたのか等、を調査し分析している。

(2) 国内共同研究等

科研 (代表者)

本専攻研究者：渡邊隆信、川地亜弥子

研究代表者：渡邊隆信 (神戸大学)

研究課題：「明石附小」における新教育の思想と実践の継承に関する研究

研究資金：2025～2027 年度・科学研究費助成事業 基盤研究 (C) (一般) (課題番号 25K05867)

研究概要：大正新教育期、戦時下新教育期、戦後新教育期の 3 期において、明石女子師範学校附属小学校の新教育思想と実践の何がどのように継承され、また継承されなかったのか、さらには新たに創造されたのかを縦断的に解明する。

本専攻研究者：山下晃一

研究課題：米国における Grow Your Own Teacher（地元教員育成）の実践と政策の展開に関する研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：本研究は現代米国における地元出身の教員を育成する実践と政策を対象として、全米的な動向の生成および展開経緯や類型を分析・検討した上で、成果・意義・課題等を明らかにして、教員の新たな資質能力観等に関するわが国への示唆を得ることを目指す。

本専攻研究者：赤木和重，川地亜弥子，勅使河原君江

研究代表者：川地亜弥子

研究課題：オーラシー育成に関する理論と実践：教育評価・環境デザイン・福祉的支援の観点から（課題番号 24K00369）

研究資金：2024～2027 年度・基盤研究（B）（一般）

研究概要：オーラシー教育に関する理論と実践について、今年度は特別活動・芸術教育・環境デザインの観点から調査し、日本における授業開発を試みた。ウェブサイトを作成した。

本専攻研究者：田中 伸

研究代表者：田中 伸

研究課題：文化受容型学習論の改革論研究 -文化を主体的・批判的に捉える市民性教育の構想-（課題番号 24K21476）

研究資金：2024～2026 年度・挑戦的研究（萌芽）

研究概要：市民性育成を目指した文化学習のあり方を日米の研究者で共同研究している。

本専攻研究者：山口悦司，坂本美紀

研究代表者：山口悦司

研究課題：科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築（課題番号 23H01021）

研究資金：2023～2026 年度・基盤研究（B）（一般）

研究概要：科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築を行っている。

本専攻研究者：山口悦司，坂本美紀，増本康平，木村哲也，佐藤幸治，Erkki Tapio Lassila

研究代表者：山口悦司

研究課題：高度情報化社会に必要な科学関連情報評価能力の育成を促進する教師教育プログラム開発（課題番号 23K17592）

研究資金：2023～2025 年度・挑戦的研究（萌芽）

研究概要：高度情報化社会に必要な科学関連情報評価能力の育成を促進する教師教育プログラム開発を行っている。

本専攻研究者：津田英二，稲原美苗，赤木和重，川地亜弥子，山本健太

研究代表者：津田英二

共同研究者：殿垣亮子，橋田慈子

研究課題：アクションリサーチに基づく「兵庫モデル」を基盤とした障害者の生涯学習研究拠点構築

研究資金：基盤研究(B)（課題番号 24K00368）

研究概要：障害者が学びの場から排除されている状況を是正し，障害者の生涯学習実践や生涯学習推進政策を進めていくにあたって，アクションリサーチや理論研究の側面からアプローチする共同研究である。

本専攻研究者：後藤聡美

研究代表者：後藤聡美

研究課題：当事者性を分析枠組みとしたマルチステークホルダーの実践共創プロセスの解明

研究資金：若手研究（課題番号 25K16922）

研究概要：本研究は，近年，多文化共生や持続可能な社会づくりの文脈で注目を集めている「当事者性（問題・テーマとの距離を示す尺度）」概念の深化を図り，異なる価値観を有する複数の利害関係者（マルチステークホルダー）が，どのように接触・葛藤・交差を重ねながら実践を共創していくのか，という具体的なプロセスとそこでの構成員や集団／組織の変容を明らかにしようとするものである。個・コミュニティ・社会の一体的な変容を捉えようとする「当事者性」をめぐる学習論の新たな展開可能性を示すことを目的とする。

本専攻研究者：津田英二，稲原美苗，赤木和重，川地亜弥子，山本健太

研究代表者：津田英二

共同研究者：殿垣亮子，橋田慈子

研究課題：アクションリサーチに基づく「兵庫モデル」を基盤とした障害者の生涯学習研究拠点構築

研究資金：基盤研究(B)（課題番号 24K00368）

研究概要：障害者が学びの場から排除されている状況を是正し，障害者の生涯学習実践や生涯学習推進政策を進めていくにあたって，アクションリサーチや理論研究の側面からアプローチする共同研究である。

本専攻研究者：目黒強

研究代表者：目黒強（神戸大学）

研究課題：明治期における巖谷小波の評論活動に関する基礎的研究

研究資金：基盤研究（C）（一般）（課題番号 24K03657）

研究概要：明治期における巖谷小波の評論活動について、『教育時論』と『児童研究』に掲載された評論記事を収集し，巖谷小波の教育観・学術観を検討した。

本専攻研究者：中谷奈津子

研究代表：中谷奈津子

共同研究者：鶴宏史（武庫川女子大学）・木曾陽子（大阪公立大学）・春木裕美（関西国際大学）

研究課題：保育所等における個別支援の充実を図る推進事業等に関する研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（B）（課題番号 23H00950）

研究概要：保育所等における特別な配慮を必要とする子どもや家庭に対する個別支援の推進事業等の実態を把握し、その効果や課題などを明らかにする。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：北野幸子（神戸大学）

研究課題：位置測位システムを活用した保育者養成教育方法と教材の開発

研究資金：挑戦的研究（萌芽）（課題番号 23K17616）

研究概要：位置測位システムを活用して園における子どもと保育者の位置データを収集し、養成教育の教材として活用すべき内容の抽出を行った。それらを検討し、保育者養成教育における活用方法と、活用可能な教材の開発を試みている。

研究代表者：村瀬瑠美

研究課題：乳幼児の「身体のおかしさ」に関する調査―一体と心をつなぐ「身」に焦点を当てた課題発見と異分野共創的課題解決の提案―

研究資金：高等学術研究院テニュアトラック教員（B 制度）

研究概要：現在のわが国の乳幼児が抱える「身体のおかしさ」を「身」の概念に着目して明らかにし、乳幼児期から子どもたちの「身体」を育んでいくための方策を提示することを目的とする。

科研（分担者）

本専攻研究者：渡邊隆信

研究代表者：相澤直樹（神戸大学）

研究課題：幼児期の表象する心のめばえを探る―インクブロット法を用いて

研究資金：2024～2026 年度・科学研究費助成事業 基盤研究（C）（一般）（課題番号 24K06501）

研究概要：心理テストとして広く用いられているロールシャッハ・インクブロット法を用いて、幼児期の表象の発達を検討する。3 歳から 5 歳の幼児を対象に同法を実施して、その反応や言語表現の分析を通じて幼児の心の発達を解明する。

本専攻研究者：渡邊隆信

研究代表者：眞壁宏幹（慶応義塾大学）

研究課題：19 世紀末から 20 世紀前半における北ドイツ教育文化再考

研究資金：2025～2027 年度・科学研究費助成事業 基盤研究（C）（一般）（課題番号 25K05958）

研究概要：19/20 世紀転換期に北ドイツで展開された新教育運動と芸術家コロニー運動のいくつかの試みを「新しいヒューマニズム」と民主主義に向けた人間と共同体の形成運動と仮説的に捉え、この仮説の妥当性とその運動の未発の可能性を考察する。

本専攻研究者：山下晃一

研究代表者：浜田博文（筑波大学）

研究課題：校長のリーダーシップ発揮を促進する制度的・組織的条件の解明と日本の改革デザイン

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(A)

研究概要：本研究は、校長のリーダーシップ発揮の促進要因を、校長職をとりまく制度的・組織的条件に焦点づけて実証的に解明し、とりわけ制度的・組織的条件の解明と整備＝システムアプローチの観点から日本における改革デザインを提示することを目的とする。

専攻研究者：赤木和重，稲原美苗，川地亜弥子，津田英二，山本健太

研究代表者：津田英二

研究課題：アクションリサーチに基づく「兵庫モデル」を基盤とした障害者の生涯学習研究拠点構築（課題番号 24K00368）

研究資金：2024 年度科研費（2024～2028 年度）基盤研究(B)

研究概要：障害者の生涯学習研究の拠点を構築しつつ、アクションリサーチを行った。

本専攻研究者：川地亜弥子

研究代表者：本田伊克（宮城教育大学）

研究課題：教育実践における学習の事実の解明—子どものことばの意味の育ちに着目して（課題番号 24K05595）

研究資金：2024 年度科研費（2024～2026 年度）基盤研究（C）

研究概要：子どものことばの意味の育ちに着目して、教育実践における学習の事実の解明を行い、国際学会 World Association of Lesson Studies にて発表を行った。

本専攻研究者：エルッキ・ラッシラ

研究代表者：大貫麻美

研究資金：2022～2027 年度・基盤研究 B（研究代表者：大貫麻美）

研究課題：サステナビリティ・コンピテンシーを培う幼児向け STEAM プログラムの開発と評価（課題番号 22H01067）

研究概要：サステナビリティ・コンピテンシーを培う幼児向け STEAM プログラムの開発と評価を行っている。

本専攻研究者：エルッキ・ラッシラ

研究代表者：隅田学

研究資金：2023～2026 年度・挑戦的研究(萌芽)

研究課題：ノンフォーマルな特別科学教育が育成する異才とその教育資本（課題番号 23K17620）

研究概要：ノンフォーマルな特別科学教育が育成する異才とその教育資本を明らかにしている。

本専攻研究者：エルッキ・ラッシラ

研究代表者：田中達也

研究資金：2025～2029 年度・基盤研究(C)

研究課題:教員志望学生を対象とした防災教育における教師エージェンシーの育成プログラムの開発
(課題番号 25K06654)

研究概要:教員志望学生を対象とした防災教育における教師エージェンシーの育成プログラムの開発
を行っている。

本専攻研究者：田中 伸

研究代表者：伊藤 直之

研究課題：アジアの社会科教師のエージェンシー比較研究：生態学アプローチによる再文脈化の考察
(課題番号 25K00797)

研究資金：2025～2029 年度・基盤研究 (B) (一般)

研究概要:アジア諸国の地理教育研究者間に拡がりつつある教師の再文脈化研究に日本から参画する
もの。主にシンガポール、マレーシア、中国、韓国を対象にする。

本専攻研究者：坂本美紀，山口悦司

研究代表者：坂本美紀

研究課題：意思決定エージェントとしての市民を育成する変革的リスクリテラシー教育プログラム
(課題番号 24K00467)

研究資金：2024～2026 年度・基盤研究 (B) (一般)

研究概要:意思決定エージェントとしての市民を育成する変革的リスクリテラシー教育プログラム開
発を行っている。

本専攻研究者：坂本美紀，山口悦司

研究代表者：坂本美紀

研究課題:意思決定エージェントとしての市民を育成する変革的リスクリテラシーの指導法と評価法
(課題番号：22K18625)

研究資金：2022～2024 年度・挑戦的研究 (萌芽)

研究概要:意思決定エージェントとしての市民を育成する変革的リスクリテラシーの指導法と評価法
の開発に取り組んでいる。

本専攻研究者：山口悦司

研究代表者：望月俊男 (専修大学)

研究課題：矛盾する情報の評価・統合過程をメタ認知し変容する力を育む協調学習プログラムの開発
(課題番号：23H01010)

研究資金：2023～2026 年度・基盤研究 (B) (一般)

研究概要：矛盾する情報の評価・統合過程をメタ認知し変容する力を育む協調学習プログラムの開発

に取り組んでいる。

本専攻研究者：稲原美苗

研究代表者：栗原一成（多摩美術大学）

研究課題：「Art&Philosophy」美術教育への臨床哲学対話の応用

研究資金：基盤研究(B)（一般）（課題番号 25K00412）

研究概要：本研究は、公開された芸術制作の現場で哲学対話を実践し、「言葉」と「行為」を通して芸術的思考の始まりを哲学的視座から明らかにする実践的研究である。哲学と芸術の協働の「場」を創出することで両者を架橋し、作品制作の過程を臨床哲学的に解明するとともに、対話型美術教育の新たな手法として文化芸術の社会的役割を多角的に検討することを目的とする。

本専攻研究者：岡部恭幸

研究代表者：下村岳人（島根大学）

研究課題：算数科における「合意形成を図る力」を育成する学習指導モデルの開発

研究資金：基盤研究(C)（一般）（課題番号 23K02341）

研究概要：本研究は、これまでの能力育成に関する研究の延長線上に位置づき、算数科における「合意形成を図る力」の育成を意図した具体的な学習指導モデルを開発し、その効果を事例と共に明らかにした。

本専攻研究者：稲原美苗

研究代表者：後藤玲子（帝京大学）

研究課題：ケイパビリティ毀損と人間の尊厳—福祉経済政策の倫理と哲学—

研究資金：学術変革研究領域（A）尊厳学の確立：尊厳概念に基づく社会統合の学際的パラダイムの構築に向けて（課題番号 23H04855）

研究概要：本研究の目的は、ケイパビリティ理論・生命倫理学・現象学などの理論的知見と、障害者・認知症患者の尊厳に関する調査を参照させることにより、より包括的な福祉経済政策を提言することにある。

本専攻研究者：稲原美苗

研究代表者：石田絵美子（兵庫医科大学）

研究課題：病院から地域への精神科看護実践の移行に伴う関係性と連携に関する現象学的研究

研究資金：基盤研究(C)（一般）（課題番号 23K09943）

研究概要：本研究は、精神障害者への支援を病院から地域というつながりのあるケアシステムの中で捉えた上で、特に精神科看護実践の基盤となる「関係性」に注目しつつ多職種連携による精神科看護実践のあり方を明らかにすることを目的とする。

本専攻研究者：稲原美苗

研究代表者：川崎唯史（国立研究開発法人国立がん研究センター 東病院）

研究課題：フェミニスト生命倫理学の方法論としての現象学の検討

研究資金：基盤研究(C) (一般) (課題番号 25K03539)

研究概要：本研究は、生命・健康領域におけるジェンダーの平等と正義を目指すフェミニスト生命倫理学において、周縁化された人々の身体的経験を記述・分析する方法としてフェミニスト現象学がどの程度有用であるのか、またどのような研究課題に適しているのかを検討するものである。

本専攻研究者：目黒強

研究代表者：土居安子（大阪国際児童文学振興財団）

研究課題：明治以降の絵葉書に見る児童文学・児童文化の研究－巖谷小波旧蔵資料の分析－

研究資金：基盤研究 (C) (一般) (課題番号：24K03683)

研究概要：巖谷小波関連資料の収集・整理を行うとともに、小波門下である竹貫佳水を中心としたネットワークを明らかにした。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：藤掛絢子（ノートルダム清心女子大学）

研究課題：実習との往還を図った音楽表現領域における保育者養成教育プログラムと評価の開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C) (課題番号 21K02418)

研究概要：保育領域「表現」の特に音楽表現に関して、往還型の養成教育の国内外の実践事例についてのデータを収集した。国内の養成教育における講義・演習と園での実習との往還的養成教育のプログラムとその評価方法の開発の実態を調査した。また実際に開発されたプログラムと評価方法についての考察を加えた。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：掘越紀香（国立教育政策研究所 幼児教育研究センター 副センター長）

研究課題：幼小接続期における教育の質の基盤形成に関する研究

研究資金：国立教育政策研究所 プロジェクト研究

研究概要：幼小接続期の教育における幼児教育センターの役割・機能に関する研究（センター機能班）の所外研究分担者として、地域の幼児教育センター機能の実態について調査し、各地教育委員会とともに幼児教育アドバイザー等を対象とした試行的な研修開発と実施に従事した。

本専攻研究者：中谷奈津子

研究代表：木曾陽子（大阪公立大学）

研究課題：3歳未満児保育と小規模保育事業におけるインクルーシブ保育のあり方の検討

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (C) (課題番号 24K05839)

研究概要：3歳未満児保育や小規模保育事業所において、特別なニーズのある子どもに対するインクルーシブ保育の実態と課題を明らかにし、先駆的实践から3歳未満児保育と小規模保育におけるインクルーシブ保育のあり方と必要な支援等を検討する。

地方公共団体・神戸大学など

本専攻研究者：津田英二，赤木和重，川地亜弥子，勅使河原君江，稲原美苗，大田美佐子，関典子，佐賀達矢，谷篤史，岸本吉弘，松岡広路，井上太一，橋澤慧，荒木絃太

研究代表者：津田英二

共同研究者：加戸友佳子，生田邦紘，黒崎幸子，藤田雅子，多田千景

研究課題：地域コンソーシアムによる障害者の生涯学習支援体制の構築

研究資金：文部科学省「地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究」（代表：津田英二）

研究概要：知的障害者に大学教育を開くことをめぐる理論的・実践的課題を明らかにし，大学教育プログラムを開発・実施する実践的なモデル開発研究，及び兵庫県内の障害者の生涯学習機会創出のモデル開発を行なう研究であり，文部科学省からの受託研究として，兵庫県教育委員会と協働連携して実施している。

本専攻研究者：寺村ゆかの，津田英二

研究代表者：津田英二

研究課題：子育て支援拠点プログラムモデル開発

研究資金：神戸市「神戸市地域子育て支援拠点事業補助金」

研究概要：2005年より運営している「のびやかスペースあーち」において，子育てに関わる多様な人々との出会いや交流を通して，そこで出会った利用者らが互いの立場を理解し互いに学び合うこと，そしてそこから生まれる新たな価値観を共有するためのプログラムモデルの開発を行う。

本専攻研究者：津田英二，寺村ゆかの

研究代表者：津田英二

研究課題：子どもの居場所づくりプログラムモデル開発

研究資金：神戸市「神戸市子どもの居場所づくり補助金」

研究概要：2005年より運営している「のびやかスペースあーち」において，社会参加機会の少ない子どもたちを中心に，多様な人たちのエンパワメントの場として活用できるプログラムモデルの開発を行う。

本専攻研究者：北野幸子，村瀬瑠美

研究代表者：北野幸子

研究課題：乳幼児教育実践の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性に関する研究

研究資金：神戸市こども家庭局事業費

研究概要：神戸市事業として乳幼児保育研究部会を立ち上げ，遠隔公開保育の方法の開発，実践事例の可視化と発信方法の開発等，保育の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性についての検討をおこなっている。本年度は特に地域における自立的研修体系の構築方法について検討した。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：舞鶴市長

研究課題：令和7年度幼児教育推進体制等を活用した幼保小の架け橋プログラム促進事業

研究資金：文部科学省

研究概要：舞鶴市保幼小架け橋プログラム検討会議において（委員長：北野），架け橋プログラムの作成を行っている。幼児教育と小学校教育の公開保育と実践検討会により幼小の相互理解の浸透を図る研修プログラムの開発と実施，評価を行っている。

(3) 論文

Web of Science 収録誌掲載論文

Sakamoto, M., Yamaguchi, E., Yamamoto, T., Matano, M., Ohmido, N., & Murayama, R. (2026. 1). An SSI-based instructional unit to enhance primary students' risk-related decision-making. *Education Sciences*, 16(1), 143. <https://doi.org/10.3390/educsci16010143> (WoS 収録論文)

Satomi Goto (2025) Positioning and practical significance of ‘encounter of tojisha-sei’ in lifelong learning theories and research, *International Journal of Lifelong Education* (WoS 収録論文)

Murase, R. & Asai, M. (2026). Individual physical expression from onomatopoeia in young Japanese children: The process from movements to images. *Early Years*, 46, pp.1-16. (WoS 収録論文)

国際共著論文

川地亜弥子, Meritxell Simon-Martin 「スペイン・カタルーニャ地方における書くことの教育と教師教育」松下佳代, 川地亜弥子, 森本和寿, 石田智敬編著『ライティング教育の可能性：アカデミックとパーソナルを架橋する』勁草書房, 292-296.

査読付き論文

渡邊隆信 (2025) 「ドイツ新教育の実践史—教育関係の日常生活史から—」, 教育史学会『日本の教育史学』, 第 68 集, 2025 年 10 月, pp. 87-92.

山下晃一 (2026) 「教科における知的方法論の再評価を基盤とした学校経営の展望 —教科のねざす「学問」への期待を中心に—」『学校経営研究』第 51 巻, pp. 1-12.

Tanaka, N. (2025). An educational approach in which students create democratic schools through dialogue about ‘school rules’ . In Katsillis, M. J. (eds.), *Citizenship and Social Change: Building Bridges, Children’s Identity and Citizenship* European Association, 22-34.

後藤聡美 (2025) 「ESD 実践における学びのメルクマールとしての当事者性の有用性」『神戸大学大学

院人間発達環境学研究科研究紀要』19(1), pp. 9-18.

澤田淳・岡部恭幸 (2026) 等号理解と関係的試行の発達段階に基づく授業実践の再分析, 数学教育学会誌 66(3・4), 印刷中

澤田淳・岡部恭幸 (2025) 等号理解と関係的試行の発達の様相：足し算にかかわる式の分析に焦点を当てて, 数学教育学会誌 66(1・2), 印刷中

太田直樹・岡部恭幸 (2025), 「部分と全体の関係性」の評価課題からみる構造的捉えの困難性—下位項目の通過基準による分類と誤答傾向からの示唆—, 数学教育学会, 数学教育学会誌 66(1・2), pp. 49-60

Yuta Uchiyama, Akira Kyan, Masayuki Sato, Atushi Ushimaru, Toshifumi Minamoto, Kazuhiro Harada, Minoru Takakura, Ryo Kohsaka, Mieko Kiyono, Tetsuya Tsurumi, Atsuhiko Uchida, Tatsuya Saga, Kenta Yamamoto. Association between objective and subjective relatedness to nature and human well-being: Key factors for residents and possible measures for inequality in Japan's megacities. Landscape and Urban Planning, 261, 10537.

後藤聡美 (2025) 「ESD 実践における学びのメルクマールとしての当事者性の有用性」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』19(1), pp. 9-18.

鶴宏史・中谷奈津子・木曾陽子・春木裕美・松山聖奈・関川芳孝 (2026) 「保育所等における子ども家庭支援の充実を図る推進事業に関する研究：5 自治体の家庭支援推進保育事業の実施状況」『教育学研究論集』第 21 号, 41-50.

小椋たみ子・土生川雄彦・寺見陽子・北野幸子・林悠子 (2025) 幼児期前期の子どもの社会情動能力への言語能力、養育・教育環境の関与の検討. チャイルド・サイエンス、Vol. 30、pp. 38-42.

査読無し論文

山下晃一 (2026) 「いじめの予防と早期発見・対応をめぐる生徒指導上の課題 —公立中学校における学校風土づくりを中心に—」『教育科学論集』第 29 号, pp. 21-28.

大野裕己・山下晃一 (2025) 「地方教育行政をめぐる今日的課題」『日本教育行政学会年報』第 51 号, pp. 266-270.

川地亜弥子 (2025) 「奈良教育大学附属小学校の教育実践と教育課程：子どもの発達と教育内容をふまえて」『教育におけるアドミニストレーション』(27), 1-9.

川地亜弥子 (2025)「奈良教育大学付属小学校の教育実践と教育課程」『教育』(952), 5-13.

田中伸 (2026)「哲学教育・P4C -子どもの現実を基盤に社会・言葉・自身を丁寧に問い直す、そして自由へ-」『社会科教育』明治図書、2026 年 3 月号、No. 803、pp. 86-89.

中山智貴・新立慶・田中伸 (2026)「社会科教師の専門性をめぐる研究動向の分析」『教育科学論集』第 29 号、pp. 29-38.

山口悦司・坂本美紀・俣野源晃・山本智一・川崎弘作・長沼祥太郎・毛利圭汰・村山留美子 (2025. 5)「科学技術の社会問題に対する小学生の意思決定を支援する生成 AI 利用型教育プログラムの開発」『日本科学教育学会研究会研究報告』第 39 巻, 第 5 号, 67-70.

比嘉俊・山口悦司 (2025. 12)「日本国内における外来生物教育研究の現状と課題」『日本科学教育学会研究会研究報告』第 40 巻, 第 2 号, 87-90.

大浦弘樹・河合絢也・望月俊男・安井弘光・クラーク A. チン・山口悦司 (2025. 12)「高等学校情報科における科学的コンセンサスに基づくメディア情報評価能力の実態:糖尿病の治療法をテーマにして」『日本教育工学会研究報告集』第 2025 巻, 第 4 号, pp. 82-86.

松岡広路 (2025)「スピリチュアルな学びとふくし教育」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』45, pp. 74-88.

津田英二 (2025)「障害者の生涯学習」『都市問題』No. 116, pp. 21-26.

津田英二, 山本健太, 赤木和重 (2025)「「障害者の生涯学習」支援への動機づけにアプリ活用は有効か:兵庫県民意識調査結果分析の概要(速報)」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』19(1), pp. 115-124.

津田英二 (2025)「協働的な学びが創るインクルーシブな社会」『特別支援教育研究』No. 820, pp. 4-7.

稲原美苗 (2026)「「家族愛」に潜むケアの課題:フェミニズムと現象学の交差点から」『シモーヌ』2026 年冬号, サッフォー, pp. 21-27.

後藤聡美 (2025)「SDGs 運動を組みなおすふくし・当事者性:マルチチュード論の批判的検討を通して」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』45, pp. 44-55.

松岡広路 (2025)「スピリチュアルな学びとふくし教育」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』45, pp. 74-88.

津田英二 (2025) 「障害者の生涯学習」『都市問題』No. 116, pp. 21-26.

津田英二, 山本健太, 赤木和重 (2025) 「「障害者の生涯学習」支援への動機づけにアプリ活用は有効か：兵庫県民意識調査結果分析の概要（速報）」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』19(1), pp. 115-124.

津田英二 (2025) 「協働的な学びが創るインクルーシブな社会」『特別支援教育研究』No. 820, pp. 4-7.

稲原美苗 (2026) 「「家族愛」に潜むケアの課題：フェミニズムと現象学の交差点から」『シモーヌ』2026 年冬号, サフオー, pp. 21-27.

後藤聡美 (2025) 「SDGs 運動を組みなおすふくし・当事者性：マルチチュード論の批判的検討を通して」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』45, pp. 44-55.

木村柚香・貞清篤郎・増田莉子・伊藤堇・山崎朋香・中谷奈津子 (2025) 「ノディングズ著『ケアリング論』を読む：ソーシャルケア研究の新たな地平を目指して」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 19 巻第 1 号, 105-114.

目黒強 (2025) 「大日本婦人教育会における巖谷小波の活動－『大日本婦人教育会雑誌』を中心として－」神戸大学大学院人間発達環境学研究科編『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 19 巻第 1 号, pp. 93-103

目黒強 (2025) 「神戸遥真作品における趣味縁の検討」日本児童文学者協会編『日本児童文学』第 71 巻第 5 号, pp. 32-35

目黒強 (2025) 「『少年世界』における竹貫佳水による読者会の展開」大阪国際児童文学振興財団編『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』第 39 号（印刷中）

北野幸子 (2025) 「世界のインクルーシブ保育」全国社会福祉協議会『保育の友』第 73 巻 13 号 pp. 20-23.

北野幸子 (2025) 「海外の保育者養成における「実習」のあり方」『発達』Vol. 184

村瀬瑠美 (2025) 身体の動きとオノマトペ, やさしく読み解く体育・スポーツの今. 女子体育 67(10) : 48-51.

(4) 著書 単著

津田英二編著（2026）『みんなのあーち』デザインエッグ社，全 140 頁．

共編著

松下佳代，川地亜弥子，森本和寿，石田智敬編著（2025）『ライティング教育の可能性：アカデミックとパーソナルを架橋する』勁草書房．

小玉重夫監修、田中伸・豊田光世編『対話的教育論の探究 ―子どもの哲学が描く民主的な社会―』東京大学出版会、2023（2025 年 10 月重版）

清田哲男 勅使河原君江 辻田美和 藤田雅也 須増啓之 松浦藍『福来四郎アートコミュニケーションプロジェクト 感受による創造性アート授業の実践』2026 年 3 月 あいり出版（印刷中）

北野幸子（監修）（2025 春・秋号）『これからの幼児教育』ベネッセ総合教育研究所。

幼稚園・保育所の運営研究会（渡邊秀則・北野幸子・草山充・佐藤暁子・大竹節子）編（2025）『幼稚園・保育所の運営トラブル解決事例集』第一法規。

編集委員会（秋田喜代美・浅井幸子・大方美香・大豆生田啓友・北野幸子・古賀松香・汐見稔幸・砂上史子・松井剛太・無藤隆・矢藤誠慈郎）編（2025）『保育ナビ』フレーベル館。

最新 保育士養成講座 総括編纂委員会（秋田喜代美・岩田力・柏女霊峰・北野幸子・山縣文治）編（2026）『改訂 1 版 第 8 巻 子どもの食と栄養』全国社会福祉協議会。

天野珠路・北野幸子編著（2026）新基本保育シリーズ① 保育原理 第 2 版，中央法規

分担執筆

川地亜弥子（2025）「生徒指導，および進路指導と生活綴方」西岡正子，桶谷守編著『生涯学習時代の生徒指導・キャリア教育 改訂版』教育出版，186-193．

川地亜弥子（2025）「まえがき」松下佳代，川地亜弥子，森本和寿，石田智敬編著『ライティング教育の可能性：アカデミックとパーソナルを架橋する』勁草書房，i-v．

川地亜弥子（2025）「生活綴方における書くことの教育：書くこと・読むこと・話すことを通じた人間形成」松下佳代，川地亜弥子，森本和寿，石田智敬編著『ライティング教育の可能性：アカデミックとパーソナルを架橋する』勁草書房，225-246．

川地亜弥子，谷美奈，松下佳代「書くことを通じた人間形成とは」松下佳代，川地亜弥子，森本和寿，石田智敬編著『ライティング教育の可能性：アカデミックとパーソナルを架橋する』勁草書房，247-257．

山口悦司（2025. 10）「69 ラーニング・プログレッションズ（pp. 146-147）」「74 認識的認知

(pp. 156-157)」磯崎哲夫監修，遠藤優介・中村大輝・松浦拓也・山本容子編著『理科重要用語事典』明治図書

稲原美苗（2026）「第七章，コロナ禍は障害者に何をもたらしたのか—ニューノーマルについての哲学的考察」，若松良樹編著『法と哲学新書 マスク取ってもいいですか？』，信山社，pp. 267-314.

北野幸子，他.（2025）「子どもの声を起点にした「架け橋プログラム事業」」全国社会福祉協議会『私たちの指導計画 2025』pp180-187.

北野幸子，他.（2025）『新しい時代は子どもから～子どもの今が未来を創る～私たちが伝えたい7つのメッセージ集』全国私立保育連盟.

北野幸子（2025）「こどもまんなか社会における乳幼児の健康・栄養マネジメントとウェルビーイング」『現場で差がつく！栄養ケアの実力』日本ヘルスケアテクノ

北野幸子（2025）「幼児と遊び」「遊びを支える環境」『令和 7 年度用中学校家庭分野 学習指導書「データ編」』開隆堂 pp. 60-70.

村瀬瑠美（2026）乳幼児期の子どもの生活の中でのモノの扱いや動きの育ちをいかに支えるか. 第 8 章 保育の新たな課題，『幼稚園・保育所の運営トラブル解決事例集』. 第一法規.

総説・書評など

川地亜弥子（2025）「学校と人間形成」『兵庫教育』第 891 号（5 月号），p. 40.

川地亜弥子（2025）「なぜ書くことを指導するのか」『兵庫教育』第 893 号（7 月号），p. 40.

川地亜弥子（2025）「人との出会いをカリマネする」『兵庫教育』第 895 号（9 月号），p. 40.

川地亜弥子（2025）「山を守り，木を育てるところから」『兵庫教育』第 897 号（11 月号），p. 40.

川地亜弥子（2026）「公正な社会づくりとオラシー教育」『兵庫教育』第 887 号（1 月号），p. 40.

川地亜弥子（2026）「あなたの声を見いだす変革の力」『兵庫教育』第 889 号（3 月号），p. 40.

川地亜弥子（2026）「課外活動・自治的活動における目標と評価—子どもの権利保障の観点から—」西垣順子，川地亜弥子，中山弘之「教育現場における学習・学生生活評価の実態と影響—生徒・学生の発達保障から考える—」大学評価学会学会年報『現代社会と大学評価』21，61-64.

川地亜弥子（2026）「公教育における権利保障と学習者の生活に根ざした表現—戦後教育実践の立場から—」室井麗子，石井拓児，川地亜弥子，清水睦美，石井英真，杉田浩崇「日本教育学会第84回大会報告 課題研究Ⅲ なぜ、日本の公教育は、不自由で非包摂的なのか（その2）—「権利保障」を問う—」『教育学研究』93(1)，印刷中。

稲原美苗（2025）『メルロ＝ポンティ・コレクション』からの文句，山本貴光・吉川浩満編集『人文的，あまりに人文的 No.4 アンケート特集：哲学の殺し文句』，哲学の劇場，pp. 17-21.

稲原美苗（2025）「＜書評＞土屋葉編著（現代書館，2023年）障害があり女性であること：生活史からみる生きづらさ」，『ジェンダー研究：お茶の水女子大学ジェンダー研究所年報』，pp. 112-113.

稲原美苗・井上太一（2025）「「わたし」の声を聴き合う対話の場 ～特別支援学校におけるお母さんたちとの哲学カフェの実践～」，『ふくしと教育—ふくしと学びの交差点—』43，大学図書出版，pp. 64-69.

北野幸子（2025：連載：4回）「学ぶほど楽しさ発見」『保育士会だより』全国保育士会.

北野幸子（2025）「医療と保育を両輪に支援を必要とする子どもを支える」『保育ナビ』2025年10月 pp. 4-9.

北野幸子（2025）「保育実践から読み解く「安心と挑戦の循環」」『保育ナビ』2025年11月 pp. 26-27.

北野幸子（2025-2026：連載：12回）「こどもまんなか時代の保育へ」『遊育』.

(5) シンポジウム開催など

教育哲学会第68回大会研究討議（2025）「教育関係と人間形成—学校・家庭・インターネットの空間から—」神戸大学，2025年10月4日，渡邊隆信（企画・司会・記録作成）。

日本教育経営学会第65回大会課題研究「社会の分断を防ぐ教育経営—新たな公教育の構築に向けて—」（2025年6月8日，茨城大学）（研究推進委員会 委員長 柏木智子，副委員長 山下晃一，司会・指定討論 山下晃一）。

日本カリキュラム学会広報・若手育成委員会主催，川地亜弥子企画・司会・コーディネータ（2025）「課題研究Ⅱ 教育行政とカリキュラム —学習指導要領の改訂期の実際—」，第36回全国大会，花園大学，6月21日。

川地亜弥子企画・司会・コーディネータ，日本カリキュラム学会第35回大会自主企画シンポ（2025）「教師教育におけるライティングの可能性」花園大学，6月22日。

日本教育方法学会第 61 回記念大会課題研究 III, 川地亜弥子企画・司会・コーディネータ, 記録作成 (2025)「ジェンダーの観点から学校で生きることを問い直す」鳴門教育大学, 10 月 5 日.

日本教育方法学会第 61 回大会会員企画シンポジウム, 川地亜弥子企画・司会・コーディネータ (2025)「現代イングランドにおける教育政策の展開と Oracy 研究」鳴門教育大学, 10 月 5 日.

子ども教育学科国際シンポジウム, 川地亜弥子企画・司会・コーディネータ (2026)「Life Writing Across Disciplines and Cultures」人間発達環境学研究科 F257・オンライン併用, 1 月 29 日.

Hervé BRETON (Université de Tours, France), 川地亜弥子企画・司会・コーディネータ (2025)「Traditions and practices of Life Writing in Progressive Education in France and Japan」オンライン, 12 月 19 日.

稲原美苗 (2026)「合理的配慮は誰のためのものか—障害者の生きられた経験からみる尊厳と民主主義」, 学術変革領域研究 (A) 尊厳学の確立: 尊厳概念に基づく社会統合の学際的パラダイムの構築に向けて—B03 主催 ワークショップ「民主主義と尊厳—生きられた経験から問い直す—」, (2026 年 3 月 1 日・神戸大学鶴甲第 2 キャンパス).

神戸大学・明石市連携協定祈念, 明石市タウンミーティング. 企画・実施, 企画・登壇: 明石市長, 村瀬瑠美, 北野幸子「明石市×神戸大学 包括連携協定締結記念, こどもの遊びと学び〜明石公園をフィールドに〜」

(2025 年 8 月 24 日, 於: 明石公園, 神戸大学附属小学校)

文部科学省・こども家庭庁共催, 「令和 7 年度 保育実践充実推進のための中央セミナー」

分科会「学び合う開かれた保育の推進〜公開保育から始まる地域のつながり〜」基調講演: 北野幸子 (2018 年より神戸市と本学の共同研究事業についての紹介)

(2025 年 12 月 3 日, 於: TKP 新橋カンファレンスセンター)

日本乳幼児教育学会第 35 回大会 企画シンポジウム II 「気候変動下の保育環境の工夫」指定討論: 北野幸子

(2025 年 12 月 13 日, 於: 西南女学院大学)

環太平洋乳幼児教育学会日本支部 2026 年研究会/第 11 回神戸こどもの発達支援研修会「1 人ひとりを大切にする保育〜共生社会のこれからを考える〜」, 企画: 村瀬瑠美, 北野幸子, シンポジウム司会・進行: 北野幸子 (共催: 神戸大学大学院人間発達環境学研究科 教育連携推進室/乳幼児教育学研究室 附属幼稚園, 神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科学分野小児神経学・発達行動小児科学部門 (神戸市寄付講座), 神戸市こども家庭局 神戸市乳幼児保育研究部会, 環太平洋乳幼児教育学会日本支部. 後援: 神戸市, 神戸市医師会, 神戸市小児科医会, 兵庫県小児科医会)

(2026 年 2 月 7 日，於：神戸大学附属幼稚園)

(6) 受賞

なし

(7) 教育系講座の研究の総括と課題

教育，カリキュラム，教員養成，教育行政などにおける現代的課題の解決に向けた研究が，活発に行われた。これらの成果は次世代の育成と教育の質の向上に直結する貴重な研究である。本講座の研究は理論に留まらず，防災教育や ICT 活用，地域連携などを通して，切れ目なく社会へと還元されている。2025 年度も JST 次世代プロジェクトや多数の科研費採択など，教育系の研究展開が報告された。国や政府系機関からの多くのファンド提供は，社会からの期待の高さを示している。また，欧米やアジア圏での国際学会発表や共同研究が複数報告された点も高く評価される。

(人間発達専攻長 岸本吉弘)

7.7.2. 人間環境学専攻

(1) 研究プロジェクト(専攻研究者が代表者で，研究費総額 200 万円以上)

<自然環境論>

研究代表者(本専攻教員)：青木茂樹

研究分担者：中野敏行(名古屋大学)，連携研究者：高橋寛(本専攻教員)

研究課題：気球搭載型エマルジョン望遠鏡による GeV/sub-GeV 宇宙ガンマ線の謎の解明

研究資金：科学研究費補助金・基盤(A)，2023-2025 年度，総額(直接経費)3,590 万円

研究概要：気球搭載型のエマルジョン望遠鏡を開発し，天体などからのガンマ線観測を行う。

研究代表者(本専攻教員)：近江戸伸子

研究分担者：高田英昭(産総研)

研究課題：次世代型高度顕微鏡による植物染色体ナノ構造と動原体機能解明

研究資金：科学研究費補助金・基盤(B)，2025-2027 年度，総額(直接経費)1240 万円

研究概要：次世代高度顕微鏡技術を用い，植物染色体の動原体高次構造についてタンパク質とクロマチンの相互作用をナノスケールで解明する。

研究代表者(本専攻教員)：小谷野由紀

研究課題：流動と拡散の協働現象の一般的な定式化

研究資金：科学研究費補助金・若手研究，2024-2028 年度，総額(直接経費)360 万円

研究概要：移流が拡散挙動に与える実効的な影響について，一般的な定式化を試みる。

研究代表者(本専攻教員)：佐藤春実

研究課題：テラヘルツおよび低波数ラマン分光法による高分子の高次構造解析と分子間相互作用の直

接観察

研究資金：NEDO ムーンショット型研究開発事業／地球環境再生に向けた持続可能な資源循環を実現／非可食バイオマスを原料とした海洋分解可能なマルチロック型バイオポリマーの研究開発，2020-2029 年度，総額(直接経費)5,346 万円

研究概要：テラヘルツおよび低波数領域のラマンスペクトルより高分子の海洋分解機構を解明する。

研究代表者(本専攻教員)：佐藤春実

研究課題：3 次元低波数ラマンイメージングによる生分解性ポリエステルの分子間相互作用の可視化

研究資金：科学研究費助成事業(基盤研究(C))バイオポリマーの研究開発，2024-2026 年度，総額(直接経費)350 万円

研究概要：低波数ラマンイメージング測定より，生分解ポリエステルの生分解の様子や結晶相転移，結晶化過程における分子間相互作用の変化を可視化する。さらに，ラマンスペクトルの深さ方向分析により，分子間相互作用の3次元イメージングに挑戦する。

研究代表者(本専攻教員)：源利文

共同分担者：山中裕樹(龍谷大学)，坂田雅之(北海道大学)

研究課題：環境 DNA 分析による種間交雑の検出

研究資金：科学研究費補助金・基盤(B)，2023-2025 年度，総額(直接経費)1,490 万円

研究概要：環境 DNA 分析によって魚類の交雑状況を把握するための手法を開発する。

研究代表者(本専攻教員)：源利文

共同分担者：平山一槻(神戸大学)，坂田雅之(北海道大学)

研究課題：超高感度環境 DNA マーカーを用いた過去復元の精緻化

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究(萌芽)，2025-2027 年度，総額(直接経費)490 万円

研究概要：ゲノム内の反復配列をマーカーとすることで環境 DNA 分析における過去復元を精緻化する手法を開発する。

研究代表者(本専攻教員)：丑丸敦史 共同研究者：倉田 正観(北海道大学)，中濱 直之(兵庫県立大学)

研究課題：半自然草原の植物相の多様性・固有性に基づく保全価値評価：自然草原との比較

研究資金：科学研究費助成事業(基盤研究(B))，2024 年度，総額(直接経費)：320 万円

研究概要：半自然草原の植物相の固有性を草原性植物種の種組成や多様性，遺伝的な特徴を自然草原のものと比較することで明らかにする。

研究代表者(本専攻教員)：丑丸敦史 共同研究者：源利文(本専攻教員)，佐藤真行(本専攻教員)，石井弘明(本学農学研究科)

研究課題：令和7年度里地里山の生物多様性向上に向けた整備及び生態系サービスの評価に係る調査研究

研究資金：神戸市・受託研究，2025 年度，総額(直接経費)：600 万円

研究概要:神戸市の放棄された里地里山の管理導入による生物多様性再生の検証および市民への波及効果について調査を行う。

研究代表者(本専攻教員):佐賀達矢

研究分担者:笠田実(北海道大学), 平岩将良(近畿大学)

研究課題:スズメバチ類の食性解析から絶滅危惧種・外来種をモニタリングする

研究資金:住友財団環境研究助成, 2024-2026 年度, 総額(直接経費)250 万円

研究概要:絶滅危惧種・外来種の分布をスズメバチ類の食性解析から調べる。

研究代表者(本専攻教員):佐賀達矢

研究分担者:笠田実(北海道大学), 平岩将良(近畿大学)

研究課題:スズメバチ類の食性解析から絶滅危惧種・外来種をモニタリングする

研究資金:環境総合研究推進費, 2025-2027 年度, 総額(直接経費)692 万円

研究概要:スズメバチ類の食性解析を用いた生物相調査法の開発を行う。

<数理情報環境論>

研究代表者(本専攻教員):長坂耕作

研究課題:データに内在する誤差が代数問題に与える影響とその構造的な除去に関する研究

研究資金:科学研究費補助金・基盤(C), 2024-2028 年度, 総額(直接経費)360 万円

研究概要:現実の問題に現れるデータに含まれる誤差の影響を構造的に除去する数値数式融合計算の開発と検証を行う。

研究代表者(本専攻教員): ESCOLAR Emerson

研究課題:トポロジカルな視点による様々なプロセスの新しいデータ解析技術の開発

研究資金:学術研究助成基金・基盤研究(C), 2024-2026 年度, 総額(直接経費)350 万円

研究概要:多様なプロセスについてその全体像を理解し, 新たなトポロジカルデータ解析手法を開発する。

研究代表者(本専攻教員):桑村雅隆

研究課題:特異摂動法の新しい理論と応用—細胞極性に関する反応拡散方程式モデルの数理解析—

研究資金:学術研究助成基金・基盤研究(C), 2024-2028 年度, 総額(直接経費)330 万円

研究概要:保存量をもつ反応拡散方程式に対して特異摂動法を適用するための新しい理論的な枠組みを構築する。

<生活環境論>

研究代表者(本専攻教員):佐藤真行

研究分担者:丑丸敦史(本専攻教員), 内山愉太(本専攻教員), 源利文(本専攻教員)

研究課題:都市化と人口構造のもとでの生態系サービス評価と保全政策に関する学際的研究

研究資金:科学研究費補助金・基盤(B), 2022-2025 年度, 総額(直接経費)1,651 万円

研究概要：都市生態系サービスに関する実証的な評価研究を行い、保全政策についての知見を提供する。

研究代表者(本専攻教員)：佐藤真行

研究分担者：内山愉太(本専攻教員)，張玉(本専攻大学院生)

研究課題：都市生態系資源を活用した都市域の冷却効果の解析と社会実装に向けた政策提言

研究資金：アーバンイノベーション神戸，2026-2027 年度，総額(直接経費)288 万円

研究概要：神戸市の暑熱環境について調査研究し，都市の快適性を含めたウェルビーイングについての政策的知見を提供する。

研究代表者(本専攻教員)：田畑智博

共同分担者：蔡佩宜(九州工業大学)

研究課題：近年のエネルギー価格高騰と家計の脆弱性に関する実証分析

研究資金：住友財団・環境研究助成，2023-2025 年度，総額(直接経費)220 万円

研究概要：近年の電気代の上昇度合いと社会的弱者の家計負担に与える影響の度合いとの関係性を明らかにする。

研究代表者(本専攻教員)：田畑智博

共同分担者：蔡佩宜(九州工業大学)

研究課題：エネルギー価格高騰に対する家計の脆弱性測定手法の開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤(B)，2025-2027 年度，総額(直接経費)1,612 万円

研究概要：環境対策として導入されるカーボンプライシング等によりエネルギー価格が上昇した際に，その影響を受けやすい家庭を特定し，効果的な支援策を提案するための評価方法を開発する。

研究代表者(本専攻教員)：大野朋子

共同研究者：片桐恵子(人間発達専攻教員)，田畑智博(本専攻教員)

研究課題：バイオフィリック・デザインによる都市緑地の展開ー多様な街路樹を生かした Living Nature Kobe を目指してー

研究資金：大学発アーバンイノベーション神戸，2024-2025 年度，総額(直接経費)250 万円

研究概要：街路樹の新たな可能性を発掘し，すべての人々が都市に求める心地よく居続けたいと思う緑豊かな神戸のまちづくりを提案する。

研究代表者(本専攻教員)：内山愉太

共同研究者：喜屋武亨(琉球大学)，高倉実(琉球大学)，佐藤真行，丑丸敦史(本専攻教員)，原田和弘(人間発達専攻教員)，香坂玲(東京大学)

研究課題：日常生活全般における生態系サービス受給の格差と効果：都市地域環境と健康の改善手法

研究資金：科学研究費補助金・基盤(B)，2023-2026 年度，総額(直接経費)1,430 万円

研究概要：環境保全と健康の改善に資する政策や取組の促進に向けて日常生活において受給されてい

る生態系サービスの評価と効果検証を行い、都市内や都市地域間での格差を解明する。

研究代表者(本専攻教員)：内山愉太

共同研究者：佐藤真行、丑丸敦史、源利文(本専攻教員)、Mario R. Delos Reyes, Mark Anthony M. Gamboa (University of the Philippines), Victorino Aquitania, Jose Bernardo B. Gochoco III (International Council for Local Environmental Initiatives), Sigit D. Arifwido, Orana Chandrasiri (Kasetsart University)

研究課題：Unraveling urban resilience using City Preparedness Index: Scientific evaluation method for developing policy and action networks

研究資金：Asia-Pacific Network for Global Change Research, Collaborative Regional Research Programme, 2023-2026 年度、総額(直接経費)715 万円

研究概要：気候変動下における都市のレジリエンス向上に向けた各都市の政策等の実施、準備状況の評価指標の構築と研究者及び政策立案者等のネットワーク形成を行う。

研究代表者(本専攻教員)：福田博也

共同研究者：兵頭政光(高知大学)、村田機械株式会社

研究課題：嚥下動作検出のためのウェアラブルセンサの開発

研究資金：産官学連携共同研究経費、2021-2025 年度、総額(直接経費)500 万円

研究概要：介護施設での食事介助における嚥下動作モニタリングのためのウェアラブルセンサを開発する。

研究代表者(本専攻教員)：村山留美子

共同研究者：Escolar, Emerson Gaw(本専攻教員)

研究課題：高次元のリスク認知構造の新たな表現に関する検討

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究(萌芽)、2023-2025 年度、総額(直接経費)490 万円

研究概要：位相的データ解析手法に着眼し、リスク認知の構造を明らかにするための新たな方策の検討を目的とする

研究代表者(本専攻教員)：井上真理

共同分担者：小泉智(茨城大学)、兒玉隆之(京都橘大学)、中西康雅(三重大学)、山田由佳子(大阪教育大学)、武内俊次(京都工芸繊維大学)、金田理子(神戸大学附属中等教育学校)

研究課題：持続可能な材料(繊維・糸)とテキスタイル製品を直結させるための感性評価の体系化

研究資金：科学研究費補助金・基盤(B)、2022-2025 年度、総額(直接経費)1,350 万円

研究概要：繊維製品を使用する際に心地よいと感じる布を繊維・糸の特性から理論的に設計する評価システムを開発し、体系化することを目指す。

<社会環境論>

研究代表者(本専攻教員)：橋本直人

研究分担者：なし

研究課題：テキスト計量による思想史研究の方法的革新—ウェーバーとドイツ社会科学を事例に

研究資金：科学研究費補助金・基盤(C)，2023-2025 年度(延長申請中)，総額(直接経費)260 万円

研究概要：マックス・ウェーバーを中心として 20 世紀初頭のドイツ社会諸科学の再編過程を思想史の観点から計量的に分析する。

研究代表者(本専攻教員)：坂井晃介

研究分担者：濱 貴子(関西大学)，前田麦穂(國學院大學)，森啓輔(専修大学)，中島満大(明治大学)，宮部峻(立命館アジア太平洋大学)

研究課題：「歴史社会学」の理論・方法・実践の共有とグローバルな対話に向けた総合的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤(C)，2025-2027 年度，総額(直接経費)455 万円

研究概要：国内外の多様な「歴史社会学」的研究が、いかなる実践の集積と方法的継承によって成り立っているのかを統合的に明らかにすることで、グローバルな研究の進展のための条件を解明する。

研究代表者(本専攻教員)：原 将也

研究課題：熱帯作物キャッサバを通して考える地域社会におけるグローバル時代の食料主権

研究資金：科学研究費補助金・若手研究，2023-2027 年度，総額(直接経費)350 万円

研究概要：グローバルな構造が前提となった現代において、地域住民が主体的に作物を選び、みずからの食を決定するという「食料主権」のあり方について、熱帯作物キャッサバの生産—消費を事例として実証的に探究していく。

研究代表者(本専攻教員)：澤 宗則

研究課題：南アジア系移民の家族の戦略とトランスナショナルな領域化に関する比較考察

研究資金：科学研究費補助金・基盤(C)，2024-2029 年度，総額(直接経費)320 万円

研究概要：南アジア系移民の家族の戦略とトランスナショナルな領域化のプロセスを比較することにより、南アジア系移民社会の特質を明らかにする。

研究代表者(本専攻教員)：太田 和宏

研究課題：原理共有なき民主主義の諸形態：フィリピン政治と社会編成

研究資金：科学研究費補助金・基盤(C)，2022 -2025 年度，総額(直接経費)310 万円

研究概要：フィリピン政治の実態を社会的文脈に埋め込まれる制度と運用の観点に立ち、民主主義原理を問い直す。

(2)国際共同研究

<自然環境論>

研究代表者(本専攻教員)：近江戸伸子

共同研究者：Stefan Wanke 教授 (Senckenberg Gesellschaft für Naturforschung ,

Goethe-Universität Frankfurt, ドイツ), Tony Heitkam 教授(RWTH Aachen University, ドイツ)

研究課題: 神戸のアジサイ遺伝資源の解析と日欧育種への応用

研究資金: 一般財源

研究概要: ドイツと日本で観賞用植物として人気の高い園芸植物アジサイについて, RepeatExplorer2 によるリピートーム解析により特定された反復配列について, 染色体上での局在性を見る蛍光 *in situ* ハイブリダイゼーション(FISH)法による細胞学的解析を行う。

研究代表者(本専攻教員): 近江戸伸子

共同研究者: Andreas Houben 教授(Leibniz Institute of Plant Genetics and Crop Plant Research, IPK, ドイツ)

研究課題: CRISPR-FISH を用いた植物動原体構造の解明

研究資金: 科学研究費補助金・基盤(B)

研究概要: 微細構造可視化法を用いて, 植物染色体の動原体高次構造について解明する。

研究代表者(本専攻教員): 近江戸伸子

共同研究者: Robert Hasterok 教授 (University of Silesia, ポーランド)

研究課題: The structural and ultrastructural characterisation of the functional proteins in the seed plant nucleoli.

研究資金: 一般研究経費

研究概要: 核小体の微細構造解析を免疫染色ならびに走査型電子顕微鏡を用いて行う。

研究代表者(本専攻教員): 近江戸伸子

共同研究者: Eva Hřibová 博士 (Institute of Experimental Botany, チェコ)

研究課題: ゲノム倍加による植物核内クロマチン動態の解明

研究資金: 一般研究経費

研究概要: 倍数性によって植物の核内クロマチン構造および染色体の配置様式がどのように変化するかを解明する。

研究代表者(本専攻教員): 小谷野由紀

共同研究者: Krishna Kanti Dey (Indian Institute of Technology Gandhinagar)

研究課題: Activity Induced Diffusion Recovery in Crowded Colloidal Suspension

研究資金: 一般財源

研究概要: 酵素反応がある溶媒中ではコロイド粒子の重心移動が大きくなることが実験的に明らかとなってきた。コロイド粒子や酵素からなる粒子系において排除堆積効果を考慮し, ランジュバンダイナミクスを解析することにより酵素反応がコロイド粒子に与える影響について考察を行う。

研究代表者(本専攻教員): 佐藤春実

共同研究者: Marlina Dian

研究課題：赤外およびテラヘルツ分光法による薬剤用試薬の分別

研究資金：JSPS Core-to-Core Program

研究概要：赤外分光法およびテラヘルツ分光法を用いて、薬剤用試薬に混入した他成分の検出について検討した。

共同研究者：Sunee Jungtheerapanich

研究課題：テラヘルツ分光法とケモメトリックス法による米粉に混入したグルテン成分の微量検出

研究資金：JSPS Core-to-Core Program

研究概要：テラヘルツ分光法とケモメトリックス法を用いて、微量に混入したグルテンの量を検出する手法を開発するための基礎研究を行う。

研究代表者(本専攻教員)：佐藤春実

共同研究者：Yeonju Park

研究課題：低波数ラマン分光法と2次元相関分光法による生分解性ポリエステルの海洋分解機構の研究

研究資金：JSPS Core-to-Core Program

研究概要：生分解性ポリエステルの海洋分解過程における低波数ラマンスペクトルを2次元相関分光法を用いて解析することにより、生分解性ポリエステルの海洋分解機構を解明することを試みた。

研究代表者(本専攻教員)：佐藤春実

共同研究者：Mikhail Malanin

研究課題：その場延伸 FTIR 測定による生分解性ポリエステルの分子間相互作用の研究

研究資金：一般財源

研究概要：生分解性ポリエステルを延伸しながら偏光 FTIR スペクトル測定を行い、配向度と応力の関係を解析することにより、生分解性ポリエステルの分子間相互作用と分子鎖のからみあいを解明することを試みた。

<数理情報環境論>

研究代表者(本専攻教員)：ESCOLAR Emerson

共同研究者：Woojin Kim (KAIST, 韓国), Steve Oudot (INRIA, フランス)

研究課題：位相的データ解析におけるマルチパラメータ・パーシステンスの研究

研究資金：科学研究費補助金・学術変革領域研究(A) 研究分担者 ESCOLAR

研究概要：複数のパラメータを持つデータの位相的データ解析に向けて、特徴量を比較し評価するための枠組みを構築した。

<生活環境論>

研究代表者(本専攻教員)：内山愉太

共同研究者：佐藤真行, 丑丸敦史, 源利文(本専攻教員), Mario R. Delos Reyes, Mark Anthony M.

Gamboa (University of the Philippines), Victorino Aquitania, Jose Bernardo B. Gochoco III (International Council for Local Environmental Initiatives), Sigit D. Arifwidodo, Orana Chandrasiri (Kasetsart University)

研究課題：Unraveling urban resilience using City Preparedness Index: Scientific evaluation method for developing policy and action networks

研究資金：Asia-Pacific Network for Global Change Research, Collaborative Regional Research Programme, 2023-2026 年度, 総額(直接経費)715 万円

研究概要：気候変動下における都市のレジリエンス向上に向けた各都市の政策等の実施, 準備状況の評価指標の構築と研究者及び政策立案者等のネットワーク形成を行う。

<社会環境論>

研究代表者(本専攻教員)：原 将也

共同研究者：Muhammad Yusri Zamhuri (SDGs Center, Hassanuddin University, Indonesia)

研究課題：インドネシア・西スラウェシにおける伝統文化資源と経済発展に関する研究

研究資金：一般財源

研究概要：西スラウェシの伝統工芸品である綿織物の生産と流通の実態と課題を明らかにし, 観光資源としてのポテンシャルを評価する。

研究代表者(本専攻教員)：佐賀達矢

共同研究者：Joost van Itterbeeck (KU Leuven), 野中健一(立教大学)

研究課題：Attitudes to wasps and edible wasp leisure activities in central Japan

研究資金：一般財源

研究概要：中部地方に残る昆虫食文化の衰退要因と発展可能性の検討を行う。

(3) 教員の受賞

<自然環境論>

受賞者：佐藤春実

受賞名：2025 年度 日本分光学会賞

受賞対象：研究活動

受賞日：令和 7 年 6 月 19 日

受賞理由：「低波数振動分光法とイメージングを用いた新しい高分子構造物性研究法の確立」に関する研究が評価されたため。

<生活環境論>

受賞者：内山愉太

受賞名：前之園記念若手優秀論文賞(一般財団法人敬愛まちづくり財団)

受賞対象：論文

受賞日：令和7年7月8日

受賞理由：日常生活における自然との接触に関する論文内容が評価されたため。

受賞者：内山愉太

受賞名：優秀若手研究者賞(神戸大学)

受賞対象：研究活動

受賞日：令和7年7月10日

受賞理由：環境学・地理情報科学に関する研究業績が評価されたため。

(4) 学生の受賞 在学中の大学生ならびに大学院生が以下のように受賞した。

< 自然環境論 >

受賞者：石黒更（博士課程前期課程2年，指導教員：近江戸伸子）

受賞名：令和7年度 博士学生優秀研究論文賞(神戸大学)

受賞対象：Repeatome landscapes and cytogenetics of hortensias provide a framework to trace Hydrangea evolution and domestication.

受賞年月：令和8年2月12日

受賞理由：2025年に発表した国際学術論文が優秀と評価されたため

受賞者：小倉彰紀（博士課程後期課程2年，指導教員：源利文）

受賞名：The 11th EAFES International Congress Best Poster Award

受賞対象：Relationship between anurans density and landscape factors in paddy field using environmental DNA analysis

受賞年月：令和7年7月22日

受賞理由：発表ポスターが最も優秀であると評価されたため

受賞者：松本奈々（博士課程前期課程1年，指導教員：源利文）

受賞名：The 11th EAFES International Congress Poster Award

受賞対象：Impact of farmland abandonment on survival of a small salamander (*Hynobius setouchi*) using environmental DNA analysis

受賞年月：令和7年7月22日

受賞理由：発表ポスターが優秀であると評価されたため

受賞者：平山一槻（博士課程後期課程3年，指導教員：源利文）

受賞名：第8回 環境DNA学会ポスター賞最優秀賞(学生部門)

受賞対象：eDNA 分析感度におけるマーカー依存的ボトルネックとその克服：ウナギ特異的レトロトランスポゾンによる改善を例に

受賞年月：令和7年12月11日

受賞理由：発表ポスターが最も優秀であると評価されたため

受賞者：松本奈々（博士課程前期課程 1 年，指導教員：源利文）

受賞名：第 73 回日本生態学会大会 ポスター賞優秀賞(保全部門)

受賞対象：耕作放棄がセトウチサンショウウオを脅かす一息への影響と保全管理の提案

受賞年月：令和 8 年 3 月 14 日

受賞理由：発表ポスターが優秀であると評価されたため

<生活環境論>

受賞者：山田拓翔（環境共生学科 生活共生科学プログラム 4 年，指導教員：村山）

受賞名：大会優秀発表賞 ポスター部門

受賞対象：リスク認知の因子構造の再検討

受賞年月：令和 7 年 12 月 5 日

受賞理由：発表ポスターが優秀と評価されたため

(5) 著書

<自然環境論>

分担執筆・編集

佐賀達矢，丑丸敦史『未来を生きるすべての人の 教養の生態学』（2025）

「4・1 生物の関係：食う-食われるから共生まで」「4・2 種間関係と進化」「4・3 共進化」「4・4 種間関係に介在する化学物質」「5・5 地球上のさまざまな生態系をみてみよう」日本生態学会，畑田彩，佐賀達矢，丑丸敦史，中田兼介（編）東京化学同人，208 ページ

<生活環境論>

分担執筆

湯浅正洋（2026）「5.1 調味料」渡邊浩幸，竹内弘幸，古場一哲，重村泰毅（編）『食べ物と健康，食品と衛生 食品学各論 第 5 版』講談社サイエンティフィク，132-141

<社会環境論>

分担執筆

原 将也 2025. コトコト煮込む家庭料理—チレンバ・ワ・クウィピカ，藤本 武・八塚春名・桐越仁美編『食文化からアフリカを知るための 65 章』pp. 2-3. 明石書店.

原 将也 2025. 熱いシマへの想い—ザンビアの国民的主食，藤本 武・八塚春名・桐越仁美編『食文化からアフリカを知るための 65 章』pp. 96-100. 明石書店.

原 将也・桐越仁美 2025. サヘルで食べる新鮮な野菜サラダ—半乾燥地ニジェールで育つレタス.

藤本 武・八塚春名・桐越仁美編『食文化からアフリカを知るための 65 章』pp. 240-244. 明石書店.

原 将也 2025. ザンビア都市のランチ事情—食事風景からみえる都市の日常. 藤本 武・八塚春名・桐越仁美編『食文化からアフリカを知るための 65 章』pp. 379-383. 明石書店.

原 将也 2026. 環境に合った多様な衣食住. 大山修一・永田忠道・立石昌文監修『帝国書院地理シリーズ 9 つのテーマでみる日本と世界の地理⑨生活・文化』pp. 8-9. 帝国書院.

原 将也 2026. 地域に根差した住居. 大山修一・永田忠道・立石昌文監修『帝国書院地理シリーズ 9 つのテーマでみる日本と世界の地理⑨生活・文化』pp. 14-15. 帝国書院.

原 将也 2026. 複雑に関係する民族と言語. 大山修一・永田忠道・立石昌文監修『帝国書院地理シリーズ 9 つのテーマでみる日本と世界の地理⑨生活・文化』pp. 30-31. 帝国書院.

原 将也 2026. 日本の伝統的な住居の特徴と変化. 大山修一・永田忠道・立石昌文監修『帝国書院地理シリーズ 9 つのテーマでみる日本と世界の地理⑨生活・文化』pp. 44-45. 帝国書院.

原 将也 2026. 地域間の交流と沖縄の文化. 大山修一・永田忠道・立石昌文監修『帝国書院地理シリーズ 9 つのテーマでみる日本と世界の地理⑨生活・文化』pp. 48-49. 帝国書院.

井口克郎(2026. 3 刊行予定)「能登半島地震における災害初期対応および『復興』政策と住民自治—被災者の『住み続ける権利』保障の観点から」『能登半島から、災害に向き合う』金沢大学能登半島地震と法研究会編, 日本評論社, 188-198.

翻訳

坂井晃介 2026. ニクラス・ルーマン, 『ルーマン 組織と意思決定』上・下, 勁草書房, (第 4 章, 第 9 章, 第 10 章, 第 13 章を担当)

(6) WoS 論文(10%論文には, 文頭に*を付す)

<自然環境論>

Aoki S. et al. (2025), Study of proton-nucleus interactions in the DsTau/NA65 experiment at the CERN-SPS, Eur.Phys. J. C (2025)85:230, <https://doi.org/10.1140/epjc/s10052-025-13928-1>

Ohmido N., Sartsanga C., Dwiranti A. (2025), Structure and compaction of plant chromosomes: Studies using advanced electron microscopy, Micron, 196-197, 103860, <https://doi.org/10.1016/j.micron.2025.103860>

Wolny E., Mur L.A.J., Ohmido N., Yin Z., Wang K., Hasterok R. (2025), Thriving or Withering?

Plant Molecular Cytogenetics in the First Quarter of the 21st Century, International Journal of Molecular Sciences, 26(14), 7013, <https://doi.org/10.3390/ijms26147013>

Ishiguro S., Taniguchi S., Schmidt N., Jost M., Wanke S., Heitkam T., Ohmido N. (2025), Repeatome landscapes and cytogenetics of hortensias provide a framework to trace Hydrangea evolution and domestication, Annals of Botany, 135(3), 549-564, <https://doi.org/10.1093/aob/mcae184>

Kurosaki, K., Kurosawa, K., Arakawa, M (2025), Ejection angles during hypervelocity impacts on flat and spherical targets investigated with shock physics modeling, International Journal of Impact Engineering, 205, 105400, <https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S0734743X25001800?via%3Dihub>

Kurosawa, K., Collins, G. S., Davison, T. M., Okamoto, T., Ishibashi, K., Matsui, T. (2025), Impact-driven oxidation of organics explains chondrite shock metamorphism dichotomy, Nature Communications, 16, 3608, <https://doi.org/10.1038/s41467-025-58474-2>

Kitahata H, Koyano Y, Kobayashi Y, Nagayama M (2026), Energetics-based model for a diffusiophoretic motion of a deformable droplet, Phys. Rev. E 113, 035408 ,<https://doi.org/10.1103/jv8k-rkx4>

Koyano Y, Górecki J, Kitahata H (2026) Intrinsic speed characteristics of a self-propelled camphor disk under repulsive perturbations, Chaos 36, 033119, <https://doi.org/10.1063/5.0303123>

Kohei Tamura, Motohiro Tsuboi, Hideki Hashimoto, Kenichi Akao, Harumi Sato, Yukihiro Ozaki, Resonance Raman and Multivariate Curve Resolution- Alternating Least Squares (MCR-ALS) Analysis of Biological Polyenes in Shells: A Nondestructive Approach for Species and Habitats Identification, ACS Omega (<https://doi.org/10.1021/acsomega.5c12036>)

Han, Yaxuan Han, Kazuya Shimooka; Jiacheng Gao; Meng-Wan Yeh; Harumi Sato; Yukihiro Ozaki; Motohiro Tsuboi, Investigation of spatial distributions of components within a pyrite concretion through Raman imaging coupled with classical least squares method, Spectrochimica Acta Part A: Molecular and Biomolecular Spectroscopy, 127512 (DOI:10.1016/j.saa.2026.127512)

Kaito Yui, Yui Okuda*, Yuki Horiike, Takaya Terashima*, Jiacheng Gao, Harumi Sato, Go Matsuba*, Copolymerization ratio-dependent self-organizing structures and liquid crystalline phase behaviors of poly(acrylic acid)/ poly(docosyl acrylate) based comb-like random copolymers,

Polymer 344, 129530(2026). (DOI: 10.1016/j.polymer.2025.129530)

Kohei Tamura, Motohiro Tsuboi, Kuniyuki Furukawa, Kenichi Akao, Harumi Sato, Yukihiro Ozaki, Characterization and Identification of Natural Amorphous Rocks Using Infrared, Raman, and Low-Frequency Raman Spectroscopy, Including the Application of Boson Peaks, *Applied Spectroscopy*, 79, 1326–1366(2025) (<https://doi.org/10.1177/00037028251412916>)

Ayaka Yamaji, Yui Okuda, Chikaho Kobayashi, Rikako Kurahashi, Kyoko Kazuma, Kazuki Chiba, Mitsuhiro Hirata, Yuka Ikemoto, Keiichi Osaka, Jiacheng Gao, Harumi Sato, Go Matsuba, Structural Analysis of Regenerated Cellulose Textile Covered with Cellulose Nano Fibers, *Polymers* 17, 2015 (2025) (<https://doi.org/10.3390/polym17152015>)

Kitani, R. P., Saga, T., Kasada, M., Kiyono, M., Sato, M., Ushimaru, A., Minamoto, T. (2026) Feasibility of an eDNA-based educational program for high school students. *Biodiversity and Conservation* 35, 85.

Osada, Y., Miya, M., Araki, H., Doi, H., Kasai, A., Masuda, R., Minamoto, T., Seino, S., Takahara, T., Yamamoto, S., Yamanaka, H., Aizu-Hirano, M., Fukaya, K., Fukuchi, T., Gotoh, R.O., Hori, M., Iida, M., Imaizumi, T., Kajita, T., Kanbe, T., Kenta, T., Kobayashi, Y., Matsuura, T., Mizumoto, H., Motomura, H., Murakami, H., Nohara, K., Oka, S., Sado, T., Senou, H., Shibukawa, K., Sunobe, T., Takahashi, H., Takayama, K., Tanaka, K., Yamakawa, H., Yokoyama, S., Yoon, S., Kondoh, M. (2026) Large-scale environmental DNA survey reveals niche axes of a regional coastal fish community. *Scientific Reports* 16, 3276.

Hunter, M. E., Sepulveda, A., Trujillo-Gonzalez, A., Helbing, C. C., Rees, H. C., Jones-Slobodian, D. N., Miliano, R. C., Minamoto, T., Theroux, S., Wilcox, T., Yamanaka, H., Villacorta-Rath, C., Klymus, K. E. (2026) Best practice guidelines for environmental DNA-based proficiency testing in non-regulatory contexts. *Environmental DNA* 8, e70189.

Uchiyama, Y., Sato, M., Ushimaru, A., Minamoto, T. (2025) Analysis of integrated studies on ecosystem service, human well-being, and urban planning: Regional trends and recommendations for future studies. *Urban Ecosystems* 28, 214.

Kuroita, T., Wu, Q., Iwamoto, R., Minamoto, T. (2025) QuickConc: A rapid, efficient, and power-free eDNA concentration method with cationic-assisted capture. *Ecology and Evolution* 15, e72269.

Hirayama, I. T., Kunimasa, Y., Takeuchi, A., Minamoto, T. (2025) Significant improvement of

environmental DNA assay by targeting retrotransposon sequences characteristic to *Anguilla* eels. *Environmental DNA* 7, e70197.

Uchiyama, Y., Kyan, A., Sato, M., Ushimaru, A., Minamoto, T., Harada, K., Takakura, M., Kohsaka, R., Kiyono, M., Tsurumi, T., Uchida, A., Saga, T., Yamamoto K. (2025) Association between objective and subjective relatedness to nature and human well-being: key factors for residents and possible measures for inequality in Japan' s megacities. *Landscape and Urban Planning* 261, 105377.

Ongkulee, J., Suwannapoom, C., Minamoto, T., Osathanunkul, M. (2025) Development of an eDNA-Based qPCR and dPCR method for detecting the spatial distribution and relative abundance of the critically endangered giant barb (*Catlocarpio siamensis*). *Global Ecology and Conservation* 59, e03511.

Wu, Q., Nakano, T., Ishida, S., Komai, T., Fujiwara, Y., Yoshida, T., Kawato, M., Oka, S., Fujikura, K., Miya, M., Minamoto, T. (2025) Development of universal PCR primers for the environmental DNA metabarcoding of cephalopod (Mollusca) diversity. *Marine Environmental Research* 208, 107094.

Takahara, T., Yamagishi, S., Shimoda, R., Nagata, A., Sakata, M. K., Doi H., Minamoto, T. (2025) Seven-year changes in eDNA concentrations of two dominant submerged macrophytes in Lake Shinji: effects of salinity. *Estuarine, Coastal and Shelf Science* 315, 109165.

Taichi N, Nakahama N, Ohmido N and Ushimaru A (2025) Adaptive trait divergence of annual plants in response to urban habitat diversity in a megacity. *Journal of Ecology* 113:3748–3761. <https://jpn01.safelinks.protection.outlook.com/?url=https%3A%2F%2Fdoi.org%2F10.1111%2F1365-2745.70193&data=05%7C02%7C%7C491a8ac6a4074611e9dd08de75de1b2a%7C20ee4c8087bd422ca5063a2b0aca0615%7C0%7C0%7C639077793949297967%7CUnknown%7CTWFpbGZsb3d8eyJFbXB0eU1hcGkiOnRydWUsIlYiOiIwLjAuMDAwMCIsIlAiOiJXaW4zMlIsIkFOIjoiTWFPbCIslldUIjoyfQ%3D%3D%7C0%7C%7C%7C&sdata=gs56ZmSbaZLvZPS9D%2B5i2yFMPesXQxmhf0%2B2Qkfvk1o%3D&reserved=0>

Tomitaka M, Inoue T, Hirayama GH, Ushimaru A, Ishii HS, Sasaki T and Kenta T (2025) Aesthetic ecosystem services of diverse wildflowers: People' s experience shapes preferences for floral traits. *Nature-Based Solutions* 8:100254. <https://jpn01.safelinks.protection.outlook.com/?url=https%3A%2F%2Fdoi.org%2F10.1016%2Fj.nbsj.2025.100254&data=05%7C02%7C%7C491a8ac6a4074611e9dd08de75de1b2a%7C20ee4c8087bd422ca5063a2b0aca0615%7C0%7C0%7C639077793949316931%7CUnknown%7CTWFpbGZsb3d8eyJFbXB0eU1hcGkiOnRydWUsIlYiOiIwLjAuMDAwMCIsIlAiOiJXaW4zMlIsIkFOIjoiTWFPbCIslldUIjoyfQ%3D%3D%7C0%7C%7C%7C>

%7C&sdata=3e7ZMD5diQq4SL5mElpJfWJGhM57aEk1CAdh%2FI7h2fM%3D&reserved=0

Watazu T, Hiraiwa MK, Inoue S, Mishima H, Ushimaru A and Hosaka T (2025) Effectiveness of interval photography cameras for a survey of pollinator communities: comparison with direct observation. *Applications in Plant Sciences*

13:e70023. <https://jpn01.safelinks.protection.outlook.com/?url=https%3A%2F%2Fdoi.org%2F10.1002%2Faps.7.70023&data=05%7C02%7C%7C491a8ac6a4074611e9dd08de75de1b2a%7C20ee4c8087bd422ca5063a2b0aca0615%7C0%7C0%7C639077793949334871%7CUnknown%7CTWFpbGZsb3d8eyJFbXB0eU1hcGkiOnRydwUsIlYiOiIwLjAuMDAwMCIsIlAiOiJXaW4zMlIsIkFOIjoiTWFpbCIslldUIjoyfQ%3D%3D%7C0%7C%7C%7C&sdata=i84pTuXZxA4siJQPSxYBe38yROMy%2B54bG1BUBqxm5RA%3D&reserved=0>

Ishii HS, Tsujimoto SG, Kadoya MB, Watanabe Y, Kohyama TI, Hiraiwa MK, Ushimaru A and Kudo G (2025) Linkage between community assemblage of floral traits and pollinator fauna: A comparison among six geographical regions *Plant Biology*

27:538–548. <https://jpn01.safelinks.protection.outlook.com/?url=https%3A%2F%2Fdoi.org%2F10.1111%2Fplb.7.70023&data=05%7C02%7C%7C491a8ac6a4074611e9dd08de75de1b2a%7C20ee4c8087bd422ca5063a2b0aca0615%7C0%7C0%7C639077793949875525%7CUnknown%7CTWFpbGZsb3d8eyJFbXB0eU1hcGkiOnRydwUsIlYiOiIwLjAuMDAwMCIsIlAiOiJXaW4zMlIsIkFOIjoiTWFpbCIslldUIjoyfQ%3D%3D%7C0%7C%7C%7C&sdata=WsNxTL6iQKiJ094jbP730xV%2BeoxSMBk7RpTpe6ZsieI%3D&reserved=0>

Hirayama GH, Tomita M and Ushimaru A (2025) Habitat preference influences response to changing agricultural landscapes in two long-horned bee. *Agriculture, Ecosystems & Environment*

381:109437. <https://jpn01.safelinks.protection.outlook.com/?url=https%3A%2F%2Fdoi.org%2F10.1016%2Fj.agee.2024.109437&data=05%7C02%7C%7C491a8ac6a4074611e9dd08de75de1b2a%7C20ee4c8087bd422ca5063a2b0aca0615%7C0%7C0%7C639077793949901381%7CUnknown%7CTWFpbGZsb3d8eyJFbXB0eU1hcGkiOnRydWUsIlYiOiIwLjAuMDAwMCIsIlAiOiJXaW4zMlIsIkFOIjoiTWFpbCIslldUIjoyfQ%3D%3D%7C0%7C%7C%7C&sdata=FOX7CkTHYmqAiXvM8azpQQw88SAmNPwB0Sxz6FUVkyU%3D&reserved=0>

<数理情報環境論>

Ikeda, H., **Kuwamura, M.** (2025). Stability of single transition layer in mass-conserving reaction-diffusion systems with bistable nonlinearity, *Journal of Differential Equations* 440 113430

Gao, E. Y., See, A. S. Y., Tan, B. K. J., Chan, S. W. D., **Zhou, Y.**, See, A., Kiong, K. L., Chan, C. Y., Koh, L. H., Tan, H. K. K., Abhilash, B., Lim, C. M. (2026). Tonsillar Asymmetry and Malignancy: A Meta - analysis of Diagnostic Accuracy. *Otolaryngol. Head Neck Surg.* <https://doi.org/10.1002/ohn.70132>

Zhou, Y., Huang, A., Hattori, S. (2025). Sensitivity analysis for reporting bias on the

time-dependent summary receiver operating characteristics curve in meta-analysis of prognosis studies with time-to-event outcomes. *Res. Synth. Methods*, 16, 528-549.
<https://doi.org/10.1017/rsm.2025.14>

Tian, Y.-S., Mao, X., **Zhou, Y.**, Fukuzawa, K., Ikeda, K., Hatabu, A. (2025). Status and influencing factors of OTC medicine use for self-medication in cold and cough: a cross-sectional survey in Japan. *BMC Public Health*, 25, 1918.
<https://doi.org/10.1186/s12889-025-23113-4>

Zhou, Y., Deng, Y., Tian, Y.-S., Wu, P., Hu, W., Wang, H., Steyerberg, E., Zhou, X.-H. (2025). CSTEapp: An interactive R-Shiny application of the covariate-specific treatment effect curve for visualizing individualized treatment rule. *SoftwareX*, 32, 102352.
<https://doi.org/10.1016/j.softx.2025.102352>

<生活環境論>

Zhang Y., Uchiyama Y, Sato M., (2026), Exploring Interactions of Thermal, Acoustic, and Aesthetic Environments on Thermal Experience in Parks, *Scientific Reports*, in press,
<https://doi.org/10.1038/s41598-026-39787-8>

Kitani R., Saga T., Kasada M., Kiyono M., Sato M., Ushimaru A., Minamoto T. (2026), Feasibility of an eDNA-based educational program for high school students, *Biodiversity and Conservation*, 35, 85, <https://doi.org/10.1007/s10531-026-03280-5>

Zhang Y., Uchiyama Y, Sato M., (2025), Effect of real-time thermal conditions and thermal perceptions on public attitudes toward urban-cooling strategies, *City and Environment Interactions*, 28, 100262, <https://doi.org/10.1016/j.cacint.2025.100262>

Ye X. and Sato M., Private car users' willingness to switch to public transportation and its influencing factors in the Yangtze River Delta", *Asian Transport Studies*, 11, 100171,
<https://doi.org/10.1016/j.eastsj.2025.100171>

Uchiyama Y., Sato M., Ushimaru A., Minamoto A., (2025), Analysis of integrated studies on ecosystem service, human well-being, and urban planning: Regional trends and recommendations for future studies, *Urban Ecosystems*, 28, 6, 214, <https://doi.org/10.1007/s11252-025-01831-2>

Uchiyama Y., Kyan A., Sato M., Ushimaru A., Minamoto A., Harada K., Takakura M., Kohsaka R., Kiyono M., Tsurumi T., Uchida A., Saga T., Yamamoto K. (2025), Association between objective and subjective relatedness to nature and human well-being: key factors for residents and

possible measures for inequality in Japan' s megacities, *Landscape and Urban Planning*, 261, 105377, <https://doi.org/10.1016/j.landurbplan.2025.105377>

Kobayashi Y., Sato M., Uchida K., Mori A. (2025), Misalignment between ecologically rapid and economically optimal forest restoration designs, *Forest Policy and Economics*, 103426, <https://doi.org/10.1016/j.forpol.2025.103426>

Yamaura Y., Shoji Y., Schmaljohann H., Unno A., Yao R. T., Yong, D. L., Kawamura K., Kitazawa M., Sato S., Aoki D., Okahisa Y., Takahashi M., Toma T., Sato M., Senzaki M., Soga M. (2025), Subjective connection with nature, rather than provisioning visual information, can support conservation measures in distant countries: A lesson from migratory songbirds in the East Asian-Australasian Flyway, *Animal Conservation*, 0: 1-12, <https://doi.org/10.1111/acv.70013>

Tabata T (2026) Environmental and Social Impacts of Community-Based Household Plastic Waste Collection for High-Value Recycling, *Applied Sciences*, 16, 1326, <https://doi.org/10.3390/app16031326>

Kikunaga, K., Yokouchi, N., Yokoyama, K., Nakata, A. (2026), Self-endangering work behavior is enhanced by a poor psychosocial safety climate at the workplace among Japanese workers under flexible time arrangements: Fixed effects model analysis in a longitudinal study. *American Journal of Industrial Medicine*, 69(3): 177-184, <https://doi.org/10.1002/ajim.70051>

Yokouchi, N., Ikeda, M., Fujisawa, R., Ishiyama, N., Takao, Y. (2026), Workplace Inclusion and Its Associations With Psychological Distress and Work Engagement Among Japanese Employees: The Moderating Role of Work Arrangement in a Prospective Study. *Journal of Occupational and Environmental Medicine*, 68(2): 155-162, <https://doi.org/10.1002/ajim.70051>

Lukman KM, Quevedo JM, Rifai H, Alifatri LO, Ulumuddin YI, Sofue Y, Uchiyama Y, Kohsaka R. (2025), Mangrove forest food products as alternative livelihood measures: mangrove conservation by community in Muara Gembong, Bekasi Regency, Indonesia, *Discover Sustainability*, 3, 6(1), 237, <https://doi.org/10.1007/s43621-025-01049-4>

Lukman KM, Hastuti LP, Oktavia D, Pratiwi D, Uchiyama Y, Harding D. (2025), Towards blue skies: A comprehensive review and regional mapping of ambient air quality in Indonesian cities, *Journal of Environmental Management*, 1, 389, 126132, <https://doi.org/10.1016/j.jenvman.2025.126132>

Saga T, Taichi N, Uchiyama Y. (2025), Spatial patterns of ecosystem disservices across urban-rural gradients: municipal wasp extermination data from Kobe, Japan. *Urban Ecosystems*.

28(5), 180, <https://doi.org/10.1007/s11252-025-01788-2>

Kajiura M., Yano F., Fukuda H. (2025), Design and Evaluation of a Conductive-Knit Sensor System for Measuring Forearm Pronation and Supination, *Cureus Journal of Medical Science* 17(9). <https://doi.org/10.7759/cureus.93323>

Ueda S., Fukuda H. (2026), Development and Validation of a Wearable Softness Sensor Based on Fingernail Deformation and an Inertial Measurement Unit for Quantifying Palpation, *Cureus Journal of Medical Science* 18(2). <https://doi.org/10.7759/cureus.104461>

Tominaga M, Sakoi C, Yamada K, Akimoto S, Kurushima T, Ishikawa S, Yuasa M. (2025) “Characteristics of chemical and volatile components of beef-based consommé double prepared by experts and non-experts”, *Food and Humanity*, 4, 100594. <https://doi.org/10.1016/j.foohum.2025.100594>

Sakamoto M., Yamaguchi E., Yamamoto T., Matano M., Ohmido N., Murayama R. (2026), An SSI-based instructional unit to enhance primary students’ risk-related decision-making, *Education Sciences*, 16 (1), 143, <https://doi.org/10.3390/educsci16010143>

(7) その他論文

< 自然環境論 >

中山牧水, 小谷野由紀, 北畑裕之 (2026) 「自己駆動粒子：無生物から生物の運動を探る」『生物物理』66, 23-27.

佐藤春実「低波数振動分光法による高分子の高次構造と分子間水素結合の研究」, *分光研究 総説*, 73, 6号, 160-171, (2025)

< 数理情報環境論 >

Aoki, T., **Escolar, E. G.**, Tada, S. (2025). Ummand-injectivity of interval covers and monotonicity of interval resolution global dimensions. *Journal of Applied and Computational Topology*, 9, 13, <https://doi.org/10.1007/s41468-025-00210-2>

< 生活環境論 >

國井大輔、林岳、佐藤真行(2025)「農村景観評価に対するモバイル・ビッグデータ活用の検討」,『農林水産政策研究』(査読つき), 第40号, pp. 27-43 .

周 俊男, 田畑智博 (2025) 「労働需要に基づく木質バイオマス供給可能量の将来推計に関する研究」

『土木学会論文集』 Vol. 81, 25-26025.
<https://doi.org/10.2208/jscej.25-26025>

Mukoyama T, Tsai P, Tabata T (2025) People are favorable towards the use of recycled plastic products?. Proceedings of the 20th Conference on Sustainable Development of Energy, Water and Environment Systems, SDEWES2025.1010, 1-8. (国際会議プロシーディングス論文)

Tabata T and Tsai P (2025) The Role of Life Cycle Assessments in Digital Product Passport Implementation for Building a Plastic Circular Economy. Circular Economy and Sustainability, 5, 3145-3157.
<https://doi.org/10.1007/s43615-025-00552-0>

Yokouchi, N., Fujisawa, R., Takao, Y., (2026), Japanese version of the Work Group Inclusion Scale: Assessment of psychometric properties using item response theory, Japanese Association of Industrial/Organizational Psychology Journal, 39(2): 161-174.

Ikeda, M., Yokouchi, N., Fujisawa, R., Ishiyama, N., Takao, Y. (2026), Development of the Japanese version of career crafting assessment scale, Japanese Journal of Administrative Science, 37(2-3): 63-76, <https://doi.org/10.5651/jaas.37.63>

Alsaaidh B, Quevedo JM, Lukman KM, Uchiyama Y, Sofue Y, Kohsaka R. (2025), Blue carbon ecosystems in the Coral Triangle: A perceptive approach to climate adaptation, APN Science Bulletin, 14(1), 190-9, <https://doi.org/10.30852/sb.2024.2790>

Yuasa M, Takimoto A, Shimada R, Tominaga M. (2025) “Antioxidant, physical, and sensory properties of dried fresh onion (*Allium cepa* L.) leaves-added cookies”, Trace Nutrients Research, 42, 1-7. <http://www.jtnrs.com/sym42/01.pdf>

湯浅正洋(2025)「タマネギをおいしく食べる秘訣」,『園芸新知識 はなとやさい』,Vol. 80, No. 9, 17-18.

菊池亮子, 吉永奈津希, 湯浅正洋, 古賀貴子(2025)「大量炊飯に用いた調理機器の違いが米飯の品質に与える影響」,『長崎国際大学論叢』, Vol. 25, 85-94.

秦堯史, 井上真理, 「タオルの触感に対する嗜好と物理特性との関係」, Journal of Textile Engineering, (査読つき)第 71 号, 第 2 巻, pp. 30-39.

< 社会環境論 >

坂井晃介 (2026) 「「責任」の意味論分析：19 世紀後半ドイツにおける社会政策の形成プロセスを事

例に」『社会政策』17(3), 54-65.

中澤芽衣・原 将也・黒崎龍悟 2026. 故郷の味を再現する―群馬県における熱帯作物キャッサバ消費の実態. 摂南社会学 3: 44-55. (査読付き)

原 将也 2025. 大学教育におけるオンラインを活用した国際理解フィールド学修の効果―神戸大学国際人間科学部 GSP の実践報告. 兵庫地理 70: 53-59.

原 将也 2025. ザンビアにおけるプラスチック規制関連法と使用済みプラスチックの流通. アフリカ研究 108: 37-40.

原 将也 2026. ザンビアのシマにみる都市と農村の食. 地理 71(3): 22-30.

井口克郎(2025)「高齢社会対策大綱を解剖する : 目指す方向と問題点」『住民と自治』No. 744, 自治体問題研究所編, 自治体研究社, 5-9.

井口克郎(2025)「介護保険制度とケアマネジャーの 25 年 : 社会保障費抑制と介護の営利化政策のなかで」『ふくしのひろば』No. 304, 総合社会福祉研究所編, 26-29.

井口克郎(2025)「書評 丹波文城著「原子力災害からの複線型復興:被災者の生活再建への道」明石書店、2023 年」『社会政策』17 (1), 社会政策学会編, 78-81.

井口克郎(2026)「能登半島地震被災地における『住み続ける権利』実現の課題―輪島市と珠洲市の復興計画をもとに―」『医療・福祉研究』第 32 号, 医療・福祉問題研究会編, 30-37.

澤 宗則(2025)「インド人―東京の IT 技術者と神戸の商人」『移民・ディアスポラ研究』14, 176-185.

太田和宏(2025)「新しいグローバル連帯の模索―東南アジアの労働実態と運動」『学習の友』8 月 No. 864, 28-35.

太田和宏(2025)「グローバル社会転換期における東南アジア―自主外交と政治の多様性」『アジア・アフリカ研究』65(4) 27-33.

太田和宏(2026)「アジアの平和と市民の役割―「脅威論」を超えて」『学習の友』1 月 No. 869 27-33.

太田和宏(2026)「歴史の記憶と忘却 : 日本軍事占領をめぐるフィリピン人の“過去消化”のありかた」JFE21 世紀財団『アジア歴史研究報告書』2025 年度 1 - 12.

(人間環境学専攻長 太田和宏)

8. 産官学共同・地域連携による教育・研究活動

8.1. 産官学共同プロジェクト

(1) 労働者のモチベーション・エンゲージメント強化に繋がる Well-being Monitor に関する研究

共同研究者：小澤（株式会社 テラアクソン）

研究資金：株式会社テラアクソンから出資

研究概要：いわゆる既存のストレスチェック等の枠ではなく、継続的なアンケートとバイタルデータを通して、幸せを感じる等の主観的ウェルビーイングをモニターすると共に、分析により個々にあった主観的ウェルビーイング増進行動を推進する仕組みを開発する。

（人間発達専攻 加藤佳子）

(2) 西陣織の技術を使った生分解性ポリエステルによるジェンダーレス・エイジレスワンピース

共同研究者：江村耕市（嵯峨美術大学）、株式会社 もりさん、株式会社 V&A Japan

研究課題：西陣織の技術を使った生分解性ポリエステルによるジェンダーレス・エイジレスワンピース

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（開拓）（代表者：上田香）、京都市伝統産業未来構築事業補助金

研究概要：生分解性ポリエステルとジェンダーレス・エイジレスワンピースという二つのテーマに学生とともに取り組み、素材・衣服に対する理解を深めた。11月15日に西陣織会館でファッションショーを開催し、2月にはミラノユニカに作品を展示した。

（人間発達専攻 上田香）

(3) アート体験によるビジネスパーソンのパフォーマンス向上に関するワークショップの企画・実施とその効果検証

本専攻研究者：清水大地

共同研究者：株式会社 SIGNING

研究課題：アート体験によるビジネスパーソンのパフォーマンス向上に関する研究

研究資金：産学共同研究（代表：清水大地）

研究概要：ビジネスパーソンの創造性と Well-being の支援・促進を目的とした芸術鑑賞・創作体験ワークショップ群を実施し、その効果検証と効果に関わる要因を解明する。

（人間発達専攻 清水大地）

(4) ウェルビーイングの実現に資する社会的つながりの新たな推定・評価方法の確立に関する研究

共同研究者：谷口隆晴・原田和弘・近藤徳彦

研究資金：大学発アーバンイノベーション神戸・大学研究者提案型（複合領域・民間企業連携区分）

研究概要：社会的つながりを定量的に評価する手法を開発する。

（人間発達専攻 増本康平）

(5) 地域在住高齢者の認知機能及びウェルビーイングに対する ICT を用いた行動変容が及ぼす影響の検討

研究代表者：秋末敏宏

共同研究者：近藤徳彦・増本康平・原田和弘・打田篤彦・古和久朋・園田悠馬・沖侑太郎

研究資金：住友生命保険相互会社

研究概要：歩行数などの身体活動要素を ICT にて計測するとともに、行動変容を惹起させる ICT を用いたプログラムにて介入することにより、認知機能の経時的変化および社会参加に対する変容をとらえることを本研究の目的とする。

(人間発達専攻 増本康平)

(6) 着圧ソックス・パンツ・サポーター等の商品開発

研究資金：コア・テクノロジー株式会社、丸紅インテックス株式会社

研究概要：着圧ソックス・パンツ・サポーター等の効果を筋活動の側面から評価する。

(人間発達専攻 木伏紅緒)

(7) お風呂と well-being

共同研究者：ノーリツ株式会社

近藤徳彦・木村哲也・原田和弘・石原暢・木伏紅緒

研究概要：社会科学・自然科学から複合的に入浴による well-being の研究を行っている。

(人間発達専攻 佐藤幸治)

(8) 運動を通じたつながりの多様性が高齢者のウェルビーイングに及ぼす影響

共同研究者：太田幸志

研究資金：公益財団法人戸部眞紀財団・研究助成

研究概要：運動を通じたどのような内容の社会的つながりが、高齢者のウェルビーイングに最も密接に影響しているのかを通じて明らかにする研究を進めている。

(人間発達専攻 原田和弘)

(9) 地域コミュニティを対象とした e スポーツの展開

共同研究者：岡田修一・近藤徳彦・原田和弘・石原暢

研究資金：西日本電信電話株式会社

研究概要：地域コミュニティの住民を対象とし e スポーツ体験がコミュニケーション活性や気分に及ぼす影響を明らかにする。

(人間発達専攻 増本康平)

(10) 疲労とホルモン測定に関する学術相談

研究資金：株式会社本田技術研究所

研究概要：耐久レース等の運転中の疲労軽減に関するホルモンの測定とその評価方法に関する学術相

談を行なった。

(人間発達専攻 佐藤幸治)

(11) 女性の体調に関するホルモン測定に関する学術相談

研究資金：親子支援ネットワーク協会

研究概要：ウェアラブルデバイス（Apple Watch 等）と AI 技術を活用し，女性の体調やホルモンバランスの変動を可視化・スコア化するアプリケーションの開発に関するホルモンの測定方法や測定項目の学術相談を行なった。

(人間発達専攻 佐藤幸治)

(12) 兵庫県・兵庫県スポーツ協会共催企画展「近代スポーツと兵庫」企画委員会

構成メンバー：角野幸博，秋元忍，山下史朗，多賀茂治，山口泰雄

研究資金：兵庫県スポーツ協会

研究概要：企画展「近代スポーツと兵庫」の開催方針の検討・決定にあたりとともに，開催内容・方法等についての調整を行う。

(人間発達専攻 秋元忍)

(13) 幼児へのプロジェクター機器等の論拠に基づく活用効果の仮説および仮検証

本専攻研究者：北野幸子，村瀬瑠美

研究代表者：北野幸子

研究資金：セイコーエプソン，共同研究

研究概要：幼児へのプロジェクター機器等の論拠に基づく活用効果の仮説および仮検証

(2025 年から 2027 年)

(人間発達専攻 北野幸子・村瀬瑠美)

(14) 共同研究先：中国四国地方環境事務所からの受託研究

研究課題：アユモドキ分布状況調査

内容：岡山県内に生息する天然記念物のアユモドキの保全のため，県内の河川において環境 DNA 調査を実施し，アユモドキの分布域について調べた。

(人間環境学専攻 源利文)

(15) 共同研究先：ひょうご環境創造協会との共同研究

研究課題：環境 DNA 分析による生物調査方法に関する研究

内容：兵庫県内の淡水域および沿岸の海域を対象に，環境 DNA 分析による生物多様性調査を実施するとともに，新規マーカーの開発などを行った。

(人間環境学専攻 源利文)

(16) 神戸市受託研究 令和 7 年度里地里山の生物多様性向上に向けた整備及び生態系サービスの評

価に係る調査研究

研究代表者(本専攻教員)：丑丸敦史 共同研究者：源利文、佐藤真行(本専攻教員)、石井弘明(本学農学研究科)

(人間環境学専攻 丑丸敦史)

(17)一般社団法人コ・クリエーションジェネレーター(CCG)との共同研究

職場環境における心理社会的・物理的・生物化学的要因が 従業員のウェルビーイングに与える影響：JAM BASE を対象とした継続的研究

研究代表(本専攻教員)：横内陳正 共同研究者：内山愉太、丑丸敦史、佐藤真行、源利文(本専攻教員)

(人間環境学専攻 丑丸敦史)

(18)まるやま FESTIVAL2025 実行委員会主催のまるやま FESTIVAL2025「海と学びの交差点 - 地域にひらかれた“海業教育”の可能性」にて、身近な生き物と食文化の在り方について報告を行い、参加した企業関係者・市民と議論を交わした。

(人間環境学専攻 佐賀達矢)

(19)株式会社中電シーティーアイとの共同研究

電力分野の現状を考慮したデータのアーカイブとその数理的構造分析

(人間環境学専攻 長坂耕作)

(20)神戸大学ウェルビーイング先端研究センター主催の「異分野共創で切り拓くウェルビーイング社会」にて、環境とウェルビーイングの関係について報告を行い、参加した企業関係者・市民と議論を交わした。

(人間環境学専攻 佐藤真行)

(21)大阪市主催の「大阪市生物多様性の保全に向けたネットワーク会議」に参加し、ファシリテーターとして都市の生態系サービスについて参加した企業関係者・市民と議論を交わした。

(人間環境学専攻 佐藤真行)

(22)大阪市主催の「大阪市生物多様性の保全に向けたネットワーク会議」に参加し、都市の生態系保全と市民の関わりについて基調講演を行い、参加した企業関係者・市民と議論を交わした。

(人間環境学専攻 佐藤真行)

(23)一般社団法人廃棄物資源循環学会企画運営委員会主催の「”あの先生”と気楽に話せる交流会」に講師として参加し、参加した自治体・企業関係者と廃棄物の資源循環に関する議論を交わした。

(人間環境学専攻 田畑智博)

(24) 一般社団法人廃棄物資源循環学会災害廃棄物研究部会主催の「災害廃棄物発生量推計の研究動向」にて、災害廃棄物発生量推計を起点とした研究の展開に関する講演を行い、参加した自治体・企業関係者と議論を交わした。

(人間環境学専攻 田畑智博)

(25) 認定 NPO 法人フードバンク関西、兵庫こども食堂ネットワークと共同で、子ども食堂への食品ロスの削減活動とその効果に関する調査研究を実施した。

(人間環境学専攻 田畑智博)

(26) 尼崎市経済環境局と共同で、日鉄鋼板 SGL スタジアム尼崎(ゼロカーボンベースボールパーク)の来訪者の移動・飲食に伴う環境影響の調査研究を実施した。

(人間環境学専攻 田畑智博)

(27) 生活協同組合コープこうべ、エプソン販売株式会社、セイコーエプソン株式会社と共同で、使用済コピー用紙のリサイクルによる資源循環システムの実現可能性に関する調査研究を実施した。

(人間環境学専攻 田畑智博)

(28) 神戸市環境局、国立研究開発法人産業技術総合研究所安全科学研究部門、アマタ株式会社と共同で、神戸市における質の高いプラスチックごみの回収とリサイクルに関する調査研究を実施した。

(人間環境学専攻 田畑智博)

(29) 株式会社住環境計画研究所と共同で、エネルギー価格高騰に対する家計の脆弱性測定手法の技術開発に関する調査研究を実施した。

(人間環境学専攻 田畑智博)

(30) 大学都市神戸産官学プラットフォーム主催の「第 17 回 KOBE アカデミックトーク『ウェルビーイングが拓く未来のライフデザイン—AI 時代をより良く生きるための“思考”と“働き方”』」にて発表を行い、参加した企業関係者・市民と議論を交わした。

(人間環境学専攻 横内陳正)

(31) 共同研究先：村田機械株式会社、高知大学との共同研究

研究課題：導電糸を用いたニットセンサによる人間計測に関する研究開発

内容：スマートテキスタイルとしてのニットセンサの機械・電気特性を理論的・実験的に明らかにし、主に、人間計測における「嚥下センサ」の開発に取り組んだ。現在、開発したニットセンサの医療機器認証など、製品化に向けての最終段階に入っている。

(人間環境学専攻 福田博也)

(32) 共同研究先：京丹波栗工房との共同研究

研究課題：食品廃棄物・栗の皮の新規有効利用法の提案

内容：栗の加工時に生じる食品廃棄部位の有効利用方法に関して、共同研究先と本学が共同で出願していた特許の取得が実現した(特許第 7774271 号)。本年度は、本特許における技術に基づいて開発した製品の販売・提供を目指した取り組みを進めている。

(人間環境学専攻 湯浅正洋)

(33) 共同研究 VIRTUS Research 株式会社との共同研究

研究課題：ウールを利用した褥瘡予防クッションの性能に関する研究

内容：食用羊のやや太めのウール繊維を利用したクッションの圧縮特性、圧分散の性能、洗濯耐久性に関する実験研究を行った。

(人間環境学専攻 井上真理)

(34) 共同研究先：株式会社アシックスとの共同研究

研究課題：テキスタイルの風合い評価方法および、その数値化に関する研究

内容：スポーツアパレルを想定し、テキスタイルの開発や訴求のために、テキスタイルの風合いを客観的に表す評価方法およびその数値化に関する研究を行った。

(人間環境学専攻 井上真理)

(35) 委託研究先：岡山県産業振興財団「Go Tech 事業」からの受託研究

研究課題：布地の『肌触りと耐久性』評価装置、評価方法の開発

内容：ニット素材を含む布地の力学特性を正確に計測可能なシステムを構築することを目的として、主にデータの集積を行う。また、ヒューマンインターフェースとしての繊維製品の心地よさを標準化、デジタル化するために、データベースの構築を行っている。

(人間環境学専攻 井上真理)

(36) 共同研究先：帝人フロンティア株式会社

共同研究者：阪上隆英、塩澤大輝

研究課題：光学技術における繊維製品の識別技術の検討

内容：工学技術を用いて繊維製品の識別のための技術開発を行った。

(人間環境学専攻 井上真理)

(37) 共同研究先：帝人フロンティア株式会社

共同研究者：阪上隆英、塩澤大輝

研究課題：繊維 to 繊維の資源循環構築の実現に向けた研究開発・実証

内容：回収繊維製品の高品位な繊維製品への水平リサイクルによる資源循環システムを構築することを目的として、繊維 to 繊維リサイクルに係る技術開発を行った。

(人間環境学専攻 井上真理)

(38) 共同研究先：地方独立行政法人京都市産業技術研究所、京都橘大学との共同研究

研究課題：持続可能な繊維製品のための新たな風合い評価法の構築

内容：繊維製品として、今年度は化粧用パフに用いられるビロード布地の風合いに関する測定装置の開発、主観評価、脳波測定の実験を進め、風合い評価法の構築に関わる研究を行った。

(人間環境学専攻 井上真理)

(39) 共同研究先：クラレトレーディング株式会社との共同研究

研究課題：特定の使用環境における快適性評価

内容：スポーツの試合時のインターバルにおける衣服内の快適感、また建物の中での軽易な作業時における衣服の快適感に関する研究を行っている。

(人間環境学専攻 井上真理)

8.2. 地域連携プロジェクト

(1) 谷正人 サントゥールソロコンサート 2026 (東京公演)

【イラン伝統音楽 全 12 旋法演奏シリーズ Vol.1】 シュール旋法／バヤーテ・トルク旋法

会場：ボイラー室 (旧音や金時)，2026. 3. 22

(人間発達専攻 谷正人)

(2) 「都会の民族芸能 (徳久ウィリアム×助川太郎 DUO)」へのサントゥールソロゲスト出演

徳久ウィリアム主催 東京：ボイラー室，2026. 2. 5

(人間発達専攻 谷正人)

(3) 「魅惑のペルシャ伝統音楽」へのサントゥールソロゲスト出演

音楽サロン DATCHA (ダーチャ：愛知県稲沢市) 主催，2025. 11. 29

(人間発達専攻 谷正人)

(4) 「都会の民族芸能 (徳久ウィリアム×助川太郎 DUO)」へのサントゥールソロゲスト出演

徳久ウィリアム主催 東京：ハコギャラリー，2025. 10. 30

(人間発達専攻 谷正人)

(5) 日本経済新聞 WEB 「イラン伝統楽器「サントゥール」の演奏会，微分音の浮遊感を味わう

関西発・文化の風 イチ押し！」2026 年 3 月 9 日

(人間発達専攻 谷正人)

(6) 中外日報 「イランの民族楽器サントゥールを演奏する」ほっとインタビュー，2026 年 2 月 24 日

(人間発達専攻 谷正人)

(7) 「坂の街神戸」と地域住民の Well-being：坂に息づくコミュニティの構築

研究代表者：片桐恵子

共同研究者：原田和弘・打田篤彦・Kim Nahyun

研究資金：大学と連携した地域課題の調査研究（神戸市）

研究概要：坂の街神戸における坂に注目し、坂が住民の well-being に与える影響について検討する。

（人間発達専攻 片桐恵子）

9. 社会的活動・震災復興支援

9.1. 災害地への支援活動

東日本大震災被災地活性化支援 岩手県大船渡市赤崎町

2011（平成 23）年 3 月 11 日に津波によって大きな被害を受けた岩手県大船渡市への復興支援を続けて、15 年になる。2025 年 5 月、11 月に、小規模で赤崎を訪問し、再開された地域行事や赤崎復興市（2012 年より始まり、2 年にわたり中断されていた復興マーケット）の運営支援を行った。また、2026 年 3 月 7 日～12 日にかけて、井口克郎准教授とともに、ESD プラットフォーム WILL（ヒューマン・コミュニティ創成センター支援組織）のメンバー 15 名で、岩手県大船渡市赤崎町を訪問することができた。3 月 11 日の慰霊式典の準備・運営補助をはじめ、災害公営住宅・高台移転団地への友愛訪問のほか、今後の復興支援計画についても地域住民とともに協議することができた。

現在、大船渡市では、防災集団移転、災害公営住宅移転、防潮堤建設が終わり、復興道路も完成した。ハードの整備はほぼ終わった。教育・福祉・医療の仕組みも徐々に正常に戻りつつある。しかし、津波やコロナ禍によって失われた人・町の活力は、いまだ回復していない。むしろ、漸減的な活力の低下が見て取れる。公民館活動の減少、地区公民館のコミュニティセンターへの移行、地域自治会の弱体化、婦人会などの地縁組織の解体、人口減少を引き金とする学校の統廃合など、あまりいい話はない。

しかし、発災以来継続して支援を続けるボランティアプログラム（現在の名称は、ESD プラットフォーム WILL 災害復興支援プロジェクト）は、単に現地の活動支援というだけではなく、被災地の子供と高齢者の交流、近接地域間の関係創成などの観点で大きな意味を見出している。まちづくり・まちおこしに不可欠なヒューマンリソース（社会関係資本）の充実に貢献しているといえよう。

R6 年能登半島地震・水害復興支援 石川県輪島市

上記の東日本大震災活性化支援と同時並行で、令和 6 年能登半島地震・水害被災地の支援プロジェクトを断続的に実施してきた。北陸学園大学と協力して、輪島市門前町の仮設住宅や被災現場での活動を中心に、支援物資の配給支援、カフェ事業、生活支援事業などを行うとともに、他大学のボランティアと共に隆起した海岸の整備活動や清掃活動等を行った。

2025 年度も昨年同様、5 月の GW を皮切りに、ほぼ月 1 度のペースで活動した。参加延べ数は、今年度 80 名程度となっている。事業資金は、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターおよび神戸大学都市安全研究センターの運営基金及び神戸大学基金によって支えられているが、学内外の研究者仲間や ESD プラットフォーム WILL 会員の寄附にも支えられている。また、今年度は、特に、日本赤十字社やひょうごボランタリープラザの学外財団からの助成金も得た。学外組織と連携して活動していることが特徴である。

（人間発達専攻 松岡広路・井口克郎・後藤聡美）

10. 附属施設

10.1. 発達支援インスティテュート

10.1.1. 発達支援インスティテュート運営委員会

本委員会は佐藤春実発達支援インスティテュート長（研究科長）、松岡ヒューマン・コミュニティ創成研究センター長、伊藤俊樹心理教育相談室長、源利文サイエンスショップ室長、北野幸子教育連携推進室長、長ヶ原誠アクティブエイジング研究センター長及び丑丸敦史副研究科長で構成される。また、古川昌紀事務部長、西田望智子総務係長も出席した。

各センター・室等の連携を図るために、令和6年度からは全学附属センターの枠組みから研究科内のものに変更し、運営を開始した。この関係で発達支援インスティテュートと各センター・室等の関わり、研究科構成員へ発達支援インスティテュートの活動紹介方法、研究科内のプロジェクトとの連携の検討が必要となった。令和7年度も本委員会を毎月1回程度のペースで開催し、研究科としての研究基盤の強化を図ると同時に、毎回各室・センターの活動報告を定例化し相互の連携を強めた。

（発達支援インスティテュート長 佐藤春実）

10.1.2. 心理教育相談室

心理教育相談室は、市民を対象とし、地域に開かれた相談室である。臨床心理学や心理療法に関する知見を生かして、地域の人々の心の健康に貢献することを目的としている。同時に、当相談室は、本研究科人間発達専攻臨床心理学コースが臨床心理士養成第Ⅰ種指定校としての認可を維持するために必要な実習機関であり、コース所属の学生たちの臨床訓練の場として機能する目的を有している。平成12年度に総合人間科学研究科の附属施設として設立され、平成17年度からは同研究科附属発達支援インスティテュートの一部門に位置づけられた。心理教育上のさまざまな問題について、臨床心理学の立場から専門的な援助を提供する活動を行っている。年間を通じて開室し（年末年始、夏季の休室期間を除く）、カウンセリング、プレイ・セラピーなどの心理療法を中心に、必要に応じて心理テストを実施するなどの心理臨床実践を行っている。相談は有料である。相談内容は、幼児期・児童期に家庭や学校でみられる発達教育上の問題、青年期のアイデンティティ形成に絡む課題、成人期のメンタルヘルス、熟年期の家族関係や生き方に関することなど、多岐にわたっている。また、平成30年度より本学研究科人間発達専攻博士課程前期課程こころ系講座臨床心理学コースにおいて、国家資格である公認心理師の養成が始まり、心理教育相談室はその実習の一部を引き受けている。心理教育相談室に所属する臨床相談員が実習指導者となり、公認心理師のカリキュラムに指定された実習時間（450時間以上、そのうち心理に関する支援を要する者等を対象とした心理的支援等270時間以上）の一端を担う役割をしている。なお、心理教育相談室における研修生の面接担当時間の確保等、今後公認心理師カリキュラムに対応するための対策が重要な課題の一つとなってくるものと思われる。

相談室の組織構成、ならびに相談システムについては以下のとおりである。心理教育相談室は、心理教育相談室運営委員会により管理運営される。委員会の構成員は、運営委員会委員長の相談室長をはじめ、副相談室長、ほか2名の委員からなる。また、本年度の相談室スタッフは、教員6名（臨床心理学コース担当、臨床心理士、公認心理師）、博士後期課程こころ系講座院生1名、前期課程臨床心理学コース院生24名（M1：12名、M2：12名）、事務補佐員1名である。

新規の相談申込みは、基本的に電話受付によって行われている。この受付業務も、臨床心理学コースの授業「臨床心理基礎実習」の一環となっており、修士課程 1 年 (M1) の学生たちが相談室スタッフの一員として交代で臨んでいる。受付時間は、月曜日の午後 1 時～2 時 45 分、火曜日～金曜日の午後 1 時～6 時 (いずれも祝日は除く) である (年末年始、夏季のお盆期間は閉室)。毎年 30 件前後の新規相談申込があり、受理面接、インテークカンファレンスを経て面接受理、担当者、継続面接の形式等が決定される。

年間相談件数は、コロナの影響は低下し、従来の相談件数に近づいてきている。引き続き、地域住民の心の健康に貢献する心理相談機関として、ならびに、臨床心理士養成に関わる実習機関として適切な活動をしている。なお、詳細な面接受付件数、面接受理数、面接回数等は年次報告資料編に掲載するとおりである。平成 22 年度より心理教育相談室は、年 1 回『神戸大学大学院発達支援インスティテュート心理教育相談室紀要』を発刊しており、院生たちに心理臨床の実践研究をまとめる場を提供している。今年度第 16 号は、事例研究論文 6 篇、相談室活動報告、相談員・研修生活動報告から構成される。なお、掲載された事例研究論文の題目は以下の通りである。博士課程後期課程 3 年 加藤 哲子「ケア役割を担っていた娘の学校不適応に悩む 40 代母親との面接」、博士課程前期課程 2 年 上田 朋樹「不登校児童の母との心理教育面接」、博士課程前期課程 2 年 上田 真菜「不安を抱えながら自分主体で歩み始めた 30 代女性との面接」、博士課程前期課程 2 年 岡林 桃香「Mo. からの愛情が欠乏している 50 代女性との面接」、博士課程前期課程 2 年 中村 祐那「ASD の娘と先天性筋ジストロフィーの娘をもつ 50 代女性との面接」、博士課程前期課程 2 年 西 裕大「自身が変化することを拒み、対人関係における悩みを繰り返し経験する 40 代女性との臨床心理面接」

(心理教育相談室長 伊藤俊樹)

10.1.3. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

(1) ジェンダー・コミュニティ支援部門

近年、世界各地において社会的分断や格差の問題がいつそう深刻化している。異なる課題を抱え、異なる立場にある人々が、葛藤を抱えながらもどのように共生していくことができるのかという問いは、あらためて重要な課題となっている。こうした状況のもとで、自己と他者に向き合い、社会で生起している諸問題をともに考えようとする実践の一つが「哲学対話」である。本部門では、一人一人が日常生活のなかで抱えている問いや問題を持ち寄り、ともに考える探究のコミュニティ (哲学カフェ) を創出する取り組みを継続してきた。そこでは、それらの課題を「マジョリティ」の立場からではなく、むしろ「マイノリティ」の視点から捉え直そうとする臨床哲学的な対話実践が行われている。ジェンダーやセクシュアリティに関する差異、障害の有無、世代間や文化間の違いなどを踏まえながら、「生きづらさ」の経験について丁寧に考え続けている。2025 年度にジェンダー・コミュニティ支援部門が実践した 4 つの活動について報告する。

1. 「神戸大学附属特別支援学校での保護者向けの哲学カフェ」

2025 年 4 月 30 日、5 月 21 日、6 月 18 日、7 月 9 日、9 月 19 日、10 月 22 日、12 月 10 日、2026 年 1 月 28 日の計 8 回、兵庫県明石市にある神戸大学附属特別支援学校において、同校に現在在籍す

る児童生徒および卒業生の保護者（主に母親）を対象とした哲学カフェを実施した。各回とも9時30分から11時30分まで開催され、毎回10名程度の保護者に加え、同校副校長の殿垣亮子氏が参加した。対話は、主催者の稲原および大学院生・研究員の井上太一氏がファシリテーターを務め、進行的な対話を行った。2025年度は計8回の哲学カフェを開催し、各回で異なるテーマを設定して議論を深めた。取り上げたテーマは、①「自由とはなにか」、②「人の豊かさとはなにか」、③「生きがいとはなにか」、④「空気を読むとはどういうことか」、⑤「迷惑とはなにか」、⑥「つながりとはなにか」、⑦「特別とはなにか」、⑧「言葉とはなにか」である。これらは一見すると障害と直接関係のないテーマのようにも見えるが、対話の過程において、参加者は障害のある子どもとの日常経験を手がかりに、それぞれのテーマについて多様な視点から語り合った。対話の中では、日常生活の中で感じている困難や「生きづらさ」に加え、喜びや楽しさといった経験についても共有され、参加者同士が互いの経験を踏まえて考えを深める場となった。なお、本哲学カフェの実践報告は『ふくしと教育』第43号に掲載されている。今後も神戸大学附属特別支援学校において、保護者向け哲学カフェを継続して実施する予定である。

2. Learning Creators' Lab 2025 講師

2025年10月26日午前、教員や教育関係者を対象としたオンラインセミナー「対話で深める—子ども哲学（P4C）における探究」を、立教大学文学部教育学科の河野哲也氏とともに実施した。本セミナーは一般社団法人こたえのない学校の主催によるものであり、本部門の専任研究員である稲原はアドバイザーとして同団体の活動に関わっている。Learning Creators' Lab（LCL）は、探究学習に関する主要な理論を学びながら、チームごとに設定した探究プロジェクトを約8か月にわたり開発・実践していく教育者向けプログラムである。河野氏と稲原は、そのプログラムの一コマを担当した。LCLは、参加者自身がプロジェクトを構想・実践することを通して、自らの経験を振り返りつつ主体的に学び、行動する力を養うことを目的としており、探究学習に関する知識や実践的スキル、さらには実践への自信を培う機会となっている。本セミナーでは、子ども哲学（P4C）における探究をテーマに講義を行った後、参加者を二つのグループに分けて対話実践を行った。探究学習において対話は重要な要素であることから、学校現場でも取り入れやすいP4Cの基本的な進め方や対話のための簡単なスキルについて紹介した。なお、一般社団法人こたえのない学校の代表理事である藤原さと氏は継続的に実践交流を行っており、2026年度も対話および探究に関する活動を共同で進めていく予定である。

3. B03班「ケイパビリティ毀損と人間の尊厳」主催のワークショップ

学術変革領域研究（A）「尊厳学の確立」（研究課題番号23H04855）B03経済・福祉政策班「ケイパビリティ毀損と人間の尊厳—福祉経済政策の倫理と哲学—」（研究代表者：後藤玲子）が主催し、本部門が共催するワークショップおよび国際交流セミナーを本年度は3回実施した。

まず2025年6月7日、神戸大学鶴甲第2キャンパスにおいて国際交流ワークショップ“The Phenomenology of Human Dignity and Vulnerability”を開催した。本ワークショップはB03班とフィンランドの研究助成団体Kone Foundationが主催し、本部門が共催したものである。登壇者としてIrina Poleshchuk氏（ヘルシンキ大学）、松葉類氏（立正大学）、Joonas Martikainen氏（ヘルシ

ンキ大学)、小手川正二郎氏(國學院大学)が報告を行い、人間の尊厳や脆弱性をめぐる経験について、現象学的観点から議論が行われた。長期的な痛みの経験、社会的苦悩や羞恥、排除の問題などをめぐり、尊厳の回復や他者との関係性について活発な討論が展開された。

次に2025年12月17日、神戸大学鶴甲第2キャンパスにおいてB03班主催ワークショップ「支援と尊厳—見えない声に耳をすますとともに生きるコミュニティのつくり方」を開催した。NPO法人レスキュー・ハブの坂本新氏と、一般社団法人こたえのない学校の藤原さと氏を招き、若年女性支援の現場や教育実践の経験をもとに、「支援」と「尊厳」の関係について議論を行った。社会の中で見えにくくなっている声に耳を傾けることの重要性や、ケアのあり方、誰もが共に生きられるコミュニティの可能性について、参加者との対話を通して多角的な議論が行われた。

さらに2026年3月1日には、同じく神戸大学鶴甲第2キャンパスにおいてB03班主催ワークショップ「民主主義と尊厳——『生きられた経験』から問い直す——」を開催した。本ワークショップでは、民主主義を制度や手続きだけでなく、人びとの尊厳がどのように理解され守られているかという観点から再考することを目的とした。藤原さと氏(一般社団法人こたえのない学校)、西山溪氏(開智国際大学)、有坂陽子氏(ヒルデスハイム大学)、稲原美苗(神戸大学)が講演を行い、教育実践、政治思想、現象学など多様な視点から議論が展開された。講演後には参加者との全体対話が行われ、「尊厳」という概念を社会制度や教育、日常生活の経験と結びつけて考える建設的な議論の場となった。

これらのワークショップを通して、尊厳をめぐる理論的検討と社会的実践を結びつける議論が行われ、本領域研究における学際的交流を深める機会となった。

4. FOX Project (FOX Lab) 講師

インクルーシブ教育と探究学習/PBL (Project-Based Learning) を組み合わせた教育プログラム「FOX Lab」(一般社団法人こたえのない学校主催)において、2026年3月29日の最終回の講師として参加した。本プログラムは、学校教員、社会教育関係者、行政関係者、地域の学び場づくりに関わる実践者、学生などを対象に、インクルーシブ教育の実践を担う人材の育成を目的として実施されている。FOX Labでは、インクルーシブ教育を単なる知識や技術の習得としてではなく、多様な背景をもつ人びとが共に学び合う場をどのように創り出すことができるのかという観点から、「インクルーシブなマインド」を育むことを重視している。参加者は約7か月にわたるプログラム期間を通してホームグループを形成し、対話を重ねながら教育や地域におけるインクルーシブなプロジェクトの構想を進めてきた。

稲原は最終回において、参加者によるプロジェクト発表の後に実施された「インクルージョン」をテーマとする哲学対話を担当し、ファシリテーターとして対話を進行した。参加者はそれぞれの実践や経験を踏まえながら、多様性や共生、依存関係のあり方などについて意見を交わし、インクルーシブな学びやコミュニティのあり方について考察を深めた。

(担当 稲原美苗)

(2) 社会教育・サービスラーニング支援部門

2017年4月のヒューマン・コミュニティ創成研究センター(以下、HCセンター)の組織変更によ

って、新たに「社会教育・サービスマーケティング支援部門」が創設され、9 年になる。この部門は、文字通り、学校教育以外のノンフォーマルな教育（社会教育）の教育原理・方法の探究と、ノンフォーマル教育だからこそ持つ開拓性・斬新性・柔軟性・実際性を学校教育と連動させる「サービスマーケティング」の在り方の探究を、実践研究のターゲットにおく部門である。

一般に、社会教育は、学校教育以外の組織的な教育活動と理解されるが、本部門では、制度化されていない幅広い教育的な活動（インフォーマル・エデュケーション）を視野に入れ、「いかに新しい教育が立ち現れるのか？」を問いとする実践的な研究も課題とする。すなわち、社会的活動のなかで「教育らしきもの＝学び」が立ち現れ、ノンフォーマル教育として輪郭をもち、その過程で制度化された教育（フォーマル教育）としての学校教育と連動して教育的効果が高まっていく、という教育生成の流れを、全体構図とする。

それゆえ、HC センターの他の部門のキーワードでもある、「ボランティア」「エンパワメント」「インクルージョン」「アンラーニング」「対話」「共生」「ネットワーキング」「ソーシャルアクション」「持続可能な開発」など、が総合化されたフィールドがターゲットとなる。教育生成の全体の流れを意識したうえで、多様な領域を視野にいれながら、各キーワードを基盤とした実践・研究の連環の様態を探究することが、本部門の使命である。以下の 5 つの実践フィールド研究を実施している。

1. ESD ネットワーキング支援事業

国連大学認証組織（RCE 兵庫-神戸：「ESD 推進ネットひょうご神戸」）の組織化・企画創出の過程におけるアクションリサーチ（参与観察・関与観察など）を主とする。「インクルーシヴ社会支援部門」「国際開発実践支援部門」などの HC センターの他の部門及と連携しつつ、環境系・福祉系・国際開発系・まちづくり系などの多様な市民・企業・行政組織が互いの活動ベクトルを接近・交差させる過程や、協働的活動のコーディネート の在り方、及び、その過程での学習プロセスの特徴を解明しようとしてきた。

本年度は、3 月 20、21 日に、神戸大学鶴甲第 2 キャンパスにおいて、全国の 7 つの RCE のメンバーおよび阪神間の NPO・市民団体・ボランティア団体のメンバーが一堂に会して ESD 運動推進の課題を検討・協議する「国内実務者会議・第 8 回 ESD 実践研究集会」を開催した。RCE 兵庫-神戸のユース組織として認定されている「ESD プラットフォーム WILL」（次項参照）の活動報告をはじめ、同組織主導のワークショップなどが行われた。

2. ESD プラットフォーム WILL 支援事業

HC センターが主催・支援する高校生・大学・若手社会人を中心とする ESD 関連事業の人的・物的資源の流動化を促進する時空間づくり、すなわち、プラットフォーム創成の過程を、参加者自らが主体となって実験的・研究的に推進する事業である。「社会保障・ソーシャルアクション支援部門」が所管する「大船渡 ESD プロジェクト」,「障害共生支援部門」の「あーち」関連事業、あるいは、「国際開発支援部門」のフィリピンフィールドワーク、さらには、RCE 兵庫 - 神戸の各団体の SD 関連活動をネットワーク化し、だれでも、気軽に ESD に触れられるとともに、そのなかで、自己・社会変容の契機を得る空間の実践方法とその理論を、参加者と研究者などの関係者が協力して探求しようとするアクションリサーチである。

ESD が立ち現れる、すなわち、持続可能性をめぐる学習が生まれることが期待される本事業で

発見された学習理論である「当事者性学習論」は、関係学会でその有効性・妥当性が検討・協議され、国際誌でも高評価を得た（後藤聡美）。

3. ESD フォーマル教育推進事業（フォーマル教育×ノンフォーマル教育）

今年度からは、2006年に設立されたESDサブコースのカリキュラム・授業内容を実験的にデザインすることを主とするアクションリサーチから、全学のオープンバッジシステムと連携した「ESDプログラム」の可能性と課題を探究する実験的事業に取り組み始めている。

今年度は、「ESD基礎」「ESD論1・2」をフォーマル教育の基軸とし、ノンフォーマル教育としての学外ESDプログラムと関連付けた事業の課題と可能性を探究した。ESDが立ち現れるサービスマーケティングの在り方、および、その教育がESD実践者育成に及ぼす効果を、比較的自由度の高い高等教育において実践的に探究した。他の部門およびHCセンターに所属していない教員、他研究科（農学など）の教員とともに、学習者の学びのプロセスをデータ化し実践モデルの再構築を進めている。この事業は、三菱未来財団からの助成を受けているものでもある。

4. ESD 社会教育・生涯学習支援促進事業

これまでも神戸市・尼崎市・堺市・岸和田市などの生涯学習に関する施策にESDを位置づける努力を積極的に行ってきた。また、兵庫県嬉野台生涯教育センター生涯大学やいなみ野学園（高齢者大学校）のカリキュラムの変更のなかでESDを位置づけるために指導助言を行ってきた。今年度は、特に、神戸市職員研修所との協働で、SDGs学習プログラムを運営した。

5. 研究・学会活動

学外部門研究員の協力を得て、日本社会教育学会、日本福祉教育・ボランティア学習学会などでの学会活動の推進・支援を試みてきた。学会員等の定期的な公開研究会（月1回）をはじめ、両学会の理事・課題別研究の世話人・幹事を務める協力研究員が増えてきた。また、研究発表や学会誌投稿も積極的に行われ、2025年度実績は、著書2冊、研究発表：3本、投稿論文（査読付き）2本となっている。

以上の5つの活動を通して、ESDとしての教育の形成過程の研究、すなわち、教育哲学論、学習論、主体論、方法論の各視座からESDとは何かを探究する研究を行った。

（人間発達専攻 松岡広路・後藤聡美）

(3) インクルーシヴ社会支援部門

A. 2005年度よりヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設として開設している「のびやかスペースあーち」において、「子育て支援をきっかけにした共に生きるまちづくり」の実践を継続して行った。火曜日から土曜日まで開館し、隔月で連絡協議会を開催して多方面の機関と連携しながら運営を行った。

「よる・あーち」は、2006年度より実施している「あーち居場所づくり」を基盤として、2016年秋から開始した「のびやかスペースあーち」の基幹プログラムである。神戸市の「子どもの居場所づくり事業」の助成を受け、灘区連合婦人会との連携で、学習支援、子ども食堂、遊び、交流の4つの活動を柱とする複合的な場づくりである。毎週金曜日の夜に実施し、住民や学生が集う。さまざまな困難（主に社会性の問題、学力の問題、障害の問題など）をもつ子どもや家庭の支援に関心の中心に

置き、その他にも障害のある青年や成人など、多様な課題を抱える人たちが、市民や学生と相互に学び合う状況を創出している。2026 年 3 月に神戸市地域貢献賞を受賞した。

B. 文部科学省受託により、知的障害者に大学教育を開く実践研究を行った。10 月～2 月に特別の課程として週 3 日の授業を展開し、知的障害者 7 名を受講生として受け入れた。その成果に基づき報告書『神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム』を編集・刊行した。また、同じ文部科学省受託により、兵庫県全域で障害者の生涯学習推進のための情報収集や整理・発信、ネットワーク形成を行った。特に、県内各地に博物館を中心に社会教育施設、学校、障害者福祉関係機関等のネットワークにより、学びの場を創設・拡充していくための組織化を行った。11 月 2 日には、文部科学省、兵庫県教育委員会との共催で、近畿ブロック「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」を実施し、本部機能を担った。また、文部科学省のアドバイザーとして、各地に派遣され、2025 年度は沖縄県、青森県、東京都、鹿児島県、福岡県、大阪府で講演を行った。

C. 学内の交流ルームに 2008 年度に設置されたカフェ・アゴラの運営に携わり、障害者雇用及び実習のモデル開発を継続した。2025 年 12 月からは新たに 1 名の障害者を雇用し、湯浅研究室との連携で商品開発を行うなど、新たな展開を試みた。

D. 障害児の放課後保障の観点から 2008 年度から開始したインクルーシブな学童保育の支援を継続して行った。

E. 知的障害者のセルフ・アドボカシーグループの支援として、新聞編集支援を継続的に実施した。ほぼ毎月 1 回の編集活動を支援した。

(担当 津田英二)

(4) 自然共生地域支援部門

本部門では、自然と共生する地域社会の実現を目的として農村部等をフィールドにアクションリサーチ型の研究を行っている。本年度は、主に以下の 4 つの内容を中心に研究・実践に取り組んだ。

1) 地縁型・テーマ型コミュニティを基盤とした獣害対策の推進

野生動物による農作物食害および生活被害は「獣害問題」と呼ばれ、全国各地で様々な対策を講じている。本部門では、NPO 法人里地里山問題研究所と連携し、野生動物を「害」と考えず、被害軽減のみならず地域住民の生きがいを創出する対策（＝獣がい対策）を全国に発信している。兵庫県丹波篠山市畑地区では、人里に慣れた野生動物と地域住民との棲み分けを目標に、放棄柿を早期収穫し野生動物の集落への出没を防ぐ取り組みが 10 年前から行われている（さる×はた合戦）。この取り組みは都市農村交流や、地域住民の獣害対策に関する情報共有の場としても活用されている。さらに、当該地区では、イノシシやシカの被害防除を目的に設置された集落柵の点検補修作業を地域外の人材で補う可能性を模索するため新たに「さく×はた合戦」を展開している。これは、野生動物の集落への出没を防ぐ集落柵の点検作業に地域外人材が参加して行うもので、獣害対策をめぐる関係人口の創出に寄与する実践研究として支援を続けている。これらの取り組みの成果は、第 30 回「野生生物と社会」学会や第 8 回丹波篠山市獣がいフォーラムで発表した。

2) 自然を生かした子育て・子育て拠点施設の運営支援

兵庫県丹波篠山市の「おとわの森子育てママフィールド〜petit prix（以下、プティプリ）」は、旧味間認定こども園おとわ園舎を活用して平成 28 年 7 月に設立された地域子育て支援施設である。当施設の周囲には、子どもたちのために地域住民がボランティアに整備を行ってきた森林がある。こうした自然を生かした子育て拠点としての可能性も期待されている。そこで、自然環境を生かした子育て・子育ての環境づくりのための学びの場として「ツキイチ勉強会」を 8 年前からコーディネートしている。勉強会の目的は 1) プティプリの新規利用者層の開拓、2) 子育て中の親の興味関心を広げ、意識した学びの場づくりである。テーマや講師についてはスタッフの意見を聞きながら選定しているが、リピーターとなる参加者がみられるほか、テーマによっては新規の参加もあり、この勉強会を通じた子育て世代を対象とした学びの場が継続できている。2025 年度は、これまでの参加者が勉強会で学んだ知見を実践する「アクションチャレンジプロジェクト」を企画し、気づきを共有する中で麹調味料づくりに取り組んだ。この取り組みの成果は、丹波篠山市食育推進大会（令和 8 年 2 月 5 日実施）で発表した。

3) 丹波篠山市史編纂

兵庫県丹波篠山市は、平成 11 年 4 月に多紀郡 4 町合併により発足し、令和元年に市政 20 年を迎え、新たに丹波篠山市として歩み出した。そこで、地域が歩んできた有史以来の歴史を振り返り、神戸大学人文学研究科と丹波篠山市の共同研究事業として丹波篠山市史編さん事業に着手することとなった。市制 30 年となる令和 10 年度の刊行をめざし、既刊の町史をはじめとするこれまでの市内外の研究成果や新たな調査研究成果をふまえ、丹波篠山市の歴史を通史的に記述する「通史編」のほか、「地域編」、「歴史資料編」で構成される。通史編は、さらに「原始・古代・中世」、「近世」、「近現代」、「自然環境・文化財」で構成される。本部門では、「自然環境編」の編集を行っており、R9 年度刊行予定である。

4) 市町村の政策立案支援

岡山県高梁市の天然記念物臥牛山のサル生息地保護管理委員会として、天然記念物であるニホンザルの保全管理に向けた指導助言や、丹波篠山市の農都創造審議会や農都ささやま外来生物対策協議会への参加を通じたアドバイスを行なった。

（担当 清野未恵子）

(5) ヘルスプロモーション・健康行動支援部門

① 健康あいち：子育て支援を通じたヘルスプロモーション・健康行動支援事業を行った。

乳幼児の保護者を対象とし、心の健康を中心テーマとして取組を行った。

具体的にはのびやかスペースあいちに訪れる保護者を対象に、スタッフとの連携のもと子育てや育児後の働き方などを中心とした相談支援を定期的（4 月 3 日、5 月 1 日、6 月 5 日、10 月 9 日、11 月 6 日、12 月 4 日、2 月 5 日、3 月 5 日）に行った。またヨガ療法を専門とする公認心理師友廣麻央氏を招き、呼吸法にも取り組んだ（8 月 7 日）。保健師実習で訪問した実習生への対応も行った。次年度も引き続き相談支援を行い、事業の充実を図る予定である。

【場所】神戸市灘区民ホール 3 階 のびやかスペースあーち
神戸大学大学院人間発達環境学研究科実習観察園

② 健康の専門職を対象とした事業

保健師や管理栄養士など健康の専門職と連携し、健康の専門職を対象として生活習慣改善における行動変容に関する事業を実施した。

具体的にはこれまでに開発した特定健診・保健指導者向け研修プログラムについて検討を深め、プログラムの改定を行った。今年度は兵庫県に加え、和歌山県、JR 西日本、ベストライフプロモーションからも依頼を受け特定保健指導に関わる保健師、管理栄養士などを対象に行動変容に関する実践的な研修を行い高い評価を受けた。また加えて今年度は、特定給食施設等対象研修会での研修プログラムも開発し、給食を通じた健康づくりの推進に寄与した。そして昨年度に引き続き、社会実装に向けた基盤づくりについて検討を行った。

③ 労働者の well-being

労働者のモチベーション・エンゲージメント強化に繋がる well-being monitor に関する研究として、株式会社テラアクソンとの共同研究を行っている。今年度は、心拍等の客観データと心理指標とを連結し、客観データからストレス状況や well-being 等の主観データをモニタリングするための調査のデザインを検討し調査を開始した。

またインタビュー調査による大型商業施設の労働者を対象したモチベーション・エンゲージメント強化に繋がる well-being についての研究成果を International Positive Psychology Association (オーストラリア・ブリスベン) で発表した。

④ 国際的な事業

心の健康のための国際プログラムの開発をめざした研究活動:心の支援にあたる支援者を対象とした心の健康に関する国際調査を行うために、オーストラリア(グラーツ大学)に研究拠点を築き、海外での研究を進めた。国際共著論文を執筆し研究成果の発表を進めている。

ハンガリー(エトベシュローランド大学)との国際交流を再開し、Erasmus+による協定の締結に取り組んだ。これによりスタッフ及び学生間の国際交流の促進が期待される。

(担当 加藤佳子)

(6) 社会保障・ソーシャルアクション支援部門

◇東日本大震災津波跡地・高台移転先におけるまちづくり支援

2012 年 11 月以後、継続的に、学生・院生及び教職員が岩手県大船渡市赤崎地区公民館(2012 年 5 月 1 日に、本研究科と連携協定と締結)に赴き、支援活動をしてきた。本年も、学生・教員、これまで活動に携わってきた OB・OG らが現地を訪問し、赤崎復興市や、3.11 慰霊の集いの支援等をした。

◇石川県能登半島地震被災者への支援

2007 年 3 月の石川県能登半島地震被災者の居住保障をめぐる問題について、支援等を行った。また、2024 年石川県能登半島地震について、今年度も学生らとともに人々の生活の復興の視点から支

援や調査活動を継続的に展開した。

◇社会保障裁判等における市民支援

2013 年の国による生活保護基準引き下げ政策について受給者らが違憲性を問うている「新生存権裁判・いのちのとりで全国裁判アクション」について、兵庫県訴訟共同代表として継続して支援を行った。本訴訟では、裁判進捗が先行していた大阪・愛知訴訟について、2025 年 6 月に最高裁が原告勝訴の歴史的判決を言い渡し、国の政策の違法性が確定した。

(担当 井口克郎)

10.1.4. のびやかスペースあーち

1. 沿革

のびやかスペースあーち（以下「あーち」）は、本研究科・ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設である。本施設は、開設当初より「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」の拠点となるべく、長年に渡り地域住民に対して多様なサービスやプログラム等を提供している。また、本研究科を中心とした教員・院生・学生の実践的研究の場（研究フィールド）、授業・実習やボランティア活動の場にもなっている。

- ・2005（平成 17）年 9 月 神戸市との連携の下、灘区役所旧庁舎（灘消防署 2 階）において運営開始
- ・2007（平成 19）年 4 月 神戸市補助金事業「地域子育て支援拠点事業」を開始（現在に至る）
- ・2007（平成 19）年度 「ユニバーサルまちづくり賞」（兵庫県）
- ・2009（平成 21）年度 「市民福祉奨励賞＜児童福祉＞」（神戸市）
- ・2010（平成 22）年度 「学長表彰」（神戸大学）
- ・2015（平成 27）年度 「ひょうご子育て応援賞」（兵庫県）
- ・2016（平成 28）年 10 月 神戸市補助金事業「子どもの居場所づくり事業」を開始（現在に至る）

※2017 年 4 月からの全面移転に先行して灘区民ホールにて実施

- ・2017（平成 29）年 4 月 灘区民ホール（3 階）に全面移転（現在に至る）
- ・2025（令和 7）年度「地域貢献賞」（神戸市）

2025 年 9 月の開設から 20 年の節目を迎え、20 周年記念の特別プログラムや特別な取り組みを本年度の後半に実施した。その一つが本施設にまつわる書籍の出版（2026 年 3 月に上梓）であり、教職員のみならずこれまで「あーち」に関わった多様な人々が執筆している。また、神戸大学地域連携推進本部が主催する「地域連携事業発表会（2026 年 3 月 4 日に開催）」にてポスター発表をおこない、大学内や灘区役所の職員等と交流を図った。さらに、「あーち」の活動が地域福祉に長年にわたり貢献したとして、本年度末に神戸市より「地域貢献賞」を受賞する（2026 年 3 月 19 日に表彰式が開催予定）。

<開設 20 周年記念事業：特別プログラムおよび特別な取り組み>

- ・灘区保育サービスコーディネーターによる講習「教えて！灘区の保育 幼稚園編」8 月 5 日
- ・「健康あーち特別プログラム 呼吸法とヨガのちえ（智慧）」8 月 7 日
- ・「命をつなぐイベント in 神戸」8 月 27 日～30 日

- ・灘区保育サービスコーディネーターによる講習「教えて！灘区の保育 保育所編」9月3日
- ・「手作りおもちゃであそぼう！」 9月16日 「同：ミニクリスマス会」 12月18日
- ・あーち人形劇団「むー」スペシャルデー 9月20日 同：クリスマスデー 12月2日・16日
- ・「みんなの手形で飾ろう！壁面アート」 9月～10月
- ・あーちオリジナル名札プレゼント 9月～10月
- ・越智先生の「親子でふれあい体操」11月14日
- ・お誕生月に手形をとろう！ 2月以降随時
- ・出版事業 津田英二（編著）他多数著 『みんなのあーち：いまどき、こんな地域の居場所がある
といいね』 デザインエッグ社 2026年3月18日出版

2. 年間の取り組みの概要

本施設の中核的な取り組みは以下の2事業であり、いずれも神戸市からの補助金事業である。

A. 地域子育て支援拠点事業

本事業は、地域に暮らす子育て中の親子の交流促進や育児相談等を通して、子育ての孤立感や負担感などの低減・解消を図るなど、地域の子育て家庭を支える国事業（第2種社会福祉事業）である。現在（2024年度）、全国8,061箇所において実施されている事業である。本施設では、補助金交付の条件である基本4事業（①交流の場の提供・交流促進 ②子育てに関する相談・援助 ③地域の子育て関連情報提供 ④子育て・子育て支援に関する講習等）を週5日型（1日当たり5.5時間）で実施している。

B. こどもの居場所づくり事業

本事業は、「子どもの貧困対策の推進に関する法律（2003年成立）」を端緒とした貧困対策の一つとして位置づく国事業である。各地域の実情に応じた多様な取り組みが可能だが、全国的には「子ども食堂」「学習支援」が主流である。「あーち」では、それまでの「居場所づくり」実践と神戸市からの補助金事業（こどもの居場所づくり事業）とを融合させた「よる・あーち」を週1回（金曜日16：30～20：00）実施している。地域の未就学児、小・中・高校生や青年、保護者、市民ボランティア、大学生・院生（他大学含む）が参加する。子ども・青年たちは学習支援を受けたり（講師は市民ボランティア・大学生らが担当）、ボランティア・保護者と夕食を共にしたり（調理は「灘区連合婦人会」の登録会員約50名がシフト制で担当）、遊びのプログラムを楽しんだりしている。

※「子ども食堂」は「灘区連合婦人会」との協働実施である。

3. 2025年度における主な利用・運営状況

<年間利用者数>

2026年2月末現在、利用者数は延べ12,771（昨年比+559）人であり、内訳は子ども5,896人（昨年比+258人）・おとな6,875（昨年比+301）人である。年間の開館日数である225日から1日あたりの平均利用人数を算出すると、約57人（昨年比+2人）となる。新型コロナウイルス感染が収束してから、ゆるやかに利用者数の回復傾向が続いている。

<プログラム開催状況>

本年度のプログラム開催状況を集計（2月末現在）すると、教員・一般ボランティアが主催するプ

ログラムの実施回数（延べ数）は 220 回、大学の正規教育プログラム（GSP 等）の実施回数（延べ数）は 45 回である。

<学部生・院生による研究利用>

学部生・院生が卒業研究・修士研究の場として「あーち」を活用した実績については、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの教員のゼミ生に限っても、これまで、卒業論文 9 編・修士論文 15 編・博士論文 3 編が提出されている。

<授業・実習の場としての活用>

国際人間科学部・GSP プログラムの一環として学部生数名が毎回「よる・あーち」に参加している。また、他大学の学生の実習として、2012 年度より園田学園女子大学人間健康学部人間看護学科の 4 年生（経験値統合実習）を継続的に受け入れており、本年度も受け入れた。また、神戸市看護大学の地域実習の一環として、看護学生が実施する「健康教育」を支援した。さらに、「トライやるウィーク」として灘区民ホールで活動していた公立中学校の生徒 4 名に対して、（区民ホールの依頼で）本施設内を案内し、「あーち」の事業内容などの説明をした。

<運営に必要な会議等>

・「あーち 連絡協議会（隔月に 1 回開催）」

本会議は、大学の「のびやかスペースあーち運営委員会」とは別に、日常的に「あーち」の活動やプログラム等にかかわっているメンバーが参加する。本年度は市民ボランティア、灘区連合婦人会、教員・スタッフなどが参加した。

・「あーち通信編集会議（毎月 1 回開催）」

プログラム予定表、学生やスタッフによる絵本の紹介、利用者が担当する取材記事・コラム等を掲載する月刊広報誌を編集するための会議である。この通信は、利用者への配布だけでなく、灘区役所、灘区社会福祉協議会、灘区内各児童館、連携先の産婦人科クリニックにも配布・設置している。また、この通信の内容は「のびやかスペース あーち」公式ホームページ上に順次アップロードされている。なお、2026 年 3 月号が通算 247 号となる。

表 1 年間および月別利用者数：延べ数（2025 年 4 月～2026 年 2 月）

2025 年度		ふらっと		こらぼ／ゆーす		一日の利用者数		
月	開館日数	子ども	おとな	子ども	おとな	子ども	おとな	合計
4	21	461	421	81	195	542	616	1,158
5	21	416	398	70	218	486	616	1,102
6	20	354	341	75	194	429	535	964
7	23	496	424	79	184	575	608	1,183
8	17	417	390	91	258	508	648	1,156
9	20	483	445	106	194	589	639	1,228
10	23	517	504	84	222	601	726	1,327
11	21	427	397	79	168	506	565	1,071
12	20	556	523	94	183	650	706	1,356
1	20	399	398	92	214	491	612	1,103

2	19	441	423	78	181	519	604	1,123
合計	225	4,967	4,664	929	2,211	5,896	6,875	12,771

4. 2025 年度の取り組みの詳細（教員・職員が中心に進めている主な活動を中心に）

【ドロップイン・サービス（地域子育て支援拠点事業）】

地域子育て支援拠点事業を神戸市からの補助金を受けて引き続き実施した。乳幼児とその保護者が安心して多様な人との交流を深めながら、社会的なつながりや活動に関わることができる場である。本事業は昼休みを閉館することなく、利用者にランチなどの飲食ができる場を設けている。また土曜日には、父親をはじめとする家族での利用者が多数あり、特に「プラレール広場」は人気のプログラムである。

感染防止については、他の地域子育て支援拠点の対策を参考に、以下を継続している。

- ・ 毎日の館内換気・清掃の徹底、毎日2回のおもちゃ・備品の消毒の徹底を継続
- ・ スタッフの健康管理・手洗いの継続 必要時マスクの着用・利用者への手洗いの依頼の徹底を継続

【子育て相談事業（地域子育て支援拠点事業）】

上記ドロップインの場に、助産師・保健師・保育士などの資格を持つ相談員の他に、公認心理師の資格を持つ大学教員が月に1回来館し、保護者への個別相談に応じた。また、灘区の保健福祉課所属の保健師が隔月に健康全般にかかわる健康教育をした後、個別相談に応じた。相談内容として多かったものは、子どもの生活に関する相談、発育・発達に関する相談、離乳食・幼児食に関する相談、育児不安に関する相談、地域資源に関する相談であった（※この相談内容に関する分類・集計結果は別途神戸市に毎年報告している）。

【よる・あーち】

学習支援、子ども食堂、居場所づくりなどを並行して実施する複合プログラムであり、毎週1回、夕方から夜にかけて実施している。多様な年齢や属性の人たちが大勢集まり、相互に学び合う場を形成している。院生・学部生、そして子どもや青年、保護者、市民ボランティアらが、これまで以上に交流を深めている。

○学習支援（こどもの居場所づくり事業）

神戸市からの補助金を受け、「よる・あーち」プログラムの一環として実施している。学習面や社会性などに困難さを抱える児童・生徒・青年が参加している。支援者は学生を中心に構成され、学習支援を契機とした支援者の学びにも焦点を置いた取り組みをおこなった。卒業生や地域住民、保護者も支援に加わり、参加型研究のフィールドにもなっている。

○子ども食堂（こどもの居場所づくり事業）

神戸市からの補助金を受け、灘区連合婦人会と連携して実施している。「よる・あーち」プログラムの一環として位置づく。食堂には毎回、主に子どもや青年（30名前後）の参加者があった。

○居場所づくり

「よる・あーち」プログラムの一環として実施している多様な人びとの間の関わりを促進する実践である。障害のある子どもの十分な参加をテーマとして活動を構成し、さまざまな年齢や属性の人たちが遊びや会話を通して自分たちをエンパワーした。「都市型中間施設」概念に基づくモデル開発実践プログラムとしても位置づけている。

【健康あーち（食育等のプログラム）／（個別相談 新規プログラム）】

子育て中の親子の健康に関する疑問や悩みに対応しながら、食生活や子育ての方法を考えるプログラムである。プログラム開始当初より、参加者である親たちが主体となり運営できるよう、教員や学生らが支援している。本年度は外部から講師を招いて「呼吸法とヨガのちえ（智慧）」を開催した。また、公認心理師である教員が「ふらっと」で保護者からの個別の相談に応じた（月 1 回）。

【灘区保健福祉課や灘区社会福祉協議会等との情報交換】

奇数月に灘区役所において開催される「子育て連絡会」に「あーち」の職員が出席し、灘区保健福祉課、やはた桜保育所（地域子育て支援担当）、灘区社会福祉協議会、おやこふらっとひろば灘、灘区保育サービスコーディネーターらとの情報共有・交換をおこなった。

【地域の医療機関との協働実践】

長年、近隣の産婦人科の医師や助産師が日常的に「あーち」の広報を行うことで、生まれてまもない乳児がいる家庭の利用促進を図っている。

5. 2025 年度に実施したプログラムの概要

本年度に実施したプログラムを以下に掲載する。また、プログラムの回数やプログラムにかかわったボランティアの人数を表 2 に示す。表 2 においては、大学の授業・実習などもプログラム数として集計しているが、毎日提供されているドロップイン・サービスおよび諸会議は集計外である。なお、表 1 および表 2 には、すべての利用者数およびすべてのボランティア数・スタッフ数が集計されているが、表 3 には改めて「よる・あーち」の利用者数・ボランティア数・スタッフ数をより詳細に示す。

本年度より新しく始まったプログラムは、「ギフテッド寺子屋 KOBE」「あーちクローゼット」である。どちらも「あーち連絡協議会」に申請したものを出席者で検討、新しいプログラムとして了承された。

【子どもとその保護者を主な対象にしたプログラム】

- ・ふらっと：地域子育て支援拠点事業（ドロップイン・サービス）週 5 日
- ・ベビーマッサージ：元利用者である母親がリーダーとなって実施 講座と交流プログラム 月 2 回
- ・リフレッシュ YOGA：元利用者による産後の母親の体調改善をめざすプログラム 月 1 回
- ・ふらっとリトミック！：元利用者による親子で楽しめる音楽遊びを提供 月 1 回
- ・あらかると音楽あそび：手づくり紙芝居や絵本に音をつけて、一緒に音楽遊びを楽しむ 月 1 回
- ・おはなしの国：ストーリーテラーによる絵本の読み聞かせ 月 1 回
- ・おもちゃ病院：地域住民の有志によるグループが壊れたおもちゃなどを修理する 月 1 回
- ・あーちクローゼット：子ども服の交換を通して子どもや保護者が交流する場 月 1 回
- ・プラレール広場：広いスペースで自由に電車遊び等ができる場 月 2 回

【学校や家庭生活において困りごとのある子どもや保護者を対象にしたプログラム】

- ・月イチ with：参加者それぞれの困りごと悩みごとについて語り合う場 月 1 回
- ・「ギフテッド寺子屋 KOBE」不登校などの困りごとがある子どもやその保護者が集まり、情報交換したりイベントを考えたりする場 月 1 回

表2 プログラム数およびボランティア数：延べ数（2025年4月～2026年2月）

2025 年度		プログラム数				スタッフ・ボランティア数			学生
月	開館 日数	一般 のプロ グラム	大学の授 業および 実習等	プログ ラム 総数	プログ ラム数 1日平均	スタッフ（含むプログラムリーダー）数 および一般ボランティア数			
						スタッフ	一般	合計	学生
合計	225	220	46	265	1.18	526	217	743	315

表3 「よる・あーち」利用数・ボランティア数：延べ数（2025年4月～2026年2月）

	利用者							ボランティア				スタッフ			
内訳	未就学	小学生	中学生	高校生	保護者	おとな	小計	一般	学部生	院生/研究生	小計	教職員	灘区婦人会	小計	合計（人）
合計	84	10	303	108	245	1,138	1,888	129	184	122	435	220	190	410	2,733

6. 2025年度の見学・視察数

大学のサテライト施設がおこなう諸活動やその成果を対外的に発信することも必要であることから、見学者やメディア取材の受け入れを積極的におこなっている。受け入れた機関・組織別に以下に整理する（個人の見学者に関しては省略）。

○「あーち」全体

神戸市健康局保健所保健課 3名 神戸市地域子育て担当 1名 灘区長一行（副区長 保健福祉課課長 保健福祉課係長）4名 灘区保育サービスコーディネーター1名 神戸市地域協働局地域協働課 1名 灘区保健福祉課 保健師 3名 灘区社会福祉協議会 1名 子育てる一む ふわり 2名 神戸真生塾こども家庭支援センター ソーシャルワーカー 1名 園田学園女子大学 教員1名・学生 4名 神戸看護大学 教員1名 学生10名 上野中学校 生徒4名

○「よる・あーち」関連

兵庫県教育委員会 1名 灘区保健福祉課係長 1名 灘区社会福祉協議会 2名 篠原児童館職員 1名 株式会社 ICB 職員1名 NHK 神戸職員 1名 大阪大学障害者雇用担当者 1名 神戸大学推進連携本部 2名 神戸大学職員 他 個人多数

7. 2025年度の連携・協力先

「あーち」の運営にあたって、本年度に連携・協力を得た組織や団体名を、その内容とともに以下の表4に整理する（個人の協力者に関しては省略）。

表 4 連携・協力関係にある組織・団体等とその内容

組織・団体名等	連携・協力の内容
神戸市市民参画推進局	運営協力
神戸市こども家庭局こども未来課	運営協力
灘区保健福祉課	運営協力／情報交換
灘区民ホール	運営協力／情報交換
灘区地域協働課	地域活動支援コーディネーターの派遣・なだ桜まつり協力
灘消防署	消防訓練（区民ホールでの訓練に参加）
やはた桜保育所（地域子育て支援担当）	情報交換
灘区地域コーディネーター（助産師）	ふらっと相談員
灘区社会福祉協議会	ボランティアコーディネート／情報交換
灘区内児童館（10 か所）	情報交換
おやこふらっとひろば灘	情報交換
灘区連合婦人会	「よる・あーち（子ども食堂）」の調理担当
社会福祉法人たんぽぽ	博物館実習
学童保育つむぎ	居場所づくり
カフェ「アゴラ」	居場所づくり
社会福祉法人かがやき神戸	居場所づくり
はしもと産婦人科	広報協力／情報交換
おもちゃ病院（地域の有志）	「おもちゃ病院」の実施
神戸大学医学部保健学科地域連携センター	「なだぽっとらっく」運営
国際ソロプチミスト六甲	運営支援

（のびやかスペースあーち運営委員会委員長 相澤直樹）

10.1.5. サイエンスショップ

1. 概要と運営体制

サイエンスショップは、(a) 地域社会における広義の科学教育や科学コミュニケーションを含む科学に関わる諸活動への支援、および (b) 神戸大学学生の科学に関わる活動への支援等を行うことを目的とする。(a) については、科学者等の専門家と市民の対話と協働を通じて、環境問題など科学に関わる課題への市民の取組や、社会における科学技術の進展への市民の関与・参画を促す仕組みづくりと実践を目指しており、実践研究として行われている。

令和 7 年度は、研究科専任教員（室長，副室長，ほか 2 名）と，特命准教授 1 名，学術研究員 4 名（非常勤職員），コーディネーター 1 名（非常勤職員），事務補佐員 5 名（非常勤職員）の体制で運営された（特命准教授，学術研究員，コーディネーターおよび事務補佐員については，次項に記す JST 次世代科学技術チャレンジプログラム（STELLA）事業に係る業務担当者を含む）。

2. 令和7年度の主な取組

(1) 科学技術みらい開拓人材育成プログラム（STEP NEXT）の運営・実施

サイエンスショップは、大学教育推進機構みらい開拓人材育成センターとともに、神戸大学、兵庫県立大学、関西学院大学、甲南大学、神戸薬科大学の5大学と連携して「科学技術みらい開拓人材育成プログラム（STEP NEXT）」を実施している。サブプログラムとして、小学4年生から中学3年生を対象とした「神戸みらい博士育成道場」、高校生等を対象とした「ROOT プログラム」があり、それぞれの事務局を神戸大学に置き、運営している。平成29年度から令和2年度の4年間（第Ⅰ期）の「根源を問い革新を生む国際的科学技術人材育成挑戦プログラム」（英語名：Research-Oriented On-site Training Program for innovative scientists in the future）、令和3年度から令和6年度の4年間（第Ⅱ期）の「“越える”力を育む国際的科学技術人材育成プログラム」（英語名：Research-Oriented On-site Training Program for young scientists to go beyond the boundaries）を引き続く形で、小中学生向けのプログラム「神戸みらい博士育成道場（第Ⅰ期）」と統合したSTEP NEXTとして令和7年度から5年間JST STELLA 事業に採択された。

STEP NEXTにおいては、神戸大学では大学教育推進機構等が主体となり、人間発達環境学研究科を含む全学の幅広い部局・組織の参画のもとで企画が進められている。その企画立案、実施等について審議するために、大学教育推進機構に「次世代科学技術チャレンジプログラム運営委員会」が設置されている。また、地域の幅広い連携のもとで人材育成を推進するために、兵庫県および周辺府県等の教育委員会や、兵庫県下の先端的研究機関（理化学研究所放射光科学研究センター、同計算科学研究機構、兵庫県立人と自然の博物館、兵庫県立大学西はりま天文台など）や、公益財団法人兵庫工業会、株式会社ダイセルなどが連携機関として協力する「次世代科学技術人材育成コンソーシアムひょうご神戸」が形成されている。

高校生等を対象とするROOT プログラム（第Ⅲ期）では、科学技術分野で優れた潜在的資質や高い意欲をもつ受講生を募集し、40名程度を選抜して受け入れる。大学教員による講義・実習、先端的研究機関の見学などを含む約半年間の「基礎ステージ」を経て、受講生が研究課題提案を策定し、評価を受けて選抜された10名程度が、約1年間、大学等において研究を行なう「実践ステージ」に取り組む。科学的課題設定力・探究力を培うプログラムと並行して、科学英語、海外研修など国際性を高めるプログラムも展開される。

令和7年度は、6月から7月にかけて第9期基礎ステージ生の募集を行い、82名の応募者から43名を選抜、それらの受講生が基礎ステージを受講した。令和8年1月には、その中から実践ステージ受講生候補者12名が選抜され、令和8年度の研究活動に向け、大学教員の指導・助言のもとで研究計画の具体化などを進めた。また、令和6年度に基礎ステージ生から選抜された第8期実践ステージ生12名が研究に取り組んだほか、令和5年度に選抜された第7期実践ステージ生6名が、引き続き成果の取りまとめ・発表を含む研究活動を進めた。令和7年度も、受講生により、多くの研究成果発表が行われた（国際会議での英語による発表5件、その他の学会や研究会等での研究発表23件、修士生による国際誌への論文掲載1件等）。また、これらを通じて多数の受賞があった。このように、優れた科学技術人材の発掘・育成の形ある成果が見られた。

小学4年生から中学3年生を対象とする神戸みらい博士育成道場（第Ⅱ期）では、科学技術分野に強い好奇心や高い意欲をもつ受講生を募集し、40名程度を選抜して受け入れる。STEAM教育を意識し

た多様な体験を通じて興味の幅を広げ深める「体験ステージ」を経て、選抜された10名程度が、受講生自らが提案する探究課題を考え、互いに議論し、実践する「探究ステージ」に取り組む。さらに、探究ステージ修了生から数名程度を選抜し、探究活動をさらに実践する「発展ステージ」を新たに設定し、ROOTプログラムへの接続も意識し、探究をすすめている。

令和7年度は、4月から5月にかけて第4期体験ステージ生の募集を行い、66名の応募者から40名を選抜、それらの受講生が体験ステージを受講した。令和8年3月には、その中から探究ステージ受講生10名が選抜された。また、令和6年度に体験ステージ生から選抜された第3期探究ステージ生10名が探究活動に取り組んだほか、第1期発展ステージ生3名が、引き続き探究活動を進めた。

なお、この次世代科学技術人材育成プログラムは、国立研究開発法人 科学技術振興機構（JST）の次世代人材育成事業の一環である「次世代科学技術チャレンジプログラム（STELLA）」、三菱みらい育成財団、株式会社ダイセルの支援を受けて実施されている。

（2）地域社会における科学コミュニケーションおよび市民の科学活動支援

以下のような取組を行った（主要な項目については、年次報告書資料編に、開催場所、テーマ、参加人数等を記載する）。

- ・「見えない生き物がわかる？環境DNA実験を体験！ユニバーサル生き物調査2025」を3回にわたり開催した（共催：NPO法人須磨ユニバーサルビーチプロジェクト）。
- ・市民向け公開講演会「水をくんで生きものを調べる～環境DNA研究の最前線～」を共催した。（主催：環境研究総合推進費4MF-2505「エピジェネティッククロックと環境DNAに基づく魚類個体群の年齢構成・繁殖推定」）
- ・伊丹市昆虫館企画展「昆虫食～これうまいでえ」の開催に協力した。（主催：伊丹市昆虫館）
- ・神戸市灘区大和公園内「あすパーク」における子どもの居場所づくりの活動「子どもリビング」からの依頼を受け、蜂に関する子ども向けワークショップの開催に協力した（主催：子どもリビング）
- ・伊丹市を中心にサイエンスカフェの開催に取り組む市民グループ「サイエンスカフェ伊丹」によるサイエンスカフェ開催に協力した（12回）。
- ・「島と神戸を結ぶ つながりカフェ 淡路島でこれからの暮らしを考えるフォーラム」の後援をした（4回）（主催：認定NPO法人ソーシャルデザインセンター淡路、共催：NPO法人フクロウの夢）。

（3）科学教育への支援

グローバルサイエンスキャンパス ROOTプログラムについては、項目(1)に記したが、それ以外の取組について以下に記載する。

- ・兵庫県生物学会と共同で「高校生私の科学研究発表会 2025」を神戸大学百年記念館六甲ホールにおいて開催した（令和7年11月）。兵庫県、大阪府、奈良県、広島県、鳥取県、徳島県の高등학교22校から生徒145名、教員17名、本学関係者9名を含む197名の参加者があり、活発な発表、交流が行われた。口頭発表11件、ポスター発表41件の発表があり、優れた研究に対して、

サイエンスショップより優秀賞を授与した。

- ・サイエンスショップが窓口となり、神戸大学共催として、兵庫「咲いテク (Science & Technology, Sci-Tech)」運営指導委員会主催の高校生の科学研究発表・交流会 “11-th Science Conference in Hyogo” (英語による発表, 令和 7 年 7 月, 神戸大学百年記念館六甲ホール) および「第 18 回サイエンスフェア in 兵庫」(日本語による発表, 令和 8 年 1 月, 神戸大学統合研究拠点および兵庫県立大学, 甲南大学のキャンパス, 理化学研究所計算科学研究センター) を開催した。
- ・地域のハナバチ類の保全と花との関係, 生物多様性の重要性について学ぶ出前授業として, 学生とともに「ビーホテル」を用いた実習を実施した (令和 7 年 6 月・10 月, 兵庫県立上郡高校, 兵庫県立淡路高校)。各校では, 参加生徒が自らビーホテルを作成し, 地域の在来ハナバチやカリバチの訪花状況を観察・記録した。身近な花との関係性を通して, 地域に根差した生物多様性保全の必要性について理解を深めた。
- ・軽度知的障害, 視覚障害, 身体障害のある子どもたちを対象に, 環境 DNA を用いた地域の魚類相調査および食文化との関連に焦点を当てた実験教室を実施した (令和 7 年 8 月・10 月, 須磨海岸にて希望者, 10 月・1 月, 静岡県立藤枝特別支援学校焼津分校, 合計 40 名)。参加者は環境 DNA 分析により地域の魚種を特定し, 検出された魚種に触れたり食べたりする体験を通して, 生物多様性と食文化の関係についての理解を深めた。

この他, サイエンスショップに関わる教員は, 様々な形で高等学校の科学教育活動への支援も行っている。

(4) 学部・大学院教育

本年度も, 国際人間科学部のグローバルスタディーズプログラム (GSP) の国内フィールドとして学生を受け入れた (新規 5 名, および前年度からの継続 1 名)。学生は, フィールドワークとして, 「佐用川の水温一斉調査」の活動への参加・協力, 市民グループが開催するサイエンスカフェ等の科学コミュニケーションイベント, 高校生の科学研究発表会等, サイエンスショップに関わる諸活動に参加した。

また, 項目 (2) に記したように, 大学院人間発達環境学研究科の授業「サイエンスコミュニケーション演習」にフィールドを提供した。

このように, サイエンスショップは, 大学・大学院におけるアクティブ・ラーニング／サービス・ラーニングの場やそれを促す仕組みとしても機能している。

(サイエンスショップ室長 源 利文, 副室長 大串 健一, 室員 谷 篤史, 佐賀達矢)

10.1.6. 教育連携推進室

教育連携推進室では, 教育連携部門, 研究開発部門, 拠点形成部門において, それぞれ以下の活動を行った。

1. 教育連携部門

教育連携部門では, 各所と協力し, 研修の提供や, 学術指導による連携を実施した。また, 研修開発にかかわる共同研究を実施した。以下対象ごとに報告する。

(1) 神戸市教育委員会

神戸市教育委員会と共同して、神戸市立の、幼稚園・保育所・小学校及び私立の幼稚園・保育園・こども園等の教員・保育士を対象に、幼小接続期教育をテーマにして「つばめセミナー」(研修講座)を開催した。開催方法は、対面による集合型と、オンライン型のハイブリッドによった。参加者はのべ438名であった。なお、一昨年度より神戸市による保育士等のキャリアアップ研修の「幼児教育」の科目として位置づけられ、市から証明書も発行された。セミナーの実施内容は以下の通りである。

【令和7年度 つばめセミナー実施内容(全6回)】

回	月日	講師名	内容(キャリアアップ研修項目番号)
1	8/22(金)	田中 孝尚 附属幼稚園長	幼児理解に基づいた指導計画, 記録及び評価 (④)
2	9/9(火)	北野 幸子 教授	乳幼児教育の遊びを通した学びについて考える —小学校教育を見通しながら— (⑤)
3	10/21(火)	村瀬 瑠美 助教	乳幼児期の遊びを通した学び —身体で感じることと表現— (①)
4	11/4(火)	浅原 麻美 附属幼教諭	主体性を引き出す環境の構成 (②)
5	12/22(月)	岡部 恭幸 教授	発達を踏まえた資質能力の育ちと学び —数理認識の育ちの幼小接続— (③)
6	1/27(火)	渡邊 隆信 教授	接続期の育ちと学び —道徳性の芽生えと発達を中心に— (③)

令和7年度 参加者内訳】※集→集合型 オ→オンライン型 キ→キャリアアップ研修(集合型に含む)

回	月日	参加人数	合計	参加者校種内訳							こども家庭局等
				学校	市立幼	市立保	私立幼	私立保	私認こ	小規模	
1	8/22(金)	集57 キ30 オ13	70	集0 オ5	集2 オ1	集10 キ1 オ3	集1 キ1 オ0	集2 キ2 オ3	集25 キ25 オ0	集1 キ1 オ1	集16 オ0
2	9/9(火)	集67 キ32 オ22	89	集0 オ4	集1 オ6	集18 キ2 オ4	集1 キ1 オ0	集4 キ4 オ4	集25 キ24 オ0	集1 キ1 オ0	集17 オ4
3	10/21(火)	集58 キ24 オ9	67	集0 オ1	集1 オ4	集19 キ2 オ1	集0 キ0 オ0	集2 キ2 オ2	集19 キ19 オ0	集1 キ1 オ1	集16 オ0
4	11/4(火)	集76 キ42 オ12	88	集0 オ0	集1 オ5	集15 キ1 オ3	集2 キ2 オ0	集3 キ3 オ3	集40 キ35 オ0	集1 キ1 オ1	集14 オ0
5	12/22(月)	集60 キ31 オ9	69	集4 オ1	集2 オ2	集10 キ2 オ3	集2 キ2 オ0	集3 キ3 オ2	集23 キ23 オ0	集1 キ1 オ1	集15 オ0
6	1/27(火)	集49 キ22 オ6	55	集0 オ0	集0 オ3	集12 キ1 オ1	集1 キ1 オ0	集2 キ2 オ2	集17 キ17 オ1	集1 キ1 オ0	集15 オ0

(2) 舞鶴市

学術指導契約をむすび、文部科学省 令和 7 年度幼児教育推進体制等を活用した幼保小の架け橋プログラム促進事業に従事した。舞鶴市保幼小架け橋プログラム検討会議の委員長を輩出し、同市の教育に協働参画した。

直接経費：220,000 円，間接経費：66,000 円

(3) 白藤学園

学術指導契約をむすび、同法人の乳幼児教育推進体制の強化にかかわる助言指導を行った。遠隔による会議や、提供資料の分析等を行った。公開保育を含む研修開発に参画した。

直接経費：304,600 円，間接経費：91,400 円

(4) ベネッセ教育総合研究所

学術指導契約をむすび、同研究所が日本全国のすべての保育施設に無料配布している機関冊子「これからの幼児教育」の監修を行った。

直接経費：53,400 円，間接経費：19,100 円（2024-2025 年の 2 年にわたる契約）

(5) 明石市

連携協定の締結に向けての協議を行った（6 月 13 日：研究科にて打合（明石市 2 名，地域連携推進本部 2 名，教育連携推進室 2 名），7 月 15 日，24 日：明石市役所にて市長と面談打合（明石市，地域連携推進本部，教育連携推進室）。8 月 24 日に，明石市第 25 回タウンミーティング「明石市×神戸大学 包括連携協定締結記念，こどもの遊びと学び～明石公園をフィールドに～」(於，明石公園，神戸大学附属小学校)（登壇者：明石市長，村瀬瑠美先生，北野）を行った。さらに，明石市連携推進課からの相談依頼があり，1 月 23 日に人間発達環境学研究科にて打合せを行った（明石市 5 名，連携推進課 2 名，KUI1 名，本室員 2 名）。

(6) GOB 株式会社

学術指導契約をむすび、8 月 27 日に人間発達環境学研究科乳幼児教育学研究室にて指導を行った。

直接経費：38,462 円，間接経費：11,538 円

2. 研究開発部門

研究開発部門では，高度教員養成プログラムを実施するとともに，6 回のセミナーと神戸大学附属学校園や地域の学校及び教育施設等をフィールドとした教育実践のアクション・リサーチを含む理論的・実践的研究の推進に寄与した。本年度の認定証発行は 9 名であった。その他，研究開発を以下の各所と行った。

(1) 神戸市こども家庭局

2018 年から継続している神戸市こども家庭局との共同研究の契約を今年度も継続し，研修開発研究を行った。神戸市内の 9 区の園から，計 44 名のプロジェクト会議メンバー及び神戸市こども家庭

局と神戸市教育委員会のメンバー、神戸大学3名とともに、プロジェクト会議を年二回（5月19日（於：神戸大学附属幼稚園）、12月26日（神戸大学鶴甲第二キャンパス大会議室）開催した。のべ参加人数は100名であった。また、公開保育を各区35施設において実施した。のべ参加合計人数は、862名であり昨年度の812名をさらに上回った。神戸市全体会を令和8年3月9日に神戸市総合教育センターで開催した。参加者は300名を超え、盛会であった。公開保育実施園による発表、公開保育についてのシンポジウム、テーブルトーク「見て・語って・つながる保育 ～公開保育から生まれる共感と学び～」を行った。

共同研究契約：直接経費：769,230円、間接経費地、230,769円

(2) 株式会社 エプソン

2025年7月から2027年10月にかけて「幼児へのプロジェクター機器等の論拠に基づく活用効果の仮説および仮検証」に関する共同研究の実施について、本学の産官学連携本部の協力のもと契約が締結し、現在、本学附属幼稚園において、実証データの収集が進められている。研究担当者は、北野幸子・村瀬瑠美（教育連携推進室）、田中孝尚（附属幼稚園）、エプソン（2名）である。

直接経費：1,538,460円、間接経費地、461,540円

3. その他

(1) シンポジウム等

1) 環太平洋乳幼児教育学会日本支部2026年研究会／第11回神戸こどもの発達支援研修会を実施した。

日時：2026年2月7日（土）9:00-17:00

テーマ：1人ひとりを大切にする保育～共生社会のこれからを考える～

場所：神戸大学附属幼稚園

共催

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 教育連携推進室／乳幼児教育学研究室 附属幼稚園

神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科学分野小児神経学・発達行動小児科学部門（神戸市寄付講座）

神戸市こども家庭局 神戸市乳幼児保育研究部会

環太平洋乳幼児教育学会日本支部

後援

神戸市、神戸市医師会、神戸市小児科医会、兵庫県小児科医会

参加者：101名

2) 文部科学省・こども家庭庁共催、「令和7年度 保育実践充実推進のための中央セミナー」分科会「学び合う開かれた保育の推進～公開保育から始まる地域のつながり～」において、2018年より神戸市と本学の共同研究事業について神戸市こども家庭局磯野課長が紹介し、それを踏まえた基調講演を北野が行った。各地での展開への可能性がこども家庭庁の鎮目専門官からなされた。なお、同分科会において、これらを踏まえた、公開保育等を通じた地域におけるミドルリーダーの育成と質向上をはかるこども家庭庁の令和8年度の新規事業の募集についての周知もなされた。

日時：2025 年 12 月 3 日（於：ビジョンセンター東京虎ノ門）

（2）その他科研等

1) 国際共同研究

①研究代表：山口悦司

共同研究者（海外）：Clark A. Chinn (Rutgers University), Qiuyu Lin (Rutgers University)

共同研究者：望月俊男（専修大学），大浦弘樹（東京理科大学）

研究課題：科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築
（課題番号 23H01021）

研究資金：2023～2026 年度・基盤研究（B）（一般）

研究概要：科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築を行っている。

②本専攻研究者：北野幸子（共同研究者）

本専攻研究者：北野幸子（共同研究者）

研究代表者：西田幸代（研究代表者）

共同研究者（海外）：西田幸代（University of Aberdeen）

研究課題：園と家庭との連携に関する実態調査 Family Involvement in Early Childhood
Education: The Perspectives and Experiences of Early Childhood Professionals

研究資金：特になし。

研究概要：保育者と家庭との連携協働や保護者の園へのエンゲージメントの状況について、保育専門組織の関係者にインタビュー調査を行い、コロナ禍以降、どのように参画が促されたのか、また実施されてきたのか等、を調査し分析している。

2) 国内共同研究等

①研究代表者：渡邊隆信

研究課題：「明石附小」における新教育の思想と実践の継承に関する研究

研究資金：2025～2027 年度・科学研究費助成事業 基盤研究（C）（一般）（課題番号 25K05867）

研究概要：大正新教育期，戦時下新教育期，戦後新教育期の 3 期において，明石女子師範学校附属小学校の新教育思想と実践の何がどのように継承され，また継承されなかったのか，さらには新たに創造されたのかを縦断的に解明する。

②研究代表者：山口悦司

研究課題：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発（課題番号 20K20829）

研究資金：2020～2023 年度・挑戦的研究（萌芽）

研究概要：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルに関する基礎研究を行っている。

③研究代表者：北野幸子

研究課題：位置測位システムを活用した保育者養成教育方法と教材の開発

研究資金：挑戦的研究（萌芽）（課題番号 23K17616）

研究概要：位置測位システムを活用して園における子どもと保育者の位置データを収集し、養成教育の教材として活用すべき内容の抽出を行った。それらを検討し、保育者養成教育における活用方法と、活用可能な教材の開発を試みている。

④研究代表者：山口悦司

研究課題：科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築（課題番号 23H01021）

研究資金：2023～2026 年度・基盤研究（B）（一般）

研究概要：科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築を行っている。

⑤研究代表者：村瀬瑠美

研究課題：乳幼児の「身体のおかしさ」に関する調査一体と心をつなぐ「身」に焦点を当てた課題発見と異分野共創的課題解決の提案—

研究資金：高等学術研究院テニュアトラック教員（B 制度）

研究概要：現在のわが国の乳幼児が抱える「身体のおかしさ」を「身」の概念に着目して明らかにし、乳幼児期から子どもたちの「身体」を育んでいくための方策を提示することを目的とする。

4. 拠点形成部門

拠点形成部門では、国内外の拠点形成を目指して、官庁や、各地の行政、全国規模の教育専門組織、教材開発に従事する企業等との連携協働の拠点形成に寄与した。附属学校部と連携し、附属幼稚園と共に神戸市こども家庭局や、教育委員会等と共同研究を行った。附属学校部と連携したプロジェクト研究としては、附属小学校、附属幼稚園における、歴史的資料のデータベースの作成を継続して行った。財務的には、現在多くの科研等の採択を獲得してきているが、今後もさらに継続して大型競争的資金の獲得に向けた申請及び申請の準備をする予定である。

（教育連携推進室長 北野幸子）

10.1.7. アクティブエイジング研究センター

1. 運営体制：運営委員

教員：長ヶ原 誠（センター長），増本康平（副センター長），原田和弘（副センター長），近藤徳彦，片桐恵子，井上真理，田畑智博，近江戸伸子，木村哲也，石原 暢，木伏紅緒，佐藤幸治，大野朋子

2. 研究プロジェクトの推進

（1）プロジェクト内容：メンバーと内容

令和7年度は以下の15件の研究プロジェクトが実施された。

①「鶴甲いきいきまちづくり-アクティブエイジングを目指して」

メンバー：原田和弘，増本康平，岡田修一，近藤徳彦，長ヶ原誠，片桐恵子，近江戸伸子，学外研究者

期間：2010年度～2026年度

内容：オールドニュータウンである鶴甲地区を対象に，多世代が心身ともに健やかで将来の希望に満ちた，安全に暮らせるまちづくりを支援するものである。アカデミック・サロン（大学内で行うイベント）を鶴甲地区の住民の学びと活動の場の基礎とし，大学をコミュニティの中心に位置付け，このサロンを通して，住民同士のネットワークを形成するとともに，サロンの継続に必要なファシリテーターを養成し，住民が企画・運営するコミュニティ活動を支援する。

②「サードエイジのサクセスフル・エイジング・モデル構築プロジェクト」

メンバー：片桐恵子，学外研究者2名

期間：2015年度～2025年度

内容：これまでの高齢者とは異なる新しいシニア層である，団塊世代以降の人のライフスタイルや志向を把握し，サードエイジ期（定年後から元気な時期）のサクセスフル・エイジング・モデルを構築する。

③「生涯学習・多世代交流プロジェクト」

メンバー：片桐恵子，学外研究者2名，海外研究者1名，大学院生1名

期間：2018年度～2025年度

内容：生涯学習を行うシニアの現状を明らかにし，学習を促進疎外する要因とそのもたらす効果をライフコース的な視点から明らかにする。さらに生涯学習を異世代交流の機会をとらえて，その効果も検討する。アイルランドとの国際比較研究を実施しながら検索する。

④「高齢者の身体システム機能維持・向上への学際的プロジェクト」

メンバー：木村哲也，佐藤幸治，木伏紅緒，学外研究者

期間：2015年度～2030年度

内容：高齢者の身体システム機能の維持・向上に対して，基礎研究及びその成果に基づいた社会実装を，応用生理学，運動生理・生化学，バイオメカニクス，生体工学の各観点を統合して学際的に実施する。現在取り組み中の具体的課題は，立位バランス神経制御則の解明や高齢者の筋機能の向上である。

⑤「関西ワールドマスタースゲームズ2027レガシー創造支援研究」

メンバー：長ヶ原誠，近藤徳彦，片桐恵子，増本康平，学外研究者3名

期間：2015年度～2027年度

内容：関西広域で2027年開催予定の生涯スポーツの国際大会がもたらすレガシー（遺産）創造に向け

た振興事業アクションリサーチの展開と効果検証のモニタリング評価を実施し、成人・中高年者を対象とした参加型のスポーツメガイイベント開催が個人と地域の活性化に及ぼす影響過程を検証する。

⑥「活動的な生活習慣と健康増進プロジェクト」

メンバー：原田和弘，近藤徳彦，学内・学外研究員

期間：2017年度～2026年度

内容：高齢者において、活動的な生活習慣が形成・維持されるプロセスには、どのような要因が関わっているのかを学際的な観点から明らかにする。また、その知見に基づき、活動的な生活習慣の効果的な支援方法を開発する。

⑦「アクティブライフ評価と健康寿命の延伸・認知症予防対策」

メンバー：近藤徳彦，増本康平，木村哲也，佐藤幸治，原田和弘，学内研究員

期間：2024年度～2027年度

内容：中年期までの活動的な生活習慣（＝アクティブライフ）が、健康寿命の延伸や認知症発症を防ぐ効果があるかどうか注目が集まっている。本研究では幅広い年代のアクティブライフを、経年的に、かつ、正確に測定し、アクティブライフと健康・認知症に関するデータの構築を目指す。これにより健康寿命の延伸や認知症予防に効果的な生活習慣対策を検討する。

⑧「社会的つながりの新たな推定・評価方法の確立」

メンバー：増本康平，原田和弘，近藤徳彦，学内・学外研究者，神戸市，企業

期間：2022年～2025年

内容：良い社会的なつながりは、健康増進，認知症罹患率の低下，幸福感の向上など個人にとって良い影響をもたらすだけでなく、地域の安心・安全や災害時の孤立者の減少等，地域コミュニティの問題を解決する上でも重要である。しかしながら，社会的つながりを客観的に測定可能な指標は極めて限られている。本プロジェクトでは，スマートフォンを用いたコミュニケーション量の計測と，調査データによって収集可能な人とのつながりのデータから数理モデルによって社会的つながりを推定する二つの手法の開発と社会実装を目的とする。

⑨「感情調整と信頼の加齢変化と社会的つながりに関する縦断研究」

メンバー：増本康平，佐藤幸治，原田和弘，学内研究者

期間：2022年度～2025年度

内容：高齢期のウェルビーイングの実現において社会的つながりは必要不可欠である。感情調整は良い人間関係の構築において中核的な役割を担っており，加齢の影響を受けにくい機能として知られている。しかしながら，高齢期の感情調整が社会的つながりや他者への信頼に及ぼす影響は明確ではない。そこで本研究では，この点を明らかにし，感情調整機能を活用することによる老いへの適応とウェルビーイングの実現の方法について検討する。

⑩「高齢者のソーシャルサポート授受とICT：コロナ禍での活用と有効性の東アジア比較」

メンバー：片桐恵子，竹内真澄，学外研究者1名

期間：2021年度～2025年度

内容：コロナ禍での活動や人との交流の制限は高齢者の心身に大きなストレスを与えている。しかしコロナ禍において従来のようなソーシャル・サポートを得ることは難しい。ICTを活用したソーシャル・サポートが代替として想定されるが，その現状や有効性は明らかではない。デジタル化が進み，日本に似た家族規範を持つ韓国と香港において，高齢者のICTの利用と効果について精査し，日本でのICT活用に有効な施策について提言する。

⑪「身体的健康が脳の老化を遅らせる分子生物学的基盤の解明」

メンバー：石原 暢（代表者）

期間：2023年度～2025年度

内容：身体を健康に保つライフスタイルは，脳老化の減速と関わることを示されている。例えば，習慣的運動に伴う体力の向上は，中高齢期の脳老化の減速と関わる。一方で，過度な座位時間，喫煙，睡眠不足，肥満，高血圧は脳老化の加速と関わる。それでは，これらの身体的健康要因は，どのような分子生物学的メカニズムで脳の老化と関わるのだろうか？本研究は，DNAメチル化の役割に着目し，身体的健康が脳の老化を遅らせる分子生物学的メカニズムを調べることを目的とする。

⑫「高齢者世帯のエネルギー価格高騰に対する家計脆弱性の分析手法の開発」

メンバー：田畑智博，学外研究者1名

期間：2023年度～2025年度

内容：カーボンプライシングに代表される経済対策はカーボン・ニュートラル政策として重要である一方，エネルギー価格の高騰を誘発させることで高齢者等の社会的弱者の家計を圧迫するおそれがある。本研究は，所得や家計に占める燃料費の割合をもとにエネルギー価格に対する家計の脆弱性を測定する指標である燃料貧困指標を用いて，高齢者世帯のエネルギー価格高騰の影響を把握するための手法を開発する。実証分析を通じてその影響を測定するとともに，影響を緩和するための対策を提案する。

⑬「質の高いプラスチックリサイクルシステムの設計」

メンバー：田畑智博，学外研究者1名

期間：2024年度～2027年度

内容：サーキュラーエコノミー（循環経済）構築の観点から，付加価値の高いリサイクル素材を製造するためにプラスチックの分別（樹脂の種類，色等）に対する要求水準が高まっている。本研究は超高齢社会においても持続可能なプラスチックのリサイクルシステムを設計するため，高齢者世帯が容器包装プラスチックの分別にどれだけ協力できるのか調査し，要求水準と現実とのギャップを明らかにする。

⑭「高齢者の社会的孤立・孤独予防プロジェクト」

メンバー：片桐 恵子（代表者），増本康平，原田和弘，佐藤幸治，木村哲也，石原暢，木伏紅緒，打田篤彦，伊藤真之，稲原美苗，中村 匡秀，陳思楠，金子由芳

期間：2022年度～2026年度

内容：近年高齢者のみ世帯が増加する一方，家族の絆や近隣，友人関係など，日本の高齢者を支える社会関係は脆弱化している。また，これからは都市の高齢化が進み，さらに近隣関係の希薄化が進むと考えられる。本プロジェクトは，賃貸集合住宅に居住する高齢者が住む地域社会に介入し，住民同士の交流を促進することで，社会的孤立・孤独の一次予防を企図するアクションリサーチである。科学的エビデンスをもとに，介入効果を明らかにすることも目指す。

⑮「浴槽入浴とウェルビーイング」

メンバー：近藤徳彦，木村哲也，佐藤幸治，原田和弘，石原暢，木伏紅緒，学外企業

期間：2025年度～2026年度

内容：本プロジェクトでは，浴槽に湯を張った入浴（浴槽入浴）という，日本文化に根差す生活習慣に注目した産学共同研究を行う。具体的には，浴槽入浴がウェルビーイングに関わる指標へ及ぼす効果の検証と，より効果的な入浴方法・技術の開発を行う。

⑯「バイオフィリック・デザインによる都市緑地の展開 - 多様な街路樹を生かしたLiving Nature Kobeを目指して -」

メンバー：大野朋子，片桐恵子，田畑智博 学外者7名

期間：2024年度～2025年度

内容：バイオフィリック・デザイン（自然を感じるデザイン）の概念を取り入れながら，都市の多様な街路樹植栽がもたらす修景や心地よさ，夏季の涼しさ（緑陰の効果）など人々の心身に与える影響をアンケートと実測より明らかにする。街路樹の新たな可能性を発掘し，神戸市が推進するLiving Nature Kobeをより発展させ，居住者，来訪者すべての人々が都市に求める心地よく居続けたいと思う緑豊かなまちづくりを提案する。

3. 地域貢献活動によるアクションリサーチ

【2025年度春 健康体操教室】：延べ126名

【2025年度春 園芸教室】：延べ61名

【2025年度春 いきいきウォーキング】：延べ111名

【2025年度秋 健康体操教室】：延べ126名

【2025年度秋 園芸教室】：延べ60名

【2025年度秋 いきいきウォーキング】：延べ105名

以上の地域貢献活動によるプロジェクトを通じたアクションリサーチの結果は，国際学術雑誌に採択されている。住民のネットワークの拡充やwell-beingの向上に役立っていることを科学的エビデンスに基づき示したものとして評価されている。

（センター長 長ヶ原誠）

10.2. 実習観察園の運営利用状況

○実習観察園施設および概略図

実習観察園の概略は図1の通りで、前年と変わりはない。灰色で示した部分は、自然環境論コースの教員が研究のために設置したビニルハウスである。

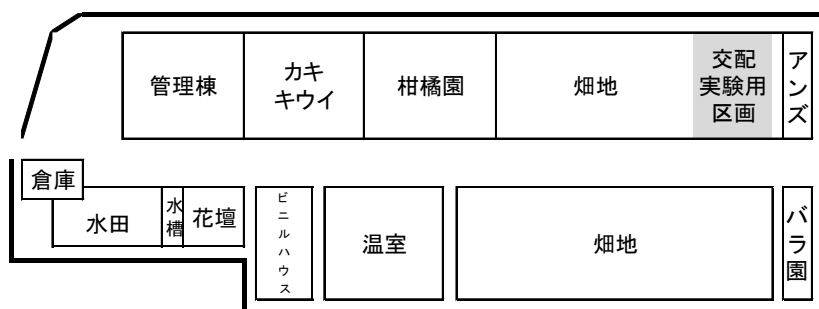


図1 施設・作付概要

○作付面積および作付植物

作付面積および作付作物はそれぞれ表1および表2に示した通りである。

表1 作付面積 (m²)

種別	面積	備考
畑地	352	教材・実習用
果樹園	255	教材・実習用
水田	70	実習・研究用
バラ園	35	園内美化・実習用
花壇	25	園内美化・実習用
計	735	全体

表2 作付植物

種類	植 物
野菜	コマツナ、ホウレンソウ、カブ、キュウリ
	カボチャ、スイカ、トマト、オクラ、ピーマン
	イチゴ、ナス、ダイコン、カブ、タマネギ、ニンジン
マメ・穀類	ダイズ、ラッカセイ、ソラマメ、インゲンマメ
	サツマイモ、トウモロコシ、イネ
果樹	なつみかん、ハッサク、温州みかん、スダチ
	ユズ、キンカン、カキ（富有、サエフジ）、ブドウ スモモ、キウイ、ウメ
花卉	ヒャクニチソウ、マリーゴールド、ペチュニア、
	サルビア、ナデシコ、ヒマワリ、アサガオ
	ハボタン、チューリップ、バラ ナデシコ、パンジー

表3 授業と研修の利用者数

授 業 名	2021 2022 2023 2024 2025				
	2021	2022	2023	2024	2025
保育内容研究(環境)	16	11	16	18	20
園芸教室	30	54	60	60	60
鶴甲幼稚園	0	0	60	60	60
計	46	65	136	138	140

北

自然環境論コース
実験用ビニール

ト	ト	ト
---	---	---

北

自然環境論コース
実験用ビニール

図2 2025年度畑地作付配置図

○教育活動

「保育内容研究(環境)」(履修生 20 名)において、植物栽培に関すること、すなわち、畝立て、土作り、草花や野菜の種まき、育苗、鉢上げ、定植、誘引、収穫、花壇・緑化設計と制作などを行っている。これらの他に、プランターや鉢植え栽培による校内美化の指導も行っている。履修者が実践的に“植物と子供の遊び”というテーマで、幼稚園児の指導をおこなうことを想定した授業をおこなった。校内緑化法について講義、能動的に学修するアクティブ・ラーニングとして、五感を活用した実習をおこなった。鶴甲幼稚園児(60 名+指導者 5 名)が学生とともに田植え、稲刈りを行った。

○研究活動

人間発達環境学研究科の教員ならびに学生が研究と論文作成のため、本実習園を活用している。

1) アジサイ属の栽培実験(近江戸)

神戸市立森林植物園との共同研究としてアジサイ属について、挿し木実験を行った。博士研究の「リピートームと染色体解析から見たアジサイ進化の研究」ため DNA 採集ならびにゲノムサイズ測定用の植物体をガラス温室内で育成した。

利用者：近江戸伸子，大学院生 1 名

2) ノジキクの栽培実験(近江戸)

姫路市でノジキクの保全・譲渡を社会貢献活動として行っている有限会社エヌ・エス・グリーン(日本触媒)から分譲頂いたものを栽培し種子を採取した。

利用者：近江戸伸子，大学生 1 名

○他機関の利用

以下について取り組んだ。

- 1) 鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト 連続講座 2025「園芸教室」の開催
- 2) “越える”力を育む国際的科学技術人材育成プログラム ROOT
- 3) 長峰中学校職業体験

1) 鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト 園芸教室の開催 (指導講師：近江戸伸子，市橋秀樹，穂谷秋恵)

高齢化が進行している地域コミュニティにおいて、多世代が心身ともに健やかで希望に満ちた、安全な暮らしができるまちづくりは急務であり、住民が主体的に、多世代の交流を促進し、その中で課題を見つけ、学び、活動していく生涯学習の実践の場づくりが大事である。地域社会のこのような現状に対し、本研究科がもつ人的・物的・空間的リソースを活用して、どのような支援が可能か検討する、「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」を立ち上げた。当実習観察園で 2014 年から開催されてきた園芸教室はその一環の活動である。

小学生から 80 歳代までの多世代が参加し、参加者(春 30 名, 秋 20 名)がグループに分かれ、以下の実施日にそれぞれのグループ毎に野菜や花の栽培を楽しんだ(図 3, 4)。

春の園芸教室 5月10日, 6月7日, 7月19日

秋の園芸教室 10月14日, 11月18日, 12月13日



図3 5月10日開催
畝づくり



図4 11月18日開催
野菜苗定植

2) 科学技術みらい開拓人材育成プログラム (STEP NEXT) (谷)

STEP NEXT のサブプログラムである科学技術人材育成プログラム (ROOT プログラム) 第7期実践ステージ生が「蜂の羽音による虫媒花の蜜の糖度の変化を調べる」ことをテーマとし, 研究を行った。観察園では, 花壇付近に咲いていたホトケノザを対象とし, 糖度計を用いて花の蜜の糖度を測定した。蜂の羽音をきかせた花では糖度が上昇することが示された。

利用者: 近江戸伸子, 谷篤史, ROOT 実践ステージ生1名

3) 長峰中学校職業体験

職業体験の一環で飲食店の仕事を学ぶことを目的とし, 食材が実際にどのように提供されるのかを理解するため, 中学生が栽培, 収穫から提供までの流れを体験する。

飲食店で使用する食材の調達として, 果物の収穫を行った。また野菜の植え付け作業を行い, 栽培についても学んだ。長峰中学校2年生 4名は食材がどのように店に届き, 調理されるのかを理解し, 飲食業の仕事の流れを実感することができた。

2025年11月12日 サツマイモ, カキ, キウイ, ユズの収穫, イチゴの植え付け

来年度は地域や学校等の要請等も積極的に受け入れ, 授業ならびに研究で, 利活用を図る予定である。

(実習観察園運営委員長 近江戸伸子)